

---

# 連理の咲く庭

珀志水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

連理の咲く庭

### 【Nコード】

N5860P

### 【作者名】

珀志水

### 【あらすじ】

6歳の時、兄が神子として異世界に召喚された。それに巻き込まれた蓮は、けれどすぐに元の世界に戻される。それから10年。目の前に現れたのは自称神様。神子を助けてくれと泣き付かれ！？うん。とりあえず一回ぶん殴っていいかな？【以下、第二章 あらすじ】舞台は移り、セイ・ロストパース大陸。北に位置するその大陸で、山賊の頭目を務めるハビは黒い卵を手に入れる。それは、フィーラードの卵だった。神子を求めるハビは、その卵を切欠にある決意をする。一方シェーラの暴走に巻き込まれた蓮は、アナクと

共に神子として捕えられていた

！

## 第一章の登場人物と造語

プロットも何もないので、忘れることが多々あります、作者です。  
よって整理用に。

登場人物 ( ) 内が表名または呼び名

三沢 蓮 (レーン)

フィーリーシャの眷属。

極度(?)のブラコン。

貞操観念希薄。

家族構成：兄、叔母、姪っ子

チート主人公ではありません。

三沢 彬 (リーン)

セイシャーリの神子。

眠り姫。

見た目は16歳のまま。

神様たち

フィーリーシャ 多分

自称神様。

セイシャーリの天上神で最高位。

子供だったり銀狼だったり。

三沢兄妹には寛大です。

フリーリ・マノレイ（マーノン） 多分

天上神第三位の神。

残虐な神様として有名。

一見優しそうな好青年、でもサドヤロー。

濃藍の髪をした蓮の従者。

ヴィレンツアーレ神帝国の人々

ヴォルゲルド・フィーシェーラ・ケアトラフェス・ヴィレンツアー  
レ

（ヴォルド・フィーシェーラ・ヴィレンツアーレ）

皇帝。

金髪の美形。

31歳。

筋金入りの女嫌い。

ダヴィデ・シードル・アダーニ（ダミアン・アダーニ）

宰相。

冷静沈着。

蓮からは腹黒そうと言われちゃった人。

アナクレト・ガリヤ・ベイツ（アナク・ベイツ）

近衛師団師団長。

蓮からは笑い上戸認定された人。

（マルガ・カヤラ）  
近衛師団副師団長。  
ダミアンとアナクに何やら含むところがあるらしい。

カティーリア・ゴルゾーラ・カステヘルミ・コフィスタ（カステヘルミ、カティ）  
神官。  
和やかでおっとりとした人。  
でもマーノンと同類風味を漂わせてる。

（エリック・アダーニ）  
ダミアンの息子。  
14歳。  
ヴォルド付きの従者。

（カミツロ・リル・ドヴレチェンスキー）  
現・ドヴレチェンスキー公。  
歴史研究家。  
神は研究対象。

シェーラ  
薄桃色の両手のひらサイズの兎。  
最上級精霊で人型にもなれる。  
マーノンが怖いもよう。

ドヴレチエンスキー公  
豚か蛙、はたまた哺乳瓶妖怪。  
元・公爵。

その他

（キヤルチエ）

故人。

神子付きの神官。

老衰により亡くなった。

造語

セイシャーリ 世界の名称

フィーリン 神子

リ・フィルシアン 連理の森 神子が召喚される森

フィーラード 力ある神官

フィルラ 神子の紋章

フィーリ 天上神の総称

フィーシェ 地上神の総称

ゝズ 最高、最上などの意 例：フィーリス 天上神最高位

ゝエル 三番目の意 例：フィーエル 天上神第三位

ゲネレ・フィファス 神威誓約 最上級、上級、中級、下級の4種  
がある

ゲネレ・ミシュ 主従誓約

ゲネレ・トワルレ 自署誓約

ベネレ・ラルシュ 結縁契約

ベネレ・ラルシーラ 束縛契約

コルレフィル 神の御許 各国の大広間に設置されたテラスのこと

克蘭ドローム 精霊使役 魔術師のこと

克蘭ドローメルズ 最上級精霊使役 神力を持つ神官のこと

克蘭ドデラ 中級位精霊

克蘭ドフィンズ 最上級精霊

双黒 黒髪黒目を持つ者のこと

ミシュラ・ハーウェイ 我が主にして寵愛の僕

ア・フィー・ベジェラルダ 我が神は唯一絶対なり

ダイン・ラ・サケネスイ 全ては在るがままに

シュズ・ベリアード・ラゼッタ 全ては我の意のままに

人物、造語共に今後も増えて行く予定。

フィが多いのはご愛敬。

以下蓮のイメージイラスト

マウスで書いた落書きみたいなもんです。

イメージが崩れる可能性もありますので、それでもいい方どうぞ。



^ 9 5 0 3 | 5 8 0 6 2 2 i . v

## 第二章からの登場人物と造語（前書き）

例の如く整理用です。

## 第二章からの登場人物と造語

（ ）が表名、または呼び名

### シェブレージー族

ハビエル・フィーシェーラ・テンベット・ブフナー  
（ハビ・フィーシェーラ・ブフナー）

シェブレージー族の集落コッロードの頭目

楽園の長と契約を成している

誓約を交わしている精霊は5匹

暗い緑の髪に褐色の肌を持つ

### ヒューバ

ハビと誓約を交わしている精霊

姿は拳サイズのフェレット

気性が荒いので要注意

### モントラーク

ハビと誓約を交わしている精霊

姿2メートル大の翼がある猫

### ファンパニア

ハビと誓約を交わしている精霊

狼のような顔、狐のような尻尾、しなやかなチーターのような体を

している

性格は一言でいえば無関心

チユイ・トラ

ハビと誓約を交わしている精霊

最上級精霊で人型

ハビを主と呼んでいるが慕っているわけではなく、逆に見下している節がある

メイリイ

ハビと誓約を交わしている精霊

くりくりとした目が特徴の羽が生えたりス、でも鳴き声は「メエ」  
治癒担当

（ウーゴ）

コッロードの副頭目の一人

朗らかな性格をしているが熱血漢で単細胞

誓約を交わしている精霊は2匹

（イスト）

コッロードの副頭目の一人

頭の回転が速い頭脳派だけど、茶目っ気たっぷりな姐御  
誓約を交わしている精霊は3匹

（アンソニア）

イストの妹  
ハビの元恋人

神様たち

フィーシェンラ 多分

地上神最高位

別名を楽園の長

緑の髪に青い瞳を持つ子供

フィーシェ・ロウラ 多分

フィーシェンラの結界内へとつながる扉の門番  
石造のように美しい女の姿をしている

ラムラの人々

(ユリス)

ラムラの王

紅い髪をしている

エムカ

ユリスと誓約を交わしている精霊

大きな耳に鈴をつけているのが特徴の優麗な白猫

(ミーシャ)

ユリスの妻で王妃  
きつい感じの美人

(インミ)

ラムラの王女

淡い金の髪をしている

(アダン)

ラムラ随一の魔術師

マーノン曰く精霊の気配が濃く天上神の気配も混じっているの  
こと

その他

(コウラン)

ダングルラルカからの使者

モール王国の人々

(コラリー・ラベイユ)

聖女様

人の話を聞かないのは故意なのか天然なのか悩むところ(作者が)

(パシィ・ファー・エリアット・モール)

モール王国第一王女

緋色の髪をした元気っ子

女装したアナクがお気に入りで「お姉さま」と呼んでいる

(ヒリン)

初老の女医

造語

ドルテ・デリゲア 最も穢れた大陸

テトシェリック 地上の楽園

シェリトウーラ 楽園の長

シェリ克蘭カ 楽園の守り人

フィールド 黒き卵

フィットン 融離魔力

イス 下級を意味する 例：ゲネレイス・ミシュ 下級主従誓約

シエトラム 誕生

シェリーア 慈愛

ドルテ・マナフ 穢れた部族 シェブレイジの蔑称

ドルフィカ 墮星

## 設定資料（整理用・ネタばれ有り）（前書き）

こちらは世界設定などの設定資料です。

例の如く、忘れっぽい作者のための整理用です。

こちらでは本編にまだ出ていないネタばれも多々出てくる可能性があります。

ストーリーなどのネタばれは控えるように頑張りますが、そういうのが苦手な方、即回れ右願います。



## 設定資料（整理用・ネタばれ有り）

### 世界設定

世界名 セイシャリー

### 神

天上神 ファーリ

最高位 ファーリーシャ

第一位 ファーリ・クオリリア

第三位 ファーリ・マノレイ 破壊神

第五位 ファーリ・エルガ

地上神 ファーシエ

最高位 ファーシエンラ

ファーシエ・ロウラ

天上神の位は14まで

地上神は最高位のみ

位を持たない神もいる

第十位までが上位

第十四位までが中位

それ以下が下位となる

人型、獣型、原型（本来の姿）の大まかに三つの姿がとれる

人型時は、天上神は髪は青系統、瞳は緑系統の色になる

地上神は逆に髪が緑系統、瞳は青系統の色になる

性交はできるが生殖機能は働いていない

## 天上神と地上神

### 天上神

そこに在りて世界を照らすことを役割付けられた神の総称  
そこに在ることを何よりも宿命づけられている

無条件の畏怖はその存在を知らしめるためのもので、力を誇示するためではない

### 地上神

世界を覆う命の誕生を促すことを役割付けられた神の総称  
穏やかな性質をした者が多い  
融離魔力を扱う力を持っている

### フイーシェーラ

フイーシェーラに名を連ねる〃地上神の血をひく者

### 墮星 ドルフィカ

理に定められた禁忌を侵した神の総称

自我を失くし理性を失った獣へと身を墮とし、最後には力に  
吞まれて死ぬ運命

神が墮ちると同時に星が流れる 故に別称を流れ星ともいう

## 世界

世界を構成する大陸は四つ

北：セイ・ロストパース大陸 南：セイ・ヴァルアー大陸  
東：セイ・コランクエル大陸 西：セイ・リチエラ大陸

大陸周囲に島は点在するが、大陸から離れた場所にはない  
大陸またそれに属する島から、他の大陸またはそれに属する島に、  
干渉することはできない

よって他の大陸への侵攻は不可能

太陽、月は存在しない（朝昼夜は存在する）

星は全て青色

四季は存在せず、場所によって気温などが変わってくる

一年が14ヶ月、一月は28日、一週間は7日

人間は卵生

融離魔力 フィットン

神が空気中に残す、残留魔力

神や精霊以外の生きとし生けるもの全てが必要とするもの

セイ・リチエラ大陸

全ての小国を含み、14カ国存在する

大陸全土に渡って神への信仰心が厚い

文字の種類は三種

神子が最後に存在が確認されたのは、1000年以上前

ヴィレンツアーレ神帝国

古代地上神の血をひく王族によって統治された国

セイ・リチエラ大陸一の大国

あらゆる面で大陸一の技術を持っている

セイ・ロストパーズ大陸

最も穢れた大陸として天上神からは疎まれている

大陸の中央に地上の樂園が存在する

地上神最高位のための大陸とも言われている

地上の楽園 テトシェリック

大陸の中央にある、翠に覆われた山岳地帯  
神や精霊たちのための土地で、侵すものを許さない

ラムラ

地上の楽園の属国の立場にある人間の国

大陸東部、大同士の国境沿いにある

融離魔力が極端に薄いため、“死の土地”とも呼ばれていた  
楽園の長からは情報の収集と整理の役目を与えられている

精霊、眷属

神の力の具現化 精霊 精霊の中でも一部が眷属

大抵は獣姿

人型の精霊、眷属は珍しい

魔術師に利用されることが多い精霊は、古代地上神の末裔  
実体はなく、丸っこい姿をしていて、意思が弱い

魔術師（精霊使役）

精霊を使役し、力を行使する者

精霊を使役しなくても使える力もある

上級、中級、位なしの三つの位がある（稀に魔術が使えない者を位  
落ちという）

最上級精霊使役 クランドローメルズ

教会にのみ伝わる儀式によって、精霊を喰らい力を得る神官

精霊を使役することはない

神子

異界から来る、フィーリーシャの愛し子

先代の神子が亡くなると、その翌年に新たに召喚される

連理の森 リ・フィルシアン

神子が召喚される神殿を囲うように結界の外に存在する森  
神子を害する全てから守る力が働いている

力ある神官 フィーラード

一黒を持つ者

フィーリーシャによって生み出される

連理の森へと渡る力がある

契約、誓約

誓約

何がしかを媒体とし、世界に理をつくる

契約に比べ種類が豊富

介入、書き換えが可能（上位の神、もしくはフィーラードなどが  
行使可能）

契約

契りを交わすことで、魂間に結びつきや流れをつくる

契約は全部で4種（神子の契約は含まれない）

介入、書き換えが不可能（フィーリーシャであっても不可能）

神子の契約は、手順などが全て違う

？の言

契約、もしくは誓約を完全に成す前に破棄する場合に用いる言葉  
のこと

## 種類

誓約は最上級〜下級の4段階のレベルが存在する（例外もあり）

主従誓約    ゲネレ・ミシュ

神または精霊が主を定め、そのものを守るための誓約

最上級は上位の神のみ使え、生涯に一度のみ

神威誓約    ゲネレ・フィファス

神が愛する者に恩恵を与えるための誓約

最上級は神子にのみ適用される

自署誓約    ゲネレ・トワルレ

紙を媒体とした誓約

他の誓約とは格段に精度が劣るために、内容は雑把となる

結縁契約    ベネレ・ラルシュ

魂を直接結ぶことで縁をつくる契約

縁Ⅱ関係性で、好意的な関係を築くための契約とも言える

束縛契約    ベネレ・ラルシーラ

互いを互いに束縛するための契約

## リシアー

蓮の花に似た花を咲かせるが、薔薇のような灌木のつる植物

大輪の花は、薄紅色をしている

## ブローグ

10年ぶりに見るその建物は、人の手が入っていないためか古くさびれていた。

石畳を靴底が叩くと、カツンと音がして、反響する。

建物の奥へ奥へと入っていくと、繊細で美しい彫刻が掘られた石造りの台の上。

真っ白な大輪の薔薇に似た華に囲まれた、10年ぶりに見る、とても愛しい人がいた。

「ただいま、兄さん」

自分とは似ても似つかない、美しく整った顔立ち。

白い肌は少し青みがかっていて、かといって不健康そうという訳ではなく、儚く優美な雰囲気を実際立たせている。

10年前に見たままの、少しも変わっていない美しい人。  
躊躇いがちに伸ばした手が、頬に触れる。

「生きてるね、兄さん」

温かい体温にほっと息を吐く。

胸の上に耳を寄せて、心臓の音を聞いた。

生きていることは知っていた。

それでも、触れて実感するまでは、もしかしたらという不安がいっつも付きまとった。

だってあれから10年だ。

10年は長い。とてもとても長い。

「待っててね。きっと起こしてあげるから」

長い時間の中で、幸せを諦めてしまった人だけど、きっと幸せにしたかった。

だって、この人が私の幸せの形。



## プロローグ（後書き）

トリップモノにハマった自分に、延々とBL王道トリップ設定を聞かせやがった友人タナベ（仮名）に捧げます。

俺が書くのはノーマルだ！と、先に断言しておく。

友人への当てつけに。

書け書けとうるさいので、意趣返しにBL王道だという設定を下地に、ノーマルで書いてやろうという…。

同性愛否定しないけど、ベーコンレタスは書きたくないんだ。

プラトニックならいいのにね…

## 1 自称神様

「蓮ー！今日暇ー？」

「バイトだったの！」

友人への対応もおざなりに、教室を出る。

授業が長引いてしまったために、バイトの時間に遅れそうだった。高校に入ってから一人暮らしを始めた私こと三沢 蓮は、生活費のためにバイトが必須だった。

金がないわけではないが、せめて大学に入るまでは通帳のお金は手をつけたくなかった。

両親の遺産に全く手をつけずにとって置いてくれた叔母の加奈子さんに、高校を出てからまで手を煩わせたくなかったからだ。

加奈子さんは、学費だけでなく生活費も出すと言ってくれたけれど、三年前に結婚して、二年前には子供まで出来て、これから大変なのに迷惑はかけられない。

加奈子さんの夫である英明さんとの折り合いも悪かった私は、これ以上頼ってなるものかと、死んでも首を縦に振りたくなかった。

そのことに加奈子さんも気付いていたのだろう。

無理強いはされず、渋々だが承諾してくれた。

それでも、電話をかけるたびに家に戻ってこないかと言われてしまうのは、兄のことがあるからだろう。

10年前にいなくなってしまった兄。

その時の兄は16歳だった。

あとひと月で、その年齢に追いつく。

私も、兄と同じようにいなくなってしまうのではないかと、加奈子さんは危惧しているのだろう。

けれど、それはないと断言できた。

兄以上ではないけれど、それでも大切な加奈子さんを心配させてまで、行きたいところなどなかったから。

その確信も、今日の前にいる子供によつて打ち破られてしまったが。

10時にバイトが終わり、24時間営業のスーパーに寄って、切っていた電球と歯磨き粉とノートを買って、さあ帰ろうという時だった。

大通りに出た瞬間、音が消えた。

行き交っていたはずの車が一台もない。

疎らながらもあはれずの人の姿も、  
気配も感じられなかった。

「は？」

目の前に立つ、見たことのある形状の変な服を着た子供以外には、海のように深い色合いの髪をしたその子供は、こちらを見るなりくしゃりと顔を歪め、泣きだした。

「……ッ！ッ！ッ！」

勢いよくかまされたタツクルに、数歩後退することで堪える。

ぐりぐりと腹に額を押し付けられ、訳のわからなさすぐに現実  
に引き戻れず、されるがままになる。

「フーフーフーフーフーフーフー……」

「いっせえ!!」

茫然としてる下で大音量で連呼され、強引に引き戻された。

ひつついてくる子供をよくよく見てみる。

青い髪に、芽吹いた緑のような碧い瞳の、愛らしい顔つきをした子供。

見覚えはといえば、全くもってなかった。

「お前誰？」

「フリーリーシャだ！」

「…うん？」

胸を張って答えた子供に、何かが引つかかって首をひねる。

フリーリーシャ。

聞いた覚えのあるそれ。

「……………あっちの世界の神様の名前だった気が」

「レーンは覚えていてくれたのだな！そうだぞ！余はセイシャーリの神様だ！」

大いに肯定され、眉間に皺が寄るのを自覚する。

フリーリーシャといえば、兄がこの世界からいなくなった元凶だ。この世界とは別の、異世界であるセイシャーリに、神子として召喚した神。

はつきり言って大嫌いな部類だ。

私と兄を引き裂いたのだから当然だろう。

自称神様の子供は、それに気づいていないのか、にこにこ嬉しそうに笑顔を見せる。

「その神様が私に何の用？」

仮にフリーリーシャだとして、その神様が私に何の用なのか。

不機嫌丸出しで用件を問えば、子供はまた泣きだした。

「レーン。レーンはリーンやセイシャーリを覚えているか？」

「リーンって、兄さんでしょ。忘れるわけじゃないじゃない。アンタがセイシャーリに兄さん連れてく時、私まで連れてった。そのくせ手違いだからって三日とせずに私だけ戻したでしょ！」

「……………レーン、怒っておるのか？」

「当たり前だ！！」

それでもきちんと納得して別れることが出来たから、憎んではない。

だからと言って、目の前に元凶がいれば、怒りを覚えずにはいられないだろう。

「で、何の用？」

怒っていても仕方ないので先を促せば、子供はまたぎゅうつと抱きついてきた。

「レーンに…、レーンに、リーンを救ってほしいのだ」

「……………兄さんになんかあったの!？」

思わず胸ぐらを掴み上げて詰まれば、ひゃうつと悲鳴を上げて怯えられた。

他に人がいれば、小さな子をいじめているようにも見えただろうが、幸い誰もいない。

「り、リーンに傷はないぞ? その…そのな? 色々と間が悪くてな?」

「なんだ」

「世界に力のあった神官が、リーンに仕えていたキヤルチエ以外に一人しかいなかったのだが、リーンが来てすぐに死んでしまっただけ? む、迎えがいつこうに來ないのだ!」

予想外すぎて、声も出なかった私の心中を誰か察してくれ…。

## 1 自称神様（後書き）

見切り発車はやっぱ危ないなあと実感中。

1話書くだけでも難産だ！。

後で書き直すかも知れません…。

## 2 兄

「はあ？」

むかえって迎えたよな？送り迎えとかあの迎えたよな？

ついでに言えば、おぼろげながらも残る記憶には、キアルチエがすぐに迎えが来るとか言っていた覚えがある。

「ちよつと待て…… ということ？」

「そ、そのな。リーンが<sup>リ・フィルシアン</sup>いる連理の森はな？<sup>ファイラード</sup>力ある神官の導きがなければ、誰も入れんのだ」

しどろもどろになりながらも、必死で説明する子供。

要領を得ないその説明を黙って聞き、頭の中で整理する。

要点だけをいえばこうだ。

森の外にいた唯一人のファイラードは、その時起こっていた大きな戦争で、敵国の間諜によって殺されたのだという。

キアルチエはいえ、契約によって縛られ、兄の傍を離れることはできない。

兄は王と契約を成さなければ、森はおろか、神殿の敷地に張られた結界からも出られない。

ならば新しいファイラードをと、ファイリーシャである子供は考え、実行した。

ファイラードの生まれる国を子供は定めることができない。

神子を迎える王は、そのファイラードを召し抱えた国だ。

おさまりつつあると言っても戦乱の世。

戦禍に巻き込まれた小国に生れしファイラードの子は、二年とそ

の生を全うすることなく殺された。

それを二度繰り返し、子供はそれ以上のことを放棄した。

滅ぶならば滅びてしまえと、あちらこちらで諍いを繰り返す人間たちに、静かに怒った。

けれど、そのままではいられなかった。

元々高齢だったキヤルチエが、寿命を全うし亡くなってしまったのだ。

一人残された兄は、長い月日の中で次第に心を病んでしまった。

「このままではならぬっ！このままではならんのだ！り、リーンは余の愛し子！神子だ！それが…それがっ」

「神様だっというなら、その結界を壊すなり何なりすればいいだろ」  
冷たく見下ろせば、自称神様の子供は悔しそくに顔を歪めて唇を噛んだ。

「余は…余の出来ることは神子を喚び寄せ、フィーラードを誕生させるくらいだ。あとは依り代がなければ何も…」

「兄さんがいるだろう」

そのための神子ではないのかと呆れば、俯き、力なく首を横に振られた。

「契約を成していない神子は依り代にはなれぬ。神子といえど異界の者だ。契約を成して世界に定着させねば、力を与えるどころか話しかけることも…」

大きく息を吐き出しながら、子供の前に屈む。

ずっと立ちっぱなしで、足が痛い。ついでに腰も。

「それで？兄さん以上に異界の者の私に、いったい何をどうしろと？」

子供はパツと顔を上げて、大きく目を見開いた。

信じられないといった様子の顔。

神様…にしちゃあ、ずいぶんと表情が動くこの子供。



感情の起伏も激しく、まるで人間。

うん、やはり自称だ。

「レーンは、助けてくれるのか？」

ぼつりと呟くように漏れた問いに、私はにんまりと口を歪める。

「ねえ、フリーリーシャ」

この時初めて、子供の名を呼んだ。

子供の視線を外さずに、鼻先がくつつきそうになるまで顔を寄せ  
る。

「私はね、兄さん以外はもうどうだっていいのよ」

加奈子さんには申し訳ないが、10年経とうとこれが私の不文律  
だ。

大体、兄が幸せだという確信があつたからこそ、別れにも納得し  
たし、一人戻されたこの世界でも生きて行けたのだ。

それがただの空想で、実は不幸のどん底だなんて、はつきり言っ  
て冗談じゃない。

「兄さんが幸せになるための協力なら、例え火の中水の中よ！人を  
殺すことだつて吝かじゃないってくらいには、協力は惜しまない」

「……人は殺さんでもいいぞ？」

「物のたとえ。まあ、実際誰が死のうと、兄さんが幸せになるため  
だつたらどうでもいい」

ハツと嘲笑しつつ言い切った私に、子供は気まずげに視線をそら  
す。

人選誤つたとか、今更ながらに後悔でもしているのだろうか。

「んで？私はそっちの世界に行けばいいの？」

「そうだ。レーンは一度あちらに行ったことがある。それ故に道が  
作りやすいのだ」

なるほど。

それもあつて私に助けを求めてきたということか。

「でも大丈夫なのか？異界のモノは異物で、世界から吐き出されるんじゃないかったっけ？」

「その点なら大丈夫だ。レーンの身体を余の眷属として少し作り変えて送り込む」

作り変える…ねえ。

痛いとかなければいいけど。

「ふーん。ならさっさと行こう」

「に、二度とこちらには戻ってこれないのだぞ？ここでやり残したことはないのか？」

若干焦った様子でこてりと小首をかしげる子供に、少し真剣に考える。

兄以外はどうかだっていいと言っても、戻ってこれないこの世界で気懸りとなること…。

ああ、一つだけあった。

「加奈子さんに手紙書かなきゃ」

鞆の中から手帳を取り出し、メモを一枚抜きとる。

ペンを手にとり、これまでの感謝の言葉と、通帳のお金の譲渡の意と、兄の下に行くことと、別れの挨拶をつらつらと書き連ねる。

最後に、自殺するわけでもなし、幸せになりに行くだけなので心配ご無用ですと書き足して、わかりやすいように手帳から少しはみ出した感じで挟んだ。

手帳を鞆の中に戻し、これをどこに置き去ろうかと考える。

ああ、そういえば少し歩いた先に交番があったな。あそこにしよう。

「ちょっと移動するよー」

立ち上がり、子供の手を引いて歩き出す。

歩こうとしてこけそうになった子供に、すぐに歩みが止まった。

今更ながらに思い出したが、この子供の来ている服。

キラルチェが着ていた神官服の裾長いバースジョンに見える。

タックルかました時は裾に足とられなかったくせに、なんで今歩

こうすると足をとられるのか。

「っち、めんどくせ」

一歩踏み出すたびに裾に足をとられてはたまらない。

子供のひざ裏に腕をやり、そのまま抱き上げた。

「うわっ……!!」

急に高くなつた視点に驚いたのだろう。

襟元の服をぎゅっと握られる。

それで丁度良くバランスが取れているようなので、そのままにさせた。

「さー行くぞ」

バイトで疲れた体に鞭打って、子供抱きあげるなんて軽く拷問だ。混雑する飲食店の接客は、足ばかりか腕にだって相当負荷がかかるんだぞ、このやろっ……。

黙々と歩いていると、耳元で子供が笑った。

「レーンは不思議だ」

不思議とな？

意味がいまいち理解できずに首をひねっていると、クスクスと子供が笑う。

「余がこうして人の前に姿を現したことは何度かあるが、こんな風に扱われたのは初めてだぞ。…それに」

「……それに？」

「レーンは、執着が薄いのだな」

どこか寂しげにもたらされた言葉に、思わず吹き出してしまった。

「いやいやいや。そんなことないでしょ。ありえないよ。兄さんには執着しまくりだもん」

「そう、か？」

「兄さんについて言うより、兄さんの幸せに、なのかも知れないけどね。それに一生分の執着使い切ってる感じがなあ……」

だから、薄いといえば薄いのかもしれない。

物も、人も、大切だとは思えど、手放すことはさほど惜しくはな

いのだから。

立ち並ぶビルの狭間にこぢんまりとした交番を見つける。

建物の中は煌々と電気が付いているのに、人の気配はやはりなかった。

仕方なしに扉の前に鞆を置き捨てる。

「さて。これでOK。さつさと行こう」

膝について子供を地面におろすと、子供は今度こそはっきりと頷いた。

「レーン。そなたの心に感謝する」

言葉とともに与えられた口づけ。

しかもデープ。

やだな、シヨタコンのケはないんだけど。

……うん。とりあえず一回ぶん殴っていいかな？

## 2 兄（後書き）

ここでいうのもどうかと思うけど、なんだか他にも誤解されてそうだからここで友人の問いに答えさせていただきます。

Q・B L王道トリップ設定どこいった？

A・下地だから原型留めてないよ。それに王道……。俺苦手。

### 3 異世界と貞操

異世界、セイシャーリ。

自称神様な子供にディープキスをかまされ、やってきました異世界。

……それで、ここどこ？

綺麗に整えられた庭の中にある池に、頭から落ちたことは覚えて  
いる。

そのまま意識失っちゃったんだろうなあってことも。

次に目が覚めたら、わぁ嬉しい、着替えもすまされて、豪華な部  
屋のベッドの中。

これキングサイズ？でかいなあ…。

「ふかふかベッド…。もうひと眠りしたい」

疲れてるんだよ。

眠いんだよ。

あのディープがファーストなのも結構ショックだったんだよ！

……嘘だけど…！

現実逃避関係なしに、睡眠欲に身を任せることに決め、目をつむる。

すぐに睡魔がやってきた。

近く期末テストがあったせいで、バイトのあとは夜中の1時まで勉強してたから、基本的に睡眠不足だったために、ぐっすりと眠ってしまった。

夢も見ず、疲れもとれるくらいに快適な眠りは、突如降って沸いた人の気配でぶち壊された。

「んっ…？」

覆いかぶさってくるような感じに、うつすらと瞼を持ちあげる。

まだまだ眠くて、瞼がそれ以上あがらなかった。

一度起きた時には明るかった部屋が、すでに薄暗く、夜であることが窺える。

窺えるが、これはいったいどういう状況だ？

暗いせいで顔は見えないが、覆いかぶさるようにベッドに乗り上げている男がいることはわかる。

シルエットの、上半身裸な気が…。

……………あれ？これってもしかして貞操の危機？

一気に目が覚めた。

「えーっと、どちらさま？」

ここが家主？だろうなあってのはわかるのだけど。

まさか助けたから身体で返せてことか？んな理不尽な！

「\*\*\*\*\*」

わああ。

何言っただかまるっきりわかんねえ。

てか、え？

ちよつと待てよ？

私って今、フリーリーシャの眷属だよね？

それなのに言語補正は効かないってか！？

やっぱり自称だな、おい。

この力加減が！！！！

「すみません、何言ってるかわかりません。とりあえず退いてください」

上体を起こしつつ、軽く後退りながら言う。  
が、その態度がお気に召さなかったらしい。  
肩を押さえつけるように押し倒される。

「\*\*\*\*\*」

耳元に顔を寄せられ、ゾツとするほど低い声で何か言われた。  
言葉は理解できないが、なんとなくわかるぞ。

動いたら殺す的なことだろう！？

動かない。

動かないから命はとるなよ！？

なんて心中で喚き散らしながら、男の動きを見極める。

ワンピースのような夜着である服のボタンを外され、胸に手を這わされる。

あー、これ完全に犯られる。

まあいいか。

命取られないんだったら。

とか樂觀視するんじゃないかった。

服も下着も剥ぎとられ、碌に前戯もなしに犯りやがったこの男！  
！！！！

うわ最低！

しかもこれ初体験とか！

痛いやめろを何度繰り返したことが！！

……………周囲が皆すませちゃってるから、体験談だけは聞いて耳年増な自分が憎い。



「湯は沸いている。あとは侍女を呼ぶなりなんなりしろ」

「ああ……は、い？……はっ！？」

用は済んだとばかりに身なりを整えた男を振り返る。

男が灯した燭台で、男の顔がはつきりと見て取れた。

綺麗な金髪の、氷のように冷たい雰囲気を纏った美形。

これで不細工だったなら呪ってやるところだった。

「……今、なんておっしゃいました？」

男は嫌そうに顔を顰めた。

「あとは侍女を呼ぶなりなんなりしろと」

ついさっきまでまるでわからなかった言葉が、日本語にしか聞こえない。

さっきまでのあれ、何？

何だったの？

「………なんで？え、セックスしたから？わけわかんねえ。……ファイ

ーリーシャ次会ったらぶん殴る。何これ。ありえねえ」

「口の悪い神子だな。それに天上神であるファイリーシャファイリを殴るだと？出来るわけがなからう」

それもこれもファイリーシャが悪いのだと、諸悪の根源を恨んでいると、男が嘲笑した。

ファイリン神子の言葉に、愕然と男を見やる。

今、この男、なんて言った？

「私が、神子？」

神子？私が？んな馬鹿な。寝言は寝てから言え。

いや、それ以前に。

「神子がいるのは連理リ・フィルシアンの森だろ？」

「神子ではないというのか？」

「当たり前だろ！！」

ふざけるなと怒鳴って、男に向かって枕を投げた。

掠りもせずに避けられて、怒りを煽られる。

「私が神子！？普通に考えてあり得ねえだろ！誰も迎えに行ってい



いらんデジャヴを感じる。

てか。

「来るのがおせえんだよボケ!!!!!!!!!!!!!!」

目標は達成するべく、突進してきた人ほどある銀狼を蹴り倒した。手じゃなくて足が出たけど気にすんな。

「レーンの愛は痛いな」

「誰が愛だ！」

へらへらとした声に突っ込みを入れつつ、今度はちゃんと手でぶん殴る。

「どこだよここ。なんで連理の森じゃないわけ？」

「レーンがきちんとこの世界に属するには、体液の交換をするしかなくてな？この国は神子を手に入れるには性交をしなければならな」という伝承があるために、ここを選んだのだ」

「……………死ね」

兄がこの国に居なくて良かった。

心底その事に安堵を覚えつつ、目の前の狼に対しての報復も忘れない。

「まさか国王が釣れるとは思わなんだが」

狼が顔を向けたその先。

すっかり忘れていた男へと振り返ると、ドアのところから兵が溢れていて、いつのまにか囲まれていた。

まあ、あの音で集まらなかつたら可笑しいわな。

持っている剣や槍を向けられないのは、神子と間違われているからだろう。

「へえ…国王。これが」

強姦ヤローだけど、確かに見目麗しいし、威厳はあるし、ぴったりだな。

「よかったな、レーン」

「あ？」

「性交をしてレーンがその男を得たのだ」

「は？」

意味がわからないでいると、狼は懇切丁寧に教えてくれた。

「レーンは余の眷属だからな。仕組みは同じだ。伝承は少々誤っている？性交によってレーンを手に入れるのではなく、レーンが手に入れたのだ。この国王を」

こんな奴いらねえと言ったら罰あたりですか？

#### 4 慰謝料頂きます

仕組みが同じ、と目の前の狼は言った。

それは、神子である兄と眷属である私に適用される、この世界の仕組みということなのだろうか。

そもそも、眷属ってどういうものなんだ。

……こちらに来る前に、きちんと説明受けておくべきだったかな。

「先ほどから聞こえる声は、その狼のものか？」

男の背筋が凍るような声に、内心びくつく。

国王つてことは王様でしょ？

…不敬罪で殺されたくないな。

これ以上何かある前に早く出て行きたいと及び腰になっている横で、狼は鷹揚に頷いた。

「いかにも。ここでの用は済んだからな。レーンを迎えに来たのだ」  
うわぁ…。

それって端的に身体目当てでしたって言うより性質悪い気がする。  
身体目当てで思い出した。

服着なきゃ、服。

シート羽織ってるってたって、その下は真っ裸。

裸見せびらかす変質者の趣味は私にはない。

行為の後で感じられたべったりとした汗も、窓に大穴があいたせいか、乾いてしまつて逆に寒い。

ベッドの端に放られた夜着を取ろうと手を伸ばすと、シートがず

り落ちた。

「……レーン。服なら余が用意する。だからシーツを剥くでない」  
呆れられたように言われて、仕方なしにシーツを羽織りなおす。  
「動きやすいのね。スカートは嫌。ズボンにしてね。派手だったり、裾がびらびらしたのだったらぶん殴るから」

子供が着ていた神官服と同じものを出されては適わないと、注文をつけるのも忘れない。

貞操観念が希薄すぎるとか、やっぱりレーンはおかしいだとか、ぶつぶつ言われた。

貞操観念云々は、犯られること確定の国に人を放りこむような奴に言われたくないと、内心で反論した。

しかし、腐っても神様。

自称だろうと神様。

一瞬にして身に纏っていた服は、なかなかどうして、動きやすい肌触りのいい服だった。

見た目は質素だけど、かなり上等な布と細工が施されている。  
漆黒の布地に、華やかだけれど控えめな品のある銀系の刺繍。  
ボタンには赤いルビーのような宝石が使われている。

服の型も、色合いのセンスも、文句なしにかっこいい。

「レーンの希望に合わせたら従者服になってしまったではないか……」

「従者だとまずいの？」

兄のためだけに来たのだ。

兄の……神子の従者でいいじゃないかとも思うんだが。

「そなた、自分の立場を露ほども理解してないのだな……」

しみじみと言われてしまった。

でもね、立場って言われてもね。

この世界のことなんて小指の爪の先ほど知ってるだけで、あとは説明もされてないし、見てもいないんだから知るかっぺんだ。

開き直った私に狼はため息を吐きながら、男へと向き直る。

威圧するような視線は、泣きながら縋ってきた子供とはかけ離れ

ていて、少し感心してしまった。

「レーンはファイリーシャの力を受けし眷属。今後この者に手を出すということは、セイシャーリ全ての神々を敵に回すと心得よ。」

「ヴィレンツアーレ神帝国皇帝、ヴォルゲルド・ファイシェーラ・ケアトラフェス・ヴィレンツアーレ」

なんだか物々しい言い方で狼が言い切ると、男が片膝をつき、右手で拳を作り心臓の上に置いて、頭を垂れる。

周りにいた兵士たちはそれを見て、慌てて両膝をついて頭を下げた。

こっちはさながら土下座だ。

それにしても、皇帝。

カイザーとキングだと、カイザーのが上だったような…。

何とも居心地の悪い沈黙にさらされ、どうしたものかと狼を盗み見ると、狼は言った。

「地上神ならまだしも、天上神ファイリに対し人間如きが話しかけるのは礼節に欠ける。殺されても文句は言えまい」

ああ、だから男はこちらを睨むように見ながらも、最初の問い以外喋ろうとはしなかったのか。

でもいつから男は、狼を天上神と感じたのだろうか？

その疑問を投げかければ、狼はくつくつと笑った。

「わからぬのはレーンだけだ。天上神が現れれば、空気がまるで違う。理が違うからな。人間にとつては化け物だろうよ」

「ふうん…。神様つて二種類いるんだ？」

「気位の違いだと余は思うがな」

「気位ねえ…」

それにしちゃあ、自称神様の気位はそこまで高くないと思うけど。狼の今は、まあそれなりに気位ありそうだけど。

今だって威圧的だったし。

いや、そんなことより聞かなければならないことがあった。

「さっさとここから出て行きたいんだけどさ。その前にもうちよっ

と詳しく教えてくれる?」

「何をだ?」

「この男が私のモノってどういうこと?」

いくら考えても意味がわからなかった。

わからないものを放置したままは、気味が悪すぎる。

なんだって相手が皇帝だ。余計に恐い。

皇帝である男が私の従者になるわけでもなし、だからといって操り人形のように意のままになるとも思えない。

それなのに、私のモノと断言できる何かがある。

たかだか性交の一回で。

「所有権とかの問題じゃないのはわかる。ならどうして私のモノになるの?」

「それはな、レーン。その国王が、レーンの害にはならないという意味だ。どうやったところで、レーンに傷一つつけられないどころか、レーンにとって有益になる行動をしてくれる」

「……うん?」

「今後、この国王が意識せずに行動してもなお、確実にレーンの役に立つという絶対の理だ。レーンが今後一切関わらなくとも同じこと。この国王が賢王になろうと愚王になろうと、それらすべて、未来のレーンの役に立つ」

なんだろう。

嬉しいような嬉しくないような。

この男の行動が私の役に立つのはいいけど、私の行動がこの男の役に立つことは…。

「そのような理はないからな。確実に役に立つということとはなからう。意識して行動するわけではないならな」

「私から与える物はなにもない。でもこの男はどう行動したって私を傷つけられないどころか、それがすべて私のためになる。だから私のモノ?」

「そうだ。だから釣れたのが国王で良かったであろう?」



世界への影響は絶大だからなと、狼が言った。  
そこらの一般人よりいいだろうな、とは思う。  
とりあえず、進んで関わらなくてもいいことにほっとした。

「今の説明でわかったか？」

「うん。ありがと」

理ということとは、意識を弄られるというわけではなさそうだから、男への迷惑は考えないことにした。

考えるだけ無駄な気がしたし、兄の幸せのためなら使える物は親でも使えが、私の信条だ。

強姦されたのだから、その慰謝料ってことでいいだろう。

「んでは、お騒がせしてすみませんでした。お世話になりました」  
男たちに一つ頭を下げてから、こっちに寄れという狼にぺたりと抱きついた。

すると、目に映る情景が水面のように揺れ、絵の具を垂らしたかのように景色が変わっていく。

鬱蒼と生い茂る木々が映る視界。

その先に、月明かりに照らされて、白く輝く神殿があった。

「兄さん……」  
リ・フィルシアン  
連理の森。

神殿を守るように外界の全てを遮断するこの森に、私は10年ぶりに足を踏み入れたのだった。

## 5 ここが現実

兄がいる。

会いたくても。

どれだけ会いたくても会えなかった兄が、すぐ近くにいる。それだけで心は歓喜に奮え、涙がこぼれる。

急く気持ちとは裏腹に足は纏れ、なかなか前に進まない。

「あつ……」

やっと森を抜けるといった手前で、見えない壁に阻まれた。

「やつ……うそ。なんで！」

入れない。

すぐそこにあるのに。

兄がいるのに！

「結界だ」

背後の狼が、静かに近づいてくる。

「……けっかい？」

「急くな。レーンなら抜けられる」

ならばどうして阻まれるのだと声を荒げたい衝動にかられたが、

風いだ視線に声が詰まった。

狼はゆったりとした足取りで横に來ると、顔を上げた。

「ここを抜ける前に、先に言っておく。レーン。余はそたなに、話していないことがある」

「何」

そんなもの、それこそ山ほどあるだろうと、今更なことに顔を顰めれば、そうではないと首を振られた。

「リーンのことだ」

「兄さん…？」

「リーンは確かにここにいる。ここにいるが…。リーンは心を病んで、眠りについたのだ」

「眠りについたって…」

リー・フィルシアン  
フイーリン

「ここは連理の森。神子を守るため、害する全てを遮る森。それは自らの意識さえも、だ。そして、このままではリーンは目覚めない」  
非情なほど淡々とした声だったけれど、瞳に苦渋が窺えた。

害する全てを遮る。

兄は、自らを傷つけるほどに絶望したのだろうか。

「目覚めさせるにはどうすればいいの」

涙を拭い、毅然と立つ。

私に弱い心など、いない。

「簡単なことだ。契約を成せる王を連れてくればいい」

「契約を成せる…。王なら誰でもいいってわけじゃない？」

「リーンは心を閉じてしまった。その心が動かされなければ、とても契約など成しえない」

兄の心を動かせる…。

どんな、王なのだろう。

それを知らなければ、王を連れてくることもままならない。  
それでも…。

「やってやる。兄さんが幸せになれるなら」

兄が笑い、優しく生きれるためならば、どんな無理難題だろうと構ってはいられない。

ただそれに挑むだけだ。

挑み、打破すること。

屈することなどあつてはならない。

「この結界。どうやって抜けられるの？」

感触だけで言えば、硬いガラス。

視覚としては感知できないが、さすがに割れたりするわけではないだろう。

抜けるということは、通り抜けるようになっていたのだろうか。

「感情を抑え、耳を傾け、この森と調和する。レーンは余の眷属だからな。それだけで抜けられるはずだ」

「わかった」

右手を結界に添えて、体から力を抜き、大きく呼吸を繰り返す。

それだけで心は落ち着きを取り戻す。

兄がすぐそばにいる。

それだけで感情は粗ぶるから、何も考えないように努めた。

わずかな風と、虫や動物たちの声が耳に届く。

森の木々と、草花と、それらすべてに呼吸を合わせていく。

息を吸う度に、緑の濃い匂いが体いっぱい広がる。

ここが、現実なんだと、なぜか急速に実感した。

するつ。

硬い感触が消えた。

一步、足を踏み出す。

何もなく、何かを通り抜けた感触さえなかった。

もう一步踏み出し、完全に森が出る。

「…通れ、た？」

踏みしめる土には、何も生えていない。

振り返れば、木々も草花も不自然に何かに遮られたように育っているのが見て取れた。

「結界は、植物ですら通さないの？」

「神殿外で育つ植物は、危険な種も多い。そのための措置だ」  
結界の外。

悠然とした姿で座る狼。

「こっちにこないの？」

座ったまま、一步たりとも動こうとしない。

「ここにいる。この先はレーン一人で行くといい」

有無を言わさない言葉に、深く考えずに頷いた。

10年ぶりに見る、白亜の神殿。

見上げた空に、満天の星空。

この星は全て蒼い。

その蒼さに、心がすっとした。

大きく息を吐き出し、前を見据えた。

interval ?

ファイリス・フリーリーシャ  
天上神フリーリーシャ。

ファイリス  
人型以外で姿を曝したことの無い天上神最高位の神が、獣型の姿をして現れた。

「ヴォルゲルド・フィーシェーラ・ケアトラフェス・ヴィレンツァーレ」

真名を呼ばれ、魂がギリギリと絞めつけられる感覚が襲った。  
フリーリ  
天上神の中には、姿を見るだけで真名を読み取るという。

フリーリーシャがその力を持つていても驚くことはないし、フリーリーシャに真名を捉まられるのなら、この上なく名誉なことだった。

たとえそれが、命を握られたと同意義であろうとも。

「フリーリーシャ神が現れたというのは本当ですか」

宰相であるダミアンが、執務室で顔を合わせるなりそう聞いてきた。

いつだって冷静沈着で、鉄仮面と評されるほど表情を片時も崩さなかった男が、満面に驚きの表情を浮かべていることが、少し可笑しかった。

それをおくびにも出さずにヴォルゲルドは答えた。

「ああ。自身の眷属を迎えに来たと言っていた」

「眷属？神子ではなく？」

昨日の昼時点で、容姿の特徴と額にある神子フィルラの紋章から、ダミア

ンには神子が現れたと報告がいったのだろう。

ダミアンにとっては、かの神に眷属がいたというほうが驚きだろうが。

「眷属だ。レーンと、呼ばれていたな。ずいぶん不遜な眷属だった。フィーリーシャ神を顎で使っていた」

口が悪く、まるで下賤の者のような振る舞いと、神を神とも思っていない態度。

暴言だけに留まらず、足蹴にする始末。

当の神はそれを当然のことのように受け取っていた。

「フィーリーシャ神を顎で使う…？」

ありえないと、誰もが思うことだろう。

直に見ていなければ、ヴォルゲルドだって信じることはなかった。真名を呼ばれるまで、天上神の中でも変わり者だというフィーリエルガかと疑ったほどだ。

「…そうだ。それと、伝承の認識が誤りであることがわかった」

かの神が言っていた、伝承の誤り。

その誤りによって今回の機会を得たと言っても、絶対的な過ちを犯す前に正しておかなければならない。

内容が内容だけに早急に正さなければ、かの神を敵に回してしまう予感がヴォルゲルドにはあった。

「“神子交わり王得たり”。あれは神子を王が得たのではなく、神子が王を得たという意味らしい」

「教会に申告しておきます。…では、得たりの意味は」

ゲネレス・フィフアス  
「最上級神威誓約だと言っていた」

「ゲネツ…！？」

今日は良く表情が崩れることだと思いながら、仕方ないことだとも知っていた。

昨夜だけで、ずいぶん信じられないことが立て続けに起こった。神官のはしくれでもあった者としては、開いた口も塞がらないだろう。

「神威誓約は、人が神の恩恵を得るためのものではなかったのですか」

「そう思っていたのは人だけだということだろう。現に、私は眷属殿と神威誓約を交わしたらしいからな」

「まさか……！」

「はつきりとそう言っていたわけではないが、原理としては同じだろう。私がどう行動しようと、眷属殿の益となる。それだけだ」

神威誓約を人に対し使えるという以外、別に騒ぎ立てることではなかった。

最上級であろうとなかろうと、何か不都合が起こるわけではない。どころか、皇帝としての箔も付くことだろう。

天上神の姿を見ることだって難しいというのに、あの最高位の神の、しかも獣型の姿を拝み、真名を捉まれたというのだから、建国以来の快挙とも云えよう。

かの神の眷属とはいえ、女と交わらなければならなかったことが、ヴォルゲルドの自尊心を大いに傷つけたが。

「それにしても、神子を正妃として迎え入れるはずでしたからね。また五月蠅くなりますね」

「わかつている……」

一夫一妻というわけではないこの国には、後宮というものが当然のように存在する。

かといって女が好きかと問われれば、答えは否。

近寄るのも見るのも、必要最低限で済ませたい。

ヴォルゲルドは、幼少のころからの筋金入りの“女嫌い”だ。

「陛下ももう31ですから。そろそろ世継ぎをどうにかしていただきませんと」

「養子でももらえばいい」

「そうですね。それでどちらの？」

「……………クソッ」

ダミアンの冷静な切り替えしに、思わず口汚い言葉が漏れた。



言ってしまったえば、調度いい人間がいなかった。

権力に酔った古狸に甘い汁を啜らせてやる気はない。

ないが、養子として周囲を納得できうるような子供は、どうやったところでその古狸どもの餌食となることがわかりきっていた。

せめてヒルトウネン公に子がいれば…。

「眷属殿に子ができていないだろうか…」

いくら嫌いな女といえど、辱めた者に対し、こんなことを請うのは間違っている。

間違っているとわかっていても、そう願わずにはいらなかった。

i n t e r v a l ？（後書き）

造語のオンパレード。

視点変わった途端に…。

造語はとりあえず神関係の言葉のみなので、後はそう増えないはず…。

## 6 従者の従者

生きるために必要なものなんて質素でいい。

無駄に金かけたって使う用途は変わらないのだから、長持ちするもので安いものが一番だ。

元々庶民で、もつと言えば儉約に儉約を重ねていたから、貧乏な部類だった。

一人でなんだってできるし、なんだってやってきた。

「レーン様、お食事はお部屋でなさいますか？それとも陛下と一緒ですか？」

それがどうしてこうなったのだろう。

見るからに金かかっているだろうという部屋の中、動けば何か壊しそうな気がして、所在無げにベッドの上に座り込んでいた。

「……部屋で」

わかりましたと頭を下げて、侍女たちが寝室から出て行く。

どこのお姫様だ、ホント。

ずっと座り込んでいるわけにもいかず、ベッドの上に用意された服 従者服に手にとり、一人で着替える。

一人で着替えられるのは、昨日のうちに手伝われそうになってすぐに断固拒否して勝ち取った状況だ。

勝ち取ったと言っても、一人でやらせると一度怒鳴っただけ。

どうにも、天上神フイリの眷属に触れるのは畏れ多いということで、すぐに諦めたらしい。

「レーン。起きてる？」

「マーノン。おはよう」

バルコニーから入ってきた美青年に、にこやかに挨拶する。

ちなみにここは二階で、登って入れる木などは一つもない。

美青年といっても、マーノンは人間じゃないから気にすることもないかった。

天上神の一人、フィーリ・マノレイと呼ばれる歴としたセイシャーリの神様だ。

「おはよう。リイから伝言。最低でも1ヶ月だって」

「……そっか。リイは1ヶ月か」

リイとはフィーリーシャのことで、天上神たちの間ではリイという愛称で通っていると言うので、遠慮なく使わせてもらっている。

「1ヶ月……。ちょうどいいからこのヴィレンツアーレに居候させてもらおう」

ヴィレンツアーレ神帝国。

戻ってくる気などなかったここに、不可抗力の末不本意ながら戻ってきてしまった。

「レーン、皇妃になる気？」

「誰になるかつ……!!」

笑みを絶やさないマーノンの言葉に、思わず突っ込みを入れてしまった。

けれど、そう……。

皇妃というのもあながち非現実なことではなかった。

なってくれないかと皇帝陛下はともかく、宰相閣下に頼みこまれてしまったし。

きつぱりと断ったけれど、あれは絶対諦めてない。

「仕方ないから様子見。この世界に人間の知り合いなんていないから、ここでするだけ常識とか文字とか世界の情勢とか、教えてもらわないとなんないし」

金もないから働き口の斡旋もしてくれたら万々歳なのだけれど。

「ああ。僕らじゃ人間側のことはわからないからねえ……」

神であるマーノンは、困ったように頷く。

「マーノンたちがリイほどに人間に興味があればなあ」

「リイは人間というより、神子に興味があるだけだね」

「そうともいっ…」

どっちにしろ、彼ら神に人間たちのことを聞くなど愚の骨頂だ。

世界各国の情勢など、彼らは知る由もないだろう。

彼らが教えてくれることがあるとすれば、せいぜいあそこで魔力が動いたとか、血の匂いがウザイとか、どっかの地上神<sup>ファイシエ</sup>が誓約したとかその程度だ。

「とりあえず飯！飯食ったら皇帝さんにいろいろとお願いしよう！」

「昨日会った人間？」

「そう。あの人の判断は私の益に繋がるからね！ちょうどいいですよ」

「……ふうん」

わからないことだらけで考えるのもめんどくさいから、人任せにすることに決めた。

それに腹が減っては戦は出来ぬだ。

こっちに來てから、まだまともなものを食べてないことを思い出した。

ちょうどドアがノックされ、準備が整ったことが知らされる。

「マーノンも行く？」

「やめておくよ。人間は好きじゃない」

かくいう私も人間なんだけどな。

眷属だからいいのだろうか。

聞いてみたいが、また今度にする。

「わかった。んじゃまたね」

「ああ、また。何かあったらすぐ呼んで」

自然な動作で近づいてきた顔が、額にキスを落とす。

マーノンはなかなかスキンシップ好きらしい、というのが、ここ数日一緒にいた私が抱いた印象だ。

放っておくと、気に入りのぬいぐるみかペットのように、抱きしめ頼ずりしてくるからたまらない。

「ん。今頼れるのマーノンだけだから、遠慮なく」  
ひらひらと手を振って、マーノンから逃れるように寢室を出た。

「あー……」

もうどうしてくれよう、この男。  
食事を終え、今後の計画を練りつつ食後のお茶を楽しんでいる時にやってきたこの男。

仮にも女性の部屋にノックもなしに、引きとめる侍女を乱暴に退かして無理矢理入ってきたこの男。  
肥えすぎてて、豚か蛙か、果ては哺乳瓶の妖怪にしか見えないこの男。

どこを見ても好印象とは程遠い。

この国には宰相閣下以外まともな男がいないのだろうか。

ああ、でも昨日話した分じゃ、あの人は結構腹黒そうだった。  
難ありだらけだな、この国の男どもは。

まだ三人しか会ってないけど。

「何の用ですか？」

無視するわけにもいかず、侍女を下げて用件を聞いてみる。

さっさと出て行ってくれないものだろうか。

「ご、ご機嫌麗しく」

麗しくねえ。

お前のせいで麗しくねえ。

咽喉元まで出かかった言葉を必死に呑み込む。

「口上とかなら結構ですから、さっさと用件にはいつてください」

はあと力なく返事をしながら、男は額に浮かぶ脂汗を拭く。

「神子殿にお伺いしたいことが…」

「マノレイ!!!」

用件を聞く前に、私の怒りが先に爆発した。

呼ぶつもりは毛ほどもなかったのに、反射的にマーノンを呼ぶく

らいに。

「ひっ！」

男は私の背後に現れたマーノンに悲鳴を上げる。

「どうしたの、レーン」

変わらない微笑を浮かべ、マーノンは背後から柔らかに抱きしめてくる。

「このクソブタ捨ててきて。あ、捨てるだけでいいから」

「それだけ？」

もつとほかの言葉を期待していたのだろうマーノンは、拍子抜けしたように問いかけてきた。

「それだけ。捨てる場所はどこでもいい」

「どこでも？」

意地悪い色が声に滲み出てるのを私は聞き逃さなかった。

聞き逃していたら、極寒の地にでも放りこんできそうだった。

「死なないとこならどこでもいい。ただし、この国の領土内で」

「どうしようかな」

悩むように言いながら楽しげなマーノンに、男の顔は青を通り越して土気色だ。

その顔に、苛立ちが増した。

「さっさとしろ。アンター応でも私の従者だろ」

唸るように命令する。

マーノンは声を上げて笑った。

抱きしめていた腕を外し、額にキスを落としながら笑う。

いつもの微笑みではなく、にんまりとした蛇のような笑みだった。

「わかってるよ、マスター。でもご褒美があってもいいじゃないか」

マーノンの本性。

いつもにこにこして、人当たりの良さそうな穏やかさを身にまと

いながら、その実、隙あらばどつやつて相手を傷めつけようかと考えている、加虐心旺盛なサドヤローだ。



## 7 真名と表名

「えーっと。公爵？」

「ええ」

「……………うそだあ」

「本当です」

「豚か蛙にしか見えなかった」

「ぶっ」

笑いを堪え切れなかったのは、話をしていた宰相閣下ではなく、傍に控えていた見知らぬ男だ。

哺乳瓶がこの世界にあるかは知らないが、哺乳瓶の妖怪と言ったら爆笑しそうな感じた。

宰相閣下の冷ややかな視線を受けながらまだ笑ってる。

あの後、マーノンは殺さないという条件下で好きにさせたところ、肉体には全く傷をつけずに精神崩壊にまで追い込み、あの豚、もとい公爵は使いものにならなくなったそうだ。

2時間たらずで何してんだマーノンめ。

「いい加減にしろ、アナク」

容赦ない宰相閣下の一声で、私も我に返った。

まだ笑ってたのかと驚いて男を見る。

なんとか笑いを引つ込めても、口もとがニヤついていた。どこがそんなに面白かったのか。

アナクと呼んだ男に呆れながら、宰相閣下は話を戻した。

「眷属殿を咎めに来たのではないのです。ただ、何が原因で貴女の逆鱗に触れたのかと……」

「アイツが私を神子<sup>フーリン</sup>って呼んだから」

それ以外に何があると胸を張って言えば、アナクは今度こそ耐えきれないともいうように声を上げて笑い出した。

笑い上戸だろうか、この人。

「ヴォルドの言ってた通りだな！」

ヴォルドって誰だろう。

言いづらそうな名前だなあ。

「アナク。貴方がいい加減に黙りなさい」

「あの…ヴォルド、さん？って誰ですか」

素朴な疑問を解消すべく、宰相閣下問いかけてみると、アナクの笑い声がピタリとやんだ。

まさかといった表情で、アナクだけでなく宰相閣下にまで見られる。

「私、なんか変なこと言いました？」

「いえ…。陛下の名をご存じないんですか？」

「……………自己紹介された覚えがないんですが」

なのにどうやって知れど？

初めて会った時にフリーリシャが呼んでいたような気もするけれど、長つたらしくて覚えていない。

そういえば、目の前の宰相閣下の名前も私は知らなかった。

あ、いや…多分この人は自己紹介してくれたはずだ。

ここに不可抗力で戻ってきた直後で天パっていたから、私が覚えていないだけで…。

頭痛がするのか、宰相閣下は眉間を抑え、アナクは腹を抱えて笑っている。

よく笑うなあ…。

「陛下は、表名をおもてなヴォルド・フィーシェーラ・ヴィレンツアーレといます」

「あれ？もつと長つたらしい名前じゃ…」

「……………真名を聞いたのですか」

真名って何だっけ。

キアルチェに教えてもらった気もするんだよね。

私の名前が蓮なのに、レーンって呼び名をつけたのキアルチェだし。

おぼろげな記憶を捻り出そうと苦闘していると、宰相閣下が教えてくれた。

「真名とは、生まれてすぐにつけられる魂に刻まれる名です。真名を知られるということは、心臓を掴まれるのと同じです。その名を隠すために、表名というものが存在します」

「なるほど…。皇帝陛下の真名でしたら、長つたらしい名前だったとしか覚えてないですから大丈夫ですよ？フィーリーシャが言つたの聞いただけだし」

「そうですか」  
でもそっか。

じゃあついつかりで、元の世界の習慣と同じように自己紹介したらダメってことが。

ああでも…。

「じゃあ私なんて名乗ればいいんだろう…」

そのままレーンでいいのかな。

「そういえば、眷属殿の名を聞いていませんでしたね。レーンというのが表名でしょうか」

「んー。どっちかっていうと愛称ですね。真名とか表名の習慣がなかったの。あ、それで…あのう」

言いづらい。

限りなく言いづらいが、ここで聞かなかつたらなんかずっと悶々としそうだ。

「なんででしょうか？」

「名前、教えてもらってもいいでしょうか。…宰相閣下は多分自己紹介してくれたとは思ってますけど、混乱してたせいでちゃんと聞いてなくて」

素直に願ひ出れば、気分を害した様子もなく頷かれた。

「かまいませんよ。では、改めて：ダミアン・アダーニといいます。ダミアンで結構です」

「俺はアナク・ベイツ。近衛師団の師団長をします。俺もアナクで結構ですよ」

いまだに笑いをおさめられない様子のアナクも、ちゃんと自己紹介してくれた。

「ありがとうございます。私もレーンで結構です。それで、ヴォルド、様？が言ってた通りというのは？」

皇帝相手だから一応様付けを試みたが、強姦魔に様付け：なんかいやだという気持ちが出て、疑問形になってしまった。

でもここでの立場もあるから、我慢我慢。

「ん？ああ。ドブレチェンスキー公がレーン様の逆鱗に触れたって報告がきた時に、神子と呼んで怒らせたんじゃないかって、ヴォルドが。神子と混合されるのをよほど嫌ってたみたいだって言ってたからさ。まさかドンピシャだとは思わなかった」

「……あの人にもそれで一度怒りをぶつけましたから。あの時はまだマーノンが傍にいなかったし、状況が状況だったから今日みたいなことにはなりませんでしたけど」

それに、皇帝陛下　ヴォルドは、あの時私が眷属であることを知らなかったし、神子の伝承に誤りのあるような国だ。

酌量の余地はある。

だけど、今回は別だ。

この王宮の大半が、私を眷属だと知ってる中で尚、神子と呼んだのだ。

「今後、私を神子と呼ぶ者は、マーノンによって裁きが下されると思ってください」

手を下すのは私ではない、マーノンだ。

眷属といえど、私は人間。

人間の私が手を下せば、皇帝にその気がなくても私を害そうという人間が出てくるかもしれない。

その点、マーノンは歴とした天上神<sup>フイリ</sup>だ。

そこにどんな理由があろうと、天上神のやることに口を出せる人間など、この世界にはいない。

## 8 神子と眷属

「なんでそこまで、神子フィーリンと呼ばれることを嫌う？」

仕事があるからと、ダミアンはすでに部屋を辞していた。

私と二人、部屋に残ったアナクから訝しそうな視線を向けられる。平然と受け止めながら、口の端を緩く持ち上げて笑みを作った。

「好き嫌い以前の問題です。私は眷属で、神子じゃない。神子じゃないことを他の何より私が一番よく理解している。それなのに、寄って集って私を神子と呼ぶ。それが私には、たまらなく我慢ならない」

「だからって報復を受けて当然というほどか？」

「私からすれば当然かと。それに…多分、フィーリーシャならば私以上に怒り狂うと思いますよ？」

だって。

「神子はフィーリーシャにとってこの世界で何より愛しい者。それを使い捨てる眷属スラヴである私と同じにされては、ねえ？」

嘲るように笑ってやる。

私を神子と呼ぶことで、フィーリーシャの怒りを買うとは、誰も思っていないことが可笑しかった。

「レーンも意地が悪いよね」

慣れない羽根ペンで文字を書く練習をしていると、マーノンが現れた。

「そう？」

返事をしながらも、練習する手は休めない。

「リイがレーンを駒だなんて思っ  
てないこと、知ってるくせに」

「簡単に切って捨てられる存在だとは思  
ってるけどね」

「そうかなあ」

いささか不満げな声に、手を止めて顔を上げる。

すぐ近くまで寄ってきていたマーノンは、私の頭を慰撫するように柔らかに撫でた。

「レーンにはわからないかなあ」

サドヤローだというのに、マーノンは私に優しい。

私だって、マーノンが嫌いな人間なのに。

されるがままになってい  
ると、脇に手を入れて抱き上げられた。そのまま私が座っていた椅子に、膝の上に私を乗せる形で座る。まるつきり愛玩扱いだ。

触れてくる手に遠慮などないのに、性的香りは微塵もない。

「僕をこうやってレーンの傍につけてる  
ってだけで、結構大事にされてるって  
いう証みたいなものだよ？」

「…それで？」

大事にされているからといって、切  
って捨てられないわけじゃない。  
いい。

誰だって、使える駒ならそれなりに  
大切にするだろう。

「本来ならこの役目は僕じゃない  
ほうがいい。それでもリイが僕に  
レーンと主従誓約を交わさせたのは、  
レーンを万全に守るためだ」

頬を両手で挟まれ、額を合わせられる。

「全てから守れ。僕はリイから  
そう言い渡されてる。こんなこと、  
簡単に切り捨てられるものに  
言うほど、リイは酔狂じゃないよ」

背筋が、凍った。

真正面にある瞳から、目が、逸  
らせない。

刺すような殺気と怒りに、体が震えた。

押し掛かる空気は重く、急激に薄  
くなっていくかのような錯覚を  
覚える。

声を出そうにも咽喉が張りついたように動かず、息でさえ上手くできない。

「あ……っ」

「ああ、ごめん。…大丈夫？」

殺気から解放された途端、体から力が抜けて背後に倒れそうになるのをマーノンの腕で抱きとめられた。

腕を引かれ、マーノンの胸に体を預けて、荒い息を整える。

早鐘のような心臓が、耳の奥で響いていた。

そっと、手が頬に触れた。

「泣いてもないね。やっぱりリーの眷属だ」

「な、に…？」

「人間なら、今のだけで発狂するよ。…ごめんね。レーンがあんまりにもリーのことがわかってないものだから、ついいらついちゃった。怖かったよね」

背を撫ぜる手も、謝る声も、酷く優しい。

ゾツとしない優しさに、けれど、次第に平常心を取り戻せた。

「でもわかってあげて欲しいな。リーはレーンを駒だなんて思っていない。そりゃあ、レーンが神子と呼ばれるのにいい気はしないだろうけど」

「……………理解はできないけど、そうじゃないってことは覚えとく」

正直に、うんとは言えなかった。

だって理解できない。わからない。

でも、そうじゃないんだってことは認識した。

「そうそう。言ってなかったけど、レーンに向かって神子って呼んだ人間は、完膚なきまでに叩きのめしていいって、リーから許可貰ってあるから」

「え！？…うわあっ！！」

勢いよく体を起こしたら、勢いをつけすぎて落ちた。

肘を強かに打ちつけて痛み悶える私に、マーノンはいい笑顔を向けてくれた。



「大丈夫？」

「全く心のこもってねえ大丈夫だな！」

「うん。だってレーンは見てて楽しいし」

「てかどういこと！？何そんな許可取り付けてんのアンタ！」

もう絶対に、哺乳瓶妖怪公爵みたいな被害者出させないように  
思ってたのに！！

フリーリースヤも許可なんてするなよ！！！！

打ちひしがれて床とお友達していると、マーノンは声を上げて笑った。

## 9 甘いものは別腹です

この世界に来て早5日目。

この国に戻ってきてまだ2日目。

一週間後にあるパーティーに出席してくれと、夕飯の席で言われた。

「本気で言ってますか、ヴォルド……………様？」

「呼び捨てで構わん、眷属殿」

「なら遠慮なく。本気で言ってるんですか、ヴォルド」

黙々と向かい合って食事をしていたところに落とされた、パーティーへの招待。

この国はおろか、この世界で共通するだろうマナーもダンスも知らない私に、何言ってくれちゃってるんだろうと呆れた。

「フイーリン神子ではなく、眷属として認識させること」

この言葉を聞くまでは。

「なるほど、お披露目ってわけですか」

「その姿恰好では、どうやったところで神子にしか見えん。だが、ヴィレンツアーレにいるのは神子ではなく眷属だと言いきれば、表立って神子と呼ぶ者はいなくなるだろう」

「せめて髪染められればいいんですけどね」

双黒だから神子と呼ばれる。

なら染めて色を変えてしまえばいいと、最初の頃は考えたのだが、結果、この世界の染色剤は私の髪にまるつきり歯が立たなかった。

「染めるのはもったいないだろう。綺麗な髪だというのに」

「……………」

ここで勘違いしてはならない。

ヴォルドのいう綺麗は黒髪であるが故で、それ以上でもそれ以下でもない。

例えば私の髪がパサついていようと、こいつは同じことを言うはずだ。

この世界で黒は高貴で、黒というだけで美しいという表現が使われるほどのだから。

「それで、パーティーってことは盛装必須ですか」

「眷属殿に強制できる権限は私にはない」

「……ない、ですか」

皇帝でもないのか。

驚いている私に、ヴォルドは小さく失笑した。

「眷属殿は何も知らんのだな」

「知りませんよ？元の世界のことならまだしも、この世界に来てまだ5日目ですし」

何をいまさら。

そう思っただけ言い返したら、ヴォルドがあり得ないものでも見るように押し黙った。

「……………あ。」

「言ってませんでしたっけ？」

「異界の者なのか？」

「ええ」

なんだろう、この沈黙。

妙に空気が重くて居心地悪い。

少し考えた素振りを見せて、ヴォルドは言った。

「眷属というのはそういうものなのか？」

「さあ？他の眷属に会ったことはありませんから」

「…そうか」

「…」

ん？

これで会話終了か？

そうかの後何も続かないの!?

ねえ、じゃあこの微妙な空気何!?

何なのよー!!

「……あー。一応聞きますけど、異界の者だと何か問題が?」

聞いてあげるから答えると目で訴えると、すんなりと答えが返ってきた。

「普通なら災厄と言われるな」

「災厄…。それって空間に歪みができるのかいう?」

「知っているのか」

知ってるも何も、そのせいで兄と引き離されたからよく覚えておりますとも。

元の世界に戻ろうとする力が無意識に働いて、放っておくと大きな災いになる。

ヴォルドはそれを危惧したのか。

「それを回避するために眷属になりましたから。災厄は起きませんよ」

「ほう…。ならいい。だがそうか、異界の者なのか」

「はい。それですね。こっちの常識とかいろいろ身につけたいんですよ。マナーとかまるで知りませんから」

「…テーブルマナーは完璧なのだがな」

手元を見られて言われる。

テーブルマナーは洋食とそう変わらないからね。

去年学校で習ったばっかだし、ヴォルドの食べ方見れば違いもすぐわかったし。

「まあいい。わかった、こちらで教師を手配しよう」

「よかった。ありがとう、ヴォルド」

1ヶ月でどこまで覚えられるだろうか。

死ぬ気で頑張ればなんとかなるよね、うん。

ヴォルドからいい返事をもらえて、上機嫌で食事を再開する。料理はそこそこ美味しい。

見るからに変な食べ物は入ってないし。

デザートはなんだろうとウキウキしていると、青い鳥を模した透明な飴細工のようなものが乗ったケーキが目の前に置かれた。

「綺麗……」

何でできているのだろう。

飴細工をフォークでそつとつくと、パラパラと崩れてしまった。

「ああ!？」

「何をしている。それは金属に反応して壊れる。手で食べるものだ」

「そういうことは先言えよ!」

壊れてから言うな!

綺麗だったのに! 美味しそうだったのに!

軽くいじていると、ヴォルドが給仕に命じて自分の皿と取り換えた。

「そちらは私が食べる」

「……いいの?」

「もともと甘いものは嫌いだからな。下のスウェルテは甘みが少ない。眷属殿には食べづらいだろう」

スポンジとムースの二層ケーキはスウェルテっていつのか。

甘みがないってことは苦いのかな。

確かにそれだけだと私には食べづらそうだ。

「スウェルテを口に含んで、上のヒルムを齧るのが正しい食べ方だ」

言われた通りに食べると、スウェルテの味の苦さに泣きそうになった。

スウェルテだけを平然と食べているヴォルドの舌は、実は馬鹿なんじゃなかるうか。

けれど、ヒルムを口に含んだ瞬間驚きに固まった。

「美味しい!」

ヒルムが甘いわけではない。

なのに、スウェルテの苦みが薄まり、さわやかな甘みが口いつ

ぱい広がった。

「うわぁ……。どうなってるんだろっ、これ」

「気に入ったのならまた出すように言っておこう」

「是非！これなら何個でも食べれそう」

こういう変わった食べ物もつとあるのかな。

そう考えるだけで、これからの食事がとても楽しみになった。

## 10 始めの一步

「眷属殿」

目の前に手を差し出され、溜息をこぼしながら厭々ながら手を添えた。

その手を引かれ、俯きながら歩き出す。

深い藍の従者服を着た私が、ヴォルドにエスコートされる姿は、ある種ひどく滑稽ではないかと思う。

白と黒の軍服のようなかつちりとした服と、黒のマント。

銀色の冠を頭にのせたヴォルドが、皇帝というより魔王に見えたのは秘密だ。

大広間を望むテラスに続く扉の前まで来て、緊張が高まる。

「眷属殿」

「わかってる」

呼ばれて、ピンと背筋を伸ばした。

「行こう」

これで全てが動く。

これから、この先で、笑うあの人を見つけるために。

1週間は怒涛のように過ぎ去った。

朝から夕方はマナー、夕方から夜は文字の習得。

パーティーが2日後に迫るころには、1日中マナー講座で、文字の習得は寝る前の一時。

マナーの中にはダンスも含まれていて、バイトだなんだと足腰を鍛えていたはずだったのに、ここ数日は筋肉痛に苛まされた。

歩き方や座り方、お辞儀の仕方までに口を出され、何度放りだしたくなっただけか。

その上、私はダンスのセンスは壊滅的だったことが判明し、パーティー前日まで粘った講師に結局匙を投げられた。

無駄な努力をしたものだ。

お辞儀の仕方は女性男性で異なるが、着ている服が服なために、私は男性用を教わった。

女性用も一通り教わったが、多分一生することはないと思う。とりあえず、パーティーに必要な礼儀作法は全て習った。

それこそ下々の者たちの作法まで。

何が必要で、何が不要なのか。

全てを知らなければわかるはずがないし、それを決めるのは私だ。文字の習得は、マナー以上にある意味大変だった。

理由は三つ。

一つは、この国で存在するだけで文字が三種類あるからだ。

この国や近隣諸国でも主流とされているヴェネ文字。

教会にのみ伝わるアフィン文字。

古代に使われていたとされるチェ文字。

チェ文字は習わなくてもいいと思ったが、この国に保管されている秘蔵書物の大半がこの文字だと知り、習わないわけにはいかなかった。

二つは、羽根ペンがうまく使えず、思った通りに書けないこと。インクのつけ加減がわからなくて、インクの血痕がボタボタと紙の上に出て行く…。

三つは、どの文字もミミズがのたくったようにしか見えないのが難点だった。

元の世界でも、英語は喋れはしても書けはしなかった。

筆記体でなくても、似たような単語がずらっと並んでるだけで眠



かったね！

と、結局は眠気との戦いになる。  
マナー講座で疲れているから余計に眠いのが、とても憎らしかつた。

最優先で覚えたいのは文字なのにね！！

それでもなんとか死ぬ気で習得して、書けはしないけど読むことは出来るようになった。

まだ絵本程度だけれど。

そんなことで満足などしない。

満足などしないけれど。

でも、これでやっと一歩。

「今宵、皆に神子<sup>フイリン</sup>に並ぶ者を紹介しよう」

ヴォルドの手を借りて、前へと進み出る。

<sup>フイリス・フイリーシャ</sup>

「天上神フイリーシャの眷属で在らせられる」

テラスの下、多くの人間がこちらを見上げているのが見えた。

「レーン殿だ」

耳を叩くヴォルドの声が、シンと静まった空間に冷たく響いた。

## 10 始めの一步（後書き）

一度データ消えたせいか、最初となんか違う  
もう少し肉付けしたいけど、これ以上やったらグダグダ感増しそ  
うな予感…

interval ?

「よりもよってフィーリ・マノレイか」

ファイエル  
天上神第三位の位を持つ、天上神の中で最も残虐な神

フィ

ーリ・マノレイ。

ドヴレチェンスキー公の精神を崩壊させ、生きた屍にした。

殺さなかったのは慈悲でも何でもなく、眷属の少女のためだろう。

「眷属殿を神子と呼ぶ代償が、フィーリ・マノレイの制裁とはな...。  
随分と高くつく」

苦々しくヴォルゲルドが言うと、ドアの傍に控えていたアナクが  
茶化すように口を出した。

「嬢ちゃんから言わせれば当然らしいけどな？」

「アナク、不謹慎すぎますよ」

ぴしゃりとダミアンが窘める。

アナクの言葉遣いは今に始まったことではないが、神に属する者  
に対して過ぎた言葉だ。

それを横目に、ヴォルゲルドはサインし終えた書類をダミアンに  
手渡した。

「建国祭も近い。祝宴でフィーリーシャ神の眷属として披露目をす  
ればいいだろう。眷属殿を神子と呼ぶ者にはフィーリ・マノレイよ  
り制裁が下る。そう伝えて表立って神子と呼ぶ馬鹿はいないだろう  
よ。これに関しては、眷属殿の許可も得た」

「ではそのように。：披露目には神の御許を？」  
「コレフィル  
ファイリス・フィーリーシャ」

「使うしかあるまい？ 仮にも天上神フィーリーシャの眷属だ」

神の御許は本来、神子の披露目に使う幾分か小さなテラスだ。

どの国にも必ず設置されているもので、神子の披露目以外で使わ

れることなど前代未聞だった。

「そこまでする必要あんの？眷属たって、人間だろう？」

気に食わないと言った様子で、アナクが言い捨てた。

「レーンをお前らと一緒にするな」

割って入った声に、体が音を立てて硬直した。

部屋の奥、濃藍の髪をした青年が穏やかな笑みを浮かべて立っていた。

人の形をしているのに、全く違う生き物だと、肌を伝う空気で実感する。

さつと、フィーリ・マノレイの名が頭を掠めた。

「レーンをお前らと一緒にするな」

低く剣呑な声で、もう一度繰り返される。

声が耳に届くたび、肌が粟立ち、米神を冷や汗が伝った。

「レーンはリイの眷属。お前らみたいな下等種と一緒にされては、僕ら天上神の名が穢れる。レーンの存在が人の形を保ったままなのは、人の中に紛れやすくする為だけのもの。お前たちとは違う、僕らと同等の存在だ」

緩慢とした動作で近づいてくる青年に、ヴォルゲルドたちは視線だけでその姿を追う。

ヴォルゲルドの前まで来て立ち止まると、ニイツと口の端を釣り上げた。

「これが皇帝、ね。………まあまあだな」

何がまああなのか。

値踏みするかのような視線を受けながら、ヴォルゲルドは眉間に皺を寄せた。

「うん。顔見に來ただけだからもういいや。そろそろレーンお風呂

から上がったかな」

楽しげにくるりと回って、青年は 消えた。

ふっと軽くなった空気に、三人ともに肩で息をついた。

「今の、フィーリ・マノレイ……だよな？」

「でなかったら何だ」

忌々しいと、ヴォルゲルドは心の中で思った。

「顔を見に来たと言っていました」

「神の考えることなどわかるわけもない。考えるだけ無駄だ」

「それもそうですが……。陛下、あれは気に入られたと考えてよろしいんでしょうかね」

「私が知るわけがない」

まあまあだとは言っていた。

が、それが顔の造作なのか、それとも全く別のものなのか。

それすらわからないというのに。

頭の痛い問題が山積みになれ、ヴォルゲルドの機嫌は急降下だ。

それもこれも、殆どは眷属であるレーンが現れてから。

「女は嫌いだ」

「女性に優しくされてこなかったツケが、今頃回ってきただけでしよう」

吐き捨てた言葉に、ダミアンが笑顔で言い返し、アナクは声を押し殺しながらも腹を抱えて笑い出した。

## 11 精霊

光有りて影広がり  
闇作りて形表わす  
光砕けて四方舞い  
世界ここに姿現す

光意思を持ちて  
狭き広大な世界舞う  
強き光天を目指し  
弱き光地を目指す

地に堕ちし光  
生命となりて大地覆う  
天に昇りし光  
蒼き光を持つて世界を満たす

### フィンガルス再生神話より

神様という存在がちゃんと確認されているにも関わらず、この世界の神話は一つじゃない。

人の妄想力ってすごいなあと感心しつつ、事実にしても過分に脚色されているだろう内容が、この世界の人々にとっては当たり前

ものだ。

本を読んで確認できただけでも、この国に伝わる神話は三つ。教会に伝わるものと、帝国の宮廷内にのみ伝わるもの、そして魔術師らの間で伝わるものの三つだ。

ちなみに、一般市民の間で主流なのは言わずもがな、教会に伝わるフィンガルス再生神話である。

「どの神話読んでも最初の四行全部一緒ってすっごい胡散臭え！てか魔術師なんていたの！？」

「魔術師？…クランドルーム精霊使役のこと？どうでもいいけど、レーンは仕組まれた話なんか読んで面白いの？」

「仕組まれてんのかい！！」

さらつと暴露。

いや、でもまあ仕組まれた話だろうと読んでおいて損はないだろうから、読み込んでおく。

習得したてでまだわからない単語も多いが、なぜか読めるマーノンにとりどころ手伝ってもらって、なんとか読み進めている。

マーノンが言うには、文字ではなく紙とインクに染みついている思念を読み取っているのだとか何とか。

便利な力だ。

「く、クラ…？」

「クランドルーム？」

「そうそれ。それってどんななの？」

魔術師ってことは魔法！

神様とかお城とか、皇帝とかより異世界！って感じがするのはなんだろうか？

「言葉通り、精霊を使役する者どものことだよ」

嫌悪感全面に押し出した物言いに、マーノンは精霊使役嫌い、脳内に記載する。

ここまで全面にだすなんてよっぽどだね、マーノン。

そもそも、精霊とは私の知識の中にある精霊と同じものなのだろう。

うか。

疑問に思っただけ聞いてみると、マーンは苦笑い混じりに「レーンも精霊の一種なんだけどね」と言われた。

「眷属って…精霊？」

「眷属は精霊でもあるけど、全ての精霊が眷属ってわけじゃないよ。使役されたりする精霊は古代地上神フイーシェの末裔ではあるけど」

「神様の末裔が精霊なわけ？」

「古代、ね。あれらはただ力を司ってるってだけで、意思が必要以上に弱い。そこを人間に利用され、力で抑えつけられて使役される」

ああ、なるほど。だから嫌いなのか。

人間を嫌いだと明言するよりも、はつきりと感じた憎悪に近い嫌悪。

抑えつけるという発想が、私も好きになれそうになかった。

「んで？精霊って結局なに？」

「神の力が具現化したモノだよ。具現化された時点で、その神とは別の意思を持ち始める。それらが眷属となるかどうかはその神次第で、大抵は精霊となるね」

「……マーンには眷属とか精霊とかいないの？」

「いるよ」

いるのか！

見たことないからいないかと思った。

「レーンが見たくても見れないよ。あいつらを地上に連れてきたら、それこそそこらじゅう血の海だから」

「どんだけ危険なんだよテメエの力は……！」

「やだなあ。僕のせいじゃないよ？」

いや、お前のせいじゃなきゃ誰のせいだ。

突っ込むのも空しく、読んでいる本に意識を戻す。

神話を読んでから、マーンフイーリの危険さを再認識した。

なんだ、“天上神で最も残虐な神”って。



好青年装ったサディストどころの話じゃなかった。

オープンすぎるサディストだった！

ということを知ってから、あまり絡まないように心がけている。  
なんだかんだで気安い相手なために、はつきり言って無駄な心が  
けだろうが。

「レーン、あーん」

「んぐっ」

クッキーに似たお菓子を口に突っ込まれた。

気管に入り、大きく咳き込む。

「ゲホッ……………っ、いきなり突っ込むなバカ!!」

自分から絡まなくても、まず相手から絡んでくるのだから。

11 精霊（後書き）

気安いのはお互いに。

## 12 月と太陽

頭の中がぐるぐるする。

思考が同じところを行ったり来たり。

「だあっ！煮詰まった！！」

「煮詰まった？レーン食べれるようになったの」

「ちげえよ！」

詰め込んで詰め込み過ぎて、頭が働かなくなったただけだ。  
なんで私が食べられるようになる。

それとも何か？

マーノンにとって私は食糧にもなるってか？

……………笑えない。

食われることはないとわかっていても、食糧認定されてたら嫌だ。

「ちよつと散歩してくる」

「いつてらっしやい」

煮詰まった頭と沈んだ気持ちをどうにかするべく、気分転換することにして部屋を出た。

披露目が終わり、私は割と自由に外に出られるようになった。

別に制限されていたわけじゃないが、外に出てうっかり神子なんて呼ばれたら恐かったので、極力出ないようにしていただけだ。

以前侍女の一人に案内された道順の通りに、広い庭園に出る。

私の部屋付きの侍女は、決められた時間の清掃と食事以外は、呼ばなければ傍にいないことになっている。

私に侍女は必要ないというのもあるけれど、<sup>フイー</sup>天上神であるマーノンが傍にすることが常のために、侍女たちが動くこともままならなためだ。

「あー、空気がおいしい」

綺麗に整えられた庭園を歩きながら、空を見上げる。

こうして空を見るのは、この世界に来て初めてだった。

リ：フィルシアン  
連理の森にいた時は、神殿からあまり出なかったこともあり、改めて空を見るといいう行為をしたことはなかった。

「……あれ？」

違和感を感じた。

もう一度ぐるりと空を見上げる。

「太陽が、ない……？」

空は青々として明るいのに、照らしているはずの太陽が、ない。

「……あれ。私、月、も……みてない？」

星は見た。

青い星。

どれもこれも青かった。

でも、月の姿をこの目で捉えたことはない。

今見る空に太陽が見つからないように。

「太陽も、月も、ない……？」

嘘。

嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘。

「マジで……？」

「どうかなさいましたか？」

背後から声を掛けられて、大げさに肩が跳ねた。

「あ……」

妙齢の女性が立っていた。

薄いブルーの神官服で教会の人間だとわかる。

「どちらさまでしょうか？」

初めて会う人のはずだ。

「はじめまして、レーン様。わたくし、カステヘルミと申します」

「かすてへるみ、さん」

「カティで構いませんわ」

和やかでおっとりとした雰囲気なのに、なんだろう、マーノンと同じ空気を感ずる。

あんまり近寄りたくない。

フィード

大体、私の頭の中で、力ある神官以外の神官は、役立たずと認識している。

「何か用ですか？」

本能のままに回れ右して逃げ出したいけど、用件だけは聞いてみる。

なんかヤバそうな内容なら走って逃げればいい。

それがマーノン呼ぶ。

うん、これが一番確実だな。

「いえ、何やら悩まれている様子でしたから」

「あ、そうですね。大したことではございませんので、お気になさらず」

よし逃げよう、さあ逃げよう。

「レーン様、今お暇でしょうか？」

うわああああああん！！！！

「暇ってわけではないですけど、休憩中です」

あ、バカ正直に答えるんじゃない、私！

そこは、暇じゃありません、だ！！

「では、今から教会の方にお越し願えませんでしょうか？」  
教会……

行ってみたいけど、この人と一緒についていうのは嫌だな。  
何されるか何言われるか、わかったもんじゃありません。  
ってことで却下だ却下。

「部屋にマーノンも待たせてるし、やることもあるので、また気が向いたときにでも」

「そうですね。近いうちにぜひお越しくださいね？」

冷静に、なんとか拒否を表明すれば、残念そうに肩を落とされた。  
「気が向いたら」

確約なんてするものか。

この手の人間に確約は命取りだ。

「では」

軽く頭を傾いだから、その場を後にする。

案外あっさりと諦めてくれたので、安心半分疑心半分だ。

部屋から出てそんなに時間が経っていないけれど、背後にビシビシと感じる視線を振り切るように、私は部屋へと戻った。

「あれ？早かったね、レーン」

「うん…。マーノン、今度から一緒に散歩しよう」

厄介事を撥ね退けるには、常に一緒にいたほうがいいと思った私がそう言くと、マーノンは気にした様子もなく頷いた。

「構わないけど、空の散歩でもする？」

軽く高所恐怖症のケがある私になんてこと言うんだ！

足場の無い高所……想像しただけで血の気が引けた。

「普通に歩こう！普通に！！」

叫ぶように言えば、くつくつと笑うマーノンが目について、一回ぶん殴っておいた。

## 12 月と太陽（後書き）

今年は（と言ってもこのサイトでは1ヶ月ほどですが）こんな稚拙な話にお付き合いいただき、ありがとうございます。来年もよろしく願います。

### 13 セイ・リチエラ大陸

「カステヘルミに会ったと聞いた」

習慣化してしまったヴォルドとの晚餐。

この晚餐中、他愛ない会話はあまりしない。

身の無い会話をするのが、互いに馬鹿らしいと感じるからだ。

「庭園を散歩したらそういう人に会いましたけど、それが何か？」  
今日会った女神官。

あれは絶対裏がある人間だと思う。

「教会に行くという約束をしたというのは本当か？」

眉間に皺を寄せたヴォルドの顔に、面倒くさそうな相手だと確信した。

「確約はしてません。気が向いたらとしか答えてませんから」

用心して確約しなくてよかったと心底思った。

私の答えに、ヴォルドも安堵した様子が窺えた。

「そうか」

「カステラ……間違った。カステヘルミさんとはどういった人なんですか？」

「カステラ？」

「そこは気にしないでください」

聞いたことの無い言葉だったのだろう。

不思議そうに問われて、居た堪れなくなった。

カステまで言っと思わず口が滑った。

目の前のデザートを見た目がカステラに似ているのに、味はチーズケーキだから食べたくなっただけだ。

「カステヘルミはコフィスタ教会の大司教だ」



「……あの人が？」

そこまでの威厳は感じられなかった。

…威厳は感じなかったと、得体の知れなさはあった、かな。

「あれは相当なタヌキだ。眷属殿がどうとなることはないだろうが、気をつけるに越したことはないだろう」

「やつぱりタヌキなんですね…。関わる気はこればつちもないので大丈夫です。避けて通る気満々ですから。存在確認したら、話しかけられる前に逃げ出します。話しかけられたらかけられたで、邪険に扱わないまでも、寄るな触るなオーラだして逃げ出します。どうなるうとあの人の前からは、逃げ出すことしか考えてません」

「そこまで言われると心配する気も失せるな」

「心配無用ですよ。教会内の見学はしたいですけどね、役立たずな紛い物神官に気を割いてられるほど、私は暇じゃないんです」

「役立たずな紛い物…？」

「私の主観で見た話ですから、聞く必要はないですよ」

神官が嫌いなのは兄の迎えに役に立つことがないという、一方的なものだ。

その嫌悪に拍車をかけたのは、マーノンの魔術師に関する話から出た言葉だけだ。

それはヴォルドが知らないのなら教える必要などないし、知らなくていいことだ。

「それより、昨日の話の続きをしてください」

胸糞悪い話より、有意義な話がいい。

「本を読んだ方が早いと思うが？聞きたいのは他の三大陸のことだろう？」

「いえ、この大陸の情勢です」

昨日までの間に、ヴォルドが知りうる限りのこの世界のことを教えてもらった。

東西南北に存在する、四つの大陸。

このヴィレンツァーレが存在する西大陸の名は、セイ・リチエラ

大陸。

この大陸に住む者たちにとっての神の存在。

他の三大陸が、存在は確認できても侵攻不可能なこと。

セイ・リチエラ大陸には、小国も含め全部で14カ国あること。

そろそろ、この大陸の各国に関する情勢が聞きたかった。

「この大陸で戦争はあるんですか？」

ずっと、聞きたくてたまらなかった。

兄の迎えを悉く邪魔し、か弱き赤子であつた力ある神官フイーラードを殺しつくした戦争の有無。

大きな戦争があつたのだと、フイーリーシャは私に泣きついてきた。

けれど、この国に来て、戦争のせの字も私の耳に届くことはなかった。

それは。

「戦争？ ないな。ここ数年では小さな内乱があつたくらいだ。8年前に大陸の西にある大国、ジェーウォルツ皇国がヴェレンツ連合国と小競り合いを起こしたが、国同士の争いはそれくらいだ」

「……大きな戦争は、ない？」

なら、フイーリーシャのいう大きな戦争があつたのは、他の三大陸ということだ。

「この大陸で力ある神官が確認されたのは……」

「覚えている限りでは、500年以上前だ」

「……」

言葉が続かない。

これが示すことは、一体どういうことだ。  
どういう…。

情報がたらなすぎる。

「神子は……」

神子がこの大陸に現れたのは、では…。

「神子が現れたという事実は、1000年以上確認されていない」

「……冗談」

「歴史書を見ていないのか？」

口を衝いて出ただけの言葉に、真剣に返される。

歴史書はまだ目を通していない。

けれど、それが事実だろうと、虚実だろうと、私にはもう関係なかった。

関係なく、困惑する。

「神子の召喚は、先代の神子が死んだ、翌年……」

10年前、キヤルチエが教えてくれたこと。

「この大陸が、神子から遠いのは……なんで？」

### 13 セイ・リチエラ大陸（後書き）

あけましておめでとついでいます。  
今年もどうぞよろしく。

## 14 人の噂も七十五日

「ん…」

まどろむ意識の中、何度か瞬きを繰り返す。

いつも見ている天井ではないことに気がついて、疑問に思った。

どこ、ここ…。

「起こしたか？」

聞こえてきた声に思考がとまった。

「…ヴォルド？」

「私はこれから政務だ。寝たければ寝ていて構わない。昼食にまた議論を交わそう」

寝室から出て行くヴォルドの姿に、昨夜のことを思い出した。

そうだ、ここはヴォルドの寝室。

フイーリン  
フイーラード

晩餐の後、神子や力ある神官の記録がある本と歴史書をあさり、その出現時期について議論を交わしていて、いつの間にか眠ってしまったのだ。

「…起きなきゃ」

やらなければならぬことは山ほどある。

暢気に寝ている暇などない。

ベッドから気だるい体を起こし、寝室を出る。

「おはようございます、レーン様」

ヴォルド付きの従者であるエリックが、朝食の準備をして待っていた。

「おはよう。……ウオンテだけでいい」

「ダメですよ？」

コーヒーのような味わいの、けれど色は赤色の飲み物であるウオ

ンテだけ取ろうとしたら、伸ばした手を叩かれた。

明け方まで議論していたせいか、あまり食欲がないというのに。

「…おなか」

「空いてなくても食べてくださいね？」

融通の利かない…。

エリックは14歳の少年で、ダミアンの息子さんだけあって二人の顔はよく似ている。

浮かべる表情は全くの正反対だけ。

不貞腐れながら席に着き、スプーンを手にとる。

「スープだけでいい？本当に食欲ないからさ」

「仕方ありませんね。……そんなに激しかったんですか？昨夜は」  
にこやかなエリックの言葉が、脳に浸透するまでにやけに時間を要した。

「はあ!？」

「冗談ですよ。でも、皆さんそう誤解していらつしやいましたよ？」

冗談にしては性質悪すぎやしませんかね!？」

いやいやいやいや、てか誤解って何!？」

どこのどなたさまがどんな誤解を!？」

「陛下とともにレーン様がこちらの部屋に入つたところを見た者がいたみたいです。レーン様が今朝になつても部屋に戻られていないと、侍女が話してしまして。それで、レーン様と陛下が…という噂になられたようですよ？元々、レーン様を皇妃にという話もありましたから」

火に油を注いだようなものですね、わかります。

自分の行動にもっと責任持つべきでしたね、ゴメンナサイ。

「もういや…」

いくら議論が白熱したからって、さっさと自分の部屋に帰っていればよかった。

せめてヴォルドの寝室で寝るなんてことがなければ…。

「けれど、どちらかといえば、陛下の女嫌いが治った、という話の

方が大きいみたいですわね」

「…女嫌いなのか？ヴォルド」

「なんでも幼少の頃からの筋金入りだとか。父が嘆いておりまして。後宮の姫様方誰一人、あの方の目にすら触れられないと」

「そんなに嫌いなのか…」

そんなに嫌いなのに、私を抱いたのか。ヴォルドは。  
…。

……あれ？

なんだろう、胃のあたりがムカムカする。

「……気持ち悪い」

吐き気までしてきて、椅子の上で蹲るように身を丸めた。  
全身から血の気が引いたような感覚もあった。

「大丈夫ですか？」

焦ったような声に、力なく頷く。

医者と呼ばうとしたエリックを引きとめて、寝なおすために寝室に帰ろうと立ち上がる。

これはあれだ、寝不足による貧血か何かだ。  
ならば寝ていれば治るはずだ。

「わぁ…」

寝室のドアを開けた途端、感嘆の息が漏れた。

「これは…すごいですね」

部屋の中を見たエリックも、さすがに驚いたようだった。

そこかしこに散らばった紙、紙、紙。

ベッドの回りには、山積みになされた本が雪崩をおこしていた。

枕のあたりにも、本と紙が散らばっている。

「この部屋見たら噂なんて一発で消えそう」

「そこまで都合のいいことはないと思いますけど…。この部屋から妖艶なことは全く想像つかないのは確かです」

「………とりあえず寝かして。片づけは後で私がやるから」  
ふらふらとベッドに近づいて、ダイブする。

「片づけでしたら僕が」

「自分でやらして！。纏めたい物とかあるから」

「でしたらこちらの本だけ隣に運んで置きますね。このままでは傷めてしまいますから」

雪崩をおこしている本をテキパキと片付けるエリックを見ながら、私は瞼を閉じた。



## 15 夢の徴

アカイアカイ夢を見た。

一面のアカイアカイ世界で私は立ちつくす。

噎せ返るような錆びた臭いが、咽喉の奥に絡みついて、気持ち悪い。

芽吹いた緑のような碧が、無邪気に笑った。

「レイン様？」

眠ってしまったてから、そんなに時間がたっていないのだろう。本を抱えたエリックが、飛び起きた私を不思議そうに見ていた。

「……あ」

「大丈夫ですか？やはり医者を」

「大丈夫。…大丈夫」

夢見が悪かっただけなのに、医者だなんて大げさだ。

だけど、なんだったのだろう、あの夢は。

なんだったのだろう、なんだったのだろう、なんだったのだろう。

知っているのに、見えないふりをする。わからないふりをする。

だってアレは、コワイモノ。

自己暗示をかけるように大丈夫を繰り返し、浅く荒い呼吸を整えながら枕の上に倒れこんだ。

じつとりと汗ばむ肌に、シャツが張り付く。

その感触に、そういえば昨夜から着替えていないことに気付いた。

「着替え…。部屋に戻らなきゃ」

「着替えでしたら預かっております。持ってきますね」

預かってるって、誰から？

あ、侍女さん方からか。

本を手に出て行ったエリックが、服を持って戻ってきた。

今気づいたけど、そういえば型だけいえば服お揃なんだよね、エリックくん。

布の質とかが全然違うけど。

「体を拭くのにお使いください」

「ありがとうございます」

渡されたのは蒸しタオルで、よく気がきくなあと感心してしまっ  
た。

エリックが部屋から出て行ってから、体を拭いて新しい服に着替  
える。

さらりとしたシャツの感触が心地いい。

幾分かすつきりとした気分で寝室を出ると、隣の部屋にマーン  
ンがいた。

同じ部屋にいるエリックが、直立不動で涙目になっててなんだか  
かわいそうだ。

「おはよう、レーン」

「おはよう、マーン。どうかした？」

いつもと同じように挨拶すると、頬にキスを落とされる。

「レーン、皇妃になるの？」

わかっているくせに聞いてくる。

ニマニマとした顔が恨めしい。

「……マーン、やめて」

自分の行動の軽率さを思い出し、自己嫌悪に陥った。

「ならないの？」

「なりません！なるわけないっての！」

泣き叫ぶように否定すれば、額へと軽くキスを落とされる。

落ち着きなど、優しく頭を撫でられた。

なんだかんだで、だいぶ毒されてるような気がしないでもない。

「ならないってレーンが決めてるなら、それでいいよ」

「……うん」

ならない。

ならないったら、ならない。

「それだけ？」

用がそれだけなら、早く部屋からいなくなってほしかった。

先ほどから真っ青な顔色で、エリックが立っている。

今にも倒れそうでとても見てられない。

「ああ、そうだ。レーンにね、朗報があるんだ」

「…朗報？」

なんだろうと首をかしげると、マーノンの目に優しい色が揺らいだ。

「リイがね、1ヶ月って言ったけど、来週には大丈夫だろうって」

「ホントに!？」

思ってもみなかったことに、歓喜のままに私はマーノンに抱きついた。

この国で足止めを食らって2週間。

ようやく動き出せるのかと思うと、浮き立つ心を止められなかった。

「眷属殿？」

「あ、ごめん…」

朝に言っていた通り、ヴォルドと昼食を取りながら昨夜の続きの議論を交わしていたのだが、私の気が漫ろで、昨夜ほど白熱しなかった。

どうしても、来週のことを思いを馳せてしまうのだから仕方ない。「やはりまだ気分が悪いのか？」

エリックに今朝のことを聞いたのだろう。

窺うような視線を向けられて、少し慌てた。

「え？あ、そうじゃないから大丈夫」

「そうか」

心配そうだった顔に、どこか安心したような表情が浮かぶ。

最初に顔を合わせた時より、ヴォルドは浮かべる表情が素直になったと思う。

その分、張り付けたような嘲笑の代わりに、殆ど無表情になったけど。

そうだ。

ヴォルドにちゃんと伝えておかなければ。

「うん。あのね、私、来週には多分ここ出てくことになると思う」

「……なに？」

ヴォルドの声が一つ低くなったことに気付かずに、私は言った。

「リイがね、迎えに来るの」

interval ?

ネコのように細くしなやかな体を丸めた女が、ヴォルゲルドの隣で眠っていた。

長い見事な黒髪に、眷属の少女だとすぐに認識した。

これが後宮や侍女の女であつたなら、即座に切り殺していてもおかしくはない状況だったのだが、眷属の少女となると、いつもの嫌悪感は微塵も顔をのぞかせなかった。

「気持ち良さそうに寝ているな」

穏やかな寝息を立てて眠る、どこか幼い表情の少女に、ヴォルゲルドはふつと笑みをもらした。

女を見て、心穏やかでいられるのはいつ振りだろう。

少女がここに滞在するようになってから、ダミアンに仕組まれて晩餐のみだがずっと食事を共にしてきたが、最初の頃は他の女と同じように、視界に入れるだけで嫌悪で吐き気がしたというのに。

少しずつ会話を交わすようになり、貴族の女たちとは違う淡々とした会話に、気安さを感じた。

それどころか、上から見下されたような対等な物言いや粗暴ではないのにどこか男っぽい仕草。

着ている服も本来男物である従者服であるせいか、女らしい丸みもない。

向けてくる視線も鋭く、纏う空気は宛ら騎士のようで、そんな少女をいつしか“女”と認識することの方が難しくなった。

身支度を整え、もう一度少女の顔を覗いてみる。

「泣いて、いるのか」

人の泣き顔など久しぶりに見たのと、少し感慨深くなる。

涙がぼろぼろと流れていく様に、ヴォルゲルドはそつと手を伸ばした。

昔、弟にしていたように優しく拭ってやり、額に口づけを落とす。一瞬、額の紋章が青く鈍く光ったことに、気付くことなく立ち上がった。

部屋を出て行こうとした時に起きた少女に昼食を一緒する約束を取り付け、ヴォルゲルドの機嫌は見る者が見ればわかる程度に良かった。

「何だこれは」

執務室に入った途端、ヴォルゲルドの機嫌は急降下した。

「祝いの手紙や品ですよ。他には見合いの斡旋と言ったところでしようか」

平然と答えたダミアンに、顔を顰める。

部屋半分を埋め尽くす勢いで置かれている貢ぎ物の山。

「祝い……？」

「レーン様と一夜を共にお過ごしになられたとか。朝までの内に瞬く間にその噂が広がったようですね」

一夜を共に。

昨夜確かに同じ寝室で寝たが、そこに一切の色事が介入していないどころか、見当はずれもいいところだった。

「神子と力ある神官について議論を交わしていただけたのだがな」  
フイリン      ファイラード

「女嫌いの陛下が一夜を女性とお過ごしになられた、というのが重要であつて、そこに色事の介入など、誰もお気になさらないでしよう」

「それで見合いの斡旋か……」

そもそも女嫌いは治ったわけではない。

眷属の少女を女として見ていないというだけで、先ほども視界を掠めた侍女に嫌悪を抱いた。

「馬鹿馬鹿しい。さつさとこれらを片付けさせる。それより、ドヴレチェンスキー公爵家を継いだのは、息子のカミツ口だったな」

「ええ。それが何か」

「カミツ口は歴史学に詳しくたはずだ。明日にでも眷属殿との晚餐に出席させる」

「畏まりました」

流れるように一礼してダミアンは出て行った。

はっと息を吐きながら椅子に座る。

厄介なことになったものだ、ヴォルゲルドは痛む頭を抑えた。

女嫌いが治ったという話が広まっているのならば、勘違いした女たちが寄ってこないとも限らない。

視界に入ってくるだけでも不快だというのに、触られてもしたら手を上げかねない自信がある。

女嫌いが治ってないと知れたとしても、それはそれで、眷属の少女との婚姻を急かされるのが目に見えていた。

「眷属殿が正妃……か」

あの少女が頷くことなどないだろうにと、苦笑する。

「何が可ましい？」

背後からの声に、いつもなら動くはずの体が張り付いたように動かなかった。

「レーンを皇妃にするっていう話を聞いたんだ。どういうこと？」

上から顔を覗き込んでくる青年。

「答えなよ」

「……そのような事実はない」

背中を伝う脂汗を悟られないように、目を合わせたまま答えた。

それに、青年は薄く笑った。

「そう。なら、これだけ言っておくよ」

間近にある顔が、さらに近付く。

ついつと目を細め、射抜くようにヴォルゲルドを見る。

「お前次第でレーンはここに留まらないといけなくなる。手を出す気がないのなら、あの子に必要以上構わないことだ」

言われた意味がヴォルゲルドには理解できなかった。

青年がいなくなつて静まり返つた部屋の中、誰かに聞き咎められるのを恐れるように息を吐く。

「留まるということは、手に入るといふことか……？」

もとより、手の届かないものとして接してきた。

神に属する者なのだから、そう思ふのが實際当然のことなのだ。

それが、自ら次第であの少女が手に入るといふ。

ヴォルゲルドにとって、それは甘美な響きを持っているように思えた。



## 16 事後の後先

順序って大切だと思うんだ。

あ、この場合過程でもいいんだけど。

何がどうなってどうやってこうなったのか。

とにかくにも、状況を説明願いたい気分なんです。  
ええ、本当に。

「あたーらしいあーさがきた…って歌ってる場合じゃないか」  
ボケたいけど、ボケられない。

大体突っ込んでくれる人間もいないし。

ノリ突っ込みもひじょうに虚しい。

「…………裸、だよね？」

シーツを纏う自分の体を私はマジマジと見る。

確認したところで、何かが変わるわけもなく…。

「…………裸だなあ」

「裸だねえ」

「…マーン、おはよう」

茫然としてるところにさわやかな笑み。

朝が来たなっと思うよ。

「おはよう、レーン。ずいぶん扇情的な格好だね？」

「一回病院行って来い？」

扇情的ってなんだ、扇情的って。

目もおかしいけれど、頭もイカレちゃったか、マーノン。

「うーん。まさかこういう事態になるとは思わなかったなあ」

「はい？」

声には軽く苦いものが混じっているのに、心底楽しんでますって  
いうそれはそれは楽しい笑顔に、頬がひきつった。

ものすごく嫌な予感。

「あの皇帝、女嫌いだっていうからさ。でもレーンは気に入ってる  
みたいだったから、ちよつと煽ってみたんだ」

「テメエの仕業か！！！！」

マーノンを蹴りつけながら、泣きたい気持ちになった。

おかしいと思ったのだ。

あのヴォルドが私に対し、一度ならず二度までも手を出すなんて  
しかも一度目とは比べ物にならないくらい優しい手つきで触られ  
た。

強引なくせに限りなく優しく触れてくる手…。

やばい、恥ずかしくて死ねる！憤死する！

「ふえっ」

歪む視界も気にも留めずに、私は湧き上がる羞恥を発散させるた  
めに枕でマーノンを殴った。

「マーノンのバカ！死ね！このサド！」

「はいはい。わかったから落ち着こうね？その格好で暴れちゃだめ  
だよ」

「うぐっ」

殴っていた枕を掴まれ、逆に顔に押しつけられた。

軽く臨死体験を味わいそうになって、慌てて枕を除けさせる。

羞恥で浮かんでいた涙が、生理的なものにすり替わった。

「し、死ぬかと思った」

「落ち着いたなら着替えようね？」

有無を言わさない笑顔に、成す術などあるはずもなく、私はいい  
子のお返事を返した。

そういえば、真っ裸でしたね私。

マーノン蹴った時点で、シーツ落ちてたし。

…… 憤りは持ちたいなあ。

願望でしかないうちは、実行できそうもないけど。

「それで？」

「うん？」

服を着込みつつ、マーノンを睨む。

「煽ったって何したの。どうせ言葉で煽る、なんて生易しいものじゃないんだろう？」

言葉で煽ったくらいで、ヴォルドが私に手を出すとは思えない。

女嫌いだというヴォルド。

いくら私がヴォルドにとって普通に接することができる相手だとしても、性的対象には思っていないかったはずだ。

「一体何をした？ マノレイ」

まっすぐにマーノンを見る。

視線を受けとめながら、マーノンの顔は先ほどと同じ楽しげな笑顔。  
「ちょっとレーンに対する欲を強めたただだよ。言っただろう？ 僕

もこの事態は予想外だったんだ」

飄々とした声が憎たらしい。

それにしても私に対する欲ってなんだ。

この場合性欲か？

んな馬鹿な。

「精々レーンを皇妃にするくらいだと思ったんだけどな」

「…… 目論見が外れたわけ？」

「大外れだね」

語尾にハートマーク付いてそんな言い方やめろ。

外れたくせに嬉しそうな顔をするな。

被害を被ったのは私一人だから、マーノンには関係ないのだろうけど。

「…ヴォルドは私を何のつもりで抱いたんだろう？」

「それより無抵抗で抱かれたの？」

痛いところを衝かれて、むうっと押し黙る。

「だって…別に今更な気がして」

「……リイの言ってた通りだね」

呆れたような声に、身を縮めた。

ついさっき慎みは持ちたいなあなんて願望を持った身としては、返す言葉もございません。

「うん。でも僕の思惑通りではあるかな」

「思惑？さつき予想外って…」

「皇帝がレーンに執着があるのかどうか見たかったただだから。よかったね、レーン」

「いや、どこもいいことなんてないけど」

「そう？」

にこにこ笑うマーノンの言葉に、首を傾げるしかなかった。それよりも、昨日の記憶を整理することの方が私には大切だった。

結局、欲を強めたからって何がどうなってこうなったのか。

それを知るには、私が自分自身で一から昨日の記憶を遡るしかなかった。

## 16 事後の後先（後書き）

自分でのチェックは限界があるなど、読み直して思い知りました。誤字脱字に気付いて教えてやろうなんていう心やさしい方、いらっしやいましたら拍手にてお願いします。

記憶を遡ろうとして、思い出した。

そっだ。

記憶に残ってないから朝から茫然としてたんだった。

結構混乱してるんだな、私。

冷静に自己分析…じゃなくて、昨日の記憶で覚えてるところは。

「晚餐の後にまたなんかいろいろ話してたんだっけ…」

問題は、その後。

寝る前に帰ればいいかと、ヴォルドの部屋で話していた途中からの記憶がすっぽりと抜け落ちている。

何がどうしてこうなったのかが、まるっきりわからないのだ。

行為の最中の記憶なら、おぼろげに覚えてるってのも性質が悪い

…。

羞恥で殺すつもり！？と、誰にもなく詰め寄りた気分だ。

「記憶取り戻す方法ってないものかね…」

「ありますよ？」

お？

「あるの？」

昼食の給仕をしていたエリックを思わず凝視した。

「ええ。そういう秘薬が教会にあるという話は」

「あ、教会ならいいや」

近寄りたくない場所？1ですからね、教会。

思い出せないからって、何か不都合があるわけではございませんし！？

「思い出せないなら、知ってる人に聞くのが一番だよな」

というわけで、ヴォルドに情報提供願いましょうか。

昼食を食べ終え、ヴォルドの部屋を一人で出る。

ふと思い立ち、足がとまった。

「執務室ってどこだっけ」

王宮内部ってあれなんだよね、ぶっちゃけ自分の部屋と図書館とヴォルドの部屋と晚餐に使ってる部屋しか知らない。

後は庭に出る道順。

今の時間ヴォルドがいるであろう執務室の場所など、どこにあるか見当もつかない。

「落ち着こう。落ち着け」

動揺しすぎだ。

なんかおかしい。

相手の行動の真意が見えないからって、なんでこんなに動揺してるんだろっ。

自分のことなのに、何にもわからない。

そもそも真意を確認しなければならぬ理由は何だ。

ヴォルドが何を仕出かそうと、私には関係ないはずだ。

それが私を抱くということだったとしても、私はそれを受け流せばいい。

それだけのはずなのに、なんでこんなに。

「なんでこんなに、泣きたくなるんだろっ」

涙で視界が揺らぐ。

俯いているとそのまま涙が零れ落ちそうだった。

「泣かない。私は、泣かない」

鼻を嚙りながら、なんとか涙を堪える。

泣かないと、兄の前で誓った。

だというのに、こんなことで破ってたまるかと、半分意地で涙を堪える。

「あー…にしてもどうしよう」

執務室に行こうか行くまいか。

ヴォルドに会って何を聞く？

受け流せばいいことを掘り下げて、真意を聞いてそれで？

私は結局何がしたいのだろう。

「レーン様？」

「……えーっと、誰だっけ」

前方から廊下を歩いてやってくる男が、どこか驚いた様子でこちらを見ている。

「アナクですよ」

「ああ、笑い上戸の…間違えた、師団長さん」

声あげて笑ってるイメージが強すぎるもので。

私の言葉なぞアナクは気にした様子もなく、問いかけてきた。

「どうかしたんですか？こんなところで」

「…こんなところ？」

「ここ、王宮内だよね？」

自由に動き回る権限を私は持ち合わせているはずなんだが。

「こっちは図書館も陛下の部屋もないですけど？」

私がいつもの行動範囲外にいるから、こんなところか。

「ヴォルドの部屋から出てきたから、ヴォルドの部屋がこっちじゃないのは知ってるよ。ヴォルドのところに行こうとしてただけだ。」

……部屋戻ろうかな」

今の状態でヴォルドに会うのは得策ではない気がする。

それ以上に、何故だか会うのが恐く思えた。

「部屋に戻られるんですしたら、今いいですか？ダミアンが探してたんですよ」

「あ、そうなの？」

「探すの俺に託して、奴さんは仕事ですけどね。ダミアンのところまでご案内しますよ」

「ありがとうございます」

探させてしまって悪かったなと思いつつ、アナクの後を追う。

こうして並んで歩いてみると、アナクの背の高さに驚く。



160ある私の頭三個分高い。

皆私より高いから、どれくらい高いとか気にしたことなかったけど、高すぎやしません？

その身長10センチくらいよこせと言いたい。

「いいなあ、皆背高くて…」

「レーン様もまだ伸びますよ」

さわやかに笑って言うてくれたけど、でもね…。

「私の成長期は13の時に止まりましたよ…」

ぐんつと伸びたと思ったら、それ以降1センチも伸びてませんよ、悲しいことに。

「え。レーン様って今いくつで…？」

「え？この間16になりました」

ん？何かおかしいなと言ったかな。

表情が固まったアナクを見ながら、私は身長ほしいとぼやいていた。

## 18 神に属する者

「…うげっ」

この一言で、場の空気が凍ったのは見て見ぬふりをする。  
アナクに案内され、通された部屋にいたのはダミアンだけではなかった。

「こんにちは、レーン様」

「こ、こんにちは？」

ダントツで会いたくなかったよ、カステヘルミさん！

この人に会うくらいならヴォルドのがいい。  
ドに会いたいよ。

会ってわかる。

この人に会うくらいならヴォルドのがいい。

「ご足労いただき、申し訳ございません」

ダミアンに恭しく頭を下げられて、カステヘルミは無視することにした。

勧められた椅子に座り、さてなんの話かと身構える私に、侍女が紅茶を淹れてくれた。

あ、最近お気に入りのベリー系の紅茶だ。

甘酸っぱくておいしいんだよね、これ。

「あ、で、用件は？」

「わたくしがお願いしましたの。お約束しましたのに、ちっとも来てくだらないので」

約束？

約束って何ですか、カステヘルミ様？

私がいつ貴女様とお約束を？

ダミアンに話しかけたつもりだったのに、前に座るカステヘルミがにっこりと笑った。

やだな、この人妄想癖でもあるのかな。

「約束…ですか？」

「教会に来てくださると、お約束しましたでしょう？」

いやいや、してませんから。

ああ、もう面倒くさいな。

「気が向いたらとは言いましたが、確約した覚えはありません。それで、ダミアン。用はこれだけですか？」

カステヘルミの思惑がなんだかなんて知らないが、私はこの人に用はない。

ダミアンを見れば、ただ黙って頭を下げられた。それ以上の用はないのだろう。

「用がないのでしたら私はこれで失礼します」

「お待ちください」

温度が落ちた声。

ひんやりとしたそれに、思わず口元が歪んだ。

「何か？」

「レーン様は神に属する者。教会に来るのが筋というものではないのですか」

「筋…？」

何の筋だというのだろう。

この人が言うのは、人間が決めた人間のための筋だろうに。

「私は神に属する者。だからこそ、人間が定めた人間のためにある教会に、何故私が出向かなければならない？」

「なっ…」

「私はフィーリーシャによって自由を約束されている。その自由をたかが人間如きの、力もない神官が侵すと言うのか」

わざと仰々しい口調を使い、顔を真っ赤にして睨んでくる女を静かに嗤う。

教会の大司教だかなんだか知らないが、この女は何か勘違いしている。

出会ったときにマーノンと似たような空気を感じたが、なんてことはない、空気だけだ。

まあ、マーノンより格下だってことは知っていたけれど。

「では、失礼しますね」

ゆったりと、自らより格上にとる礼をとってやった。

部屋を出ると、アナクが壁に寄り添うように立っていた。

「話は終わったみたいですね」

「待ってたんですか？」

「ここからじゃ部屋、戻れないでしょ？」

苦笑気味に言われて、乾いた笑いを返した。

その通り、戻れません。

一人で戻ったら迷う自信満々です。

「ご案内します」

その申し出に、一にも二にもなく飛びついた。

「お願いします」

師団長さんだというのに、こんなことさせて少々忍びなかった。燦々と光が降り注ぐ廊下は静かで、開いた窓からは風と木々の擦れる音しかない。

響くのは靴が床を叩く音。

「このことも、もう少しでお別れか……」

ふうつと息を吐くように呟く。

「ここを出て行くんですか？」

驚いた様子もなく淡々としたアナクに、一つ頷く。

「ええ。やる必要がありますから」

「それは、どんな？」

探るような声だったが、私も淡々と答えた。

「天命ですよ。フィーリーシャからの」

自らが定めた運命でもあるけれど。

あ、そうだ。

「私が16歳だとなんかおかしいんですか？」

「え？」

「さっき驚いてませんでした？」

ちよつと気になってたんですよ。

自分がいくつに見られていたのか。

「ああ…。15までが成長期だと言われているので、14ほどだと思っていたんですよ」

14の小娘に手を出したのか、ヴォルド！

あ、でもヴォルドの年齢知らない。

ここの成人14だから犯罪には…ならないか。

「14…。若く見られて喜ばいいのか、子供に見られて嘆けばいいのか微妙です」

「喜んでおけばいいんじゃないですか？」

あら、軽く言われてしまった。

「ところで、アナクさんおいくつですか？」

「35です」

……………詐欺だ。

20代だつて信じてたのに！

アナクが35歳。

どう見積もっても28そこそこだと思っていたのに。

「年齢不詳すぎ。何あの童顔」

東洋人にある典型的な幼顔である自分のことは、この際棚上げしとく。

しかしアナクが35歳だとすると、ヴォルドはいくつなんだろう。……知らないほうがいいか。

戻ってきた私室のソファアに凭れながら、完全にだらける。

セイシャーリに来てからというものの、いつもいつも気を張っていた気がする。

知識と情報を頭の中に詰めることにだけ貪欲で、周囲を意識することもなかった。

ぼうつとする意識に、眠気も相俟って目を瞑る。

力の抜けた体が、だるく熱い。

熱に浮かされているのだと気付くのに、そう時間はかからなかった。

「体調崩した……」

自覚した途端、激しい頭痛が襲ってくる。

寝室まで行くのが面倒で、ずるずるとソファアに寝転んだ。

布張りのソファアはベッドほどではないにしろ、結構な寝心地だ。

「レーン、顔真っ赤だね」

「……………マーノン、なぜうつるよ?」

若干舌回ってないな。

ああ、マーノンが驚いた顔してる。

貴重だな。写真撮りたい。

「僕らが風邪なんてひくわけないでしょ」

神様ですもんね。

ごめんなさい。

「もうすぐ皇帝が来るからってお知らせに来ただけど…。大丈夫？」

聞きたくない単語が聞こえた。

それにしてもいつもながら気持ちのこもってない心配の仕方するな。

大丈夫？だけがすっごい楽しそうだ。

「ヴォルドにまたなんかした？」

「してないよ。僕はもう傍観に徹することにしたからね」

「……そう」

断言するってことは本当にしてないのだろう。

そんなことよりヴォルドだ。

この体調で会うのはご免被りたい。

「じゃ、僕はもう行くから」

「まっ……」

止める間もなく、マーノンの姿が掻き消えた。

起き上がった瞬間、少し治まった気がしていた頭痛がぶり返した。

「いったぁ……」

頭を抱えてソファアに蹲る。

鈍痛にじつと耐えていると、肩に何かが触れた。

「どうかしたのか」

声を聞いただけで、体がぞわっと栗立った。

ゆっくりと上げた顔に、筋張った男の手が触れた。

「……ヴォルド」

「熱があるな」

手が首筋を撫でる感触にゾツとする。

恐怖に絡め取られたように、体が言うことをきかない。

マーンに詰められた時とは違う、触れられた場所から浸食されていくような恐怖。

「寝るならベッドにしろ。ここでは悪化させる」

俗にいうお姫様だっこで抱き上げられ、抵抗も儘ならずなされがままになる。

恐い、と間違いもなく感じる。

なのに、発熱とは別に体の奥から波打つような熱が湧きおこる。その熱がなんなのか、理解できない。

寢室のベッドに優しく横たえられさせられ、靴を脱がせられる。

「医師を呼ぼう」

「嫌」

「……嫌、なのか？」

しまった、つい本音が。

漏れた本音によって我に返り、恐怖と熱が少しだが薄らいだ。

ヴォルドは微かに笑みを滲ませながら、リボンをタイをするりと解き、シャツの間に手を滑りこませる。

肌蹴られていくシャツに、上半身が顫わになった。

「女嫌いじゃ、なかったの？」

鎖骨に寄せられた唇を感じながら、呟くように訊ねる。

くつくつと咽喉を鳴らして、ヴォルドは顔を上げた。

「嫌いだが、お前は欲しい」

「それは……」

本当に、私？

欲しいのは、リーの眷属ではないのか。

そう続くはずの言葉を遮るように、ヴォルドが言った。

「私の前に在るお前が欲しい。それに、お前に触れるのは心地よかった」

くつりと笑うヴォルドの笑みはどこか歪んでいる。

その笑みのまま顔が寄せられ、乾いた唇を食むように口付けを与えられる。



それは次第に、呼吸を奪うような激しいものに変わっていく。  
けれどももう、私は何かをする気にはなれなかった。

## 19 熱（後書き）

流されてるだけな蓮さん…。

## 20 契約を成す

頭が痛い。

指一本動かすのも阻まれる気だるさと頭の奥で響くような鈍痛。どれだけ体温上がっているのか、茹だるような発熱に意識は朦朧としている。

これは言うまでもなく、私の体調は悪化していた。

「……………つく」

額にのせられた濡れタオルを抑えながら、うーだのあーだの唸る。喋るのも一苦勞で、息をするだけで身体の節々が痛んだ。

「絶不調だね、レーン」

マーンンにしては珍しく、真剣な顔をして現れた。

こうしてみると、クールでかつこいい観賞用美形だ。

いつもその表情でいればいいのに。

そんなことを思っていると、チツと舌打ちが聞こえた。

「抜かったな…。歪な形で契約が成されてる」

額のタオルを除けられ、指が触れる。

「ひいあつ…！」

ビリッと、感電したみたいに体が跳ねた。

指が触れた場所が爛れるように熱く、突き刺すような鋭い痛みを感じる。

「リイが来るまでまだ時間があるっていうのに…」

マーンンの声など、すでに私の耳に届いてはいなかった。

声が咽喉に張り付き、呼吸をすることすら思うように出来ず、酸素を求めて喘ぐ。

痛い、熱い。

この二つだけが私の思考を埋め尽くしていた。

「レーンに手を出しておきながら、契約の仕方也不知道なんて…。  
なんでこう人間って愚鈍かな」

苛立たしげにまた舌打ちをして、マーンンは毒吐いた。

額の紋章を指先でなぞられるたびに、ビクビクと体が跳ねる。

何度かなぞると、指の代わりに唇が押し付けられた。

「我が主にして寵愛の僕。ミシユラ・ハーウェイ誓約に基づき、その心身を蝕む物を排除する」

ズツと、唇が離れるのと一緒に何かが体から抜けた。

同時に体中の力が抜けて、筋肉が弛緩する。

ようやく体内に取り込めるようになった空気を貪るように呼吸した。

「……あ？」

「おかしいと思ったんだよ、レーンが風邪なんて」

軽くなった体や消え去った頭痛に驚いていると、マーンンがベッドに腰掛けながら肩をすくめた。

いつもの笑顔に戻っていて、なんだかムツとした。

「傍観に徹するんじゃないかったの？」

「傍観に徹したら、レーンが壊れていたよ。それでも僕はレーンの従者だからね。守らなければならない時はきちんと守るよ」

「……ありがとう」

助けられたのは事実なので、礼だけは言っておいた。

幾分か体はだるいが、それも激しい運動をした後の倦怠感のようなもので、それ以外は特に不調はない。

何をしたかは知らないが、マーンンが取り去ってくれたのだということはよくわかる。

「お礼を言うにはまだ早いよ」

「ん？」

「契約を半分以上成してしまっているからね。さっさと真名を交換しないと、また同じことになるよ？」

へー、ふーん、ほー。

「……………契約って何？」

マーノンの笑顔に凄みが増して、体が硬直する。

怖い。怖いよ、マーノン！

「契約も知らずに人の中にいるなんて…。リイは本当に何も教えてないんだね」

呆れを滲ませて言われても、知らないものは知らないんです。

とは、怖くて言えないけれど、視線では訴える。

これ見よがしに溜息吐かれてしまった。

「どおりでこんなことになると思った。わかってたら幾らレーンでも、もっと警戒してそうだし」

「や、だからどういうこと？」

話の見えなさに、私の困惑は最高潮だ。

契約と聞いて思い浮かべるのは、神子である兄が連理の森<sup>リ・フィルシアン</sup>を出る

ために必要な、王との契約だ。

でも私は眷属で、その契約とは関係ないはずだ。

ならばマーノンがいう契約とは何なのか。

皆目見当もつかない。

もうひとつ溜息をこぼしながら、マーノンが口を開いた。

「レーンの額にあるその紋章はね、神子の紋章と同じものなんだ」<sup>フィルラ</sup>

似ているとかは思ってたけど、まさか同じものだったとは。

驚いている私を他所に、マーノンは説明を続けた。

「そしてレーン自身は、神子でなくてもリイの眷属<sup>フイーリ</sup>で、どれだけ人の姿をしていても人間じゃない。精霊であり、天上神である僕らと

同等の存在だ。」

「同等…？」

「そう、同等。だから神子ではなくても、紋章は神子と同じように作用する。神子の契約は、第一に神子の紋章への王の口付けから始まるからね」

紋章への口付け…？

「された覚えないんだけどな……」

唇にはこれでもかとされたけど。

「寝てる間にでもされたんじゃない？」

……寝込み襲われてたのか、私。

「本来なら口付けた後で真名を交わす。それで契約の第一段階が成されるわけだけど……、レーンの場合はその順序も守られてないからね。こうしていろいろ不具合が発生してるわけだ」

「なるほど……」

なんだかマーノンの言葉に引っかかりを覚えたが、何がどう引っかったのかがわからずに、受け流してしまう。

とりあえず、中途半端に契約が成されているために、体調がおかしくなったのだといことはわかった。

「じゃあ、ヴォルドと真名を交わせばいいわけ？」

事態を脱するための方法としては、それしかないのだろう。

そう思った私に、マーノンがにんまりと笑った。

「契約を成したくなければ、相手を殺すっていう方法もあるけどね？」

## 20 契約を成す（後書き）

契約の内容については一言も触れてないマナーンです。

interval ?

「リイがね、迎えに来るの」

初めて見る、眷属の少女が浮かべた花のような笑顔に、ヴォルゲルドの胸の奥で冷たいものが灯った。

手に入れたと思った矢先に、消えると言っのか。

この手の届かない場所に。

「許さない」

この手から逃れることも。

自分の前から消えることも。

許すものかと、ヴォルゲルドは一人、小さく呟いた。

「待て待て待て待て！」

「なんだ」

「お前自分が何言ってるか自覚あるか？え？」

詰め寄ってくるアナクの肩を押すことで遠ざけ、紅茶に口をつける。

「眷属殿を手に入れると言った」

感情を含ませないヴォルゲルドの声に、アナクの顔が苦味を潰したように歪む。

アナクの隣で話を聞いていたダミアンも、痛む頭を抑えていた。



「手に入れるとは言われますが、如何にして手に入れると言うのですか」

「古文書に神との契約について載っていた。それを用いるうと思う」

「レーン様は眷属ですよ？」

神と眷属では、その存在が全く違う。

契約を交わすとなれば、相手の意向だとして重要になる。

それがわかつていないのか、ヴォルゲルドは平然と紅茶を飲み、手にしている本を読み進める。

ダミアンは溜息を吐きなくなった。

「フィーリ・マノレイの言葉を忘れたか？」

「……まさか」

「あ？どういうことだ？」

何かに行きついたダミアンに、話がわからないアナクが首を捻る。本から視線を外さずに、ヴォルゲルドが言った。

「フィーリ・マノレイの言葉を借りるなら、眷属殿は天上神フィーリと同等の存在。ならば、眷属との契約ではなく、神との契約を成すべきだとは思わないか？」

片手で本を閉じ、ヴォルゲルドは立ち上がった。

戸棚に何冊か置かれた本の一冊を引き抜き、ページを見開いて机の上に放る。

そこに載っているのは、神との契約方法。

アフィン文字で書かれたそれは、アナクには読めないが、教会で育ったダミアンには容易に読めた。

その内容がいかに大罪であるかも。

「神を凌辱なさるおつもりですか」

声が震えたが、ヴォルゲルドは依然として平然とした空気を崩さない。

どころか、悠然と笑みを浮かべて見せた。

「神と同等といえど、眷属だ。神ではない」

矛盾している。

そう思っても、口に出すことはできなかった。

「眷属殿を契約によってこの地に縛り付ける」

ヴォルゲルドは笑っていたが、その瞳の奥で仄暗い狂気が揺らいでいる。

「アナク。先ほど言った薬を用意しておけ」

「無茶言うな。催淫薬なんか用意できるか。用意できて精々軽い睡眠薬だ」

実際はそんなことはなかったが、要求された薬を用意する気がアナクにはなかった。

どれだけ強く言われようと、大罪と見做されるかもしれない行為に加担する気はさらさらない。

「それでもいい。用意しておけ」

さらりと流され、アナクは顔を顰めた。

ダミアンは本を手にとり、もう一度目を通す。

「三度の交わりはどうとでもなりましようが、真名を交わさなければ、契約を成すこともかなわないのでは？」

「そこは術を用いる」

もう何かを言う気力にもなれないと、ダミアンですら口を閉ざした。

術といっても使うのは禁術だろうと予想がつくからだ。

自らの命を削り、求む物を奪う。

その術を行使しようというのだろう。

「嬉しいだろう？お前たちが待ち望んだ正妃が、もうすぐ誕生しようというのだからな」

ヴォルゲルドの声だけが、冷たく響いた。

i n t e r v a l   ? (後書き)

今回短め…。

なんだか段々と嫌な男になっていくな、皇帝。

契約を成すか、相手を殺すか。

紙に書いてみた。

「…なにこの二者択一」

ていうか破棄するには殺すしかないですか、そうですか。

「ヴォルドのこと、殺したいほど憎んではないんだけどな」

必要性も今のところ感じない。

ヴォルドのせいで体調が崩れたことに関しては、一回ぶん殴りたいくらいで、それ以上何かをしようという気もなかった。

人を殺すのは結構な気力と体力が必要なわけで、面倒くさがりな私には、兄が絡んでいなければ土台無理な話だ。

紙に書いた二つの言葉の下に棒を二本書き、それを何本かの横線でつなげる。

ひっくり返せば、あみだくじの完成だ。

「…うん。これはないな、さすがに」

どうしたものかと考えていると、あることに思い至った。

「契約って、…何の契約？」

フリーリン 神子と王の契約についても、私は詳しいことは何一つ知らない。

本で調べてしまおうかとも思ったが、誤った情報ではなく、正確な情報が欲しかったために、フリーリーシャに後で教えてもらおうと考えていたのだ。

眷属である自分が成せる契約など、見当どころか想像もつかない。「肝心なこと何一つ教えてくれてねえじゃねえか、マーンン！」  
気付くのが遅いよ、レーンと、マーンンが笑っている声が聞こえた気がした。

体の不調を一時的にはあるが、マーノンに取り除いてもらったのが夜中の話。

とんでもない二者択一を突き付けられ、とりあえず保留で眠りについて、起きたのが昼過ぎ。

ご飯も食わずに、私は悶々と契約について考えていた。

で、肝心な契約内容についてや契約方法の全貌については、マーノンからはつきりと聞いていないことに気付いて憤慨。

ついでに、昨日のうちに聞いておかなかった自分に、ちよっぴり自己嫌悪。

「……しょうがない。マーノンに聞くか」

この手に関しての情報源は今のところマーノンしかない。

多少の誤りを気にしないのであれば別にマーノンでなくてもいいのだろうが、今はより正確な情報が必要だ。

マーノンはあれで“嘘”は絶対に吐かない。

あまり頼りたくはないが、背に腹はかえられないと、意を決して名を呼ぶ。

「マノレイ」

……。

……。

……。

………？

「マノレイ？」

反応が、ない？

「マノレイ？おーい？」

おおっ？

いつもなら呼べばすぐ来たのに、反応がない。  
反応どころか姿も見せない。

「……なんでだ」

風呂場だろうと、寝言だろうと、うつかり呼べばすぐに姿を現したあのマーノンが！

呼ばなくてもよく来たけど。

「なんでこない？」

おかしい。変だ。

ゲネレ・ミシユ

主従誓約によって、呼応は絶対の義務になっているはず。それをしない、あるいは出来ないことがあるとすれば。

「リイのところにいるのかな」

フィリス

天上神最高位であるフィーリーシャの言葉の方が、主である私の言葉よりも優先順位が高い。

フィーリーシャのところにいるのなら、どれだけ呼んでも来るわけがないだろう。

「どうしよう…」

唯一の情報源がないとなると、八方塞だ。

もう本当にどうしてくれよう。

契約の内容も、本来の契約手順もわからない。

破棄する方法が、相手を殺すというもの以外に他にも方法があるのか、マーノンは断言もしていない。

他にも方法があったとして、それを知るのもやはりマーノンだ。

大体にして、ヴォルドが何故私を抱いたのか。

それすらもまだわかっていない。

「……そうだ」

先にそれを追求しよう。

ヴォルドが私を抱いた理由。

私を欲しいとヴォルドは言った。

それがマーノンによって私に対する欲を強められた結果にしても、何故私を抱くという考えに至ったのか。

私を抱いたところで私が手に入らないのは、当初の出会いの時に実践してわかったはずのことではないのか。

その事実には、実は誤りがあるとでも…？

いや、ヴォルドは私に行為を二度強いた。

行為の回数に何か意味があるのか。

そもそも女嫌いのヴォルドが、私を“女”として扱わなければならない行為を率先して行う、その理由は何だ。

「そうすることで、私の意思に関係なく、私が手に入る……？」  
どうやって？

「けい、やく……？」

契約とは何だ。

わからない。

わからない、情報が欲しい。

契約に関する知識が。

濁ったような思考の中で、私は自嘲気味に嗤った。

偶然の上で成り立った契約だと、私は無意識に思いこんでいた。

実際は、ヴォルドが意図して実行していたわけだ。

「……殺す？」

この契約がなんであれ、私の行動を阻むものになると、本能で直感した。

ならば、ヴォルドは、彼は敵だ。

私と兄を阻む敵。

敵に容赦は

「しない」

## 22 無知による羞恥

ファイリス・フリーリシャ

天上神フリーリシャの眷属な私ではあるが、私に何か特別な力があるか、と言われたら答えは否。

見た目の通り、非力な人間でしかない。

そんな私が一国の王を殺すとなると、一体どれだけの知恵と身体能力が必要なだろう。

「毒殺？……どこから毒仕入れよう」

というより、どこで混入しよう？

「剣……。斬るのは難しそうだなあ」

護衛もそうだが、ヴォルド自身、剣術などの武術を嗜んでいるだろう。

人の気配にも敏感そうだ。

そんなヴォルドに、素人の私が簡単に殺せるような隙が見当たらない。

武術どころか喧嘩もしたことがない私は、隙って何だ！というお話にならない状態だ。

真っ向からは避けて寝込み襲うにも、ヴォルドの寝顔すら見たことないし。

「この世界に銃……あるのかな。わかんね。魔術習う……。時間ねえか」  
魔術は使いたくもないしなあ。

いやはや、殺そうと思っても、考えていた以上に実行するのは面倒だ。

ここでマーノンでも現れてくれたら、サクッとやってくれそうなんだがな。

「頭の遣いすぎで熱でそう……」



殺すことだけじゃなく、殺した後のことも考えなきゃならない。  
みっちり計画を立てている時間もあるのか怪しいところだ。  
真名を交わして契約を成す。

となれば、ヴォルドは私の真名を知ろうとしてくるはずだ。  
手段は知らないが、こうして契約を成そうとしてくるくらいだ、  
何かあるのだろう。

「だあっ！情報が圧倒的に少なえんだよ、この野郎！！」  
知らないこと、わからないことが多すぎる。

どうにかこうにか頭を働かせたところで、情報量が少なすぎてす  
ぐに詰まる。

これで殺人計画など立てる奴がいたら、是非ともお目にかかって  
みたい。

如何ほどの天才か、それとも超がつくほどの馬鹿か。

枕下に短剣でも仕込んで殺す、などと簡単に言ってくれるな。

実行するとなればまず短剣を仕入れて、相手をベッドまで誘導し  
なければならぬ。

誘導イコール夜のお誘い…無理。

「女嫌いだっというヴォルドが、そう易々と誘惑されてくれるわけ  
ないだろうし」

なんたって私を抱いた計三回とも、目的がありましたからね。

無条件で私を抱いたことありませんからね。

色事の色も知らない私が誘惑っただけでも無理があるっというの  
に、そんな相手を誘惑なんてどうやったって無理だ。

「……殺すって一口で言っつても、難しいわ」

防御に魔術使われでもしていたら、私には反撃の余地もない。  
魔術どころか武術も対抗できませんが。

「マノレイが恋しいなんて、私の頭もイカレたか」

人殺しのスキルが欲しいようと嘆いていると、頭の上にポンと手  
を置かれた。

「また体の調子悪くなったの？」

「……………マーンン？」

顔を上げた背後には、いつもの笑みを浮かべたマーンンがいた。

「ただいま、レーン。体は大丈夫そうだね。何してるの？」

「…契約成す前にヴォルド殺そうと思って」

きらりと、マーンンの瞳が輝いた。

「殺すことにしたんだ？」

ニマニマとした笑顔がものすごく気持ち悪い。

この相手に殺しを頼むのに、ものすごく引け目を感じるのは何故だ。

「マーンンはリイのところに行ったの？」

「様子を見にね。それで？まさかレーンが殺す方を選ぶとは思わなかったんだけど」

マーンンに後ろから押し掛かれ、机の上にひれ伏しながら唇を尖らせた。

「契約を成したら、これからの邪魔になると思ったから」

「今の契約なら、特に問題はないと思うけど？」

思わず聞き流しそうになって、首を傾げた。

「え？」

どういつことだと顔を上げれば、マーンンは微妙な顔つきになった。

ぐしゃぐしゃと頭を撫ぜられ、ぎゅっと抱きしめられる。

なんだ、どうしたんだ、こいつ。

「レーンの無知さを忘れてたよ。ごめんね？」

「キモッ」

神妙な顔で謝られて、背筋に悪寒が走った。

「酷いな。ああ、それで契約だったけ？」

「あ、うん」

今一番、咽喉から手が出るほどの情報だった。

マーンンが教えてくれるというなら、是非とも教えてほしかったので、素直に頷く。

「今のレーンが成そうとしてる契約はね、ベネレ・ラルシュ結縁契約。他に3種の契約があるけど、まあそれはそのうちね」

「ベネレ・ラルシュ？は、どういう契約なわけ？」

「縁を結ぶ。いうなれば、魂同士で直接縁を結ぶ契約かな」

「……」

フリーリーシャと出会ってから、なんだか予想外な出来事が多すぎて頭が痛い。

「一応聞くけど、魂同士の縁を結ぶって……？」

「互いへの好意の強制かな。あ、神子フリーリンの契約はこれとは別物だからね？」

「そう……」

自分の勘が当てになるかどうかなんてことは、当てにならないと知っていたけれど、空振りもいいところだ。

殺そうとか意気込んでた自分が恥ずかしい。

穴があつたら入りたい。

「他の契約が併合する可能性は？」

「ないね」

「……………契約成してくる」

体が不調を訴える前に成してきますとも。

それが終わったら、マーノンに契約についてちゃんと問い詰めておこう。

これ以上空回りするのは、本当に馬鹿らしい。

## 23 真名を交わす

脱力しきった体でドアまで向かう。

ドアノブに手をかけたところで、マーノンに呼びとめられた。

「契約成して一段落したら、話があるから呼んでね？」

「話って、ヴォルドに？」

「皇帝とレーンに」

一体何の話なんだか。

訝しく思いつつも、生返事だけ返して部屋を出る。

殺すという言葉に目を光らせたマーノンだが、契約を成すと口にすれば、それ以上の茶々は入れてこなかった。

ぼんやりと部屋の前で座り込んでいると、予め呼んでおいた侍女がやってきた。

「お待ちせいたしました。ご案内いたします」

以前の二の舞にならないようにと、ちゃんと案内を頼んでおいた。先に行く侍女の後を歩きながら、マーノンから聞いた真名を交わす手順を思い返す。

契約手順も間違えてたヴォルドが、真名を交わす手順を正確に知ってる可能性は低い。

ちゃんと調べとけよと、思いつきり愚痴りたい。

ついでにこっちの意向も確認しやがれ。

「……絞め殺したい」

不穏な言葉は侍女に届いてなかったらしい。

歩みは止まるどころか、一寸の乱れもなかった。

さすがは侍女といったところか。

案内された部屋は、どうやら応接間らしく、誰もいなかった。

謁見の最中だとのことなので、まあそれは気にしない。

紅茶だけ淹れてもらい、一人ソファで寛ぐことにした。

「……………わぁ、幻覚？」

「うわ、え？アンタがフィーリーシャ神の眷属？」

外の空気が吸いたいなと開けた、窓の外。

木によじ登っている男がいた。

「不審者？」

これは防衛のためにマーンンを呼ぶべきかと、本気で警戒した。

そんな私をキラキラとどこか恍惚な表情で見つめてくる男は、開け放った窓から飛び込んでくると、私の手を取って言った。

「すっげえ！マジで双黒だ！え、パチもんじゃねえよな！？」

ここまで堂々とした不審者はそういないかと、すぐさま警戒が薄れた。

ていうかパチ…。

私の語彙のせいなのか？この翻訳。

「お……………アナタ、誰？」

お前と言いつうになつて、言い換える。

初対面の年上だろう人間にお前はさすがにいただけない。

「あ……………やべえ。俺がここにいたこと内緒な！」

「つちよ」

「カミツ口様！？」

「うわぁっ！」

名乗りもせず内緒はないだろう！？と腕を掴もうとしたら、背後から聞こえてきた声にビビって背中を押してしまった。

窓から身を乗り出していた男は、その反動で勢いよく窓から落ちていった。

「……………大丈夫？」

ここが2階でよかった。

下の植え込みで伸びている男を見て、死んでないことに安心した。無差別殺人犯になる気は、私にはないからなあ。

背後から声を上げたのはダミアンで、ダミアンと一緒にヴォルドもいた。

「あの人誰だったわけ？」

落ちた男は、ダミアンの指示ですぐに運ばれた。

頭は打っていないが、足の骨を折ったらしい。

災難なことだ。

「ドブレチェンスキー公です。お見苦しいところをお見せして申し訳ありません、レーン様」

ヴォルドの斜め後ろに控えたダミアンが、スツと頭を下げた。

「いえ……」

相手の正体が知れたので、一先ず良しということにしておく。

どうしてあんなところから現れて、どうして逃げ出そうなどという素振りがあったのかは、覚えていたら後で聞こう。

今は他にやるべきこともあることですし。

「私に用があると聞いたが？」

「ああ、うん。真名を交わそう」

「……何？」

顔を顰めたヴォルドに、あれ？と首をかしげる。

「聞こえなかった？真名を交わそうって言ったんだけど」

「いいのか？」

あり得ないという顔をされて、私は更に首をひねった。

この反応は予想してなかった。

「いいも何も、契約成したいんじゃないの？」

私の言葉に、ヴォルドだけでなくダミアンの表情まで凍りついた。

「眷属殿は構わないのか？」

「別にいいけど？てか交わそう。ヴォルドの契約手順がめっちゃくちゃなせいで、私体の調子最悪なんだから」

さあ早くと急かせば、ヴォルドがダミアンに人払いをさせる。

部屋をも移ろうとしたが、それは私が断った。

そんなことしてる間に体調が崩れたらどうしてくれる。

「真名の交わり方、ヴォルドは知ってる？」

「ああ。何度か交わしたことはある。だが、結界のない場所では初めてだ」

お、経験ありですか。

ならスムーズに終わりそうだ。

「結界の張り方はマーンに教わったから、それは任せて」

向かい合わせに立ち、私の手の甲が上になるように右手同士を握り合わせた。

瞼を閉じ、深呼吸して肩の力を抜く。

「我が神は唯一絶対なり。<sup>ア・ファイ・ベジエラルダ</sup>この空間、全てを閉じ、全てを遮る。我らの声は我らにしか届かない」

ピンッと張った空気に瞼を開く。

どうやら結界を張るのには成功したらしい。

顔を上げ、ヴォルドと視線を合わせる。

「我ら、真名を証に契約を交わす者である」

ヴォルドの言葉に続くように、私も口を開く。

「我が名は三沢蓮」

「我が名はヴォルゲルド・フィーシェーラ・ケアトラフェス・ヴィレンツアーレ」

フィーリーシャの口から聞いた時は覚えられなかった長ったらしい名前が、なぜか今回はすんなりと覚えられた。

ヴォルドが真名を言い終えると、右手の甲が熱を持ち始める。

青い光を放ちながら、浮かび上がるように表れたのは、花のような形をした紋様だった。

「…これで完了、かな？」

「ああ。それはすぐに消えるはずだ」

手を離すと、ヴォルドの手の甲にも同じ紋様があった。

「消えちゃうの？」

「本来ならな」

ということは、今回はわからないって言うことか。  
綺麗な模様だから消えないでほしいとは思ったが、とりあえず。

「これで体調万全だ！」



## 24 答え合わせをしよう

これで体調が崩れる心配がなくなったと、清々しい気分で伸びをする。

昨夜の体調の崩れ方は、もの凄く堪えた。

あんなものは二度とごめんだ。

「そういえばさ、ヴォルド。なんで結縁契約？」  
ベネレ・ラルシユ

他に3種もの契約の種類があつて、何故この契約を選んだのか。わからなくて首を傾げた。

「……束縛契約ではなかったのか」  
ベネレ・ラルシユ  
「うん？」

聞いたことのない言葉が聞こえたのは気のせいかな。  
愕然とした声だったのも気になる。

嫌だな。

なんだかややこしいことになっている感じが、バンバンする。  
あ。

今になって嫌な仮説思いついた。

「まさか、と思うけどさ？」

恐る恐るにヴォルドを見上げる。

「契約の仕方間違えてたんじゃなくて、契約の種類自体間違えてましたーとか……」

さつと逸らされた視線。

ひくりと動いた頬。

「あるんだな？」

声が一つ低くなったのは仕方ない。

「古文書の通りにしたただけだ」

言い訳じみているとわかっているのだろう。

視線を逸らしたままの言葉に、眉間に皺が寄るのを自覚する。

「……」

伝承の類が当てにならないことを理解してないのか、この男は。別の物だから大丈夫とか思っちゃったのか、この男は！

「学習しろよ、馬鹿ヴォルド！」

体調が崩れた恨みと共に、鳩尾に一発打ち込んでおいた。

二発目は理性でおしとどめ、ソファアにどかりと座り込む。

「そこ座れ」

全体重をかけたパンチは結構重かったらしく、前屈みになっているヴォルドに、向かいのソファアを指差して言った。

無言で鳩尾をさすりながらヴォルドが座る。

「全くさ、古文書の信憑性を確かめろつての。それで？ベネレ・ラルシーラって何？結縁契約とどう違うわけ？」

ソファアにふんぞり返りながら、睨みつけた。

眼力欲しい。と、なんだか切々と願うよ。

大の男を怯えさせられるとか思っただけ、何この無反応。

毎度おなじみの無表情から少しは表情動かせてんだ、この野郎。

「ヴォールドロー？」

間延びした呼び方をしながら、机を軽く蹴る。

カシャンツと、机の上のカップが悲鳴を上げた。

「言葉のままだ。3度の凌辱と真名の交わりによって相手を縛る……契約だ」

つまり私の勘は半分だけではあるが、大当たりしていたわけか。

やっぱり殺した方が良かったか？

「なんだってそんな契約……」

「確実に手に入れるならそれが一番だと思っただけだ」

「……別のところにも突っ込みたいけど、先にこっち聞く。なんでそれが確実なわけ？」

今の言葉で私は一つ確信した。

ヴォルドのこの物言い。

私を物か何かと勘違いしてらっしゃりませんか？

「契約は天上神<sup>フイリー</sup>といえど介入できないからだ。成してしまえば、変更も書き換えも出来ない」

常識だろう？といったそんな顔をぶん殴りたくなった。

すみませんね、常識知らずで。

「契約を成せば、フイリーシャ神だろうと、眷属殿は連れてはいけまい」

そこまで計算してて、契約の種類を間違えてたら世話ねえな。

馬鹿の子ほど可愛いっていうけど、うん、ちよつと可愛いかも。

「私の意思是まるつきり無視してるところが、氣にくわねえつらないけどね。その子供が玩具に執着する思考と、全く変わらないのは何で！？」

これに恋愛感情が少しでも混じってるなら、まだいい。

でもこれは小さな子供が氣に入った玩具に対する執着と同じだ。

何故わかるかって？

決まってる。

私にも身に覚えがある感情だからだ。

「変わらない…か？」

「じゃあ聞くけど。ヴォルド、私のこと恋愛感情で好き？愛してるって言える？」

好きの部類ではあるだろうが、断言してやる。

この男は私に対して恋愛感情を抱いてはいない。

欲しいと手を伸ばしたのだって、マーンンに欲を強められ、私がフイリーシャの迎えでいなくなると知って、失くすのが惜しくなっただけだろう。

「手に入るとか以前の問だ…い」

音もなく立ち上がったヴォルドが、不満げな顔で私の手を掴んだ。そのまま引き倒されて、ソファアの上でヴォルドに覆いかぶさる格好になる。

「意外に口喧しいな。好きだの愛しているだのはどうだっていい。私はお前を手に入れる。それだけだ」

視線に、絡め取られたように動けなかった。

固唾を吞んで、じっと耐え忍ぶ。

浮かべられた嘲笑は、初めて会った時と同じものだった。

## 25 爆弾

「退け」

掴まれていないほうの手で、目の前の体を退けようとする。

しかし男と女の力の差など言わずもがなで、退けるどころか逆に抱きしめられてしまった。

うん。

こうして抱きしめられて、より思うよ。

ヴォルドは私に恋愛感情なんて抱いてないって。

だってマーノンに抱きしめられている時と、そっくりそのまま同じだ。

抱かれた時のような羞恥を煽る手つきではなくて、愛玩動物を遠慮なく触れるような手の感覚が。

「だーかーらーさー。私、物じゃないの。わかる？ 売り買いできる動物でもないわけよ。意思もあれば感情もある、人間様なわけ。大体さあ、手に入れるっていう、その思考回路をまずどうにかしように？ せめてオトすにして……」

こちらも遠慮なく、バシバシと後頭部を叩く。

手加減しているから、まあ痛くないはずだ。

「ならば……」

「ん？」

肩に額を押し当てたまま、ヴォルドが言った。

「ならば何故契約を成した」

何故？

何故ってそれは……。

「結縁契約は好意を強制するものなんでしょう？ なら元々好意を持

ベネレ・ラルシュ

つてる相手に好意を強制されたからって、何かが変わるとは思えないじゃん」

それによって行動が制限されるとは、思えなかった。

私の優先順位ははっきりしている。

兄と、それ以外。

それ以外の中で、何がどう変動しようと、私がすべきことも、為すべきことも、何も変わらない。

強制されるのが愛情であつたならば、私ももっと考えただろうが、強制されるのは好意でしかないのだから。

「契約を成すか、ヴォルドを殺すかっていう二者択一なら、契約を成すでいっかなあって」

抱きしめてくる腕に、僅かに力が籠った。

小刻みに揺れ動く体で、すぐに笑っているのだと気がつく。

「何笑ってんだ」

ベシベシと頭を叩くと、ぐぐもった声で返された。

「何故その二者択一なんだ。契約を成したくないのであれば、<sup>はてめ</sup>の言があるであらうに」

……っ、マーンン！！！！！！

あやつめ、わかってて教えなかったな！

あああああつ、てかしっかり確認しとけよ、私！！

「……くそう。またしてもやってしまった」

ヴォルドを貶してもいられない。

私ももっと学習能力を身につけるべきだな。

これで何度めだろう……。

「眷属殿は本当に物を知らないのだな。……まるでヴェルデのようだ」

顔を上げたヴォルドが浮かべた表情に、胸が詰まった。

酷く悲しげで、切なくて、泣きたくなるような笑みに、何かを思い出しているような遠い目。

晚餐の時や議論を交わした時にも、時折見られたこの表情に、私

はもの凄く弱かった。

昔、兄がよく浮かべていた表情とそっくりだったからだ。

なんとなしに頭に手を伸ばして、ぐしゃぐしゃと撫ぜ回す。

「違う意味で物を知らないのは、私よりヴォルドだと思っけどね。

これに懲りたら……って、そうだ。もとを正せば、元凶はクソマーノンじゃん」

「フィーリ・マノレイがどうかしたのか？」

「いや……」

ヴォルドのプライドのために黙っておこう。

よくよく考えれば、ヴォルドがこういう行動を起こすこと自体おかしい。

この国、この大陸では、神への信仰がとても厚い。

フィーリーシャともなれば、それは絶対で、その眷属ともなる私は、ここでは神の代理人と言ってもいい。

その存在に手を出すどころか、三度の凌辱……。

大罪とわかるものに、ヴォルドは本来手を出さない人間のはずだ。

「ごめんね、ヴォルド……」

マーノンのせいで。

「悪いのは私だろう？ 少し頭が冷えた。謝ってすむことではないが、すまなかった」

「……」

起き上がったヴォルドに引き起こされ、向かい合うように隣に座る。

謝られてしまった私は、幾分居た堪れない気分で少し乱れたヴォルドの髪を整えた。

「……あ、マーノン呼ばなきゃ」

「今からか？」

「契約成したら呼べって言われてるから。ヴォルドと私に話があるんだって」

すっかり忘れていた。

一体何の話だろうか、マーンンと呼ぶために、一度結界を解く。

「ダイン・ラ・サケネスイ  
全ては在るがままに」

何かが弾ける音ともに、今まで遮られていた音や気配が一気に戻ってくる。

風の音や鳥の気配に、現実に戻ってきたかのような感覚を覚えた。  
「マノレイ」

名を呼んだ途端現れたマーンンに、横で座っていたヴォルドが即座に身を硬くした。

「ああ、契約成せたんだね。おめでとう」

「うっさい。白々しいからさっさと用件に移れ、サド」

にこやかーな笑みに、一発打ちかましたい。

人をおちよくりやがって、腹立たしい。

コンクリで固めて、海に沈めてやりたい。

「そうだね。用件としては簡単なことだよ。レーンのお腹に宿る命のことだね」

「.....は？」

え、今なんて言いやがりました？



interval ?

欲しいという欲求に、逆らう術がわからない。

「私の前に在るお前が欲しい」

無理やり強いる行為の、せめてもの償いのように、ヴォルゲルドは出来る限り優しく触れた。

一度目の暴力でしかない行為を塗り替えられたらいい。

傷つけることはヴォルゲルドの本意ではない。

ただ、今腕の中にあるこの存在が、自分の前からいなくなるのは許さない。

いなくなることを眷属の少女が告げた時、この手の届く場所に置くために、手段を選んではならないと強く思った。

抗うことのない、抗えるはずのない欲求のままに抱きながら、見上げてくる少女の瞳に、嫌悪や嘲りが浮かんではないことに安堵した。

「おかしなものだな」

「陛下……?」

おかしなものだと、ヴォルゲルドは苦い笑みを漏らした。

少女にこれほどまでに執着する理由が、自分でもわからない。

愛しいと、思ったことはない。

好ましいと、思ったことは幾度もあれど、それは親しみでしかない。

ましてや、好かれないなど思ったこともないはずだ。

だというのに、少女に嫌われることを恐れる。

始めから好かれていないだろうことを知っていながら。

「謁見は中止だ。眷属殿の下に向かう」

「畏まりました」

謁見の間を出て、ヴォルゲルドは足早に少女が待つ部屋へと向かう。

早急な用があるとの言葉に、無理矢理成そうとしていた契約がバシたのだろうと、すぐに悟った。

殺されるだろうなどと、他人事のように思う。

神を穢し、貶めたのだから当然だろう。

そう思っ、覚悟をしたというのに。

「真名を交わそう」

平然と言われた言葉に、理解が追いつかなかった。

けれど、昨日からの体調不良は契約手順の不手際のせいだと不貞腐れる少女に、絶好の機会だと思った。

このまま契約を成してしまえば、少女をヴォルゲルドは手に入れることができる。

そう思っ、少女の言葉のまま契約を成した。

「そつえばさ、ヴォルド。なんで結縁契約？」  
ベネレ・ラルシュ

契約の種類すらも誤っていたとは知らずに。

古文書に載っていたのは、束縛契約と呼ばれる契約だった。  
ベネレ・ラルシーラ

三度の凌辱と真名の交わしによって、相手を縛る。

縛るとするのは、物理的な距離であったり、感情などの制限だ。

契約内容とその動機を知った少女は怒った。

その怒りは当然のものだとヴォルゲルドも思ったが、怒りの方向が予想とは違った。

「その子供が玩具に執着する思考と、全く変わらないのは何で！？」

玩具に執着する子供。

少女に対する執着心が、それと同じだとは、ヴォルゲルド自身は思わなかった。

恋愛感情ではないだろうと追い打ちをかける少女に、そうではないと黙らせるために腕を取って動きを封じる。

確かに、少女の言うとおりこれは恋愛感情ではない。

だからといって玩具に執着する子供とは違う。

そうではない。

これは…。

「退け」

片腕で体を押し退けようとする少女の、曇りのない真っ直ぐな瞳に、狂おしいほど懐かしい面影が重なる。

ヴォルゲルドは、殆ど無意識に細く小さな体を腕に抱きこんでいた。

抱き込み、諭すように話す少女に、ヴォルゲルドはようやく自分の胸の内を理解した。

重ねていたのだ。

幼い頃に失った幻影を。

「眷属殿は本当に物を知らないのだな。……まるでヴェルデのようだ」

庶子であるが故に王宮の奥に閉じ込められ、何も知らずに育った、小さな弟　ヴェルデ。

会う度に外の話进行がみ、真っ直ぐに見つめてきたその小さな子供をヴォルゲルドはとても愛していた。

継承権を破棄し、教会に身を置くことが決まった日。

外に出られることを喜んでいた小さな子供は、翌日には息をしない屍となっていた。

あの時の喪失感をヴォルゲルドは今でも忘れたことはない。

頭をぐしゃぐしゃと撫でられて視線を戻せば、少女が目を細める。

「違う意味で物を知らないのは、私よりヴォルドだと思っけどね。

これに懲りたら…って、そうだ。もとを正せば、元凶はクソマーノンじゃん」

嫌悪感丸出しの表情に、フィーリ・マノレイと何かあったのだろとかと、ヴォルゲルドは内心で首を捻った。

ぶつぶつと聞きとれない声で何か言った後、少女は心苦しそうな顔で謝ってきた。

謝られた理由に心当たりがなく、それ以上に自分の仕出かしたことのほうが重大だろうと、ヴォルゲルドは頭を下げた。

すると更に心苦しそうな顔で少女が見上げてくる。

一先ず、押し倒したような格好では誠意も伝わらないかと、起き上がって少女も引き起こす。

もう一度謝ろうとしたら、頭に手が伸びてきて、髪を整えられてしまった。

「…あ、マーンン呼ばなきゃ」

今思い出したように、少女が声を上げる。

謝罪も受け付けられないということだろうかと、ヴォルゲルドは少し頂垂れた。

許してもらおうとは思ってはいないが、それなりに友好的に築けていた関係が崩れてしまうかと思うと、少し淋しい気がした。

自業自得といえばそれまでだが。

真名の交わしのために張られていた結界が消え、少女がフィーリ・マノレイを呼びだす。

現れた青年は、二度ヴォルゲルドの前に現れたあの青年だった。

フィーリーシャ同様、不遜な態度で言葉を交わす少女に、フィーリ・マノレイは言った。

「用件としては簡単なことだよ。レーンのお腹に宿る命のことだね」

有り得ないと、ヴォルゲルドは反射的に思った。

## 26 命

マーンがマーンである所以は、こういう突拍子もない、人をおちよくるところにあると思う。

「命…？」

「命」

聞き返して断言されて、まだ思考が置いてけぼりになっている。

「……………どこに？」

「レーンのお腹に」

「……………いつ？」

「レーンと出会った時にはすでに宿ってたからね。あ、相手はその皇帝だよ」

あーあーあーあーあーあーあーあーあーあー。

「聞き流そうとしないでね？」

はい。

怖い笑顔で言われて、即座に頷いた。

ようやく動き出した思考が、少しずつ事態を把握し始める。

命ってことは子供？

相手がヴォルドって、そりゃ、ヴォルドと以外そういうこととしてないからね。

ヴォルド以外だったらすっちの方が驚きだけど！

いや、にしても子供…。

マーンと出会ったところにはすでにということは…。

「強姦での妊娠率が高いって本当だったんだ！」

空気が水を打ったように静まり返った。

……………すみません。

思考が変な方向に行きました。

隣に座る体がカタカタと震えていて、ちらりと目を向けて驚いた。  
「ヴォルド、大丈夫？ 顔真つ青だけど」

微かだけれど頷いたので、それ以上声をかけるのはやめておいた。  
下手に触れると、さらに酷くなりそうだ。

「あー、で、その命が何？」

ヴォルドは放っておいて、マーノンに話を戻した。

「うん。生まれたら、皇帝にあげればいいと思って」  
あげればいい。

簡単にこういうこと言っちゃうところが、人の姿をしてても人じゃないんだと思う。

元の世界の現代っ子感覚な私は、産む前に墮ろしちゃえばいいのに、なんて思った。

その提案は、口にする前にマーノンに却下されたが。

「レーン、産まないなんて選択肢はないからね？」

「えー」

「リーの眷属なんだから、そういうことはしちゃダメ」

「リーの、眷属だからなの？」

フィーリーシャの眷属でなければ、墮ろしてよかったということだろうか。

堕胎技術がこの世界にあるのかどうかの方も、疑問だ。

選択肢にないのだから、確認する気もないけれど。

「僕の眷属だっていうなら、別にいいけどね。僕は壊すのが性分だから」

今日一番のいい笑顔をどうもありがとう、マーノン。

物騒な言葉がなければ、尚いいのにな！

「産むのは決定事項なわけね」

「そういうことになるね」

行動が制限されるだろうことにもどかしく思いながらも、この場合ヴォルドを責めるのは間違っているだろうと、なんとか苛立ちを

抑制する。

二度目以降の行為なら、ヴォルドを責めるだろうが、一度目の行為はフリーリシャのせいだ。

犯されること前提でこの国に放りこんだのは、フリーリシャなのだから。

「産むのはわかったけど。… あげればいいって、ヴォルドにだって事情つてもんが」

「大丈夫だよ。ね、皇帝？」

否応なくイエスと言う以外、その迫力ある笑顔にどう答えろっていうんだマーン。

もう震えてはいないが、血の気の引いた顔で体を硬くしているヴォルドに、人と天上神<sup>フリーリ</sup>の関係性がよくわかる。

マーンだから、というのもありそうな気がするけど。

ヴォルドに不憫さを感じつつ、出産後の面倒はマーンのとおりヴォルドに押し付けることにした。

「ここって十月十日？」

「とつきとおか？」

出産までの期間を知りたくて聞いたのだが、言葉が伝わらなかった。

十月十日に合う訳がなかったか。

「出産までの期間。どれくらいなのかって話」

「さあ？」

これははぐらかされているのか、わからないのか。

どっちだ。

ヴォルドに聞きたいが、マーンがいると喋れないだろう。

仕方ない、マーンを問い詰めるか…。

「わからないの？それとも言いたくないの？」

「わからない、かな」

楽しむような声で、マーンが笑う。

「どうして？」

「まだ形を成してないからね。予想がつかない」

「……どうということ？」

形を成さなければ、大体の妊娠期間もわからない？

それ以上に形を成すって何だ。

意味がわからない。

自分の常識が通用しないのは、ここに来てからほとんど当たり前だったけど、こういうのってけっこうショックだなあ。

「レーンは眷属だからね。人のより異常に早いかもしれないし、遅いかもわからない」

「……いつになったらわかる？」

「形を成さなければなんとも。リイだったら僕より眼がいいから、もしかしたらわかるかもね」

ならこれもフリーリーシャ待ちか。

フリーリーシャが来るのいつだっけ。

あと5日くらい……？

「リイさつさと来ないかなあ」

5日もこの状態で放っておかれるのは、勘弁したい。

勘弁したいと願ったところで、これ以上早くしろとは言えないけど。

ソファアの肘掛けに打ちひしがれていると、マーノンがさらに言った。

「命は二つだから。一つはほぼ確実に人間として産まれてくると思うよ」

「……え」

顔を上げた私をせせら笑うようにマーノンの姿が消えた。



## 26 命（後書き）

マーノンがいと皇帝無言…。

## 27 常識、非常識

訳のわからなさに、私は意気消沈していた。

「…16で子持ちかあ。加奈子さんより、まず英明さんに殺されそうだな」

硬派といえば聞こえはいいが、堅物で融通のきかない叔母の夫を思い出す。

付き合ってもいない相手との子だもんなあ。

「殺される前に、呆れられて終いには泣かれそうだ…」

「すまない」

「はえ？」

隣から聞こえてきた謝罪に、ヴォルドの存在を思い出した。

愕然としすぎて、軽く忘れてた。

「あのさ、子供本当に押し付けて大丈夫？」

マーンの手前、頷くしかなかっただろうヴォルドに、もう一度確認してみる。

これからのことを考えれば、私が自分で子供を育てるというのは無理があると思う。

自分のやるべきことで手いっぱい、子育てになんて手が回るはずもない。

だからといって、ヴォルドに押し付けるのはなんだか不安だ。

だってここは王宮で、ヴォルドは皇帝。

そのヴォルドの子ということは、王子様なわけだ。

王位継承権とか発生しちゃって、色々大変なことになりそうな気がする。

「私には子がないからな。譲り渡してもらえるのならば、有難く」

「…皇太子つてこと？」

「そのような扱いになるな」

子供がいらない、ということは、継承権争いはそこまで大変ではないか。

いや、でも…

「後見とかは？」

何の後ろ盾もない子では、さすがにまずいだろうに。

「こちらでなんとかする。心配されるな」

「…ん。じゃ、よろしく」

きっぱりと言い切ったヴォルドに、この国の内情をほとんど知らない私が口を出すことでもないかと、これ以上何か言うのはやめておいた。

国の内情どころか、継承権とかの仕組みもよくわからないし。

なにはともあれ、生まれた後のことは決まった。

何か忘れてる気がしないでもないけど、考えたくないからこのまま忘れたことにしとく。

深く考えたところで、わからないものはわからないだから、空回りせずに放置しとくに限ると、今日一日で学習したからね！

同じ轍を踏んでたまるか。

で、あとはだ。

「ヴォルド。人間の妊娠期間って通常どのくらい？」

十月十日が通じなかったために、気になっていた。

この世界、一週間は7日、一月は28日、一年は14ヶ月となっている。

十月十日ではないにしろ、それに近いものであるはずだ。

「そうだな…。全体でいえば一年強といったところか」

「結構長いね」

14ヶ月以上は長いなあと、俄かに驚いていると、更に驚愕な事実を教えてくれた。

「腹の中にいるのは2月ほどだ。12ヶ月以上は卵の中で育つ」

「卵…？」

え、聞き間違い？

聞き間違いなのかな！？

「母の体からは卵で、卵から人は生れるものだろう？」

言葉もない私に、重ねて言葉を続けるヴォルドに、泣きたくなつた。

それはどこの鳥類ですか！？

びっくりだ。

なにそれ。

ありえない。

「異世界ってこういうことか…」

怖いな。

今まで感じた非常識な常識より、よほど怖い。

こういうびっくり箱的な常識、まだ眠ってたりするのかな。

「卵…。卵かぁ。私も卵産むのかな…」

卵産むのと、子供産むのどっちが体に対する負担少ないんだろう。卵の方がつるりとしてそうだから、産みやすそうではあるよな。

「眷属殿が元いたところは違うのか？」

「うん。10ヶ月くらい母親の胎内で育って、人の姿で生まれてくるよ」

「……………そうか」

ヴォルドにとっては、私の言葉の方がカルチャーショックか。

普通に見てる限りでは同じ生態をしていると思っただのに、生まれ方からにしてが違うものなあ。

人間って一括りにしてたのに、私の知る人間と違う。

マーノンが私に優しくったのって、このせいもあるのだろうか。

「あ、ねえ。リイが来るまで、妊娠のこと伏せててもらっていい？」

「構わないが、何故だ」

「周りがうるさそうだから」

噂がどれほど膨れているか知らないが、煩わしいものに違いない。

その中には必ず、私が皇妃になるというものもあるはず。

その噂を確固たるものにされないためにも、せめてフリーリシヤが来るまでは伏せてほしい。

そう説明すると、ヴォルドの顔がさつと青ざめた。

「ヴォルド……？」

「すまん」

「……何が」

今日日、嫌な予感が絶えないのは何ですか。

「ベネレ・ラルシーラ束縛契約を成したと、ダミアンらには思われているかもしれん」

## 28 寂寞の時

間違いを正させるべく、尻を蹴りだす勢いでヴォルドを部屋から追い出した。

ついでに契約に関しての箝口令も敷くように、きつく言い渡した。勘違いの大馬鹿野郎はどこにでも出てくるものだ。

ベネレ・ラルシラ  
束縛契約だろうと、ベネレ・ラルシユ結縁契約だろうと、一緒にたにされて皇妃になるのが当たり前など考える馬鹿が出る前に、口外させないことが最善だろう。

現時点の段階で、如何なる情報が如何ほどの度合いで知れ渡っているのか。

もしかしたら手遅れかもしれないが。

「…部屋戻ろう」

この部屋に居続けても意味がない。

さつさと自室に戻って、食べ損ねていた昼食の代わりに、何か軽食を取ることを決めて、部屋を出た。

「お腹減ったあ」

起きてから何も食べていないのに、もう夕方近い。

窓から見える空は、薄い水色から濃紺の夜色へと移り変わろうとしている。

「……空が赤くないのも新鮮だ」

綺麗な青のグラデーションをした空は、元いた場所では有り得ないもの。

赤みを帯びることのない黄昏時の空。

どれほど周りが見えていないのか、自嘲が禁じえない。

もうここにきてひと月近くになるというのに、今になって気づく

とは。

がらんとした廊下を歩み進め、ぴたりと足を止めた。

「迷った」

元の部屋に戻ろうと思っても、残念なことに、どこをどう曲がってきたのかも覚えていない。

「またやってしまった…」

昨日に引き続き、これで二度目。

どこも似たり寄ったりりの装飾のために、目印になるものもない。だからこそ迷ったのだが。

周りに誰かいないか確かめたが、人の気配もなく、どうしたものかと頭を搔く。

マーノンを呼んでもいいが、馬鹿にされること請け合いなので、これは最終手段だ。

「もうちょつと歩くか」

探検も兼ねて、人に出くわすまで歩くことにした。最近運動不足だったから、丁度いい散歩になる。

窓の外を見ながら歩いていると、ボツと音を立てて廊下の明かりが灯った。

「おお」

電気ではない、蝋燭の明かりで照らされた廊下は、思っていたよりかは明るい。

「魔法…？」

どういう仕組みなのか興味をそえられる。

ただ、これが魔術にしろ魔法にしろ、精霊の力を使役したものだとしたら、少々、いや大分胸糞悪いが。

ランドルーム  
精霊使役。

マーノンが話したことだけが真実ではない。

それ以上の真実をマーノンは隠していることだろう。いつだって全てを語ったことなどない。

けれど、あの時のマーノンが浮かべた嫌悪は絶大で、そのひとつ

の真実だけが、私の中の“真実”となった。

「力で抑えつけるだけでは飽き足らない、か」

奪わなければ気が済まないのは、人の性なのだろう。

だからといってそれが正当化される謂れはない。

不快なものは不快だし、目の当たりにしてしまえば忌々しい。

「だからって消えてなくなれって願うのは、間違ってるんだろっ  
あ」

もしこの明かりを灯したのが精霊使役の力だというのなら、人間の生活の深いところまでその力は入りこんでいることだろう。

どう見ても科学が進歩していないだろうこの世界で、それに見合った力を提示せずに、ただ消えろと願うのは、子供の所業だ。

しかも私は眷属といっても、元は異界の人間でしかない。

何も分かってない私が、この世界の仕組みに口出しするのは、少し差し出がましい気もする。

「あ、ここ見覚えが…」

心赴くままに歩いていると、見覚えのある部屋を見つけた。

窓から見える景色も、暗いけれど多分同じであるはずだ。

「…ダミアンいるかな」

昨日、アナクに連れられて来た、ダミアンがいた部屋。

カステヘルミという余計な者もいた部屋でもある。

とりあえずノックを試みるが、やはりというか応答はない。

ここがダミアンの私室であった場合、勝手に入るのはかなり気が引けるのだが、現在位置を把握したために、徐にドアノブに手をかけた。

なるたけ音をたてないようにしながら、そろそろとドアを開ける。中を覗き見るも、真っ暗で何も見えない。

カーテンが閉められているらしく、余計に真っ暗だ。

「…うう」

明かりの灯し方など、私は知らない。

いつも暗くなる少し前に風呂に入って、戻ってくる頃には明かり



が灯っているといった状態だったからだ。

これではこの部屋が昨日の部屋かどうかの確認も出来ない。

もうマーノンを呼んでしまおうかと思った時、廊下から部屋へと差し込んでいる光に、影ができた。

なんだろうと振り返ろうとした瞬間、ぬつと背後から現れた腕に驚いて身を竦めた隙に、ぐつと布を口と鼻に押し付けられる。

どろりとした甘い香りが鼻腔を攪り、危険だと思いながらも肺いっぱいに吸い込んでしまった。

噎せるような香りに、意識が霞んでいく。

最後に見たものは、無情にも凍てついた瞳だった。

## 29 拉致監禁は犯罪です

目が覚めて、自分が置かれた状況を確認する前に、じゃらりと鳴った鎖に目が行った。

「趣味悪っ」

無駄に装飾が施された足枷。

キラキラとした宝石もそうだが、金色の枷と鎖に吐き気がした。誰だ、この成金趣味を私に押し付けやがった馬鹿は。

最近周り見ないようにしてたからあんまり気にしなかったけど、基本質素が主義の私に対して、なんていう嫌がらせだ。

「せめて銀色にしろってんだ。くそっ、外れねえし……」

繋ぎ目も何もない足枷は外れそうもなく、鎖はいくら引つ張ろうとも耳障りな音を立てるだけ。

無駄な体力を使うのは面倒なので、一先ず放置だ。

当面の問題は、こっちだ。

「こことっ」

足枷の趣味も悪かったが、部屋の趣味も悪いな。

何だこの部屋。

金ぴかすぎて目が痛い。

モノトーンな部屋とは言わないから、アンティークで落ち着いた部屋の方が私は好きだ。

「いたるところに金って、絶対頭の悪そうな人間だよなあ。この部屋の持ち主」

独断と偏見にまみれた感想を述べながら、今の状況を考える。

右足についた趣味の悪い足枷と、これまた趣味の悪い部屋。

趣味の悪さは全開だし、足枷も気に食わないが、こんな金きらな

部屋にいるということは一応は高待遇のようだ。

それにしても、ここがどこだかは知らないが、どうも私は拉致られてしまったようだ。

王宮内で拉致とか、警備はいつたいどうなってるんだ。

ぐるりと見渡してみるが部屋の中に窓はなく、唯一の出入り口は扉のみ。

家具がベッドしかないところを見ると、ここは寝室なのか。

「面倒だからさっさと出たいけど、何で拉致られたのかは気になるしなあ」

出て行くのは簡単だ。

マーノンを呼べばいい。

…こう言つと万能っぽいなあ、マーノンって。

ヒーローって柄でもないのに、ヒーローっぽい。

「うっ。何このびらびらした服」

淡い水色のドレスに、知らず顔が歪む。

成金趣味どころか、スカートまで私に押し付けるとはいい度胸だ、この野郎！

これはあとでじっくりとお礼をしなければと、誰とも知らない人間に報復を決意した。

成金趣味はともかく、私にスカート着せやがる奴は、兄と加奈子さん以外は万死に値すると思うんだ。

「さて、と」

キングサイズだろうベッドから立ち上がる。

鎖はベッドの脚に繋がっていて、結構な長さが余っていた。

扉までの距離と鎖の長さを比べてみると、届きそうな感じだと思ったら、扉の前に来ててもまだ余裕があった。

扉は、まあ当然鍵がかかっている開きそうもなく、けれど、それで諦められないやむにやまれぬ事情が私にはあって、仕方なく扉を乱暴に叩いた。

「誰かー」

ドンドンと乱暴に叩き続けること数分。

手が赤くなりだした頃に、ガチャリと鍵が開く音がした。待ってましたとばかりに開くと、外開きのそれが、勢いよく何かにぶつかった。

「……おお？大丈夫？」

扉から顔を出すと、額を抑えて蹲る男が一人。

古典的なボケをどうもありがとう、と思いつつ、少し心配してみる。

いい音しましたからね。

ゴツって。

「大丈夫です……」

若干声震えてるけど、本当に大丈夫か？

あ、いや、他人の心配してる場合じゃなかった。

「大丈夫なら悪いんだけどさ。トイレどこ！？トイレ！」

尿意で目が覚めたのに、トイレ行けないなんて拷問だよ？拷問！この部屋にないんだから外出るしかないじゃん。

ってことでトイレプリーズ！

切羽詰まった私とは裏腹に、男はマイペースにゆったりとした動作で立ち上がり、「こちらです」と近くの扉を開けた。

「ありがと！」

駆け込んでみたものの、鎖が邪魔で扉が閉まるはずもなく。

「……」

扉の前で立つ男を恨めしげに睨む。

貞操観念は希薄だけど、それなりの羞恥心は私にだってありますからね。…多分。

「どっか行ってくれたり……」

「しませんよ」

「……っち」

少しは間を置けよ。

即答すんな、考えろよ。

それでも年端もいかない、花の女子高生が相手だというのに。

ぶちぶちと文句を垂れながらも、半開きの扉のまま用を足した。手を洗い、トイレから出る。

ふむ。

羞恥心も私から欠落していたようだ。

「ああ、すつきりした」

晴れ晴れとした気分ですう言っていると、扉の前で待っていた男があらさまに顔を顰めた。

私はそんな男のしかめっ面など気にすることなく、臆面もなくにつこりと笑ってやった。

「こんにちは。よくも拉致ってくれやがりましたね、師団長さん」  
気を失った時に見た瞳の持ち主は、近衛師団長のアナクだった。

## 29 拉致監禁は犯罪です（後書き）

犯人を刺激してはいけませんという言葉は、蓮の頭の中になかったり。

ぐうううつと、間抜けにも鳴った腹の虫に、丸一日何も食べてなかったことを思い出した。

「とりあえずご飯くださいな」

可愛らしく上目遣いでおねだりしたのに、アナクに嫌そうな顔された。

自分でも鳥肌立つくらいキモイと思ったので、その顔は正しい。少し待つように言われ、元の部屋へと逆戻りさせられた。ばつちり鍵もかけられた。

足枷でどこにも行けられないっていうのに、念入りなことだ。飯を持ってきてくれるなら、暴動は起こさないようにしようと、借りてきた猫のように大人しくベッドの上に座って待つ。

先ほど見た限りでは扉の外は赤絨毯の廊下で、トイレのあった扉と、その奥にもう一つ扉があった。

推測ではシャワー室だと思う。

廊下もトイレも、多分シャワー室も、部屋同様金ぴか。

拉致理由を聞いたらすぐさまマーノンを呼ぶことにした。だってここ、私の精神衛生にひつじょうによろしくない。

一日とは言わず、半日ここにいただけで体調崩すこと請け合いだ。そつえば、廊下も窓ないからわからなかったけど、気を失ってからどれくらい時間がたったんだろ。

拉致理由と一緒に聞いておこう。

「お待たせしました」

片手で持ったプレートに、カリカリのパンと温かそうなスープとウォンテをのせて、アナクが戻ってきた。

「ご飯だ！」

待ちに待った飯を、ベッドの上に置かれる。

お行儀よくいただきますをしてから、勢いよくがつついた。  
前日の夜から食べてないからね。

三食抜くのはさすがにきついんだよ。

「ふいー。ごちそうさまでした」

お腹いっぱいってわけではないけど、それなりに満たされたので満足しながらウオントを飲む。

「…んでさ。なんで私拉致られたの？」

食べ終わるのを扉に寄りかかりながら待っていたアナクが、私へと視線を向ける。

「理由教えてもらえませんか？」

合わさった視線は冷たくて、瞳の奥には嫌悪が見え隠れしている。  
この人が私を嫌う理由は何だろう。

今回のヴォルドのことだろうか。

それとも、私にはわからない何かか。

「命令に従った。それだけだ」

「命令？」

ヴォルドの、と考えるのが妥当だろう。

この人はヴォルドの近衛騎士だ。

けれど、私はヴォルドではないと判断した。

「ヴォルドの？」

一応確認はするけど。

「そうだ」

「ふうん」

ダウト。

だめだよ、見え見えの嘘は。

いや、だって…ねえ？

「アナクさん。ここ、教会の施設じゃありません？」

そこかしこに掘られてるの、教会の紋章ですよね。



「そうだな」

おう。

ずいぶんあっさりと肯定されてしまった。

もしかヤステヘルミとヴォルドはグルですか！？

いや…でもな。

契約云々抜きにしても、妊娠発覚した直後に拉致監禁は、ヴォルドしないと思うんだよなあ。

フィーリーシャがもうすぐやって来ることだって、知ってるはずだし。

そこまで頭が回らない馬鹿じゃない。

「…主犯格が誰かなのはこの際置いて、目的をお伺いしても？」

「俺にはわかりかねるんで、聞かれても答えられませんよ」

余裕の笑みが癪に障る。

私は駆け引きは得意じゃない。

喋るならちやきちやき喋れって思っちゃう人間なんだ。

「わかりました。ところで私が意識を失ってどれくらい経ちます？」

「半日ほど」

思っていたより時間が経ってなくて良かった。

こんなことで時間の浪費なんてしてる暇は、私にはないんだ。

「そうですか。教えてくださってありがとうございます」

うふふと、恥じらってみる。

キモイ通り越して吐き気がしてきた。

もういいや。

「マノレイ」

呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン。

何だっけ、このフレーズ。

今不意に頭をよぎった。

「レーンってば、女物着るようになったんだね」

私とアナクの間に現れて、真っ先に突っ込むことがそれが、マイン。

それよりアナク大丈夫か？

マーノンが現れた途端、自ら背中から扉に激突して。

おでこぶつけた時以上にいい音したなあ。

「好きで着てねえよ。着せられたんだよ。着たくねえんだよ。ていうか足枷より服に目が行くのか」

「足枷？…レーン、そういう趣味があつたの？」

真顔でなんてこと言いやがるんだ。

そういう趣味ってどういう趣味だよ、馬鹿マーノン。

あああ、答えなくていい。聞きたくない。

「これ外して」

右足を差し出してぶらぶらさせれば、ベッドのふちに腰掛けた私の前に膝まづく。

撫でるように右足を取り、足枷へと口付けを落とすと、パキッと音を立てて、足枷が割れた。

「その外し方は嫌がらせだな、テメエ」

「レーンの趣向に合わせたただだよ」

「死ぬ。私の性癖は至ってノーマルだ！」

左足で顔面蹴ってやろうとしたけれど、軽々と避けられる。ムカつきながらも、助けられたのでそれ以上は何もしない。

マーノンは咽喉を鳴らしながら、そんな私を抱き上げた。

アナクを見ると、扉に張り付いたまま体を硬直させ、こちらを凝視している。

「アナクさんが素直に教えてくださらなかったたので、これから犯人探しという名の無差別攻撃を開始します」

と言っても、攻撃対象者は一人で、攻撃するのはマーノンだ。今回は制限つけないからね。

ボロツボロにされればいいさ。

そしてね。

「実行犯の貴方には、後で最高のプレゼントを差し上げますね？」

向けられる嫌悪に覚えはないが、向ける嫌悪に覚えがありますか  
ら。

### 30 一応の探索（後書き）

犯人は誰だ。

…あの人だ！（え

呼ばれて飛び出てジャジャジャーン  
って誰か知ってる人います？

interval ?

子供。

眷属の少女との間に子供。

「ありえないだろう」

眷属ということは、少女は人間ではない。  
人の姿をした“神”と同じ異形だ。

いくら元々が異界の者であったとしても、眷属。

「子を成せないのではなかったのか？」

伝承でも、古文書を読んだわけでもない。

それは絶対の理として、あらゆる神々が今でも伝えている、常識だ。

子を成せない代わりに、精霊というものがあり、眷属が存在する。  
眷属の少女が子を成してくれないかと、ヴォルゲルドは以前、口にしたことがあった。

だがそれは、成せないと知っているからこそ口に出せたものであり、実際成すとは予想だにしていなかった。

妊娠の事実には、ヴォルゲルド以上に、少女も衝撃を受けていたようだったが。

部屋を追い出されてすぐ、ヴォルゲルドはダミアンに契約の誤りを説明し、喋ってはいないだろうが、念のために箝口令を敷くように指示を出した。

ベネレ・ラルシーラ

束縛契約を成そうとしていたことを知っているのは、ダミアンとアナクのみのはずだから、さほど心配する必要はないだろうと、ヴォルゲルドはそのまま執務へと戻った。

いつも通り執務を終え、いつものように食堂へと向かう。

晚餐に少女が来るとは思えなかったが、すでに習慣化してしまったことだ。

いつもの時間まで、ヴォルゲルドは待つつもりでいた。

少女が行方不明だという話をダミアンが持ってきてなければ。

「部屋に戻っていない…？」

「侍女からそのように報告が。陛下とのお話の後、誰かしら呼ばれた気配もないので、王宮内で道に迷われたかと」

「……捜させる」

王宮は広い。

眷属の少女は、アナクからの話で少々方向音痴であることが伺い知れていたので、迷子になっていたとしても驚きではない。

部屋を出る時に誰かしらに声を掛けておけばよかったかと、ヴォルゲルドは悔んだ。

あの後すぐに少女が部屋を出たのなら、優に3時間は王宮を彷徨っている計算だ。

どこを迷っているかは知らないが、早く見つけてやらなければと、搜索を急がせる。

しかし、少女は朝になっても見つからなかった。

「外に出た形跡は？」

「ありません」

目撃情報もなく、完全な手詰まりだ。

まさかあの少女が誰かしらに連れ去られた、などとはヴォルゲルドにとって信じられないので、意識的に頭の隅に追いやっている。

あのフィーリ・マノレイが傍にいて、少女が傷つけられる危険性は皆無だろう。

どうしたものかと黙考していると、ダミアンが言った。

「出て行かれた、ということはないのですか」

虚を衝かれ、ヴォルゲルドは眼を見開く。

「出て行く…？」

何を言われたのか、瞬時に理解できなかった。

「これほど捜しても見つからないのです。出て行かれたと思われるのが、適当ではないかと」

「それはない」

妊娠の事実が発覚し、5日後にはフィーリーシャが来ると言っていた。

第一、すぐにも出て行くのなら、王妃になるならなどあの少女が気にするとは思えない。

何のための箝口令か。

結局足止めかよと、追い出される時に愚痴っていたのも、ヴォルゲルドの耳にはしかと届いていた。

それで出て行くとは、どう考えてもない。

「…連れ去られたと考えるのが順当だな。隠し通路が使われた可能性もある。もう一度捜させる」

ただの迷子であつたならば、隠し通路などに入りこむわけがないからと、搜索範囲から外していた。

されど、連れ去られたとなれば、使われていないほうがおかしい。これだけ捜しての目撃情報のなさや痕跡のなさは、明らかに異常だ。

フィーリ・マノレイがあの子を守っているだろうことは、見ていればわかるが、実際どこまで守っているのかは定かではない。

少女と話しているのを見ていた感じでは、わざと野放しにして楽しんでいそうだ。

ヴォルゲルドが少女に手を出した時も何もなかったのは、多分そのためだろうと推察した。

「一体どこの馬鹿だ…」

ダミアンが出て行き一人になった部屋で、知らずばやく。

きちんとした警護を少女につけていなかったことが、この時ばかりは悔やまれた。

当初はつける予定だったのだが、フィーリ・マノレイが少女の前に事あるごとに現れるために、警護にならなかったのだ。

フィーリ・マノレイが少女を気にかけていることも見て取れたこともあり、少女と話し合っただけで警護をなくすことに決めた。

少女の傍にフィーリ・マノレイがいることは、披露目をしたことで知れ渡っている。

まさか自分以外で手を出す輩が現れるとは、ヴォルゲルドとて思っただけだった。

5日後にはフィーリーシャ神が来る。

それまでには何としても見つけ出さなければと、ヴォルゲルドは頭を抱えた。



i n t e r v a l    ? (後書き)

犯人から皇帝除外され、さて誰だ。

### 31 示唆

私の目前にはカステヘルミ。  
私の背後にはヴォルド。

……。

これどういう状況？

金だらけの目が痛い部屋から、落ち着いた自室へとマーノンの力で跳んで戻った。

神っていいな。

空間移動が簡単にできる能力、私も欲しい。

「よし。着替え完了！」

いつもの従者服を身に纏い、安心感に顔がだらしなく緩む。  
やっぱりスカートは気持ち悪い。

あれはもうホント、嫌悪感の塊でしかない。

あんなものの着て、何が楽しいのやら。

嫌いではあるものの、着ていたドレスが高級そうには変わらないので、皺にならないようにハンガーにかけていると、マーノンが言った。

「さつき攻撃するって言ってたけど、本当に無差別にやっちゃっていいの？」

生き生きとした輝かしい瞳をこちらに向けないでくださいな、マーノン。

もう肉食獣並みに爛々としてるね。

仕方ないと言えば仕方ないのだろうけど。

ゲネレ・ミシユ

主従誓約で、真っ先にフィーリーシャが禁じたのが、私の許可なく人を傷つけないこと。

それを許可されるんだから、久しぶりの獲物に舌舐めずりする気持ちもわからないでもない。

ないけど。

「無差別だけど、獲物は一人だから」

その一人以外に手を出したらダメですよ。

そんなことされでもしたら、困るの私なんだから。

「誰をやるの？」

「んつとねえ…。カステヘルミかなあ、やつぱ」

主犯がカステヘルミだとは思っていないが、八つ当たりには丁度いい人材だと思う。

主犯とは思ってないけど、疑わしいとは思っている。

疑わしきは罰せよ！だ。

それがなくても、私の自由を害そうとした、という大義名分もあるわけで。

「お好きに料理していいけど、死体にしても廃人にしても、ちゃんと残しておくこと！」

見世物だからね。

私の行動を制限することがどれだけ愚かか、見せつけてやらないと。

これでカステヘルミが主犯だったら、一挙両得だな。

「手を出していいのは一人で、生死は問わないけど、体は残しておく？」

「殺す場合はちゃんと判別できる程度の破損にして」

「…わかった」

獰猛な獣がチロリと赤い舌を覗かせながら笑う。

怖いとは思わなければ、体が微かに震えた。

マーノンが敵でなくて良かった。

「その前にヴォルドのとこ連れてって」

王宮内で拉致られたことに関しては、色々と言句を言ってやらねば気がすまない。

けれど、これから侍女を呼んだりなんなりは、はっきり言って面倒で、だからと言って一人のこの会いに行くことも出来なかった。迷子になるのが目に見えているから。

よって、マーノンに便利タクシーになってもらうことにした。

「しょうがないなあ」

許可が出たことがよほど嬉しいのか、しまりのない顔でマーノンが了承する。

おいでおいでと手招きされたのに、近寄りがたい印象を受けた。だってキショイ。

「レーン？」

気色悪さを耐えながらマーノンに近寄ると、ギュッと抱きつかれた。

ぬいぐるみよろしく、頭に頬ずりされる。

それを押しやろうとしている間に、周囲の景色は姿を変えていた。

「…お？」

マーノンから体を離し、顔を上げた途端、私は首をかしげてしまった。

カステヘルミが目の前で座っている。

何故だ。

私はヴォルドの元に行きたかったのに。

「レーン、後ろだよ。後ろ」

マーノンに言われ振り返ると、ヴォルドが立っていて。

「…あれ。ここ教会？」

どうしてわかったかって？

理由は単純明快。

拉致られた部屋と同じ金ぴかな部屋だったから。

「あー…」

マーノンに標的としてロツクオンされてるカステヘルミと、私が文句を垂れに来たヴォルドが同じ空間にいる。

大体にしてどうして一緒にいるんだこの二人。

話を聞こうにも、マーノンがいるために会話も出来ない。

ということ、マーノンにご退場願うことにした。

「マーノン、悪いんだけど話があるからどっか行つて。大丈夫、終わったら速攻で呼ぶから」

「……今更なし、なんて言わないなら別にいいけど」

そんなに甚振りたいのか。

私としても撤回する気はないので、大丈夫と返せば、またねと姿を消した。

「さて。ここで何をしてるのかお伺いしても？ヴォルド」

疑心の目を向けると、反対にヴォルドは安心したように表情を崩した。

「よかった。無事だったのだな」

そう言つて私に近づいてきたかと思えば、細く長いしなやかな指が頬に触れた。

軽く触れただけの指はすぐに離れ、ヴォルドは怒りを携えた射貫くような視線をカステヘルミへと向ける。

「まだ茶番を続けるつもりか。カステヘルミ」

首にナイフを押し当てられているかのような鋭さを持った声に、カステヘルミは悠然と微笑んで見せた。

「茶番は陛下のほうでしょうに」

タヌキの化かし合いを見に来たわけではないんだけどなあ……。

## 32 茶番

ぴりぴりとした空気に疎外感を感じながら、二人の顔を交互に見やる。

茶番って何の茶番だろう。

もしかして、拉致監禁の主犯がカステヘルミなのか？

カステヘルミはヴォルドだとか思ってた？

んで本当はカステヘルミが主犯でしたーとか。

やつすい三流な展開だなあ。

何でもいいけど、私も会話に参加してもいいんだろうか。

「ヴォルドー。ここでなにしてるのー？」

答えてもらっていない問いをもう一度問いかける。

口調がだらけたのは、なんだか一気にいろいろと面倒になったからだ。

三流展開を思い描いたら、ありきたりすぎて体から力抜けた。

「眷属殿の行方が知れなくなっただけで捜索したところ、教会への隠し通路が使われた痕跡が出てきた」

「なるほどそれでカステヘルミに詰問してたってわけですかそうですか因みに私が囚えられてたのは教会の施設のようでしたよええまあそんなことはどうでもよくてですね何で私王宮内で拉致られてんだよ王宮の警備どうなってんだ全くちゃんと仕事してんのかこの王宮の兵士は！」

まだ続きそうな三流展開を予想させるヴォルドの言葉を遮り、ノンブレスで言い切ったら咳き込んだ。

何とか落ち着くと、咳払いを一つこぼしてからヴォルドを見上げる。

きよとりとした顔で見下ろしてくるヴォルドの腕を取った。

この顔じゃ、言ったことの半分も理解しているか怪しいところだ。  
「これから二度も三度も同じことがあったら嫌なんでね。ちよつとそこらへんの話しましょうか？」

「いや、眷属殿、それより」

「お待ちください、レーン様！」

ヴォルドを引っ張って、部屋の扉まで行こうとした私の足を止めたのは、ヴォルドの声じゃなくて、カステヘルミの声だった。

全力で聞こえない振りをしてもよかったけれど、しばしのお情けということで振り返ってみる。

「何か？」

「わたくしではありません！陛下が貴女様を捕らえようとなさったのです！これは濡れ衣ですわー！！」

「それで？」

その根拠は何なのだろう。

確かにヴォルドは私を捕えようとはしたけど、それは契約であつて、拉致監禁ではない。

それでもカステヘルミが、ヴォルドを主犯として豪語するのには、何かわけがあるのだろうか。

あろうがなかるうが、もうどうだっていいんだけど。

「それで？」

じつと、合わせた視線を外さずに、同じ問いを重複する。

そんな私に、カステヘルミが俄かに怯んだ。

「それで、だから何ですか。仮にヴォルドが主犯として、それで？あなたには何も関係ないとしても？そんなことあるはずがないでしょう？だって私が囚われたのは教会の施設。貴女の管理下ではありませんか。ほら、関係などないなんて嘘でしょう？」

「それはっ……！」

「私はね。主犯が誰か、なんて実際どうだっていいんですよ」

主犯が誰かはどうでもいい。

気にしていたとすれば、無差別攻撃など私はしない。

「私の自由を害する全てに、報復を。私の行動を制限するんですから、それくらいの対価は当たり前でしょう？もちろん、ヴォルドからも対価を頂きます。ですから、貴女にも報復を」

だから、見せしめに死んでください。

惨めだったらしく泣き叫んで、無残な死に方を晒せばいい。

神官である貴女が死ねば、私に手を出すことがどれだけ愚かか知れ渡る。

主犯が他にいようと、その惨たらしい死に方に、恐れ慄くことだろう。

次は自分かと身を縮めて。

「ね？」

につこりと笑ってやった途端、カステヘルミが変貌した。

ぶわりと、空気がカステヘルミを中心に濃く渦巻く。

顔を怒りが羞恥か、真っ赤にさせて、般若のように私を睨み据えた。

シュズ・ペリアード・ラゼッタ

「全ては我の意のままに！」

カステヘルミの言葉に呼応してか、私を取り巻く空気が水へと変換された。

エラ呼吸ができるわけでもない私は、息苦しさに水を掻く。

しくじった。

あれほど嫌っていたのに、すっかりと抜け落ちていた。

神官であるなら、カステヘルミがそうだとわかってよかったのに。

クランドローメルズ

最上級精霊使役。

神官の中にしかない、精霊を喰らい、その力を自らのものとした者たち。

「レーン！」

焦ったような声が、水を通して鈍く聞こえる。

その呼び方にマーンンかと思えば、ヴォルドだった。



「やめろ、カステヘルミ！この者はフィーリーシャ神の眷属だぞ！」

「このように下劣な者が！？これはきつと偽物ですわ！」

「何を馬鹿なことを！」

つちと舌打ちして、ヴォルドは腰にさげた剣を掴んだ。

錯乱したカステヘルミへと振り上げたその剣は、けれど、カステヘルミを斬りつける前に止められた。

「……」

「ダメだよ。これは僕の獲物だからね」

掴んだヴォルドの腕を離し、マーンが笑う。

ザッと、水が重力に従って床に落ち、私は床へと崩れ落ちた。

「皇帝、レーンを連れて部屋から出て行ってくれるかな」

その命令に、ヴォルドは静かに従った。

床に倒れたまま咳き込み続ける私を抱き上げ、部屋の外へと足を向ける。

扉が閉まる直前、私が部屋の中で目にしたものは、恐怖で顔を歪ませ、泣き叫ぶカステヘルミの姿だった。

## 32 茶番（後書き）

皇帝が初めて蓮呼んだ。

### 33 眺望

閉ざされた扉は、部屋の中の惨劇の音を遮ってはくれなかった。聞こえてくる音に背を向けたまま、ヴォルドは歩き続ける。

音が聞こえなくなっても、ヴォルドの顔つきが険しいままだったが、私はそれに気づかない振りをして、ヴォルドの腕に水に濡れて重たい体を預けた。

建物の外に出ると、ヴォルドの護衛だろう騎士が数人待っていた。「下ろして」

肩を叩いて催促すれば、ヴォルドは壊れ物を扱うようにゆっくりと私を下ろす。

「これを着ている」

外の空気は濡れた私には肌寒く、ふるりと震えていると、頭からヴォルドが着ていた上着を掛けられた。

身長と体格の差で、ぶかぶかどころの話ではない。

丈だけでいえばロングコート状態で酷く不格好だが、着ていると温かったなので、素直に借りておいた。

「陛下」

呼ばれて頷くと、こちらだと私の腕をとって歩き出す。

教会の外観は、中の金ぴかが嘘のように古く威厳がある真っ白な建物だった。

内側と外側ではあまりに印象が違って、言葉も出ない。

「眷属殿」

呼ばれたのはわかるのに、違和感を覚えて眉を顰めた。

「レーンでいい」

「…いや」

「さっきはレーンって呼んだ。レーンでいい」

強くそう言えば、ヴォルドは困ったように眼を泳がせ、渋々と頷いた。

呼びたくなかったのなら、ずっと貫き通せばよかったのに、この男は私を呼んだ。

それをなかったことにするには、何故か腹の虫が治まらなくて、呼び方を改めさせる。

「レーン殿」

「殿もいない」

「……わかった。レーン、高いところは苦手か？」

根競べをする気はないらしく、すぐに折れたヴォルドの言葉に、私は顔が引きつるのがわかった。

高い、ところ…？

「なんで？」

すつとヴォルドが指差した先。

飴色をした美しい生き物が数匹、広場のような場所で鎮座していた。

「トレバランに乗るからだ」

「トレバ、ラン…？」

ドラゴンかと思ったが、どうやら違うらしい。

ヴォルドの背後に隠れるように近付いてみると、全く違うことが分かった。

ふわふわの毛並みをした、狐のような顔と耳の翼を持つ獣。

大きさは象ほどだろうか。

手を伸ばして擦り寄ってくるところを見ると、人懐っこそうだが可愛くて、動物としては愛嬌がある。

あるが…。

「これに、乗るの？」

「ああ」

…乗りたくない。

そう思ったものの、便利タクシーなマーノンも呼べない今、交通手段は歩くかこれに乗るかだ。

帰り道もわからない私が、歩いて帰れるはずもない。

しかし、翼があるということは飛ぶということで、体は自然と竦んだ。

「……二人乗り？」

「私と一緒にだが…嫌か？」

「ぜひお願いします」

ぶんぶんと首を横に振りお願いする。

一人で乗れとか言われたら、泣き叫んでちびりそうだ。

今の時点ですでに涙目だけれど。

取り付けられている鞍に、先に乗ったヴォルドに引っ張り上げられて、私はヴォルドの前に座らされた。

「戻るぞ！」

ヴォルドの号令で、全てのトレバランが翼を広げて舞いあがった。腰にまわされたヴォルドの腕で不安定ではないにしても、拭えない恐怖に目をきつく瞑る。

顔を煽る風に、回されている腕を強く握った。

「レーン、目を」

耳元で聞こえてきた声に、そろりと左目だけをうつすらと開ける。見えた景色に、恐怖も忘れて眼を見開いた。

「…ふあっ」

空中に浮かぶ、城。

下に広がる大地は緑で覆われ、正しく城下には大きな街が広がっている。

遠くに望めるのは雪で白く輝く山々。

その少し手前には広がるのは、色からして砂漠か荒野か。

背後を覗き見れば、教会も浮いていた。

「外から見るのは初めてか」

ひとつ頷いて前に向き直ると、じっとその景色に見入った。

綺麗。

幻想的な景観は、ただその一言に尽きた。

「すごく……すごく綺麗」

馬鹿の一つ覚えみたいに「綺麗」を繰り返して、ヴォルドの顔を  
見上げて笑う。

そんな私に、ヴォルドも目元を緩めて小さく笑った。

### 33 眺望（後書き）

… あつれ？

無自覚のイチャコラになっちゃった。  
なーぜーだー。

### 34 クランドローメルズ

高揚した気分は、部屋に戻ってきてすぐ一気に萎えた。

自分で着替えを取り出そうと、クローゼットに手を伸ばして見つけた、淡い水色のドレス。

「形も残らないだろうな」

残せとは言ったが、マーンがそれを守るとは思えなかった。それと見えなかったけれど、あれは随分と激昂していた様子だった。

多分、カステヘルミが最上級精霊使役だとわかったせいだろう。  
クランドローメルズ  
タオルで体を拭き、新しい服に着替える。

脱いだ服を呼んでおいた侍女に渡し、待たせているヴォルドの元へと向かう。

向かう先はヴォルドの部屋だ。

仕事があるというヴォルドの言葉を見殺し、着替えてくるから待つてると命令系でお願いをしてきたから、多分待つているはずだ。色々と愚痴りに行ったのに、言いたいことの三分の一も言えてない状態で逃がすか。

「お待たせー」

ノックをしてドアを開けると、ヴォルドが着替えていた。

「……ごめんなさい？」

返事を待つてから開けましょう。基本ですね、ごめんなさい。エリックに着替えを手伝わせながら、ヴォルドは不思議そうにこちらを見る。

「シャワーは浴びてこなかったのか」

「え、必要ないでしょ。水に濡れただけだし」



「冷えていただろう。体を温めたほうがいいと思うが」

心配、されているんだろうなってことはわかるんだけど…。  
なんだろう、むず痒い。

「大丈夫だから気にしないで。あ、エリック。紅茶お願い」

ヴォルドが着替えを終え、片づけをしているエリックに、紅茶を頼む。

「すぐにお淹れしますね」

快く承諾してくれたエリックに「ありがとう」と返して、ソファ  
ーに腰掛けた。

ヴォルドも向かいに置かれたソファーに腰掛ける。

エリックは紅茶を淹れると、すぐに部屋を出て行った。

「さて。何から話そうか」

温かな湯気を立ち昇らせる紅茶を冷ましながら、ちらりとヴォル  
ドを見ると、徐に口を開いた。

「カステヘルミは…」

「マーノンが生かすとは思えない。形すら残るかもわからないし」

攻撃の許可を出しただけで、生死の有無はマーノンのに一任して  
いるが、死は確実だろう。

「それは…レーンに手を出したからか」

「違う違う。カステヘルミが最上級精霊使役だから」

「クランドローメルズ…？」

「カステヘルミが私に対してつかった力のこと。そうか…クランドルーム精霊使役  
自体が神用語か」

一般的には魔術師だものね。

魔術師イコール精霊使役の図式が出来上がってるもんだから、一  
般流通してるのかと思ってたけど違ったようだ。

教会用語：ではなさそうだから、マーノンたち神の間で使われる  
言葉だと思ったほうがよさそうだ。

「あの力は神力ではないのか」

神力！

神官ですからね、神力っていうのもわかるけど。

思わず紅茶噴きそうになっちゃったよ。

「神の力って意味では合ってるんじゃない？」

「意味が…」

理解できなくて当然ですよ。

最上級精霊使役については、教会内じゃ絶対極秘だろうし。

例えば皇帝でも、その力の入手経路なぞ、調べようとしてもしない限り全く知らなくて当然だ。

神への信仰心が厚いのであれば、想像すら堪え難いことだろう。

「ヴォルドはあの力の入手方法をご存じですか？」

「いや…。神の宣託を受け、手に入るとだけ」

「精霊をね、食べるんです。それも一度や二度じゃない。年に二、三度、力を維持するなら必ず」

なんて卑しくて、浅ましい力なんでしょうね？

そう嗤えば、ヴォルドは顔を真っ青にして口もとを抑えた。

私はこの話をマーンノンから聞いた時、血肉を啜る人間を想像してしまっただけ吐いた。

人間の浅ましさには呆れ果てて、神官への嫌悪を深めた。

「魔術師は、その力を使う都度、精霊を喚び寄せるとか」

「ああ。稀に喚び寄せた精霊をそのまま手元に置く者もいるな」

「必ず傍に在るはずの精霊を使わずに、それと同等の力を扱える。

魔術師である精霊使役と神力を持つ神官である最上級精霊使役との違いは、ただそれだけです。でも、結構な差だとは思いませんか？」

「……」

両手で顔を覆い、ヴォルドは俯いた。

それを横目に丁度よく冷めた紅茶に口をつける。

甘酸っぱい味わいが口いっぱいに広がるのを楽しみながら、思考は拉致監禁の主犯について考え始める。

どうでもいいと言ったが、知る必要がないとは思っていない。知れるものなら知っておいた方が、今後の役にも立つだろう。

この国とは、出て行つてはいおさらばという訳にもいかないのだから。

根拠は薄いが、主犯はカステヘルミではないだろう。

向かい合った様子では、カステヘルミは本気でヴォルドを主犯とみていたように感じられた。

カステヘルミは、ヴォルドが私を捕えようとしたと言っていた。

私はこれをあの場では、拉致監禁のほうに当て嵌めた。

だが、実際は拉致監禁に加え契約のことも指していたら？

アナクがヴォルドの命令としていた拉致監禁。

それと同じ認識をカステヘルミがしていたとしたら。

「レーン」

名を呼ばれ、沈んだ思考が浮上した。

「一つ、聞かせてください」

「何だ」

浮かんだ、一つの仮定。

それを少しでも裏付けられるとしたら。

「契約に関して、箝口令を敷いた時点でどこまで知れ渡っていたんですか」

### 35 贈り物と共犯

なんだか馬鹿馬鹿しくなつて、頭を掻いた。

空回りが十八番なのか、私。

この世界来るまで知らなかったよ。

まあ、マーンノンの溜まりに溜まったストレス発散でただけでも、今回は良しとする。

どう足掻いたところで、空回りを運命付けられているようだ。

「ふむ…。ヴォルド、私を拉致したのはカステヘルミってことで、処理よろしく」

「それは、他に犯人がいるということか？」

「そこはまるつと無視してくれて大丈夫。その方が私も都合がいいし。ヴォルドにとってもその方が都合がいいでしょ。最上級精霊使<sup>クランドローメ</sup>役<sup>ルズ</sup>のことは表沙汰にしないほうがいいだろうし」

明るみに出でもしたら、すごいことになりそうだ。

面倒は絶対被りたくないの、ひた隠しにしておいてもらおう。

教会と事を起こすなら、私の知らないところでひっそりとお願ひしたい。

私を巻き込もうなんてしたら言語道断でぶっ殺してやる。

「そついで、よろしく」

よろしくされたくないといった顔のヴォルドに、にこやかに手を振りながら部屋を出た。

本当は色々と思つてやりたかったのだが、最上級精霊使役の話がよほどシヨックだったのか、未だに顔色が青いヴォルドを見て、少し可哀想になったのでやめておく。

その分この後いろいろ働いてもらおう。

諸々の事後処理とか。

スキップしそうな勢いで、私は自室へと小走りで戻った。

「さあっとと」

最高のプレゼントを用意しなくては。

これから作るものにうきうきしながら、侍女を呼んだ。

「ただいま、レーン」

マーノンが帰ってきたのは、空も大分暗くなっただ頃だった。

そももう清々しいほど爽やかな笑顔を携えて。

やり遂げた感いっぱいだ。

「おかえり、マーノン。その様子だと、形も残ってなさそうだね」

「あははは。ごめんね？」

仕方ないとわかっていているから、文句は言わない。

言わないけど、どの程度の形の残さなさなのが気になる。

肉塊か、それともそれすら残っていないか…。

「ああ、死んだってことはわかる程度に残してきたよ」

「…それでいいけどねえ」

乾いた笑いしか出てこないよ、もう…。

想像はしないようにしよう。

頭から排除で。

「ね、ちよつとそこ立ってくれる？」

マーノンを目の前に立たせ、持っていた物を合わせて見る。

「…これでいいか。」

「これ、どうしたの？」

「作った。って言っても、元々あるもの改良しただけだから、全部じゃないけど」

「ふうん」

「よし、完成。マーノン、戻ってきてそうそう悪いけど、連れて行ってもらいたいところがあるの。いい？」

出来上がったものを丁寧にお手製のプレゼント袋に入れ、リボンで口を縛る。

マーノンを見上げれば、了承の返事が返ってきた。

「行き先は？」

「アナクのところ」

プレゼントを抱え直し、マーノンに抱きつく。

するりとすり替わる部屋の景色に、今日だけで3度目だなとマーノンを頼る率が高くなっていることに気付いた。

こうして依存していくなんてことがないようにしなければ。

「あ、ダミアンもいる。ラッキー」

アナクの前へとやってきたかと思えば、振り返った先にダミアンも発見した。

この人にも用があるんだよね。

どうやら二人でお茶をしながらお話していたようだ。

「マーノン、ありがと」

「いえいえ。じゃあ、僕は行くね？」

額に軽く口付けを落としてから、マーノンはひらりと姿を消した。さて。

「アナクさん、これプレゼントです。あ、開けるのはまだダメですよ？」

とりあえず手元の包みをアナクに押し付けて、二人の間にある席に座る。

にこにこと上機嫌な私に、アナクは怪訝そうだ。

「レーン様、何か…？」

こちらの様子を窺うように、ダミアンが訊ねてきた。

「お聞きしたいことがございましてね？ええ、まあ、お二人ともよく身に覚えがございますでしょう？」

「…どういうことでしょう？」

「あら、すつとぼけちゃいます？ま、それでも全然構いやしないんですけどね、私は。ああ、アナクさんは言い逃れできませんからね。

彼にお聞きしますか。マーノンにでも頼んで」

それがいいですか？と、小首を傾げてアナクを見た。

ざっと二人の顔から血の気が引いたのは、マーノンの名のせいか、それともカステヘルミの惨劇を知っているのか。

「その様子じゃ、ダミアンも共犯ですか」

まさか、とは思っていたけれど。

箱口令を敷いた時点で、ヴォルドが知る限りでは契約に関して知っていたのは、二人。

アナクとダミアン。

拉致監禁に関わっていたアナク、そしてカステヘルミ。

カステヘルミが契約のことを知っていたのなら、二人の内どちらかが情報を流したことになる。

アナクが情報を流したと考えるのが順当ではあるが、この様子ではダミアンが流したと考えるのもいいだろう。

「ちゃきちゃき喋ってもらいましょうか。弁解は無用です。目的と動機のみで結構。貴方方をどうするかは、その後でお決めしましょう？」

### 35 贈り物と共犯（後書き）

蓮は結構短絡的な子



interval ?

「陛下」

「……マルガか。何かあったか」

眷属の少女を探すために、後回しにしていた書類にヴォルゲルドが目を通してると、入ってきた騎士姿の男に顔を上げた。

マルガ・カヤラ。

表向き、近衛師団副師団長の役職にあるが、本来は影グリーデと呼ばれる皇帝直属の諜報部隊の人間だ。

影の名の通り、その存在を知るのは皇帝と影である当人たちだけだ。

「お考えの通りかと」

「……そうか」

「宰相閣下におきましては、大司教の排除をお考えだったのでしよう。引いては教会そのものの排除もお考えかと」

尚悪いと、ギリツと奥歯を噛み締める。

これが世の明るみには出ないだろうことは知っているが、だからと言って見過ごしていいことではない。

けれど、手を下すのは自分でもないことをヴォルゲルドは理解していた。

「誘拐に関しての主犯はカステヘルミとして処理するよう要求されている。実行犯は適当にでっちあげておけ」

「……よろしので？」

「カステヘルミは最早死んだ。事を荒立てても意味がない」

カステヘルミの死も、正当な理由付けがされている。

神から見た、正当な理由と、人間から見た、正当な理由。

どちらもそろっっているのだから、その死に宮廷側も教会側も騒ぐことなどないだろう。

そこに罪が一つ増えたところで。

「罪を被せるのはわかりましたが、彼らに関しては如何なさるおつもりで？ 放置されるとでも？」

「アレらの処罰はレーン自身が決めてくれよう。私たちが手出しする必要はない。手を出すなと牽制もされたからな。アレが教会を嫌う理由も、先のレーンとの会話で分かった。今回は見物させてもらおう」

横槍を入れようものなら、少女の怒りの矛先がこちらに向かないとも限らない。

「では眷属様の処断にお任せしますが…、手緩かつたら影で処罰しても？」

マルガがダミアンとアナクに含む所があることを知っているヴォルゲルドは、「レーンに許可を取りつけられたらな」とだけ言っておいた。

教会への隠し通路が使われた痕跡がある。

その情報をヴォルゲルドに齎したのは、ダミアンに隠し通路の搜索を命じたすぐ後でやってきたマルガだった。

もう一つ気になる情報を持ってきたマルガに、ヴォルゲルドはその場を任せて、護衛の騎士を引き連れ教会へと急いだ。

先に少女の救出をと思わなかったのは、少女に対しこれ以上の手出しはされないという確信があったためだ。

少女が連れ去られたのは、偏にヴォルゲルドから少女を守るために他ならないのだから。

「久しいな。カティ」

「お久しぶりですわ、陛下」

にこやかに笑うカステヘルミに、逆にヴォルゲルドの顔は顰められる。

幼いころから知っている仲とはいえど、嫌悪の対象でしかない女。見ているだけで虫唾が走る。

「余計な与太話は無しだ。単刀直入に聞こう。……ダミアンと何を取引した」

「何のことでございましょう」

「ダミアン……いや、アナクでもいい。答える。何を取引した」

大凡の見当はヴォルゲルドにもついていた。

ダミアンらは、契約の話をネタにカステヘルミに話を持ちかけたはずだ。

大罪を犯したヴォルゲルドを皇位から失脚させようと。

「答えられないか？ ……カティーリア・ゴルゾーラ・カステヘルミ・コフィスタ」

「……」

息を呑んだカステヘルミは、ぐっと座っている椅子の肘掛けを握りしめた。

真名を呼んだことで、回答への強制力が生まれ、カステヘルミの口が本人の意思とは関係なく動こうとした、瞬間だった。

目の前に現れた姿に、ヴォルゲルドは軽く舌打ちをしたい気分にかられた。

眷属の少女とフィーリ・マノレイ。

その後は、ヴォルゲルドにとっては散々だった。

ダミアンとアナクどちらにしろ、カステヘルミと繋がっていたという自供が欲しかったのだ。

カステヘルミに対しても、コフィスタ教会大司教を易々と退けることも適わないために、面倒を避けるために生きてもらわねばならなかった。

少女の命を狙い、クランドローメルス最上級精霊使役であつた彼女に、弁明の余地も

なくなってしまったのだが。

最上級精霊使役の真実には、ヴォルゲルドも度肝を抜かれた。精霊を食べる。

それは神を食すと同意義であることをこの大陸に住む誰もが知っている。

想像するだけでおぞましかった。

これは知らずにいたかったと、意気阻喪としてみると、少女は何か考え込んでいる様子なのに気付いた。

「レーン」

強要された呼び名で呼びかければ、少女は茫然とした様子で顔を上げる。

「一つ、聞かせてください」

「何だ」

「契約に関して、箝口令を敷いた時点でどこまで知れ渡っていたんですか」

その問いに、少女がどうでもいいと言っていた主犯が誰か、気付いたのだと悟った。

知ってしまったえば、自らで制裁を加える気なのだろう。

手を出すなという遠回しな牽制をされ、全ての事後処理を軽い口調で押し付けられた。

始めから、少女に事後処理をやらせる気もなかったけれど。

目を輝かせて部屋を出て行った少女に、ヴォルゲルドは深く息を吐いた。

i n t e r v a l   ? (後書き)

前回の話で、皇帝無能？って聞かれた。

無能？有能だ。多分。

…うん、多分。

### 36 推理ゲームと解答

「一つね、気になることがあるんです」

なかなか口を割ろうとしない二人を前に、私は両手を組んでテーブルに肘をつく。

「契約が今回に関する全ての起因だとすれば、貴方方が私をヴォルドから…王宮から隔離したかったのはわかるんです。本来望んでいた契約が成されず、もう一度契約を…なんてヴォルドが言い出した事ですからね。王宮の権力が届きにくい場所は教会なんでしょう。一度は私をそこに送ろうとなさっていたみたいですし、その推測はできました。今回の強硬手段は、私が教会を嫌っているような発言をあの時したからでしょう?」

「そこまでわかっていらして、何が気になるのですか」

「そうですね…。強いて言えば、貴方方がヴォルドの味方であるか否か、でしょうか」

味方とは言えないだろう。

敵、というには、何か引つかかるものを感じた。

もつと何か、別の目的があるような、そんな感じだ。

両者共にそうなのかは知らないが。

「何が聞きたいんだっ」

噛みつくようなアナクに、おやおやと頬杖をついた。

「何って、最初に言ったじゃないですか。貴方方の目的と動機ですよ。ああ、勘違いなさらないでくださいね。私が知りたいの全てです。拉致監禁と一緒に何を企んでいたのか…もですよ?」

私を保護するという名目で拉致監禁し、それを利用して何かを企んでいた。

ふむ。

口に出してなんだか一気に現実味増した感じだ。思いつきでも口に出して見るものだな。

「企む……？」

本当に覚えがないのだろう。

純粹に浮かんだ困惑の表情で、アナクは私とダミアンを見比べた。この人が私に向けた嫌悪が、ヴォルドを狂わしたから、とかだったら笑える。

当たらずも遠からずな気もするけど。

あ、そうするとこの人の動機はこれになるのか？

……私じゃなくてマーンソンに報復すればいいのに、畜生め。

反してダミアンはいえ、堅い面持ちで私を見ていたのその相好を崩した。

楽しむような目で、口もとを歪めている。

「よく、お解かりになりましたね」

「いえ、勘違っていかただの思いつきなんですけどね」

買い被られても困るので、真っ先に訂正しておいた。

私そこまで勘の働く人間じゃないし、頭もよくないですからね。

はつきり言つて、結論急いで間違える馬鹿ですから、私は。

「それで？何が目的だったんですか」

私を利用したんだから、馬鹿馬鹿しい理由だったら半殺しになればいい。

死なれると困るから半殺しで。

「見当はついてるんじゃないんですか？」

「そこはほら、当人の口から聞かないと」

私に喋らそうなんて、楽はさせません。

因みに、見当なんて全くついてませんから。

喋りたくても喋れない。

「レーン様もご存じでしょう？教会の奥に潜むものを」

「……なるほど」

ダミアンは教会関係者だったのか。

「おぞましく醜悪なものをいつだって消したいと望んでいました。いつだって……」

望んでいたのだろう。

頭わにされた嫌悪は、以前見たマーノンのそれと同一だった。

何を、ダミアンは知ったのだろう。

クランドローメルズ  
最上級精霊使役のことか、それとも全く別のものか。

更におぞましいモノがあったとしても、不思議ではない。

「それでどうして私を拉致監禁？」

「レーン様のお言葉の通りですよ。陛下にこれ以上罪を犯してほしくなかった。それと同時に、考えたんですよ。貴女を拐した罪をカステヘルミに擦り付ければ、フィーリ・マノレイが殺してくれるのではないかと」

「……目論見通りで喜ばしいですね」

この人の掌で踊らせられていたのかと思うと悔しいが、利害の一致があつたのだから良いということにしておこう。

アナクを見やれば、啞然とした顔でダミアンを見ていた。

全く知らなかったのか。

お目出度い奴……。

「そのおぞましいのが表に出て、教会の地位が失墜なんてなったら一石二鳥だな、なんてことだとは思いますが、そういうことにはならないのでご了承くださいませね？」

「それは勿論」

落ち着き払ったダミアンの笑みに、なんだかなあと脱力した。

この人、第一印象のまんま絶対腹黒そうだ。

一国の宰相閣下だから当然なのかな、これは。

「ああ、そうだ」

あることを思い出し、アナクへと顔を向ける。

「アナクさん、プレゼント開けてくれて構いませんよ？」  
てか開ける。



不吉な予感でも感じ取ったか、アナクはひきつった顔で手元の包を見た。

それなりの大きさがあるそれは、私お手製だ。

喜びこそすれ、突っ返すなんざしたら、男の急所を狙ってやろう。

「どうぞ、開けてくださいな？」

可愛らしく上目遣いのおねだりならぬ、睨みを利かせてやった。  
顔真っ青だね、アナク。

### 36 推理ゲームと解答（後書き）

プレゼントの中身は次回...！



ました？」

監禁部屋から出て行く時に宣言した、プレゼント。

あの時誰が何のためになんてことはわからなかったのも、私にドレスを着せたのを暫定的にアナクと認定し、その報復をと思ったのだ。

ただ、カステヘルミのように殺す気はなかったのも、社会的地位を抹消する方向で考えた。

「アナクさんはその姿で明日一日お過ごしくださいね。本当は写真撮ってばら撒きたい気分なんですけど、ここには写真なんて便利なものないから、それで我慢してあげます」

変態女装ヤローの称号を手にするがいいさ。

ここまで似合っちゃってると、逆に誰かに惚れられたりしたら楽しそうだから尚良し！

至極楽しそうな私に、アナクが逆らえる権限などあるはずもない。今日はこれくらいにしてやるが、明日が楽しみだ。

「着替えてきていいですよ。本当に着てもらわなきゃいけないのは明日なんで」

奥歯を噛み締めて睨みつけてくるアナクに、着替えの許可を出してやる。

屈辱にまみれた顔が、最高に気持ちいいってことをこの男は知らないのだろうか。

相手を屈服させるということは、快楽に近いものを与えてくれる。マーノンほどではないにしろ、私も結構サドっ気が強いんだな。

「明日が楽しみだなあ。あ、ダミアンさんをどうするかは明日決めますね！」

部屋から出て行くアナクの背に手を振って、ダミアンを振り返る。未だ笑いがおさまらないのか、口を抑えて笑っているダミアンは、震えながら頷いた。

そんなにツボったのか。

「大丈夫？」

「ええ…、すみません。こんなに笑ったのは久しぶりです」

「喜んでいただけたならいいんですけどねえ」

何がそこまでツボったのが気になるどころだが。

まあ、人のこと笑ってる暇ないんだって、…わかってても平然としてそうだな、この人。

アナクと同じ目にあつたとしても、普通に似合いますか？とか聞いてきそう。

「ダミアンさんは今回のことで、辞職しようなんて考えてたんですか？」

ダミアンに淹れてもらった紅茶を飲みながら、テーブルの上のお菓子を摘む。

む。これ苦い…。

「勿論です」

「辞めさせないので、頑張ってください」

「…は？」

は？って何だ。

当たり前じゃないか。

「今回の主犯はカステヘルミです。私を拐かしたのは教会の人間。わかります？貴方がやめる必要、どこにもないですよ」

「ですが…」

「なのでこれまで以上に頑張ってくださいね？この国と皇帝のために」

皇帝のために。

ヴォルドのために、これから生まれる子供のために。

とても優秀な逸材であることは、ヴォルドから聞いて知っている。それを失くすのは惜しいし、弱みを握れたのだ、これから尚頑張ってくれることだろう。

「ついでに私が皇妃にならなくていいように、手回しお願いしますね」

こっちのが、私にとっては切実な願いだった。

まだ生まれても来てない我が子より、自分の方が大事だからね。  
ダミアンの両手をぎゅっと握ってお願いする。

「…そんなに嫌ですか」

「嫌って言うか…」

真摯な瞳に、目を合わせられなくて逸らす。

あれ…なんだ。

なんでこんなに罪悪感を感じなければならないんだ。

「あのですね。私、ここにずっといる気は皆無なんですよ」

兄を助けるために、ここを出て行くのは必須ですからね。

大陸だって移動しなければならいだろうし。

そう思っの言葉をどう歪曲したのか、ダミアンは変なことを言  
い出した。

「期間限定ならいいということでしょうか」

「…なんでそうなるの」

そもそもなる気ないって。

そこを理解しようよ、ダミアン。

てか期間限定って、私は季節ものの菓子かなんかか？

「いえ、レーン様を逃したら、陛下は婚期を逃すのではと思いまし  
て」

ヴォルドのご心配ですか。

いや、まあ逃しそうだと思うけど。

思うどころか絶対逃しそうだけど！

「ごめんなさい」

私に求められても困るんです。

### 38 懷疑に揺れる

気分は最高潮で、目の前の料理も美味しいとなれば、至福だ。  
今何が起きてても片手で片づけちゃいそうな無敵気分。

気分のみなので、そんなことは絶対あり得ないのだが、まあ要は小さな幸せを噛み締めているということだ。

「うまあ……」

「……レーン、今何と言った？」

「ん？うまあって」

「違う。その前だ」

その前と言われて、少し考えてから思い出した。

「明日女の人がヴォルドの前に現れても、気にしないでねって言った」

女の人とは、当然アナクのことだ。

男だとすぐ気付くとは思うが、女装男を前にヴォルドがどう反応するかがわからない。

とりあえず流血沙汰は避けたい。

「レーンの知り合いでも来るのか？」

「……来るってわけじゃないけど、うん、まあそんなとこ」

「極力視界に入れないようにする」

その返答はどうかと思うが、大丈夫ということだろうか。

というより、この王宮の外にいる私の知り合いに、神様以外の知り合いはいないことをヴォルドは知らない。

もし天上神フイリだったら、視界に入れる入れない以前の問題だ。

「そんなに嫌い？」

「生理的に受け付けられない。見るだけで吐き気がする」

舌打ちしそうな不機嫌さに、明日は大丈夫だろうかと不安になった。

アナクが血まみれにならないように祈っておこう。

「あ、そう」

こんな様子ではいつまでたっても皇妃なんて出来っこないだろう。ダミアンが懸念するのもわかる気がする。

というか、見るだけで吐き気がするのに、私は大丈夫とかその定義は何だと問い詰めたい。

そこにどんな意味合いがあるのか、もの凄く興味がある。

契約によるものが、それとも、ヴォルド自身の中にある何かなのか。

真面目な話。

皇妃になるならない以前の問題に、私はヴォルドに対して抱いている感情を測りかねていた。

好意はある。

でも恋愛感情ではない。

その、はずだ。

「好き…」

なら、この胸の奥で疼くものはなんだろう。

これが契約の効力なのか、以前からあったものなのかもわからない。

「レーン？」

視線だけ上げた先にいる男は、食事の手を止めた私を不思議そうに見つめている。

その視線を合わせて、答えは返さずに考える。  
好き。

でも愛しいわけじゃない。

なのに、明らかな特別扱いに嬉しいと感じる。

私自身を認識しないと、何故だかむしゃくしゃする。

これは一体何だろう。



どこまでが私の、私だけのものなのか。

「……わかんない」

「何がだ」

不可解そうに眉を顰めるヴォルドから視線をそらす。

「…わかんない」

自分の気持ちも、ヴォルドの気持ちも。

せめてヴォルドの気持ちがわかったら、私は私の気持ちを見つけられるのだろうか。

わからない。

結局は仮定の話でしかなく、わからないものはわからないのだ。

「ヴォルド、この後暇？」

「暇ではない」

にべもないね。

事後処理で忙しいんだろうけど。

押し付けたのは私なので、無理は言いません。

「なら明日時間ちょうだいね」

これくらいの無茶は言うけれど。

「…わかった」

疲れたように頷くヴォルドを見て、デザート最後の一口を口の中に放り込んだ。

食後の紅茶でまったりとしている私を置いて、ヴォルドは仕事へと戻って行った。

本当に忙しそうで、実は晚餐する時間も惜しかっただろうかと、少し申し訳なくなった。

申し訳なくなっただけで、何かする気はないけど。

悪いね、ヴォルド…。

「つつかれたー！」

寝室のベッドにドッと倒れこむ。

一日離れたただけだというのに、すごく懐かしい気がする。

「お疲れ？」

「…マーノン。その疲れてる人の上に乗っかな」

背中に跨っているマーノンの重さに、食べた物が胃から逆流しうになる。

バシバシと足を叩くと、つまらなさそうに唇をすばめて退いてくれた。

「あー気持ち悪…」

せつかくのいい気分が台無しだ。

体を起こし、マーノンの隣に座り直す。

「何か用？用ないなら寝たいんだけど」

「今日は最高に気分がいいからね。レーンの質問に全部答えてあげようかと思って」

「…え、本気？」

その気分の良さは、あれか。

カステヘルミをやっちゃったからか。

ストレス解消は狙ってたけど、ここまでとは。

棚から牡丹餅だな、ホント。

「何が聞きたい？今日だけは特別に全部答えてあげるよ」

嬉々とした様子で言うマーノンに、私は少し逡巡してから言った。

「契約について教えて」

今一番知りたいこと。

これを知れば、私は私の気持ちを掴めるのだろうかと考えて、少し自嘲気味に笑った。

### 39 ベネレ・ラルシュ

「何泣きそうな顔してるのさ」

むにと頬を抓まれ、俯き加減だった顔を上げさせられる。

「泣きそうな顔なんてしてない」

「自虐的な顔はしてた。どうしたの。もっと喜ぶと思ったのに」

確かに、普段の私なら大喜びしていそう。

でも今は喜んでるとはお世辞にも言えなくて、抓まれた頬を無言でさすった。

「…ねえ、マーノン。結縁契約の効力ってどんなもの？」

ベネレ・ラルシュ

「今更だねえ。そんなこと気にしてたの？」

ぎゅむぎゅむと大きな両手で顔を挟まれて、それこそ泣きたくない。

「そうだ、今更だ。」

契約の介入、書き換えは出来ないとヴォルドが言っていたではないか。

こんなこと、一番に聞かなければならないことだというのに。

「馬鹿だね」

手が離れ、脇の下に腕を通して抱きしめられる。

私もマーノンの胸に頬を寄せて、縋るように抱きついた。

ゆらゆらと横に体を揺らすマーノンに合わせて、私の体も揺れる。それが心地よくて、体から力が抜けるように目を閉じた。

「何がそんなに気になるの」

背中を優しくリズムよく叩く掌を感じながら、首筋に額を擦りつける。

「レーン？」

耳元で聞こえる声は、多分に甘さを含んでいて、その声の誘惑のままに甘えたくなった。

けど、マーノンの優しさは大半有料だから抱きつくだけで我慢する。

「そろそろ話す気になった？」

髪に指を絡めるように頭を撫でられる。

そろりと体を起こして反転し、マーノンを背もたれにして座った。

「自分の気持ちが変わらなくなっただけ」

「ああ。それで効力が気になったわけだ？」

「うん…」

好意ならばと高を括っていただけに、こんなことになった自分がちよつと恥ずかしい。

そう思つて俯いていると、ポンポンと頭を撫でられた。

「契約の効力はその時々で変わるんだよ。これは契約と誓約の決定的な違いだね。誓約が理という流れを世界に作るのに対し、契約は契りを交わすことで魂同士に直に流れを作ってしまう」

「それって、何が違うの？」

噛み砕いて説明してくれているのだろうけれど、私にはやっぱりわからない。

逆に疑問が増えるばかりだ。

「誓約は世界に流れを作るから、個人の感情までには影響はない。無意識下に行動を制限するようなものだからね。でも、契約は魂同士の流れを作ってしまうから、どうしたって契約相手に精神面で影響を及ぼしてしまう。一方的ではなく、互いにね。結縁契約はそれが特に顕著なんだ」

「…うん？」

頭の中がこんがらがつて首を傾げた私に、マーノンは小さく笑いながらも言葉をつづけた。

「好意を強制するって言ったけど、結縁契約は本来魂同士で直接縁を結ぶものだからね。好意の強制は付随でしかない。今のレーンた

「ちは、結ばれた縁をどこへ落ち着けるかを探ってる状態なんだよ」  
それはつまり、どういうことだ。

「まずまず訳がわからなくて首を捻っていると、マーノンが強く抱きよせてきた。」

「気にしても仕方ないんだよ。直接結んだ縁で、魂が繋がってるからね。結んだ縁が収まる場所に収まるまで、情緒不安定になるのは仕様がなない」

「縁が収まるって…どういうこと？」

「関係性だよ。友人、恋人、夫婦、兄弟、親子、師弟とか。どれにしても好意的なものしか築けない。そのための好意の強制なんだよ」  
開いた口がふさがらない。

「コイツ、詳細は全く説明してなかったんだなと、脱力した。」

「マーノンが全てを語らないことは知っていたけど。知ってたけど

…！

「ああ…でも、関係性か。」

「友人…うん、友人で」

「まだ収まってないんだったら、修正も可能なはずだ。」

「変な方向、主に恋人とか夫婦とかは避けたい。」

「師弟…は、何の師弟だよって話だから除外だし、兄弟は弟ならまだしも兄は一人でいいので却下。」

「友人だな。」

「うん、ヴォルドは友人！」

「互いに同じ認識が出来てなければ、どれだけレーンが友人って言いつても、縁はそこに落ち着きはしないからね？」

「…落ち着くって言うけど、それって結局どういう状態よ」

「互いに対する認識がぴったり合った瞬間のこと。大概は合意の上で契約を交わすからね、長くても3日くらいで落ち着くんだけども…レーンたちはどうなるんだろうね？」

「ね？と首を傾げられるのを仰ぎながら、溜息を吐く。」

「首を傾げたいのは私の方だ。」

マーノンの話は、鵜呑みにしてはダメだと再度認識する。

嘘はついていないけど、それ以上のものがあると疑ってかからなければ。

「落ち着けられない状態が続くとどうなるの？」

「情緒不安定になるだろうね。多分、好意の度合いの起伏が激しくなると思うよ？ちょっとしたことにも過敏に反応しちゃうたりとか」

「……選択間違えたあ！」

半泣きでマーノンに抱きつきながら叫べば、慰撫するように頭を撫でられた。

こつも面倒くさいものなら、契約なんて成さなかったのに！と内心で喚き散らす。

契約を成すとか簡単に言った自分を罵り殺したい。

けど、わかったことがある。

ヴォルドに対して抱いた感情は、情緒不安定によるもので、それ以上でもそれ以下でもない。

だからこの感情は恋愛感情ではないのだと、そう結論付けて、私はひっそりと安堵した。

「ヴォルドは友人、ヴォルドは友人。ヴォルドは友人」

自己暗示に繰り返し呟く私の頭をマーノンは何も言わずに撫で続けた。

### 39 ペネレ・ラルシュ（後書き）

皇帝と蓮の関係はどこに落ち着くことやら。

## 40 影響力

「レーン、朝だよ」

揺すり起こされて、頭までかぶっていた布団から顔を出す。

眠たい目を擦りながらのろのろと身を起こせば、寝癖で跳ねた髪をマーノンが撫でた。

「おはよう」

「……………おはよ」

右手でしかと握られていたマーノンの服の裾は、なかったことと目を逸らして挨拶を返せば、寝癖を撫でていた手がずりりと首筋をたどる。

くすぐったさに身をよじれば、軽く額へと口付けられた。

「よく眠れた？」

「ぐっすり」

その後、結縁契約については一切触れずに、明け方近くまでマーノンを質問責めにした。

その途中で眠ってしまったのだろう。

途中から何を聞いたか、記憶があやふやだ。もったいない。

「そう。じゃあ僕、これからリイのところ行ってくるから」

「行つてらっしゃい」

手を振ってマーノンを見送った後、寝起きで重たい体をベッドから起こした。

そこからは、馴染んでしまったこの国での日常。

侍女を呼び、着替えをして、隣室で朝食を取る。

二日ぶりのそれは、酷く奇妙な違和感が纏わりついた。

焦燥にも似た違和感に、停滞した時の中にいるのだと、止まって



いた読書を再開して思った。

少しずつ積み上げられた知識と変化する事態に、動いた気になっているだけで私の中の時は停滞している。

一人では何も出来ない。

何をどうしなければならぬか。

それを模索する段階にもまだない。

「焦ってもどうしようもないのに……」

なんだか、気分の浮き沈みが最近激しいと思う。

つい数日前は、フィーリーシャが来るまでに出来るだけの知識を頭の中に詰め込むんだ！と、無駄に息巻いていたというのに。

もしかこれも契約の影響なのか……？

いや、いくらなんでも……ありえそうだ。

「思考に没頭する度にドツボにハマりそう……」

これは一心不乱に読書に集中するほうが、余計なこと考えなくていいかもしれない。

そう思いいたって、私は無心で手にしていた本を読みだした。

「失礼いたします。陛下から昼食への招待を承っておりますが、如何なさいましょう？」

いつもは昼食のワゴンを引いてくる侍女が、部屋に入ってくるなりそう問いかけてきた。

「ああ……」

昨夜、時間を頂戴とお願いしたからだろう昼食のお誘いに、タイミングの悪さに舌打ちしたくなった。

今はヴォルドに会いたくない。

そう思っても、自分から願い出といて、会いたくないからなどというくだらない理由で却下するのは気が引ける。

なんで会いたくないか、なんて説明するのも嫌だ。

というより、説明して夫婦になろうとかヴォルドに言い出されたら泣く。

何墓穴掘ってんだよ私！的な感じで。

調度いい断り文句も思い浮かばなかったので、厭々ながらも招待を受け、私は重い腰を上げた。

侍女に案内されるがままに歩いていくと、先日昼食を共にした時と同じテラスだった。

すでに待っていたヴォルドに、挨拶と招待への礼を言ってから席に着いた。

「どうした」

食事を始めてすぐ、ヴォルドは私にそう言った。

「話は食事が終わってからでいい？」

給仕がいる中では結界もはれない。

他人に聞かせて良い話ではなかったために、そう返せば、ヴォルドは緩く首を振った。

「そうじゃない。気分でも優れないのか？表情がいつもより堅いが」  
「……っ」

何気ない心配に、思わず声が詰まった。

「別に、体調が悪い訳じゃないから平気」

絞り出すような声でなんとか返事をする。

契約を意識すればするほど、ヴォルドの前で平常心を保つことが困難に思えた。

ぎゅっと絞めつけるような心臓。

少しでも気を抜いたら、訳のわからない高揚感に顔が赤く染まりそうな気がした。

「そうか」

深くは聞いてこようとしないヴォルドにほっと息を吐きながら、「ヴォルドは友人」と心の内で繰り返し唱える。

動揺している私とは裏腹に、ヴォルドは至っていつも通りだ。

ポーカーフエイスの賜物かとも思ったが、それにしてはあまりに

も普通だ。

この差は一体何なのだろう。

互いに影響を及ぼすとマーンンは言っていたけれど、あれは嘘だ。こちらがこれだけ当惑しているというのに、ヴォルドに影響が出ている様子など全くないではないか。

あんまりな差に、苛立ちと憤りを感じて口がへの字に曲がったのは、ご愛敬だ。

軽く請け負ったのは私だけど、仕掛けたのはヴォルドなんだから、ヴォルドが苦しめばいいのに。

そんなことを考えながらなんとか食事を終え、結界を張ったところで、私はようやく平常心を取り戻せた。

「あ、ねえ。アナク見た？」

心に余裕が出てきたことで、ヴォルドが今朝出くわしただろう女装男を今になって思い出した。

「…………アレはレーンの仕業か」

「え、当たり前じゃん」

苦々しい表情のヴォルドに、私の口がにんまりと弧を描く。

してやつたりといった気分だ。

出くわしたヴォルドがどういう反応を示したのかが気になるが、とりあえずそれは後だ。

「それで、話なんだけどね」

「なんだ」

「ダミアンと誓約をしたいの」

「誓約……？」

胡乱な目を向けられる。

それにつこりと笑って、持ってきた紙を広げた。

アフィン文字の羅列が並ぶその紙をヴォルドへと突き付ける。

ゲネレ・トワルレ  
「自署誓約。誓約内容はその紙の通りよ」

自署誓約は、紙を媒体に真名を署名することで成す誓約だ。

本来なら和平や同盟などの時に用いるその誓約を私はダミアンと

交わしたかった。  
彼の行動を制限するために。

interval ?

仕掛けた悪戯にわくわくしている子供のような顔で食事をする少女の言葉を、ヴォルゲルドの脳は理解することを拒否した。

拒否したままに確認するように問えば、少女からは同じ言葉を返される。

そこで仕方なく、その言葉を理解した。

ヴォルゲルドの天敵と言ってもいい“女”という存在が、明日ヴォルゲルドの前に姿を現すという。

少女の知り合いだと言われれば無碍にも出来ず、極力視界に入れないことでやり過フイリごすことに決めた。

もし相手が天上神であつたなら、嫌悪など感じる隙もないだろう。それならそれで、ヴォルゲルドとしては有難いが。

「そんなに嫌い？」

窺うように目を向けてくる少女に、ヴォルゲルドは正直に答えた。嫌い、などという生半可なものではない。

存在することすら許せないと感じるほどの憎悪が、ヴォルゲルドの中にはある。

その憎悪が、少女に向けられない、ということに、ヴォルゲルド自身不思議に思えた。

ヴェルデのようだと認識した今となつては、弟のようにすら感じている。

如何せん、三度も抱いた身であるヴォルゲルドからしても、少女自体が色香とは程遠い無邪気な子供にしか見えない。

笑った顔も、怒った顔も、正直すぎるほどの感情が現れていて、あどけない。

「レーン？」

そう思った矢先に、少女の泣きそうに歪んだ顔に、艶が帯びるのを見た。

俄かに潤んだ瞳がヴォルゲルドへと向けられる。

その瞬間、ヴォルゲルドは固唾を呑んだ。

明らかに女を匂わせている少女に、けれど、不思議と嫌悪は抱かなかった。

それどころか、すぐにでも口付けたい衝動に駆られる。

それをなんとか押し止めながら、少女との会話に集中したが、少女自身もなにやら混乱しているようで、次第に不貞腐れたように唇をすばめた。

その仕草に、いつものあどけなさが表に出て、帯びていた艶が掻き消える。

ふっと、ヴォルゲルドはいつの間にか強張っていた肩から力を抜いた。

明日、時間をつくる約束を交わし、その夜は晩餐後すぐに別れた。晩餐後も共に過ごすようになって一週間も立っていないというのに、そうして少女と別れることが、久々のように感じられる。

「…正妃、か」

子供まで与えてもらい、正妃にと縋るのは都合がよすぎるというものだろう。

そうわかっていながらも、心のどこかで少女をと望む気持ちがあることも、ヴォルゲルドは否定できないでいた。

徹夜で仕事を片付けていたヴォルゲルドは、前日も少女の搜索でほとんど睡眠をとっていなかったことから、慢性的な寝不足で朝から機嫌が悪かった。

隈が出来にくい体質のためか、傍から見れば怒っているようにし

が見えない。

同じように仕事をしていたダミアンは、眠気覚ましにとウォンテを淹れてヴォルゲルドに手渡した。

それを受け取りながら、ヴォルゲルドは目を瞬かせた。

「アナクはどうした」

先ほどまで傍で控えていたアナクの姿がないことに気付いたヴォルゲルドが問うと、ダミアンはなんともいえない微妙な顔をした。笑いたいのか困っているのか、それともどちらものか、判断の付きにくい顔に、首を傾げる。

「どうした」

「いえ。少々用を言い渡しまして、すぐ戻ってこられますよ」

微妙な顔のまま言われ、不可解なものを感じたが、そうかとだけ返してウォンテを啜った。

そういえば、眷属の少女は二人にどのような報復を考えたのだろうと、ウォンテの苦みに目が冴えるのを感じながら思った。

今の様子を見るだけでは、ダミアンに何かしたようには感じられない。

姿が見えないアナクを考えると、こちらをどうにかしたのだろうか。

とにもかくにも、マルガが納得できうるものであればいいと、ヴォルゲルドは思った。

納得できないからと問題を起こされてはたまらない。

ふいにノックの音が聞こえ、ヴォルゲルドが入室の許可を出すと、ダミアンがドアを開けた。

瞬間、香ってきた匂いに、ヴォルゲルドは顔を顰めた。

キツイ女物の香水の匂いだ。

傍に置いておいた細身の剣を引っ掴み、ドアへと視線を向けて固まった。

「……………どういった見だ、アナク」

女物の服を着たアナクの姿に、ヴォルゲルドは吐き気を覚えた。

ヴォルゲルドは女を嫌うのと同時に、女を連想させる物も嫌いだ  
った。

化粧品やドレスなどはその筆頭だ。

それを傍に仕えるアナクが知らないはずがない。

「これは、その……」

ヴォルゲルドのただならぬ怒気に、顔を蒼褪めながらアナクは言  
い淀む。

着属の少女を拉致した主犯がカステヘルミと知れ渡っている今、  
自らがそうだと名乗り出すことも出来ず、それ故に理由を喋ること  
も出来ない。

「答えられないか」

その問いにアナクが沈黙していると、ヴォルゲルドは持っていた  
剣を鞘のまま振り上げた。

それを反射的にアナクは避けようとする。

「避けるな。アナクレト・ガリヤ・ベイツ」

ぐつと強制的に動きが止められたアナクの頭へと、剣が振り下ろ  
された。

鈍い音を数度部屋に響かせた後、アナクがその場に崩れ落ちるの  
を見て剣を止める。

ヴォルゲルドは僅かに血の付いた鞘を汚らしい物でも見るように  
眉を顰め、アナクの上にその剣を放った。

「さっさとこれを医務室にでも連れて行け。剣の換えと、部屋の掃  
除もさせる」

ダミアンにそう命じてから、ヴォルゲルドは仮眠をとるために、  
隣室の仮眠室へと入っていった。



## 41 仕切り直し

「ええ！？殴って気絶させちゃったの！？」

ダミアンとの誓約にヴォルドから同意を貰い、気になっていたアナクのことを聞き出して、思わず大声を上げた。

怪我くらいはさせるかもしれないとは思っていたけれど、殴って気絶。

「因みに何でどこを殴ったの？」

「鞘のままの剣で頭を」

剣？剣って言ったこの人。

悪びれもせず、しゃあしゃあと剣とか言った？

鞘がついたままって言ったって、剣。

銀で加工されている鞘はあれだけで結構な重さがあったと、記憶している。

抜き身でないにしても、殴るとなれば立派な凶器だ。

それを頭…。

打ちどころ悪ければ死ぬぞ。

「ねえ、私言ったよね？女の人がヴォルドの前に現れても気にしないでねって言ったよね！？」

怪我の予想はしていても、まさか死なせる気はなかった私は、怒りを頭わにヴォルドに詰め寄った。

女嫌いは知ってたけど、女装もダメなのかこの男。

「あれは女じゃないだろう」

吐き捨てるように言ったヴォルドに、何言ってるのと反論する。

「女装男だろうと、一見したただけなら女でしょ。胸さえあつたらアナク、結構美人なお姉さんだったもん」

じっくりみると、お笑いにしかないけど。と、声に出さずに付け足した。

本当に女らしく見せるなら、カツラと化粧と胸に詰め物は必須だと思っただけで、結局そこらへんの手配はしなかった。

そこまでするのは流石に面倒くさかったからだ。

「ヴォルドの前で瞬殺かぁ。…今日はしょうがないにしても明日も一回着せなきゃ！」

「まだ着せる気か!？」

「当たり前!今度はちゃんと見て見ぬふりしてね。ヴォルドが邪魔する毎にアナクの女装期間長くなるから」

そうと決まれば、胸の詰め物とカツラを手配しようと心に決める。どうせ女だろうと女装男だろうと、ヴォルドの機嫌が急降下するのには変わらない。

この際だ、アナクには女装を極めてもらおう。

化粧もして、用意できなかった靴やアクセサリーも何か用意しようか。

カツラはどんなものがあるだろうか。

後で侍女さんに確認しなければ…!

嬉々としてアナク女装計画を再度練り出し始めた私を前に、ヴォルドは悲愴な顔を手で覆った。

昼食後、ヴォルドと別れたその足で、私はダミアンがいるという部屋に向かっていた。

案内役の侍女の後について歩きながら、胸ポケットにしまいこんだ紙を取り出す。

それは先ほどヴォルドに見せた紙とは別のもので、アフィン文字ではなく日本語が並んでいる。

書かれているのは、マーンから教わった誓約の手順だ。

「何か心許ないけど仕方ないか…」

知っていること、わかっていることの全部を教えてはくれないマ  
ーノンからの情報だ。

また何か隠されているかもしれないと思うと、少し怖い。

でも、本で調べた限りでは同じ手順だった。

「……どうか面倒事にはなりませんように」

なるはずがない誓約内容だけれど、前科がある私は切実に祈って  
しまった。

兄が関わることならいざ知らず、どうでもいいことに煩わされる  
のはもう御免こうむりたい。

苛立ちに、ぐしゃりと強く紙を握り潰した。

「こんにちは。手間を取らせてすみません」

案内された部屋は、以前アナクに連れてきてもらった部屋と同じ  
ようだった。

仕事の途中なのだろう。

手にした書類から目を離して、ダミアンが立ちあがって礼をとっ  
た。

「申し訳ありません。本来なら私から出向かなければならなかった  
のですが」

「私の我が儘ですから、お気になさらず。それで、今大丈夫ですか  
？」

「それは勿論。どうぞこちらに」

以前と同じように勧められた椅子に座る。

彼の部屋付きの侍女が、紅茶を淹れてくれて、それが済むとすぐ  
に部屋を辞した。

それを見送ってから、部屋に結界を張る。

「…結界、ですか」

私が結界を張るのを見て、ダミアンは軽く驚いた様子だった。

「ええ。マーノンから教わったんです。誰にも聞かれない話で  
すし」

「…それは」

「こちらに署名をお願いします。もちろん、真名で」

ヴォルドに見せた同じ紙をダミアンの前に差し出す。

それを見て、ダミアンの顔色が変わった。

「何故、この誓約を…？」

「それはどういう意味の何故、なんでしょう？」

わかっていて、問い返してみる。

ギリツと、ダミアンが奥歯を噛み締めたのが見て取れた。

「誓約にしても、契約にしても、それを拒否する権限が誰にでもある。その権限を行使するとしたら、“はどめの言げん”が使われることが多い」

「…それを使わせないため、ですか」

ダミアンは神官でなかったにしろ、それに近い人間だったはずだ。

誓約の抜け道はいくらでも知っているだろう。

ゲネレ・トワルレ

けれど自署誓約に、抜け道なんてものは存在しない。

あるのは、承諾か、拒否か。

その二択だ。

「自署誓約の拒否は、署名をしないこと、ですからね。目に見えてわかりやすいでしょう？」

この誓約に、拒否権など与えはしない。

そう嗤いながら、私はダミアンへ誓約の紙を突き付ける。

「どうぞ、署名を。ヴォルドにはこの誓約に関しての同意は得ています。真名を署名しなければ、すぐに知れること。貴方に逃げ道はない」

## 42 ゲネレ・トワルレ

誓約の内容は、それほど難しいものではない。

ゲネレ・トワルレ  
自署誓約で出来ることといえば、本当に大雑把なものだ。

例えば、同盟国に対し武力をもって侵攻してはならないとか。

例えば、どこその国がどこその国を援助するとか。

国単位での誓約で、個人に使われることはまずない。

それは、個人に対して使うのが難しいということもある。

紙と真名のみを媒体とするために、他の誓約より精度が格段に劣るためだ。

よって、誓約の内容は自然と簡単な、大まかなものとなる。

個人ともなれば、それはなおのこと。

はつきりいつて誓約の内容の匙加減が難しいのだ。

私も今回、内容を決める時、大分マーノンにダメだしされた。

そして決まった誓約内容がこれだ。

「簡単でしょう？ “辞職することを禁ず” ただそれだけですから」

その一言に、ダミアンは言葉通りの意味以上に、無意識に行動を制限されることだろう。

それをよく理解しているダミアンとしては、なんとしても避けて通りたかっただろうが、ご愁傷様だ。

マーノンが言っていたけれど、他の神にでも茶々を入れられなければ、フィーリーシャの眷属である私の強制力は半端ないらしい。

……それを聞いた時、マーノンが茶々を入れないでくれることを切に願ってしまった。

茶々を入れるとしたらマーノンしかないからね、今のところ。詰めていた息を細く長く吐き出しながら、ダミアンはペンを手にとった。

未だにペンの扱いがへったくそな私とは違い、スラスラときれいな字で署名する。

ペンが完全に離れた瞬間、淡い光とともに紙に模様が浮かび上がった。

誓約完了の証だ。

これが出るということは、きちんと真名を書いたのだろう。

「おお？これ蓮の花じゃん」

紙を手にとり、透かして見ると、うつすらとした模様が鮮明になる。

これって重要書類とかによくある透かしと同じだろうか。

私の名前と同じ名前を持つ花の絵に、口元が緩んだ。

「はす……？リシアーでは？」

「あ、リシアーっていうんだ？」

蓮の花ではないのかと、残念に思ったが、でもよく似ている。

翻訳されてないということは、同じものではないのだろう。

最近翻訳基準も少しはわかってきた。

透かしから目を離し、署名へと視線を向ける。

達筆なそれは、大変読みやすい。

「だ……ダヴィデ・シードル・アダーニ？」

……ダミアンの名がどこから出てきたのが謎だ。

そんな疑問を読み取ったのか、ダミアンがカップに紅茶を注ぎ足しながら教えてくれた。

「ダミアンは洗礼名です。もう教会に属していませんが、今も表名として使っているんです」

「へえ……」

洗礼名とな。

私はダヴィって呼びたいな。

ダミアンって好青年っぽいんだもん。

「さて。…火、貰えます？」

誓約の紙を四つ折りにして、小首を傾げる。

自署誓約は他者に内容または真名を知られないようにするために、大抵の場合は紙を燃やしてしまう。

紙が燃えたところですでに完了した誓約がなくなるわけではないし、何らかの支障をきたすこともないので、これが通例だ。

ダミアンはポケットからライターのようなものを取り出して、火を点けてくれた。

その火に紙を寄せ、燃え移るのを見てからカップを持ち上げてカップソーサーに燃えて続けてる紙を置く。

私は紅茶を飲みながら、火が消えるまでただじっとそれを見つめていた。

「そういえば、アナクの怪我、酷いんですか？」

黒い炭となった紙から顔をあげると、ダミアンがソーサーを取り換えてくれた。

「いえ、騒ぐほどではありませんよ。少々頭蓋骨が陥没したくらいで」

「いやそれとんでもなく大怪我じゃないですかね！？」

淡々とした声に似合わない言葉が聞こえて、思わず突っ込んだ。

え、何。

もしかしてこの世界じゃ、頭蓋骨陥没はかすり傷と同じ！？

そんなわけ…。

「我が国の医療技術は大陸一ですから」

「そういう問題…？」

そういう問題に、なっちゃうの？この国じゃ。

「医療魔術が他国よりずいぶんと進んでいますから。多少の怪我ならばすぐに治りますよ」

飄々と言ったのけましたけど、頭蓋骨陥没は多少の中に入ってしまったんですね。

魔術、ともなれば当然、なのかな。

基準がわからないために、どうにも理解しがたいが、とりあえずアナクはそれほど心配する必要がないことはわかった。

「ええっと。じゃあアナク明日には元気になってます？」

「大丈夫かと」

ダミアンからお墨付き貰ったから大丈夫だろうと勝手に納得する。ふむ。それならば…。

「ダミアンさん、ダミアンさん。また面白いもの見たくはありませんか！？」

ここは一つ、この人にも協力してもらおう！ということで、ダミアンを巻き込むことに決めた。

面白いことで大体の予想がついたのだろう。

是非喜んでと快諾を貰ってしまった。

「何をすればよろしいでしょうか？」

積極的に聞いてくるダミアンに、「そんなに見たいんですか、アナクの女装姿…」と、私は少し呆れてしまった。



## 42 ゲネレ・トワルレ（後書き）

常識が恋しい今日この頃。

### 43 ドヴレチェンスキーの血筋

乗り気なダミアンにこれ幸いとアクセサリーやカツラの用意を頼み、私は血でダメになってしまったらしい服を作り直すことに決めた。

次はなにを着せようかとうきつきしながら、自室への案内役である侍女の後をスキップしそうな勢いでついて歩いていた私の足が、ぴたりと地に縫いついたように動きを止める。

「あ？」

廊下の窓の外、有り得ない物を見てしまった。

え、あれからまだ3日と経ってないよね。

足の骨ってそんなに簡単にくつついちゃうの！？

あ……いや、頭蓋骨陥没が多少の怪我だもんね、当然か。

「あ、眷属様じゃん」

以前と同じように、ひらりと窓から入ってきた男は、そのまま窓枠に腰掛けて気軽に手をあげて挨拶してきた。

私が窓から突き落とした、あの男だ。

「ドヴレチェンスキー公爵様！？」

挨拶を返そうか迷っていると、前方を歩いていた侍女から悲鳴に近い声が上がった。

公爵。

公爵なのに、この軽さ。

まともな公爵はこの国にいないのかよ。

てか何故に窓から入ってくるんだ、不作法じゃないかと、困惑気味に考えながら、じっと男を見つめる。

年齢は20代くらいだろうか。

なんというかチャライ雰囲気の方は、侍女に気安い様子でひらりと手を振って、話しかけている。

名前：確かダミアンが以前、カミツロと呼んでいただろうか。  
家名がドヴレチェンスキー。

ドヴレチェンスキー…？

あれ？どつかで聞いたことあるような、ないような…。

「なあ、フリーリーシャ神の獣型は銀狼だって本当か！？」

「へ？」

もんもんとした思考に気を取られていると、いつの間にやら手を握られ、前と同じ恍惚とした表情で詰め寄られる。

「獣型…？」

銀狼ってことは、ヴィレンツァーレに初めてきた時に見たあの狼姿だろうか。

それがそんなに興奮するようなことなのかと不思議に思っていると、どうなんだ！？とさらに詰め寄られる。

間近に来た顔に嫌悪を覚えて、思わず握られていない手でぐっと押し退けた。

「ああ、確かそうだったけど、なんで？」

面倒くさげに答えながら、何故そんなことが気になるのかと逆に問いかければ、啞然とした顔をされた。

「…眷属なのに知らないのか？」

「だから何が？」

「…いや、眷属だから敢えて気にしないのか？眷属が人型だしな…これだけでも珍しいことだし。そもそもフリーリーシャ神の眷属だしな、常識求めちゃだめだろう」

ぶつぶつと勢いよく独り言を呟きだした男の前に、私はどうしたものかと手を握られたまま立ちつくした。

質問の問いだけでも答えていたんだけど、今のこの男に何を言っても無駄そうだなとさっさと諦めて、先ほど男に声をかけられた侍女に目を向ける。

ピンとした背筋で少し離れた場所で立っていた彼女は、私の視線に気付き軽く頭を下げてきた。

さっき大いに動揺していたらうに、この切り替えはすごいなと思う。

さすがだなあと感心していると、ようやく自分の世界から帰ってきたらしい男が、ぎゅっと私の手を握る力を強めてきた。

「なら原型はみたことはあるのか!？」

……人の問いにも答えようぜ、この野郎。

つつい内心で苛立ちながらも、表には出さずに首を傾げた。

「原型つて？」

「…知らないのか？」

「知らないから聞いているんですが」

私は本当に知らなかった。

確かにフリーリーシャは子供の姿だったり銀狼の姿だったりしたけれど、その二つしか見たことはない。

獣型というのが銀狼を指すなら、子供の姿は多分順当に考えて人型だろう。

なら原型とは何か。

さっぱり見当もつかなかった。

「神々の本来の姿と言われる姿だ。眷属だというのを見たことは」  
「ないですね」

断然と否定すれば、男はかなりショックを受けたようで、目に見えて肩を落とした。

そんなに期待していたのか…。

少々同情してしまいそうなくらいに沈んでいる男に、けれど同情する気は全くないので、握られている手を振りながら声をかけた。

「そろそろ手、離してもらっても？」

「あ？ああ…悪い」

意気消沈としている様子は、なんだかそのまま膝を抱えてのの字でも書き始めそうな感じた。

じめじめとした空気は放置したら苔でも生えてきそう、意図的にその場に放置したくなった。

少々聞きたいこともあったので、それが出来ないのが残念だ。

「もう二度目の対面ですけど、お名前をお聞きしても？」

さすがに三度目の対面までに引き延ばす気はないので、自己紹介を要求すると、男は今思い出したような…実際今思い出したのだろう顔で、恭しく頭を下げた。

その様は、さすが貴族様だと感心するくらいには優雅だった。

「申し遅れました。私はカミッロ・リル・ドヴレチェンスキーです。今現在はドヴレチェンスキー家の当主にして公爵の位を賜っておりますが、私自身はただの歴史研究者です」

歴史研究者。

それはそれは…、だからフィーリーシャの姿が気になったのか？

それにしてもドヴレチェンスキー…公爵。

なんだろう、なんでこんなに引く掛かるんだ。

ん…。

あ…。

「豚公爵の後釜か！」

ようやく合点がたって、うつかり声に出して手を打った私に、カミッロのみならず、侍女からの視線も痛かった。

## 44 欺く人

さすがに元であろうと、公爵を豚呼ばわりはまずかっただろうか  
と少し気になっていると、カミツ口は楽しげに目を輝かせた。

「豚、豚か！ぴったりだな！！」

「……はあ」

豚公爵の後釜ならば、カミツ口はその親子とかそれに近い人間  
ではないのだろうか。

豚呼ばわりに突っ込むどころか感心していいのか。

ああ、でも…アナクも豚呼ばわりに笑ってたしな。

それだけ人望がなかったのか、あの公爵は。

…可哀相に。

「あ、私はレーンです」

自己紹介を要求しておいて、自分がしないのは失礼だなと自己紹  
介を返す。

「レーン？」

「公爵様！」

私の名前を反芻したカミツ口を咎めるように侍女が叫んだ。

それに首だけ振り返ったカミツ口が、ああと頷いた。

「呼び捨ててはいけなかったな」

「…別にいいのに」

様呼びに慣れたと言っても、それが好ましいわけではない。

できれば呼び捨ての方が好ましいのだが、この国でそれは期待で  
きないことも知っているから、ぼそりと呟くだけにとどめておいた。

「俺たちが良くて、周囲がな」

「カミツ口は良いんだ？」

「俺は神を崇拜してはいないからな。あれは研究対象だ！」

「……」

清々しいくらいに言い切ったカミツロに、侍女が真っ青通り越して紙みたいな顔色になっていたが、私は彼の発言のほうに疑問を抱いた。

歴史研究者のくせに神が研究対象ってなんなんだろう。

神々の歴史とか？

…調べる価値あるのかな。

どうでもいいや。

「まあとりあえずよろしく…する気もあんまりないけど、よろしく」  
「噂にたがわず正直だなあ。俺としてはよろしくしたいから、よろしく！」

握手を交わした手をぶんぶんと振られる。

うん。

やっぱりこの人、街でよく見かけたチャライ兄ちゃんだ。

てかその噂、多分…というより絶対アナクかダミアン経由だろう

！？

絶対に碌な噂じゃなさそうだと、ヒシヒシと感じた。

カミツロとはもうそんなに会うこともないだろうと、別れた時は安心していた。

だってそんなに接点ないし。

鬱陶しそうな人だったから、進んで関わりたくはない。

それに私の使ってる部屋は外から入ってこれるような木もないから、大丈夫だと思っていたのだ。

そんな安心があったのに、それを一瞬にしてぶっ壊してくれたのは、ヴォルドだった。

「……あれ？」

「くんばんは。レーン様」

外面は厚いんだな。

それが三度目に会った時に真っ先に抱いた印象だった。

いつものヴォルドとの晚餐。

テーブルに着いていたのはヴォルドだけではなく、昼間に会ったカミツロも一緒だった。

「知り合いか……？」

落ち着いた、でもいつもより温度が低い声で、ヴォルドが私とカミツロを見比べる。

向けられる視線も、どこことなく冷たい気がした。

「知り合いつて言うか……。ほら、前に呼び出したときに、私が窓から突き落として足の骨折った奴」

「……ああ」

「その説明は酷くないか!？」

あ、崩れた。

外面はさほど厚くなかったか、つまらん。

そして事実だ、酷くはない。

「んで？なんでカミツロがいるの？」

席に着きながら、ヴォルドに説明を催促する。

会いたくなかったのには言えなので、恨めしげに睨みつけた。

「これでも歴史学の権威だからな。先日話に意見を貰おうと思ったんだが」

「専門家の意見ってわけですか」

確かに専門家の意見は欲しいところではあるけれど……。

ちらりとカミツロに視線をやる。

ヴォルドの手前、昼間よりは洗練された雰囲気ではあるが、先ほどの言動と態度を見る限り、ヴォルドがこれ呼ばわりするくらいには、チャライのだろう。

「この人、そんなにすごい人なの？」



「胡散臭げな目で見るな。この手の世界じゃ俺の右に出る者はいないんだからな！」

「黙れカミツロ。その学才には私も一目置いているが、眷属殿の前にその軽い口調は改めろ」

豪語したカミツロをヴォルドは冷ややかに諷めた。

仲いいのかな、この二人。

なんというか……。

「兄弟みたい」

やんちゃな弟とそれを諷める兄みたいな。

そんなことを思った私に、ヴォルドは心底嫌そうな顔をし、カミツロは逆にぱつと明るくなった。

「やめろ。私はこんな品位の欠ける兄を持った覚えはない」

「あ、そういうこというか!？」

「……兄？」

苦渋に満ちたヴォルドの言葉に、知らずに脳が理解を拒否した。

兄？どっちが？

困惑している私に気付いたカミツロが、朗らかに笑って教えてくれた。

「あ、俺陛下より年上だから。もう40近いし」

……………詐欺だ。

## 45 神子

世界規模の童顔…？

いや、国単位なのか？

どっちにしるこの国の人間は、外見年齢に10歳くらい多く見積もって見ないとならないわけか。

幼顔というわけではないのに実年齢より若く見えて、しかも美形。…羨ましい。

平凡顔で童顔な私に対する当てつけだろうか、これは。

兄以外の美形なんていつそ滅びてしまえばいいのに。

「ファイリリン ファイラード 神子と力ある神官の出現時期について…？そらまた難しいところを」

「レーンが言うには、何がしかの要因があるはずだと」

「何を根拠に？」

「それは…、レーン？どうかしたのか」

「え？」

ヴィレンツアーレ人の詐欺とも思える外見年齢に、苛立ちを覚えている間にどうやら本題に入っていたらしい。

全く話を聞き流していた私は、二人の視線を受けて口に入れようとした野菜を取りこぼした。

「…落ちた」

「拾って食べようとするな」

落ちた場所が皿ではなく、クロスの引かれたテーブルの上で、もつたいない精神が根付いている日本人な私は手で取って口に運ぼうとした。

口に入れる前にヴォルドに怒られてしまったけれど。

行儀が悪いのはわかっているの、皿の端に置くことで食べるのは諦めた。

「何の話だっけ」

「聞いてなかったのか」

「うん」

「神子の出現には何らかの要因があるはずだと言っていただろう？」  
即答で頷いた私に特に反応を返すこともなく、ヴォルドは話を元に戻した。

言われた言葉を頭の中で反芻し、思考を切り替える。

「言ったね。その要因が他の大陸より、この大陸は圧倒的に少ないだろうってことも言った」

「そう思う根拠は？」

真剣そのものなカミツロに、少し考えてから答えた。

「力ある神官は、世界に必ず一人常に存在するようにしていたと、リイ　フィーリーシャが以前言ってた。だというのに、この大陸で力ある神官が確認されたのは500年以上前。神子が確認されたのは1000年以上前ときた。調べた限りじゃ、それ以前はかなりの頻度で確認されていたのにも関わらず、ね」

「だから何らかの要因があつて、力ある神官が出現し、神子が現れるって…？それはちよつと飛躍しすぎじゃないか？」

「1000年。少なくとも1000年、この大陸に神子は現れていない。それどころか力ある神官までも、出現する頻度が激減してる。それは逆に言えば、この大陸にどちらの存在も必要なかった。そう考えることは出来る」

フィーリーシャの愛し子であると共に、神子は世界に必要とされる存在だ。

必要だと、その存在が必要だと、兄は縋られ、この世界で生きる決意をした。

その兄の…神子の存在が、この大陸には必要ないのだと、1000年以上神子の存在が確認されていないと聞いて思ったのだ。

その証が、500年以上もの力ある神官の不在。

「四大大陸で神子が出現する周期があるとは思えない。ならば、何らかの要因によって出現する場所が選ばれていると思うのが妥当。無差別っていうのは有り得ないからね」

「だが、調べた限りでは何も出てこなかったな  
そう。」

ヴォルドの言うとおり、何も出てはこなかった。

最初、戦争をキーワードに探してみたが、神子が必ずしも戦争のある時期に現れているわけではなかった。

それどころか、大陸の西の端で大きな戦争が起こっている中、東端の平穏な小国に現れ、戦争に関わることなく生涯を終えたという記述もあった。

神子が見れた50年前後の歴史を一つ一つ紐解いて、共通点はなにか探しても、掠りもしなかった。  
と言ってもまだ1000〜1300年前の分しか紐解いてないけれど。

でもそれだけですでに5人。

5人のうち3人は立て続けに現れていた。

最後に確認された神子はその3人目。

1000年前に何かあったのか？

「……神子は死んでもその翌年には新しい神子が召喚される。神子という存在がこの世界で空白になる期間は長くて1年」

思考を整理するために口に出して呟いた言葉に、カミツロが反応した。

「神子ってのは替えがあるのか？」

「……代用品みたいな言い方やめて。神子の魂自体は一つしかなくて、産まれてくるのは常に異世界でなんだって。それをその都度捜してくるんだってフィーリーシャが言ってた」

「へえ。異世界から来るものは災厄だっていうが、神子は別物なんだな」

関心を示しながら頷くカミツロは、そのままウィングラスへと手を伸ばす。

手にとったウィングラスに揺れるのは、薄く緑に色づいた果実酒だ。

それが揺れるのを見ながら、私ははつと息を呑んだ。

「そう、そうだ！」

異世界から来るものは全て災厄を引き起こすもの。

その理が適用されないのは神子と、そしてフリーリーの眷属である私だけだ。

リ・フィルシアン

「神子は連理の森の結界の中に召喚される。それは結界の外だと災厄が引き起こされるからだ」

なら私は…？

私は、ヴォルドと性交することで災厄を引き起こす前に、この世界に完全に属した。

だから、災厄は引き起こされなかった…？

召喚される場所が違う、ということはスタート地点から違う。でも同じことはあるはずだ。

連理の森から出るための契約が、私にとっての性交として…。

属すのは…？本当に世界か？

兄にとって、神子にとって、属すのは…。

「王…？」

調べた神子は5人とも、契約を成した王と共に生涯を終えていた。契約を成すことで、神子は王に属すのか？

それはまるで、伴侶のような。

「レーン」

ヴォルドの声で、埋没しかけていた思考の波から脱する。

一気にものを考えたせいか、一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなった。

怪訝そうにヴォルドとカミツロが私を窺っているのを見て、晩餐の最中だったとようやく頭が理解する。

「あ…、ごめん」

「構わないが…何か思いついたのか？」

「……少し」

誤魔化すように小さく笑って、ヴォルドの心配そうな瞳から視線を逸らす。

先ほど考えたことを纏め上げながら、思考は一つの可能性をはじき出していた。

「要因は王自身にあるのかもしれない」

「それは…どういうことだ？」

「王に何らかの問題があつて、それが神子を惹きつけるのかもしれない」

突飛だと思った。

半分は願望に近い気もした。

でも、これが真実に近いと思った。

だって兄は、心動かされる王を待ち望んでいるのだから。

#### 45 神子（後書き）

……矛盾、あるだろうか  
すごく心配（汗）

interval ?

アナクの女装が眷属の少女の差し金であったことを知り、アナクを見た時から懐いていた嫌悪と怒りは、すっかり呆れへと姿を変えていた。

「あれが眷属様の処罰：ですか」

今日一日は安静を言い渡されたアナクの代わりに、ヴォルゲルドの警護についたマルガも事の真相を知って呆れ気味だ。

まさかあくるとは誰も予想だにしていなかっただろう。

何をどう考えて女装させるという手段を選んだのか。

全く理解できない。

「こなると、宰相閣下への処罰はどうなるんでしょう」

「ああ。それなら、誓約をすと言っていたな」

先ほど見せられた紙を思い出す。

何を考えてあのような誓約を決めたのかは知れないが、それなりの思惑があるのだらうと、ヴォルゲルドは一切の理由を聞くことなく承諾した。

あの内容ならば、ヴォルゲルドにとっても不利益ではないと判断したためでもある。

「誓約：？」

ゲネレ・トゥルレ

「自署誓約のようだったな。あれもまさか人に対して使えるものだとは思わなかったが」

「：眷属様は本当に規格外な方なんですな」

正直な感想を述べただけだろうマルガに、規格外かとヴォルゲルドは頷いた。

確かにあれは規格外だろう。



眷属でありながら、神子と同じ姿をし、元は異界の人間で、誓約の使い方を見る限りでは精霊としての力は無きにしも非ずといったところか。

接して見る限りでは、非力な子供にしか見えないというのに。

「アナクは明日、また女装をさせられるらしい」

「それは面白いですね。今回は見逃しましたからね、是非とも拝見させていただきたいです」

楽しいことと面白いことには目がないマルガに、アナクと明日の職務を代われと言おうとしたヴォルゲルドは寸でその言葉を呑みこんだ。

拝見イコールいじり倒させると、ヴォルゲルドの耳には聞こえたからだ。

これは少女に言われた通り我慢するしかないかと腹を決めた時だった。

「ネリアーデ！」

何かの気配を察知したマルガが鋭く声を上げる。

それに呼応して、一匹の緋色の小さな獣がどこからか現れ、窓の方へと飛び出た。

「わあっ！待て待て待て！俺だ俺！」

「…カミツロ。窓から入ってくるな」

窓から現れた男に、ヴォルゲルドは頭痛を覚えた。

「公爵でしたか、これは失礼を。ネリアーデ、戻れ」

緋色の獣はキュルルツと小さく鳴くと、ぴょんつと飛んでどこかに消えた。

「カヤラのチビが、いつの間クラントデラに中級位精霊なんぞ…」

「2年前からですが」

消えた獣姿の精霊に驚いた様子のカミツロに、恬淡とした物言い  
でマルガは返した。

何を今更といった嘲りが混ざっていそうだと思いながら、ヴォルゲルドはカミツロに手元にあった本を投げた。

マルガに気を取られていたからか、避けられることなくそれはカミツ口の頭へと命中する。

「いっ……！何すんだよ、今角当たったぞ！」

「うるさい、黙れ。何故窓から入って来るんだ貴様は。………また逃げられたのか？」

「一つだけ思い当たることを口にすれば、どうやら凶星だったらしい。」

「ここに居たくないんだって駄々こねられてんだよ。ここについてからずっとだぜ？」

「中にはいないのだから外を探すのはいいが、それで何故窓から入ってこようとするんだ」

「たまに気配が中からするからさ、いるのかと思って」

「……さつさと捕まえろ」

理由が理由だけにやめろとは強く言えず、捕獲を急がせるだけにとどめる。

一人話が見えないマルガは、自然とその疑問を口にした。

「何を探されているのですか？」

「そうか、マルガは知らなかったな」

ゲリーデ  
影の者たちですら、知る者は2人いるかいなかだろう。  
マルガが知らなくても無理はないことだ。

「カミツ口が探しているのはシェーラという精霊だ。クランドフィンス最上級精霊のな」

「……最上級精霊？」

マルガにしたら青天の霹靂だろう。

最上級精霊を手中に収めた者は、この大陸にはいないことになっているのだから。

しかし、実際カミツ口は最上級精霊であるシェーラと誓約をし、傍に置いている。

「教会にバレル前にどうにかしなとなあ……」

「シェーラはそこまで馬鹿ではないだろう」

確かに教会に知れたら事ではあるが、最上級であるだけに、シェーラは人型にもなれ、知能も人以上であったと何度か会ったことのあるヴォルゲルドは認識している。

「そうだけどさ、多分ファイリ・マノレイが近くににいるせいで、大分動揺してるみたいなんだよ」

ファイリ・マノレイの氣に中てられたかと、少々同情した。

地上神の精霊であるシェーラにとっても、高位である天上神の氣は人間同様あまりいいものではないのだろう。

「殊更早く見つけて来い。ファイリ・マノレイに出くわしでもしたら目も当てられないぞ」

「わかつてる。んじゃ、俺もう行くわ」

早速搜索に戻ろうと、カミツロは窓枠に足をかける。

どうやら正規の出入り口であるドアから出て行く氣は、これっぽっちもないらしい。

それに敢えて突っ込むこともせず、ヴォルゲルドはカミツロに言った。

「今夜は眷属殿との晩餐に出席してもらっからな。夜には戻れ」

眷属の名に目を輝かせたカミツロは、了解の意を伝えると、勢いよく窓から飛び出していった。

「…陛下。何故公爵が最上級精霊を…？あの方は一体」

カミツロの背を見送った後、愕然とした様子で口を開いた。

ヴォルゲルドは頬杖をつきながら、口もとを歪める。

「お前が思っているほどいいものではないだろうよ。あれは一種の呪いだからな」

国の存亡を賭けた呪いなのだと、ヴォルゲルドは笑っしかなかった。

「王について言うが、それはそれで色々とおかしくないか？出現は力<sup>アイラード</sup>ある神官が先なんだろう？」

指先でウィンググラスを回しながら言うカミツロは、果実酒を一気に呷った。

「そうだけど……」

「神子<sup>フィーリン</sup>への執着心というのはどうだ？神子を何としてでも手に入れたい者が、力ある神官を手に入れる」

ヴォルドの意見にそれも一理あるかと思つた矢先に、カミツロが言った。

「それだと力ある神官は、神子を望む者の前に現れるってことにならないか？」

「それじゃおかしいの？」

「おかしいというか……」

カミツロは言葉を濁らせ、ヴォルドへと視線を向ける。

ヴォルドはその視線を受け、肩をすくめた。

「あれほど神子に焦がれていた父の前に、力ある神官さえも現れなかったのはそれでは不自然だと言いたいのだろうか？」

「……ヴォルドの、お父さん？」

そういえば、ヴォルドの両親の話聞いたことはなかった。

外見年齢に10歳プラスしても、ヴォルドはまだそれなりに若い年齢のはずだ。

けど、パーティーの時には顔を合せなかったことを考えると、もう亡くなってしまったのだろうか。

好奇心と疑問に知らずうずうずしていると、ヴォルドはそんな私

に小さく苦笑した。

「神子狂いとまで言われた狂人だ。当時の宰相の傀儡と成下がった馬鹿な男だ」

「亡くなったの？」

「ああ」

それ以上のことは聞けず、気のない返事を返して新たに運ばれてきた料理に手をつける。

なんだかずんつと重くなった空気に耐えかねたのか、カミツロが言った。

「この1000年で現れてないってのが問題だっていうなら、有名な話があるだろ」

「あるの？」

ヴォルドと一緒にあって読んだ歴史書の類に、そんな話はなかった気がしたが、口伝などの正式なものではないのなら、私が知らなくて当然だ。

カミツロの言葉で思い出したのだろう。

ヴォルドもあつたなと頷いていた。

「しかしあれは妄説だと聞いたが？」

「扱いが難しいから一般的にそう言われてるっただけだろ。俺は真実だと思っけどな」

「何の話？」

二人だけで話すなと割って入る。

一人蚊帳の外に置かれるのは、はっきりいって気に入らないとむくれて見せると、カミツロが説明してくれた。

「最後に確認された神子は、寿命とは関係なしに人為的に殺されたっという話だ」

「神子殺し？」

よもやそんなことがあったのかと驚く私に、ヴォルドが妄説とされる根拠を教えてくれた。

「国が廃れる時の風説だ。神子が現れていた時に挙ってそんな話が

上がっていたにすぎない」

「そうは言っけどな、だったらコルビラの消滅はどう説明するって言うんだ」

不満そうな顔でカミツロが反論すると、ヴォルドが鼻で笑った。

「あの国が消滅したのはフィーリ・ロレルアの逆鱗に触れたからというのが通説だろう？」

「フィーリ・ロレルアにそんな力の有無は、それ以前もそれ以降も確認されたことなんてないだろうが」

「その時神子が現れた国は、コルビラとは無関係の国だぞ。それをどうやってコルビラの者が殺すというんだ？」

「だったら神子が亡くなった時期とコルビラが消滅した時期が重なるのは、どうしてなんだろう？」

ヒートアップしてきた二人の様子を、私は一人料理を口にしながら眺めていた。

天上神<sup>フィーリ</sup>が絡んでいるなら、マーンに聞いたら早そうだなとは言わず、ただ眺め、聞き入る。

コルビラ、というのは国の名前だろう。

消滅、ということは、その国が地名として消えたのではなく、その土地そのものが消えたのだろうその真因が、フィーリ・ロレルアと呼ばれる天上神の力が、それとも神子を殺したことによるものなのか。

そのどちらかで、人々の間では意見が分かれているのだろう。

二人の言葉を聞きながら、私はふと思った。

そのどちらか、ということはないのだろうか。

神子を殺すという大罪に、フィーリ・シャは必ず怒るはずだ。

けれどフィーリ・シャ自身が制裁を加えることは出来ず、他の天上神に任せたとすれば……？

「その神子が殺されたから、セイ・リチェラ大陸に神子が現れなくなっただけ」

要するに、カミツロが言いたいのはそういうことだろうと、私が

口を開けば、二人は会話をやめ、私に視線を合わせた。

カミツロの考えが合っていたとして、けれど、これはこれで疑問が残る。

「そう考えたとして、500年前に力ある神官が確認されたのは何で？」

そこは考えていなかったのか、カミツロは言葉を詰まらせた。

そんなカミツロをしり目に、ヴォルドが先ほどの持論を引っ張り出す。

「神子を望む王がいたからと考えるのは？それが他大陸の王の方が強かった。だから神子が現れる前に力ある神官は死んだ」

「…その望むつていうのも考えものだね」

神子という存在を求めているのか、それともその存在に付随する力か。

あるいは…。

「もつと別のものを望んで、それが神子だった…？」  
ダメだ。

どうしたって首を傾げなくなってしまう仮説でしかなくなる。そう思っ頭を抱えると、なるほどカミツロが手を叩いた。

「陛下にとつてのレーン様と同じ訳か」

「………はい？」

意味がわからずに問い返す。

ヴォルドは目を見開いてカミツロを見ていた。

「女嫌いの陛下がレーン様だけは好いたのと同じかな、と」

「…それだとヴォルドが実は女を望んでたってこと？」

「そこは皇妃とか？」

皇妃で思い出した。

違う、子供だ。

ヴォルドは子供を望んでいた。

本来過程としてあるはずの恋愛や政略であろうとなかろうとあるはずの結婚もなにもなく、私は彼にそれを与えようとしている。

でも。

「私と神子をおなじにしないでよ。大体、ヴォルドは私を好いてなんていない」

好いてたとしてもそれは友人として！と声を大にして言った私に、カミツ口は生温い視線を向けた。



## 47 成された契約

友人と言い張ること、その可能性から最も遠ざかっていることに気付かなかったわけではない。

それでも友人と言い張るのは、結局、見たくない現実から目を逸らしているにすぎないのだと、当の自分自身がよく知っていた。目を逸らし続けることも出来ないことさえ。

「だ、そうだけど？陛下は実際のところどうなの」

面白がるかのようにヴォルドへと矛先を向けたカミツロに、思わず舌打ちしたくなった。

余計なことを。

多分、今の私はヴォルドの返答を軽く受け止めることなどできない。

これが契約を成す前ならば、何を言ったところで「ああ、そうですんだことなのに、きつと過敏に反応してしまう。」

唇を噛みながら耳を塞ぎたい衝動を抑え、軽く俯いた。

「好意はある。ヴェルデのようで愛しいとも思っな」

「…ヴェルデって。なんだ、兄弟愛かよ」  
ヴェルデ。

契約を成した時も聞いた名だと思ったが、どうやらヴォルドの兄弟の名前らしい。

私に対するヴォルドの感情が恋愛の粹にないことを知り、カミツロはつまらなそうに酒を煽った。

そんなカミツロに、ヴォルドが更に言葉を重ねた。

「だが、ヴェルデを思うのとは違うな」

「そりゃ、レーン様は弟殿下じゃないからな」

「そうじゃない。レーンを見ていると、時折触れたくてたまらなくなる」

火がついたように顔に熱が集まるのを感じた。

触れたいの意味に気付き、単純に好きだと言われるより何倍もの羞恥心を煽られる。

反射的に顔をあげて合わさったヴォルドの視線が、見たこともないくらい真摯で、それが更に顔の熱を煽った。

顔を真っ赤にしてうるたえる私をカミツロが小さく笑った。

「これが友人ですか」

冗談めかした物言いに、反論することも出来ない。

というより、もはや私の耳に届いていなかった。

じわりと浮かんでくる涙で滲む視界の中、ぴたりと合わさって絡め取られたように動かない視線。

覚束ない呼吸で酸素が足りないのか、頭の中が霞んで思考が鈍る。もとよりヴォルドとの間にある感情のことに關して、思考が正常に働いたことなどなかったけれど、いつも以上にぐちゃぐちゃになっているのを感じた。

「レーン？」

大丈夫かと問うヴォルドになんとか頷いて、小さく深呼吸して動揺を押し隠す。

けれど、それが消えることはない。

ふっと吐き出した息に、そっと言葉を乗せた。

「友人じゃなくて…それで？」

友人じゃなければなんだ。

今の言葉を聞く限りじゃ、兄弟としての情でもない。

ならばなんだ。

「それで？触れたくて、何？」

言いながら涙が零れ落ちそうになるのを必死に押し留める。

外されることのない視線を合わせたまま、私は言い募った。

「ねえ、何だっというの？好意はあって当然よね。それは強制されたものだもの。でも…でもただ好ましいで触れられる私は堪ったもんじゃないわ。私は…私はヴォルドにとって特別なんだろうけど、それは単に毛色の変わった小娘に興味がひかれたようなものでしょう？触れたいと思うのだって…」

今まで敬遠していた女の身体に興味がわいたのと同じではないのか。

そう言おうとして呑み込んで、ヴォルドに笑って見せた。

この時、私の頭の中から、カミツロの存在は消えていた。

カミツロだけじゃない、給仕の者たちの存在もだ。

だから馬鹿なことを口走っていた。

「契約も成した、子供もあげる。これ以上、私に何を望むっていうの？」

「契約に、子供…？」

「黙っている、カミツロ」

反応したカミツロを制して、ヴォルドは私を見たまま首を横に振った。

「何も。何も望まない」

静かな落ち着いた声に、涙がほろりと流れた。

流れる涙と一緒に、ぐちゃぐちゃとしていた思考も洗い流されていく気がした。

「何も…？」

「何も。あ、いや…一つあるな」

「うん？」

困ったような笑みに、なんだろうと首を傾げる。

「ここを出て行ったあとも、戻ってきてはくれないか？……………」

子供に会いに」

随分とあつた間に、吹き出してしまった。

ああ、でも、いいかもしれないと思う。

子供に会いに、戻ってくるのも。

そのついでにでも、ヴォルドにも会いにくるの。  
いいかもしれないと、笑いながら思った。

「うん」

穏やかな気持ちで頷いた瞬間、カチリと何か歯車が嵌ったような音が、やけに大きく響いたような気がした。

完全に、契約が成されたのだ。

私とヴォルドの間にどんな関係性におさまったのかは、今はまだ分からない。

けれど、それはとてもいいもののように思えた。

「それで、そろそろ聞いてもいいか？」

穏やかに笑いあう私とヴォルドの間に割って入った声に、ようやくカミツロの存在を思い出した。

「……………あ」

「契約と子供が何だった？」

せつかく敷いた箝口令を自ら駄目にした瞬間だった。

## 48 宣言と譴言

広まった噂に、朝から見知らぬ相手からの祝いの品が殺到した。全て返却、部屋に誰も入れるなの命令を侍女は遂行してくれたらしい。

昼まで部屋に籠って静かな時間を過ごし、黙々と針を動かして、昨日のうちに作れなかったアナクの服を作り上げた。

出来あがった服に、知らず脂下がる。だって楽しい。

これを着たアナクを想像するの。きつとよく似合うんだろうなあ。

怪我の痕は目立ったけど肌は綺麗だったし、ちょっと見た限りじや無駄毛も見当たらないし、女装のためにある人間だよね、あれは「あの、レーン様？」

気味の悪い表情を浮かべている私に、侍女が怯えたように声をかけてきてハッと我に返った。

「あ、はい？」

「その、ダミアン様からお約束の品をお揃えしたので、一度見ていただきたいと」

おお、揃ったのか、揃えたのか！

カツラにアクセサリー一式！

大まかな注文はしたけど、どんなのだろう。

むふふふと笑った私を侍女がまた怯えたように震えたのは見えない振りだ。

「昼食食べたらは是非伺いますと伝えてください」

服も出来あがって靴の準備もできて、カツラとアクセサリーを確

かめたら準備万端だ。

本当は今日アナクに女装させる気だったけど、この分では明日になりそうで、ヴォルドには申し訳ないが不意打ちで明後日に着せてもいいかもしれないと、にへにへと笑った。

アナクの女装で完全に現実逃避していた私は、このダミアンの誘いが、まさか全くの別の用件だとは考えもなかった。

「……………これ、どういうこと？」

「すまない。やめるとは言ったんだが」

侍女に案内されやってきた部屋は、ダミアンの部屋ではなかった。ダミアンが待っている部屋にお連れしますと侍女は言ったから、ダミアンの部屋でなくてもそれは別にかまわない。

かまわないし、実際ダミアンもいるからね。

嘘じゃないからいいけど、でも、これって所謂会議中なのではないでしょうか？

大きな机を囲む人々を見て、嫌な予感を覚える。

だって、こんな状況で呼ばれるのって一つしかないじゃないか。

恨めしげにヴォルドを睨んでいると、机を囲んでいた一人であるカミツロが蔑むように言った。

「事の真相をつて話だよ。契約を成したっていうのに、婚姻もせず、ただ子供だけをなんて話じゃ、ここの堅物どもが納得しないからな」  
「ドヴレチェンスキー公！」

咎めるように呼ばれても、カミツロは態度を改めることもなく鼻で笑う。

「子供が貰えるだけ有難いと思えて言う話だろ。レーン様はフィーリーシャ神の眷属だぞ。お前ら人間が如何こうしていい存在じゃないだろうが」

ピシヤリと言い切ったカミツロに他の見知らぬ男が言葉を荒げる。そんな口論を耳に、ダミアンが用意したヴォルドの隣の椅子に座る。

すると、ヴォルドが何かに気づいたように胸元へと手を伸ばして

きた。

すぐに離れて行く指に抓まれた物を見て、その理由に気付く。  
服を作っていた時に落ちたのだろう糸くずだ。

「何かしていたのか？」

「服作ってた。……ヴォルド着る？」

「やめておこう」

作っていた服がアナクへのお手製女装服だと気付いたのだろうヴォルドは、即答で拒否。

「……っちえ」

アナクもヴォルドもそんなに身長が変わらないから着れると思うたのに。

少々残念だ。

「で？皇妃だなんだっていう話？」

顔を近づけて喋れば、ヴォルドも自然と顔を寄せてくる。

口論の声が思いのほか大きくて、ヴォルドの声が聞き取りにくくてとった行動だった。

「無理だと言ったのだがな。聞く耳を持たん上に、ダミアンはレーンを正妃にと推している分、この馬鹿どもの味方だな」

ヴォルドの隣に立っているダミアンにちらりと視線を送る。

「ああ……。ヴォルドの女嫌い治ってないからねえ。でもいいじゃん、子供いればヴォルドはそれでいいんでしょ？」

「レーンはこの国に留まる気はないのだろう？契約で行動を制限しているわけでもなしに、私がレーンの行動を阻むことは出来ないからな」

「それ皇妃になってほしいって言うてるようにも聞こえるけど？」

「なる気もないレーンに強制する気はないというだけだ。どうやったところで、レーン以外の女は嫌悪の対象でしかないからな」

「ふうん。本当に何にも望まないんだ」

「私のたった一つの望みは、もう叶えてくれる約束をしてくれただろっ？私はそれでいい」

「…うん」

私も、それでいい。

なんだかくすぐったい気分になりながら小さく笑うと、大きな手で頭を撫でられた。

「イチャつきに来たんですか、レーン様は」

「うえ？」

いつの間にかおさまっていた口論の代わりに、机を囲んでいる者たち全てからじつと凝視されていた。

口をぽっかりと開け、啞然とした表情をしている者もいる。

その中で、カミツロだけは呆れたように苦笑していた。

「あ…」

イチャつきに来たわけじゃないけど、これは傍から見たらイチャつきに見えるのか。

いや、ただヴォルドが女嫌いだからインパクトがでかいんだ。

絶対そうだ。

ということではイチャつき発言はスルーすることにした。

突っかかるだけ墓穴を掘りそうだ。

それよりも、カミツロが称したようにこの堅物の馬鹿どもを黙らせることを先決としよう。

「先に言っておきます。皇妃になる気はありません。子供は、まあ出来ちゃったので産みますが、産むだけです。後のことは全てヴォルドに一任しましたので、私はこれっぽっちも介入する気はありません。もしこれ以上グダグダ言うようなら…」

一旦言葉を切って、私はにいつと口を歪めた。

「マーノン差し向けますけどどうします？」

フィーリ・マノレイの名に込められた力の壮絶さに、私の頬が引きつった。



## 49 初体験

フィーリ・マノレイ。

その名が示すところは、絶対的な畏怖だ。

フィーリ  
天上神としての存在感。

傍若無人に揮われる、逃れる術のない圧倒的な力。

その存在は人間たちにとって、時にはフィーリィシャよりも重きを置かれる。

わかつていたけど、机を囲んでいた彼らが示した壮絶な反応に、微妙な気分になった。

「差し向けるだけなんだけどな」

「フィーリィ・マノレイが現れるということは、本来死と同意義だからな。無理もない」

会議が続けられる状況でもなくなり、解散を言い渡したヴォルドに「休憩に付き合わないか」と誘われたお茶会。

ぽりぽりと用意をされたお菓子を食べながらぼやくと、ヴォルドが仕方ないと言った様子で頭を振る。

崇め奉ったところで何も利益を齎すこともないフィーリィシャと、現れたが最後殺されることがほぼ運命づけられていると言われているマーンンとは、マーンンのが怖いに決まっている。

フィーリィシャや他の天上神は怒らせなければいいが、マーンンは人間相手ともなれば本来無差別に破壊する。

無駄な崇拜より、堅実に自分の命が大事なら仕方ない反応だ。

「抵抗することもできず、弄り殺されるだけだもんねえ」

「そのいい例が二つもあれば、ああなって当然だろう？」

「尤もで。」

精神崩壊の生きた屍に、元の形も窺い知れないほどの肉塊。  
ある意味究極の選択だ。

「…そういえば、今日マーンン見てないや」

マーンンの話をしていて思い出した。

朝から現実逃避に忙しかったから、マーンンがいつものように現れなかったことにも気付けなかった。

いや、昨日の朝フィーリーシャのところに行っただけで、それ以降戻ってきていない。

丸一日戻って来ないのは初めてだ。

「それは、珍しいことなのか？」

「一緒に行動するようになってから初めて。まあ昨日フィーリーシャのところに行くって言うて出てったから。何か合ったら喚べばいいし」

「小間使いか何かか」

「似たようなもの」

だって従者だもん。

小間使いとそう変わらないだろうと頷くと、ヴォルドの表情が微かに固まる。

「うん？マーンン、私の従者だよ。護衛的な意味合いが多いけど」

「……そうか」

何かおかしいのだろうかと首を捻る私に、何でもないヴォルドは首を横に振った。

「レーン様、品はこちらでよろしいでしょうか」

項垂れているヴォルドを不思議そうに見ながらも、持ってきたアレクセサリーを私にだけ見えるように見せてくれるダミアンに、私は大きく頷いた。

「完璧！ありがとう、ダミアン！」

「いえ。お役にたてて嬉しいです。もう一つの方はお部屋の方に運ばせてあります。気に入ったのをお選びください」

生き生きとしたダミアンに、ヴォルドは疲れたように顔を背ける。

話からにしてどんな話題か察しがついたのだろう。

「じゃあアナクを私の部屋に呼んでくれますか？試着させなきゃ！」  
あんまりヴォルドを疲れさせるのも悪いので、明日着せようと思  
い、今日中に試着をさせるためにアナクを呼びつけることにした。

「この後すぐにでよろしいですか？」

「うん、お願い。じゃ、私部屋戻るね。お茶とお菓子ありがと」

「ああ、また」

ダミアンが案内役の侍女を呼び、アクセサリーの入った箱を渡す  
のを見て立ちあがる。

軽い挨拶をして、私はそのままヴォルドと別れた。

この時、ヴォルドの言った「また」が、晚餐の時であると私は無  
意識に思い込んでいた。

だから、昨日中途半端に終わった神子と力ある神官フイリン フイラーについてじっ  
くり議論を交わそうと思っていたのだ。

もちろん、カミツロも交えて。

「…また何してんの、カミツロ」

窓から見えるすぐそばに植木に、猿のように登っているカミツロ  
を見つけ、私は声をかけた。

「レーン様か。いや、ちよっと探し物をな」

「探し物…？手伝おうか？」

一体どんな探し物かは知らないが、木に登ったり大変なことだ。  
木登りはしないけど、“探す”という行為だけなら私にも出来そ  
うだからと申し出てみる。

「いや…、試しに手伝ってもらってもいいか？」

「構わないけど、用事すましてからでいい？なんならカミツロも見  
てくといいよ」

アナクの女装姿。

付け加えた言葉に、カミツロの顔ににたにたと厭らしい笑みが浮かぶ。

「楽しそうだな、それ」

「明日一日中着せるためのものなんだけどね。今日はその試着なの」窓から軽々とした動作で入って来るカミツロに説明して、侍女が持つている箱を指差す。

「ダミアンにいろいろ用意してもらってさ。化粧もするから様になると思うよ」

「へえ……」

廊下を歩きながらアナクの女装話に花を咲かせた。

どんな服を着せるんだとか、アイシャドウや口紅の色は何色にするんだとか、カツラはどんなのがいいとか。

何でか、カミツロは化粧とかについてやたら詳しくて、せっかくだから一枚かませるというカミツロにアナクの化粧をしてもらうことにした。

部屋に着いてクローゼットに仕舞ったお手製の服を引っ張りだす。

「これ着せるの！」

「シエーラ!？」

「ん？」

ぱつと服を掲げて見せた途端、カミツロが大声で何かを呼んだ。

「おまつ、こんなところに居やがったのか！」

駆け込むようにして頭を突っ込んだクローゼットの奥。

カミツロが引っ張り出してきたのは、薄桃色の兎だった。

「探し物って……それ？」

「そう。シエーラっていうんだ」

大事そうにカミツロの胸に抱え上げられた兎は、しゅんつとした様子で耳を垂れさせている。

可愛いけど、何か、異質な感じがした。

「……その子」

「シエーラっていう名前の、俺と誓約している地上神<sup>フィーシェ</sup>の精霊でな」

「シェーラ…」

精霊。

初めて見る精霊に、私は頬を紅潮させて感激した。

「かわいい！」

だってこの兎、両手のひらサイズなんだもん！

## 50 唐突な始まり

薄桃色の兎の毛並みに顔を埋めてもふもふ感を堪能していると、アナクとダミアンがやってきた。

もふもふと大きすぎず小さすぎずのジャストフィットサイズの兎に心奪われて、二人の来訪に全く気付かなかった私の代わりに、廊下で詳細を聞いていたカミツロが嫌がるアナクに服を試着させ、化粧まで施してくれていた。

「おお、お姉さま！」

ぐったりとした兎から顔をあげた私の視界に真っ先に映ったのは、私手製の葡萄色えびいろのチャイナドレスを着た超絶美女で、思わずお姉さま呼びしてしまった。

美形が多いこの国でも滅多に見られないだろう美女に、手伝いに呼んでおいた侍女たちは顔を赤らめて見惚れ、ダミアンとカミツロはあまりの似合いさに、声を殺して笑っている。

「似合うだろうとは思ったけど、犯罪級だね。にしてもカミツロ化粧うまつ」

「だろ？俺としては最高傑作な出来栄え！…カツラはどれにするんだ？」

問われて、数種類のカツラが並んだ机を見た。

どれも白に近い銀髪なのは、地毛がそれと同じ色だからだ。

触ってみた感じもの凄くサラサラで、兎のもふもふ感とは別にずつと撫でていたい感触だった。

「んー。これなんてどう？」

癖一つないロングストレートを選んで、アナクに被せる。

一昨日のように顔を赤くすることもなく、どちらかといえば蒼白

な顔色で諦めというより達観した表情のアナクは、すでにされるが  
ままだ。

「んでこれつけて…」

右側の髪を共布で作った大きめのコサージュと一緒にピンでとめる。

全体的なバランスを見るために立ちあがらせて、少し離れて見てから侍女同様、私まで見惚れてしまった。

「……アナク、産まれてくる性別間違えたね！」

引き絞まった体は、女と言うには筋肉がついていたけれど、でも不自然ではない。

胸はそれなりの大きさになるように詰め物がされていて、触った感じ本物みたいに柔らかいそれは、言われなければ本物と間違えること請け合いだ。

チャイナドレス特有の大きくスリットが入っているために見える足は、艶めかしいほど白い。

ダミアンが用意した、瞳の色によく似た鮮やかな黄色の宝石があらうてある、ピアスとブレスレットもよく似合っていて、頬にかかる髪を耳にかけながら悩ましげに息を吐くアナクに、フェロモンが垂れ流しになっているような気がした。

「化けるものですね」

感嘆した様子で呟くダミアンに、私はそういえばと首を傾いだ。

「ダミアン、仕事平気なの？」

「本当は昼食をと思ったのですが、こちらの方が気になってしまつて。もう少ししたら戻ります」

よくよくアナクの女装がツボにハマっていたんですね、ダミアン。わからないでもないけど、食事はしっかり取った方がいいのにと  
思いながら、私は侍女たちに使わなかったカツラなどの片づけを頼む。

私の声到我に返った彼女たちは、俄かに焦りながら片づけへと行動を移し、カツラや化粧道具などを持ってテキパキと部屋から出て

行った。

「脱がすのもつたいないなあ……」

試着なのだから、本当に着なければならぬのは明日だ。

「もう着替えてもいいですかね？」

「喋ると男だね」

せっかく詰襟で咽喉仏隠してるのに、これでは意味がない。

どうせだから裏声で喋らせるかと思案していると、ピイピイといつの間にか私の手から逃れていた兎がカミツロの手の中で鳴き始めた。

どこかへ逃げようともがく兎を抑えながら、カミツロは困惑げに兎を見る。

「シェーラ？どうかしたのかお前」

「何かあった、の……」

理由を問おうとして、それが不必要なことをすぐに悟った。

「ただいま、レーン」

ぎゅーっと抱きついてきたマーノンに「おかえり」と返ししながら、精霊でもマーノンが怖いのかと不思議に思った。

動物の本能的な危機察知と一緒にだろうか。

マーノンが現れた途端、カミツロたちか体を固くし、兎の鳴き声は大きくなっていた。

けれど相手が精霊だからか、五月蠅いくらいに鳴いている兎に気を止めることなく、マーノンは言った。

「リイがレーンを呼んでね？お迎えに来たんだ」

「お迎えってことは、ここ出てくの？」

てつきりフィーリーシャ自身が迎えに来ると思っていた私は、幾分か拍子抜けしながらマーノンに頭だけ振り返る。

「そうなるね。また戻ってくることはなるだろうから、一時的だけど」

子供のこともあるからそれもそうかと頷いた。

いつ生まれるかもわかっていないのだから、とりあえずフィーリ



「シャに会ってそこらへんのことを知って、ヴォルドにも教えなければならぬ。

「すぐ戻ってこれる？」

「さあ？そこはリイに聞かないと」

「そっか。∴とりあえず行こう」

こうしていても仕方がないし、女装計画がまた延期されるかと思うと悔しいが、フィーリーシャに会う方が先決だ。

そう思ってダミアンたちに挨拶をと振り返った時だった。

「パイ――――ツツツツツツ――！！！！」

兎が一際甲高い声で鳴き、薄い緑の球体のようなものが部屋の中  
 央に出来る。

それを見て、マーンが舌打ちをして私を抱きしめる力を強め、カミツロが兎に對し何かを叫ぶ。

多分「やめろ！」的なことだったとは思うが、それが音となつて私の耳に届くより早く、一瞬にして膨れ上がったその球体に、その場にいた私たち全員が呑まれていた。

## 50 唐突な始まり（後書き）

女装姿のまま巻き込まれなアナク…。

i n t e r v a l ?

「何も。何も望まない」

深い黒瞳から涙が流れていく様は、言葉で言い表せないほど綺麗な情景だった。

その涙を拭いたくても、手を伸ばして届く距離ではないなのかもどかしくて、胸の奥が疼く。

「何も……？」

確認するというよりは、口を衝いて出ただけのような言葉に一度頷こうとして首を振った。

何も、ではなかった。

ただ一つ、約束という形だけでもいいから欲しいものがあった。

「ここを出て行ったあとも、戻ってきてはくれないか？………

子供に会いに」

子供に会いになどとはこじつけた。

ただ、自分が少女に会いたいただけなのだ。

ヴェルデのように死すのではなく、生きて再び会えることを。

けれど、それを素直に口にする気はない。

それは必要のないことで、それを少女が望んでいないことも知っていたから。

そんなヴォルゲルドの願いに、少女は朝露に濡れた華のように笑って頷いてくれた。

その笑顔を見た瞬間、カチリと何かがはまったような音が大きく響いて、少女との間に風が吹くのを感じた。

柔らかな撫ぜるような風と、青い光が舞うようにヴォルゲルドと少女を包み込み、一本の糸のような光の端が、互いの右手同士に絡

まる。

霧散するようにその幻想が消えるのを眺め、笑う少女に笑みを返しながら、少女との間に確かな繋がりを感じていた。

少女の発言によって、契約や子供のことが知れ渡っても、ヴォルゲルドの心は寸分も揺れ動くことはなかった。

急遽開かれた宮廷会議も、ヴォルゲルドは表情一つ変えなかった。もう無理に引きとめる理由も、少女が離れて行くだろうことへの感傷もなく、目に見えないけれど確かな繋がりでだけで充分すぎるほどで、それ以上の何かなどヴォルゲルドにとっては聞くに値しないことだったからだ。

実際、少女にもそう誓った。

何も望まず、ただその存在に再び会えることだけを願うと。与えられる子供とともに。

そうヴォルゲルドが言つて、納得したのはカミツロだけだった。

しかし、彼らが躍起になって眷属の少女を正妃にと望んでいる理由がわかるだけに、自らに不甲斐なさを覚えて強くも出られない。

さてどうしたものかと、如何にして自分を言い含めようかと必死に弁を立てている者たちを見渡しながら、ヴォルゲルドは頬杖をついた。

そんな時だった。

部屋の中を見るなり不機嫌丸出しの表情をした少女がやってきたのは。

呼んだ覚えはなかったが、真つ先少女に対応したダミアンに、彼の仕業だと知った。

隣に設けられた椅子に座って、少女は小さな子供のように唇を尖らせる。

申し訳ないと思う反面、その仕草が何とも微笑ましく思えた。

ふと少女の服に付着していた金糸が目についたので、手を伸ばして取ると、少女は服を作っていたのだと答えた。

少女の目が爛々と輝くのを見て、その服がアナクに着せるためだ

るうものだとすぐにわかった。

今日アナクが女装しなかったのは、このためかと苦々しく感じる。着るかと聞いてきた少女に、ヴォルゲルドは即座に拒否を示した。つまらなさそうに少女は剥れたが、すぐに元の表情に戻して現状を確認してくる。

それに答えていると、話はやはり、昨夜のヴォルゲルドが立てた誓いへと戻った。

「本当に何にも望まないんだ」

淡々とした声色に、ヴォルゲルドは目を細める。

「私のたった一つの望みは、もう叶えてくれる約束をしてくれただろう？ 私はそれでいい」

また会えることがわかつているだけで、それだけでいい。

今はまだ。

「…うん」

どこか淋しそうに嬉しそうに笑う少女に、知らずその頭へと手が伸びていた。

昨夜のように茶々を入れてきたカミツロに、少女が周囲の様子に気づき気まずげに視線を泳がせる。

ぶつぶつと何か言ってから、少女は凜とした表情で婚姻の拒否と子供の譲渡の意を示し、極めつけに脅しつけた。

少女が放ったフィーリ・マノレイの名は、多分、少女が思った以上に脅しの効果が絶大だったことだろう。

何せ失神する輩まで出た始末だ。

強制的に会議は終了となり、ヴォルゲルドは少女と休憩がてらに茶に誘った。

案の定、少女はフィーリ・マノレイの名が持つ畏怖を正確に理解はしていないようだった。

その畏怖を感じずにいられる存在なのだから、やむを得ないだろう。

フィーリ・マノレイを自身の従者と言って憚らないのだから。

アナクの女装のために部屋へと戻って行く少女を見送りながら、ヴォルゲルドは右手をきつく握りしめた。

これが最初の別れだと、繋がった右手から感じていた。

ヴォルゲルドが執務室へと戻った直後、空間が犇めくほどの魔力が宮中、否、帝都全体を駆け巡った。

事態を把握する前に、ヴォルゲルドを異変が襲う。

煮え滾るように血液が沸騰する感覚、次いで、目の奥を鈍痛が走る。

一つ、また一つと増えていく異変に堪えること空しく、ヴォルゲルドはそのまま意識を失った。

i n t e r v a l   ? (後書き)

これにて第一章完結となります。

## レーンという存在

「よろしく、マーノン」

目の前に差し出された手を握る。

「よろしく、レーン」

この世界で自らを守る術を何一つ持たない非力な子供に、リーの願いとは関係なく与えられる全てを与えようと、柔い手の感触を確かめるように心の内で決めた。

その子供を初めて目にした時、あまりの異質さに肌が粟立つのを感じた。

フリーリン

神子と呼ばれる存在を何度か目にしたことはあるけれど、神子と同じ特徴を持ち得ながら何とも歪な気配を子供は纏っていた。

リーに自分の眷属だと紹介され、その異質さが示す意味を理解する。

フイリス・フイリーシャ

天上神フイリーシャであるリーに、本来眷属などいない。

それはリーにとって、神と称される僕ら全てが僕らにとつての精霊と同じで、神子や力ある神官が眷属と同意義だったからだ。

フイラード

無いはずのものを存在させる。

世界を覆う理の中で、それを捻じ曲げることなく、けれど在るはずのない存在はそれだけで歪だ。

それに加え元は異界の人間であったという子供は、存在自体が未だ不安定なようだった。

その不安定さはきつと、子供の腹に宿る二つの命のせいだろう。



眷属というからには、子供は精霊であって然るべきだった。けれど、精霊は子など宿せない。

ということは、半人半精霊といった状態なのだろう。

しかもその半人は異界の人間という意味での半人だ。

なんてややこしい。なんて面倒くさい。

歪さと不安定さを抱えた子供が、それでも世界から弾かれることもなくそこに在れるのは、何かと交わされた誓約のおかげだろう。

誓約の証である淡い翠の光の糸が、子供に絡みついているのが見えてくる。

でも、その誓約だけでいつまでこの世界に留めておけるか。

リイが僕を呼んだのは、子供をこの世界に留めておくために、より強い誓約をということだった。

「子が宿るなど想定外でな」

力なく頂垂れる銀狼姿のリイの頭を撫でながら、リイに抱きつくようにして眠る子供を見る。

子供の腹に命が宿らなければ、子供は今ある誓約だけで一生をこの世界で終えられたはずだった。

「起きてしまったことは変えられないからね。僕はこの子と主従誓約<sup>シユ</sup>でも交わせばいい？」

「お願いできるか？」

「リイのためなら」

鼻先にキスを落としながら言うと、リイはぺろりと唇を舐めてきた。

お礼のつもりなのだろうそれに笑いながら、眠る子供の顔を覗き込む。

ふと、子供の額に掛かる髪に手を伸ばして掻き上げた。

「神子の紋章<sup>ファイル</sup>…？リイ、この子…」

「守ってはくれぬか、レーンを」

主従誓約を交わすのだから守るのは当たり前ではないかと、怪訝に思った。

「害する全てから、守ってほしいのだ。この連理の森リ・フィルシアンのように」

乞うように言うリイに、息を詰めた。

そして納得する。

壊すことしか出来ず、守るというには相応しくないはずの僕を選んだ理由を。

「精霊になり得なかったレーンは、この世界では人間以下だ。精霊としての力も扱えぬどころか、人として魔術も扱えぬ。精々剣が扱えるかどうかだ」

その剣も、この細腕ではナイフくらいしか扱えない。

「他の天上神フイリじゃ例え人間だろうと、殺すことに躊躇いを覚える」

「その一瞬の隙が命取りになり得ぬと誰が言えるというのだ？余は……余はレーンを失いとうない」

あどけない寝顔を晒して眠る子供は、そこらの赤子と同じというわけだ。

誰かに守ってもらわなければ、死すことしかできない。

「この世界で最も非力な存在……か」

眠る子供の額の紋章へと口付けを落とす。

鈍く青く光るそれを確認してから、子供の耳へと口を寄せた。

「我が名はマノレイ。破壊ジョバムを司る第三の光。その名において、この者を主と定め、守ることをここに誓う。愛ウェイラーベ・ラルガトルすべき存在に祝福を」

もう一度額に口付けを落とすと、紋章から光が消えた。

「マーン……、よいのか？」

主従誓約の中でも一番強い最上級の誓約をした僕に、リイが驚く。「人間は嫌いだけだね。この子は守られるべき存在だから、守ってあげるよ」

過剰ともいえる力でもって。

リイの願いどおり、全てから守ってみせよう。

でも、守るだけでは味気ないから、色々と何か与えてみるのでもいいかもしれない。

破壊しかできない僕が、誓約の力を借りて、どれだけこの子供に

意味あるものを与えることができるだろう。

「んっ…」

むずがるようにリイの毛並みに一度顔を埋めた子供は、うっすらと目を開けて僕をその黒い瞳に映した。

「…誰？」

「僕はファイリー・マノレイ。マーンンって呼んで」

「…神様か」

事も無げにそう言っ、て、リイの毛並みに再び顔を埋める。

また眠ってしまった子供の髪を梳きながら、こんな扱いは初めてだと、リイと一緒に笑った。

## レーンという主

誓約を交わして主従関係になったことに、子供は「あ、そう」と漏らしたけだった。

それで、だから何？と首を傾げる始末。

この世界のことも、自分自身のことですら何も理解していない子供にとって、僕との主従関係など気に留めることではないようだった。

起きた時改めてした自己紹介の時に握手を交わしたくらいで、それ以降、子供が僕に対し何かしらの興味を抱く様子もなく、空が明るいまは神殿に籠っている。

その様子を結界の外、神殿が見渡せる木の上で眺めながら、この子供の関心は全て子供の兄であるという当代の神子フーリンに向けられているのだと知った。

そのためだけにこの世界に身を投じ、そのためだけに生きて行くうとしている。

その子供の凜とした美しいまでの姿勢が、僕にとっては不快だった。

多分、いや絶対、この子供は神子のためなら、自らの命さえ易々と擲ってしまうのだ。

そこに一片の躊躇いも、感傷も、なにもなく。

もしかしたらきつと、幸せそうに笑うのかもしれない。

守ろうとしている僕や子供を大切に思っているリイの事など、頭の隅にすら一度たりとも顧みることはないのだろう。

吐き気を覚えるほどの不快を感じながら、さてそれをどうやって切り崩そうかと考える。

僕が守ると決めたのは、レーンと呼ばれるリーの眷属である子供だ。

子供が救いたい神子ではない。

もし神子が子供を害そうとすれば、躊躇なく殺せるだろう。

僕にとつての神子はそれくらいの存在でしかない。

「マーノン、食べる？」

お腹が空いたのだろう。

結界の外に出てきた子供は、リ：フィルシアン連理の森でリーが採ってきた果物を

頬張っている。

その内の一つを僕へと差し出してきたが、僕は首を横に振った。

食べれない訳ではないが、僕は神は元より腹など空かせたことはない。

せつかくの食料であるそれらを子供から貰う気はなかった。

それ以上に。

「レーン、よく食べれるね」

「…吐くほどじゃないから」

見かけは美味しそうでありながら、それらの果物が如何に不味いかを知っている身としては、手を伸ばしなくなかった。

無言で咀嚼を繰り返し、二つ目に手を伸ばしながら、子供はあることに気付いてぱっと顔をあげた。

「ね、リーは？」

子供が神殿に入った直後からいなかったのだが、今になって気づいたらしい。

「出かけているよ。多分夜までには戻ってくると思うけど」

「…ふうん」

どこへ行ったのかは気にならないようで、戻ってくるとわかると興味をなくしたようにまた果物を食べ始める。

そんな子供に、木から下りて後ろから抱きついた。

リーから誓約について聞かされた時に、「加虐心旺盛な獣のような奴だから扱いに気をつけろ」と言われたからか、ピクリと揺れ固

くなる小さな体に僕は相好を崩した。

「怖い？」

「…別に。だってマーノン、私の従者になったんでしょ？」

可愛くないなと思いながら、子供から手を離して前に回り込む。

口の端についた果肉を拭ってやりながら、その額へと口付けを落とした。

その口付けに、一瞬だけ紋章が青く光る。

こうすることで、誓約の力を少しずつだが強められるのだ。

「…何でデコチュー？」

この口付けの意図をまるつきり理解していない子供は、口付けられた額を嫌そうに拭う。

「レーンは可愛いからね」

答える気のない僕はそう言っただけ口付けを落とした。

実際、嫌そうに顰められる顔は可愛い。

その顔をもっと見ていたくて繰り返すうちに、子供はすぐに慣れてしまつて、少しつまらなかった。

空が暗くなるまでまた神殿に籠った子供は、次に結界から出てきた時、一冊の本を持っていた。

「それは？」

すでに戻っていたリイが聞くと、神子の日記だと言う。

子供はずっとこれを探していたようで、満足げな顔をして笑った。そんな子供に、リイがこれからのことについて話し出す。

「余はこれから力ある神官を生み出すことに専念する。それまでのマーノンといしてほしいのだ」

「いいけど。…だったらこの世界を見てきてもいい？」

世界を知りたいという子供の申し出に、リイはさして反対することなく頷いた。

子供が寝てしまつてから、僕はリイに言った。

「外に出していいの？」

「旅をさせる気はないぞ？レーンにはここに来る前に寄った国にい

てもらう」

「人間の国？」

「そうだ。地上神<sup>フィーシエ</sup>の血が流れる王がいる国でな。さぞ丁重にもてなされるだろうよ」

それを世界を見て回れると心躍らせる子供に教える気は、毛頭もないのだろう。

なかなか食えないリイに、僕はただ子供の髪を梳いた。

翌朝、行ってしまったリイを見送ってから、とりあえず移動しようと思いを掛け、子供を抱き上げる。

そうして、リイから事前に聞かされていたヴィレンツアーレ神帝国へと飛んだ。

## 1 テトシエリック

セイシャーリを構成する大陸は四つ。

その内の一つである北に位置するセイ・ロストパース大陸は、天<sup>フ</sup>  
上神からは“最も穢れた大陸”として疎まれている。  
イーリ  
ドルテ・デリゲーア

そんな大陸のほぼ中央にあるのは、美しい翠に覆われた山岳地帯、  
テトシエリック  
“地上の楽園”。

何者であろうと侵すことの許されないその土地で、山賊を生業とする一族が暮らしていた。

「ハビ！また来たぞ！」

「……いい加減減らせ」

「無茶言うな！！」

山の奥深く、ひっそりと存在していた集落コツロード。

本来山賊を生業としているシェブレードという一族のみが暮らしている。

その集落の頭目であるハビは、木々の狭間から見える新しい人間らの多さに思わず半目になった。

地上の楽園の周囲は今、戦争という喧騒の中にあり、どうしたつてその中心に位置するこの場所も少なからずその影響を受けている。それが避難民だ。

戦禍を被り着の身着のまま村を逃げ出して、救いを求めて険しいこの山岳地に足を踏み入れる者も少なくない。



土地を侵すことがなければ楽園ともいえるこの土地だが、その“侵す”の基準を知らない者にとってはただの危険地帯だ。

放っておくこともできたが、どこにでも近所付き合いというものはある。

この場合、楽園に住まう動物や精霊たちとの付き合いなのだが、入り込んできた人間が何か仕出かせば、すべてシェブレージにしろ寄せが来るのだ。

仕方なく奥地にまで入り込めた者のみ保護することに決めたのだが、その人数がハビにとっては問題だった。

精々100人入り込めればいい方だと思っていたそれが、いつの間にもや500人近い。

それどころか日に日に増えるばかりだ。

一族は他に点在する集落の人数も合わせれば600人余り。

合わせれば1000人を超してしまふ。

「これ以上増えたら、片っ端から叩きだすぞ」

「出来ねえこというなって。んなことするくらいなら、シェリトゥーラ楽園の長に頼んでまた集落を大きくすればいいだろ」

副頭目の一人であるウーゴの言葉に、ハビは鼻で笑って一蹴した。「簡単に言っな。それでも限界ぎりぎりなんだ。これ以上やれば、俺たちは侵略者と見做されて殺されるのがオチだ」

頭目として楽園の長と契約を成しているハビは、人の中で誰よりもこの楽園の危険性を知っている。

どこまでが赦されて、どこから禁じられるのか。

もしも“侵している”と認識されたら最後、そこに待つのは悲惨極まりない死だ。

それを痛いほどわかっているからこそ、ウーゴのように楽観視などできるはずもない。

膨れ上がった、集落に見合わない人口。

誓約を交わすことで行動を制限しているとはいえ、感情まで制限できるわけではない。

目の前に目も眩むほどの宝があるとわかれば、手を伸ばしたくなるのが人だ。

そこにどれほどの危険が潜んでいるのか、一族であれば知っていることでも、避難してきた者たちは欠片も理解していない。

「一度山を降りる」

大本の原因を絶たなければ人口は増える一方だ。

受け入れるのも捨置くのも容易いが、その者たちが引き越す事の代償を支払う気は毛頭もない。

どちらにしろ、手を打たなければ一族に待つのは破滅だ。

「山を降りるって、お前自身が？」

「ヒューバを置いて行く。あとはお前とイストの判断に任せる。他の集落の連中もお前たち相手なら言うことを聞くはずだ。ただ、極力これ上の人間を受け入れるな。集落を大きくするなど言語道断だ」

「……わかった」

頭目の顔で命令を下すハビに逆らう気は、ウーゴには微塵もなくしつかりと頷く。

一族で頭目の命令は、生きていくために絶対だ。

「ヒューバ」

ハビの声に反応して現れたフェレットに似た精霊が、ウーゴの足元でじゃれつく。

「相変わらずちみっこいな……いつ……！」

男の拳にも満たない大きさに、踏まないように細心の注意を払いながら、足に纏わりつくヒューバを見てウーゴが言くと、がぶりとヒューバが足に噛みついた。

仲がいいことだと頷きながら、ハビは頭目専用である小屋の中へと入っていく。

専用といってもベッドと机があるだけの狭い小屋だ。

壁にかけてあった色褪せた浅葱色のマントと、ベッド下に隠してあった数枚の金貨と銀貨が入った財布代わりの小袋を手にとり、小屋から出た。

「頭目―――！つっつ！！！！ハビ頭目つっ！！！！！！」

未だウーゴとじゃれ合っているヒューバに、これからのための命令を下そうとした時だった。

勢いよくこちらに駆けてくる女に、ハビは軽く驚く。

今日入ってきた避難民への指示を任せていたもう一人の副頭目であるイストだ。

「どうかしたか」

危機に直面したというよりは、ただ想定外の事が起こって当惑してるだけのようだが、それにしても必死な形相で駆けてきたイストに問うと、ウーゴと共に小屋へと押し込められた。

狭いそこは大の男が二人も入れば息苦しいことこの上ないのだが、そこにさらにイストも入って来る。

「つちよ、これ！これ見て！」

そう言つて机の上に持っていたものを置く。

白い布に包まれたその中身に、三人は言葉をなくした。

まさか。

「イスト、これはどういうことだ」

「ここについた途端息絶えた女が持つてたんだ！さつき中身見て、もう仰天しちゃったよ！」

興奮した様子でイストがとび跳ねるのをウーゴが抑える。

それはそうだろうと、ハビは机の上の物をじっと凝視した。

早々お目にかかることは出来ない代物だ。

チチチツと鳴きながら、机の上に登ったヒューバが嬉しそうにそれにすり寄る。

「フィールド  
黒き卵……」

フィールド  
力ある神官を内包した漆黒の卵が、息衝くように青く発光した。

## 1 テトシェリック（後書き）

第二章は視点が変わって新キャラ尽くしで、造語オンパレード。  
これでも抑えたんだけどね。

## 2 黒き卵

狭苦しいことこの上ない小屋からウーゴとイストを追い出し、テ  
ーブルの上に置かれた人の頭ほどある大きさの卵へと視線を向ける。  
外殻の色だけで力ある神官の卵だと一目瞭然のそれは、断続的に  
青く光っていた。

その光に惹かれるように手を伸ばす。

けれど、直に触れようとして電流のようなものに弾かれた。

弾かれた手を見つめながら、ハビは徐に腰にさげていたナイフを  
引き抜く。

切りつけようと振りかざすも、ナイフの刃が殻に触れる少し前に  
大きく弾かれた。

「なるほど。卵期に殺せないというのは本当らしいな」

ただ触れようとした時の比ではない力に、ビリビリと痺れる手を  
抑え、じつくりと黒き卵を観察しながら、ハビは卵に擦り寄るヒュ  
ーバを見る。

「お前は どうして触れるんだ」

疑問をそのまま投げかければ、卵から顔を離してハビを見上げた。  
頭に直接響く男の声が、苦みを滲ませて言った。

「生気を送り込んでいるからな。これは相当衰弱しかけているんだ  
ろっ」

「…精霊の気を？」

普通の人の卵であれば、母に抱かれることで母から生気を貰う。

そもそも異種存在から生気を貰うことが可能なのかとハビが驚  
いていると、ヒューバは小さく笑った。

「力ある神官だからな。本来母体を通してフィーリーシャ神から気  
力ある神官だからな。」

を貰う。俺のは一時の代用だ。これは樂園シェリトゥーラの長に届けたほうが無難かもな』

「…そうか」

貴重な代物を手にするのはいいが、結局厄介事しか運んでこないのかと、ハビは肩を落とした。

手元に置いておいても持て余すことはわかっていたから、ヒューバの助言の通り樂園の長へと預けることに決めて、卵に布をかぶせた。

「俺は山を降りる。お前はここでウーゴとイストのサポートをしてやってくれ」

『了解した』

ひらりとテーブルから下りてヒューバは小屋の外にいるウーゴの下へと駆けて行く。

多分、先程のちみつこい発言が気に入らないのだろう。

ちみつこいではなくねちつこいの間違いだらなとハビは思いながら、卵をベッド下から引っぱり出した鞆にいれて肩にかけ、その上からマントを羽織った。

ハビが小屋から出ると、イストが駆け寄ってきた。

ウーゴとヒューバの姿が見えないところを見ると、恒例の追っかけっこをしているのだろう。

「頭目、アレどうするんです？私が育ててもいいですか？」

「人じゃ育てられないらしい。長に預けてくる」

鞆を指し示せば、イストはさすが力ある神官と驚きながらも頷いた。

「そのまま山降りられるんですか？」

「ああ。あとのことはよろしく頼む。ウーゴにも言ったが、これ以上人間は受け入れるな。極力追い返せ」

「わかってますよ。これ以上はさすがにちょっとまずいですもんねえ。…その卵で取引とかできないもんですかね」

ハビもそれを考えなかったわけではない。

黒き卵を材料に楽園の長との取引をすることを。

けれど、それをすれば忽ち侵略者と見做されることだろう。

この世界で最も神聖なるフィーリーシャの贈り物を貶すようなものだ。

そんなことを許すほど、アレらは寛大ではない。

その事に気付いているのだろう。

イストも本気で言ったのではないようだった。

「皆によろしく頼むな」

「はい。アンソニアに何も言っただけじゃないんですか？」

「……いや、必要ないだろう」

アンソニアの名に逡巡しながらも、ハビは首を横に振った。

数年前まで恋人であった女だが、もう何の関係もない。

未練ですら、ハビの中には存在していないのだが、相手にそれを残させることはするべきではないだろうとイストを見れば、少し視線を落とされ、淋しげに微笑まれた。

アンソニアとイストは姉妹だ。

全くと言っていいほど似ていない姉妹で、イストはすっきりとした短髪に、鍛え抜かれた鋼のような躰をもち、一族の中でも俊敏さにかけては随一の技量を持ち合わせている。

一方アンソニアは、長い艶やかな髪に女らしい丸みのある躰で、一族一の美人と持て囃されている。

見た目の通り性格も正反対の二人だが、仲は大変いい。

「アンソニアが何か言っていたか」

「頭目が気にすることじゃないよ。…いつてらっしゃい」

暗い表情が気になったが、それ以上の問いに頑ななほどの拒絶をイストから感じ、ハビは行ってくると背を向けた。

「モントラーク」

嘶きながら現れた羽根をもった2メートル大の猫のような精霊に跨る。

『長のところまで？』

女性というには少し低いアルトの声が、頭の中に響く。

「頼む」

『ははっ。相変わらず低姿勢だね。もっと上から目線でいいのに』  
「力を貸してもらっているんだ。お願いするのは当然だろう？」

揶揄するような物言いに、ハビが真剣に返すと大笑いされた。

『外の人間は、使ってやつてると思っらしいけどね。でもハビらしいや。そういう考えでないと、ここでは暮らしていけないものね』  
そう。

テトシエリック  
地上の楽園の外で、人間がいくら我が物顔で闊歩できたとしても、  
中では違う。

ここはいつだって、人間は下層の生き物だ。

それを弁えていなければ、あらゆる生き物から輦蹙を買い、すぐに生きていけなくなる。

侵す侵さない以前の問題だ。

『人間全てがハビたちみたいならいいんだけどな』

子供のような願いを込めた言葉に、ハビは何も言えずに黙りこんだ。



### 3 楽園の長

翼をはためかせ空を駆るモントラークは、集落があつた場所よりさらに最奥に位置する森の中へと入っていく。

楽園の長シェルトウーラがいるのはその森の中心部、というわけではなく、その地下。

木々の根が張り巡らされた洞窟のような場所だ。

その入り口までハビはモントラークに送ってもらい、そこから先は一人で歩いた。

一切の光彩が望めない地下で、けれど木々が淡く緑に光り、明かり代わりになっているために暗くはない。

階段状になっているそこを下へ下へと降りて行くと、一つの石造りの扉へと行きつく。

その扉の前で美しい石像のように佇むのは、人型のフィーシェ・ロウラだ。

深緑の髪に冷たい藍色の瞳をした地上神フィーシェは、ハビを見るなり聖母のように柔らかい笑みを浮かべた。

「お久しぶりですね、ハビ。珍しい物をお持ちになって、どういったご用件かしら？」

鞆の中にある黒き卵を見なくとも感知できるのは流石だなと感心しながら、ハビは率直に用件を口にした。

「これの母が亡くなつてな。人では育てられないと聞き、長にお願いできないかと思つたのだが」

「そうでしたか。ですが天上神フィーリの領域の物をこちらに持ち込むのは如何なものかと」

「…だめ、なのか？」

二つの神々の間に何か確執でもあつただろうかとハビは考えたが、思い当たる節はない。

そのような口伝も聞いたことがなく、困惑しているとロウラは首を横に振った。

「ここに持ち込むということは、それを探し回っておられるであろうフィーリーシャ神が、それを感知できなくなってしまうのです。ここは外界から隔絶された場所ですから」

「ああ…。しかし、このままでは死なせるだけだ」

「そう、ですね。…仕方ありません、こればかりは私の一存では決めかねます。お通しまするので、どうぞ、証を」

「感謝する」

一礼してから、苔に覆われた扉の前に立つ。

契約の証が刻まれた右手を扉に押し付けると、普段は消えている紋章が、薄い緑の光を帯びて手の甲に浮かび上がり、扉が音もなく消えてハビの頬を風が撫ぜた。

扉の向こうに顔を出したのは、地下とは思えないほどの広大な草原だ。

もう一つロウラに一礼してから、ハビは中へと足を踏み入れた。見上げればそこにあるのは天井ではなく、青々とした空で、雲も浮かんでいる。

草を踏みながら進んでいくと、草の色そっくりの髪を同化させるように横たわる子供を見つけた。

「シェリ、トウーラ…」

そつと呼べば、子供はパツと跳ね起きて、目を丸くしてハビを見上げた。

「フィーシェーラに名を連ねる人の子ではないか。珍しいこともあるものだよ」

無邪気に笑う子供は、こっちへ座れと隣の地面を叩く。

それに従い、ハビは子供の傍に腰を下ろした。

「黒き卵をもってどうしたのだ。まさかそなたらが力ある神官を召フィーラード

し抱えられるわけでもあるまいに」

「……」

「なんだ。そなたまだ神子<sup>フィリン</sup>が欲しかったのかえ？ほんに馬鹿だのう。妾と契約を成した時にそれはあり得ぬと教えたであらう」

ぐつと唇を噛み締めて俯くハビに、子供は笑い声を上げた。

小さな手のひらでハビの頭を撫でながら、まだ笑う。

「神子を求めてやまぬ者がフィーシェーラの子にはよく生まれてくるものだが、そなたには酷じゃの。シェブレイジは決して王にはなり得ぬからのう」

神子が欲しい。

それはハビの中で幼い頃から息衝く欲求だ。

理由など何もなく、恋情や愛情でもなく、ただただ欲しい欲しいと求めるだけで、それはハビを大いに苦しめた。

歳を重ねることに強くなっていくその欲求は、けれど、目の前の子供と出会う以前よりかは随分と小さくなった。

子供と成した契約のおかげで。

「それで？そなたは自分の身の程を弁えているからな。その卵を我がものにしようとは考えておらんはずだ。何を求めてきたのかえ？」

用件を問われ、鞆の中から布で包まれた卵を取り出す。

「人の手では育てられないと聞いた。どうか育ててやってくれないか」

「構わぬが……。ふむ、そうじゃの。等価交換と行こうではないか」

黒き卵を受け取りながら、子供は無邪気な笑顔を捨て、にんまりと口の端を吊り上げる。

卵を抱えて徐に立ち上がった。

「そこにおるのであらう、フィーエル。そろそろ姿を見せよ。無礼であらう」

「……タイミングをはかっていただけだよ」

不機嫌そうな声とともに現れたその男に、ハビは驚きに息を呑んだ。

濃藍の髪をした青年が、優雅な動作で歩いてくる。

初めて目にする天上神という存在は、人当たりの良さそうな笑みを浮かべていた。

「変わり映えしないね。ここも…君も」

「リイが変わり映えしたというなら、妾も変わりようがあるのだから。ところで、妾の結界を壊してまで入り込んだ理由は何ぞや」

子供にしては珍しく剣呑な光を湛えて、青年を睨めつける。

青年はそんな子供に笑みを崩さずに飄々とした態度で言った。

「リイの眷属が行方不明だね。探し回ってるんだ」

「…眷属？リイの…眷属、だと？」

愕然とした顔で青年を見上げる子供は、卵を持っていなければ今にも掴みかかりそうだった。

「最近出来てね。この大陸にいることはわかってるんだけど…」

青年から笑みが消え、凍りつくかのような凍てついた視線にさらされて、ハビの体はぶるりと震えた。

「ねえ、何か知らない？」

静かな怒気を孕んだ声は、やはりどこまでも冷たかった。

### 3 楽園の長（後書き）

マーノン再登場。

蓮さんと離れ離れで怒り心頭のご様子…。

## 4 子供と青年

「教えてもよいが……。先も申したぞ、無礼であろう！」

バシャツと勢いよく空から落ちてきた水が、天上神フイリスの青年を直撃する。

全身が水に濡れた青年を見て、子供は卵を抱えたまま楽しげに声をあげて笑い、ハビの足の間に腰をおろした。

「そなたらはほんに妾を軽視するがの。ここは妾の領分ぞ。リイ当人に何かあったのではないのなら、手順を踏め。馬鹿ものが！」

「……リイの、眷属じゃなければそうしてたよ」

リイのいうところをやけに強調して、青年はふるりと首を振って水を散らす。

それだけの動作で、水で濡れていた服や髪が一瞬にして乾いた。

「リイの眷属であるというなら尚のことであろう。そこらの天上神ですら手が出せぬ力を持っているはずだからの」

「そうであつたなら、僕が気にかかる必要などない」

子供の言葉をきっぱりと否定し、青年の顔が苦渋に染まる。

「あの子は……レーンは人間にすら力劣る存在だ。僕の加護なしに、身を守ることでだってできやしない」

命を狙われたが最後、あの子は死ぬだけだ。

話が見えてこないハビにも、青年がリイの眷属とやらをとて大事に思っていることは伝わってきた。

子供はそんな青年を困惑げに見上げていた。

「訳がわからぬ。そなた、リイの眷属だと言つたではないか。あのリイだぞ？ 天上神フイリス最高位の位を持つあのリイの眷属が、人よりも劣ると？ まさか、そう言っているのかえ？」

フリーリス。

その言葉で、ハビはリイというのがフリーリーシャ神であることを理解した。

ということは、リイの眷属とはフリーリーシャの眷属だ。

子供が驚き、今も困惑している理由がハビにも推測できた。

セイシャーリの神々の頂点に立つフリーリーシャの眷属が、人間より劣るなど、普通に考えれば有り得ないことだ。

それ以前に、フリーリーシャ神に眷属がいたという話をハビは聞いたことがなかった。

先程の驚きようを見る限り、子供も同じだろう。

「信じられないのはわかるけどね、二度も同じことを言う気はないよ」

「…妾を囚っているわけでもないようじゃの。だがのう。リイの眷属なのじゃろう？何故そなたが構う」

「絆が見えてないの？僕の主だからだよ」

「なんと…！そなた……、最上級主ゲネレス・ミシユ従誓約を交わしたのかえ！？なんとなんと…これは一大事じゃの」

あわあわとうろたえた子供は、そのまま力が抜けたようにハビへと背中を預けた。

天上神に関してあまり詳しくはないハビは、目の前の青年がその髪色から天上神だとわかるくらいで、どんな神なのかが全くわからない。

子供が青年をフリーエルと呼んでいたから、天上神第三位の神なのだろう。

かなり上位なのはうかがい知れたために、刺激はしないようにと口を閉ざし動かないでいることぐらいしか、ハビには出来なかった。「リイに眷属がいることより、僕が主を定めたほうに驚くのは何でかな」

心外だと言わんばかりに不機嫌そうな顔を作る青年に、子供は強く言い返した。

「そなた、神子フーリンにすら興味を抱かず、神と精霊以外を嫌悪しておつたくせによく言つわ！しかも最上級じゃと！？それが使えるのは後にも先にも一度きりだというに…！それに比べリイはの…神子のためなら多少の無茶はしでかしそうじゃからのう。理由を推察できえは、さほど驚くこともなからう？」

「レーンも眷属だから、半分は精霊だけど？」

嫌悪の対象ではないのだから不思議ではないだろうと返され、子供はしかし、納得するどころか啞然とした様子で青年を見た。

「半分：！？いや、それはもうよい。そなたと誓約を交わしておる時点で、純粋な精霊ではないことはわかっておったからの。いやしかし…なんとまあややこしいことになっておるのう」

子供は肩を落として、これからそれに巻き込まれるのかと嘆息する。

「リイの眷属だというに、リイを訊ねるところか妾を訪ねてきたということは、リイにも気配を辿れぬか…。最上級主従誓約を交わしているそなたでも辿れぬ挙句、そなたへの呼び掛けもないのならば、このように外界から隔絶された結界の内じゃろうな」

「どっかの馬鹿が意図的に隠しているんだろうことは、僕にだってわかつているよ。その馬鹿に心当たりはないかって聞いているんじゃないか」

ようやく話を元に戻せて気を抜いたのか、青年は子供の前に座り込んだ。

抱えた卵を撫でながら、子供は力なく乾いた笑みを漏らす。

「見ての通りじゃ。そなたの言う馬鹿には大いに心当たりがあるのう」

「それを教える気は？」

「教えてもいいが、妾の願いを聞いてたもれ？」

卵で口元を隠しながら、無邪気さを装って子供が笑う。

青年は軽く肩を竦めて言った。

「その馬鹿を始末しろとでも？」



「ちいと違うの。この者がすることに力を貸してほしいのじゃ」

この者と自分を指し示され、ハビはぎよつとした。

一体何を言うのかと子供を凝視していると、青年の視線が初めてハビへと向けられる。

「…これは？」

「フイーシェーラに名を連ねる人の子じゃ。どうかの？」

人の子という言葉に、青年の一瞬だけ顰められたのをハビは見た。殺されるのではないかと内心で恐れ戦いていると、青年の視線が子供へと戻される。

ついつと細められた目に、冷たいものが揺らいでいた。

「この僕に、人間に力を貸せと？本気で言っているの、地上神最高<sup>ス</sup>位フイーシェンラ」

それが怒りであることを感じ、冷や汗を流すハビなど気にした様子もなく、子供は無邪気な笑みのまま青年を見つめる。

「それくらい当然であろう？妾を只同然で使おうなどと、よもや考えておるまいな。いくら寛大な妾でも、無礼が過ぎれば殺すぞえ？」

## 5 決意

ピリピリとした空気の中、互いににらみ合ったまま動かない神々を前に、これも卵を拾ったせいかとハビが達観しはじめていると、先に動いたのは青年の方だった。

舌打ちをしてハビを見る。

「見たところ君と契約してるみたいだからね。そこらの愚図を相手にするより倍マシだろうけど、これになにをさせる気？」

「妾に卵を育ててくれと言ってきたのでな。それを引き受ける代わりに、愚図どもの争いをどうにかしてもらおうと思っておる。その争いにフィーリ・チャメトフが絡んでおってなあ。いくらフィーシエーラの子でも、人の身ゆえ無理かも知れぬが、そなたがいれば容易いであろう？」

等価交換とはこれかと驚きながらも、元よりそのために山を降りる予定だったので反論などもちろんない。

ないが、この青年と二人で何かをするというのは、ハビにとってどうも身の危険を感じざるを得ない気がした。

力を借りられるのは有難いんだけどなとハビが思っている間にも、神々は話を詰めていく。

「……チャート、ね。レーンを隠したのも？」

「そうかもしれないし、違うかもしれない。もう一方おかしな気配がちらついておつての。妾にも気配を感知させぬゆえ、上位の者とみてもまず間違いなからう」

「君に気配を感知させない上位なんて3人もいないじゃないか」

「そうさな。リイの眷属をどうこうしようなどと考えるのは、その中でも1人だけではないかの」

青年が押し黙り、両手で頭を抱える。

子供も疲れた様子で卵を凭れるように抱え込んだ。

「ねえ、どこが容易いつて？」

「妾もまさかアヤツだとは思ってなかったのな。今自ら言っ  
て思わず脱力してしまった」

あまりの脱力具合に、ハビはつい口を出してしまった。

「そんなに大変な相手なのか？」

「大変というより面倒なんだよね。こつちの話をこれっぽちも聞  
きやしない。……ねえ、これ本当に人間？」

ハビの問いに答えてから、青年は驚いたように目を見開いてハビ  
を凝視した。

子供は青年の言葉の意図がわからないようで、顔をあげて首を傾  
げている。

それから青年とハビを見比べてからああと頷いた。

「妾と契約を成しているからの。天上神フイリを前にしても畏縮したりは  
せぬ」

「地上神フイリシエズ最高位ならではってわけか……。これからのこと考えると楽  
だからいいけど」

物珍しげな視線を青年から向けられ、何ともいえない居心地の悪  
さにハビは子供に問いかけた。

「天上神の前では畏縮するものなのか？」

「するものというより、してしまうのもだの。一種の拒否反応とい  
ったところじゃろう」

「そう、なのか」

これは子供の契約者であってよかったと喜ぶべきか、それとも、  
天上神を前に平常心を保ててしまうことに不安を抱くべきか。

後者だろなど、ハビは乾いた笑みを漏らした。

すると、青年が最初に見せた人当たりの良さそうな笑みを浮かべ  
て言った。

「その様子じゃ、僕の名も知らなさそうだね」

「……申し訳ない」

フィーシェ 地上神と接することは多くとも、天上神はこれが初めてで、知識としても皆無に等しいハビは、言い当てられた事実<sup>に</sup>素直に謝罪した。

「うん。君ならいいや。…クオリーのことはリイに言ってみるよ。どうにもならないようなら、そっちの力も借りるから」

前半はハビに、後半は子供に言っ<sup>て</sup>、青年は満足そうに膝を打って立ち上がった。

「心得ておる。リイに黒き卵<sup>フィルド</sup>は妾が預かっておると伝えてたもれ」

「ああ。その卵はレーンを迎えに行けたら取りにくるよ。元々レーンに渡す予定だったものだし」

「リイの眷属にかえ？」

フィラード 「その力ある神官は神子に繋がっているからね。死なせる前に保護するんだよ」

ハッとしたように、ハビは息を呑んだ。

神子へと繋がる、卵。

なりを顰めていた欲求がぞろりと首をもたげ始める。

けれど、決して手に入りはしないことを痛いほどわかってもいて、胸の奥が悲鳴を上げていた。

シェリトウラ 「…楽園の長」

「なにかの、フィーシェーラの子よ」

ハビの言いたいことがわかるのか、仕様のないわが子をみる母のように優しい顔で、子供が見上げてくる。

頭を撫ぜ<sup>る</sup>小さな手のひらの体温を感じながら、ハビは瞼を閉じた。

「この…神子への欲求をなくすことは出来ないことはわかっている。だから…」

だから、少しでも望むことだっ<sup>て</sup>してないほうが本当はいいのだ。そうわかっていても、一つだけ。

一つだけと心に決めて、目を見開いて子供を見た。

「神子の姿を見てみたいと思う。この欲求が：俺が望むものが“何”であるのか。見極めてみたいんだ」

果てのない、感情さえ伴うことのない無条件の欲求だ。

その欲求に見合うものなのか、神子の姿を見ることができなくても、それだけは見極めてみたいと思った。

「いいのではないか？それはそなたの、そなただけの選択だ。身の丈に見合った願望であれば、妾は応援するぞえ」

いいこいいことといった感じに頭を撫でる手に、ほっと息を吐いてふと顔をあげると、青年の視線とかち合った。

じつと見つめてくる瞳に淋しさが滲んでいるように見えて、ハビが口を開こうとした時だった。

「名は？」

「あ：ハビだ。ハビ・フィシーラ・ブフナー」

名を問われたのだと理解するのに一瞬遅れて、答える。

青年は気にした様子もなく、「ハビね」と名を繰り返した。

「僕はマーノンでいい」

にこやかに笑う青年に、なんとかやっていけそうだとハビは胸をなでおろした。

後に彼がかのフィーリ・マノレイであるを知り、ハビが失神寸前まで顔を青ざめたのは、別の話。

i n t e r v a l ?

世界広しといえど、こうも立て続けに拉致られる馬鹿は私くらいだと思ふ。

豪華な、けれどヴィレンツアーレの自室とはまるで違う部屋の中、食い入るように窓の外を見つめる。

この世界に来て初めて見る海は、潮の匂いなんてかけらもなく、絵の具のように綺麗な青がただ揺らいでいた。

キラキラとした光が瞬く緑一色に視界が染まり、感じたのは鼻の奥が詰まるような圧迫感。

それが遠のいて瞬きをすれば、目に映る景色は荒れ果てた大地が剥きだしの荒野へと変わっていた。

「レーン、大丈夫？」

しっかりと私を抱きかかえているマーノンに頷きながら、どこに移動したんだろうと首を傾げたくなった。

マーノンやフィーリーシャが使う空間転移のような力のおかげで、耐性がついているせいか驚きはない。

むしろここどこ！？といった、この世界に来て何度目か知れない疑問が頭に浮かぶ程度だ。

「怪我はないみたいだけど…。不調があれば言ってね」  
「…うん？」

体の線に這うように撫でまわした手を離して、今度は額に口付け

られる。

どうやらマーノンたちの力とは違うらしく、安全性は全くもってなく、それどころか危険性抜群な力に巻き込まれたらしい。

まあ、傍から見ても暴走だとわかるような力の発現だったし、場所が移動したくらいで自分自身に何かあったわけではないのでどうでもいい。

「あ、そういえば他の皆は？」

あの様子では、部屋の中にいた全員が巻き込まれていたはずだ。けれど周囲にいるような気配は感じられない。

「さあ？」

…。

そうですねー、人間嫌いだもんねー。

マーノンに聞いた私が馬鹿だったと、マーノンから離れてぐるりと周囲を見渡してみる。

荒野のど真ん中のように、遠くに山が見えるくらいで木の一本も見あたらず、見えるのは土と岩ばかりだ。

「ここどこよ、マジで」

「ロストパース大陸。リイもこの大陸にいてね。レーンを連れてこようとしてた大陸なんだ」

「へえ…」

あっさり大陸移動してたわけですか。

大陸移動しただけでこうも見える景色が違うものなのかと、少しびつくりだ。

ヴェレンツァーレで見た景色は空からだったのもあるのだろうけど、とても幻想的な風景だったのに、今見える景色には幻想のげの字もない。

触れる大地はひび割れていて、空気も乾いている。

「あ、レーン。あそこに何かいるね」

岩陰の一つを指しながらマーノンが言い、私がそちらへと視線を向けると、人の足のようなものが目に入った。

まさか死んでないよね、と心配になりつつ恐る恐る近づいてみて、絶句してしまった。

「……つちよ、ダミアン!?」

岩に打ちつけたのか、それとも巻き込まれた力の暴走故か。

頭から血を流して気を失っているダミアンがいた。

「え…つちよ、どうしょ!?し、止血?いや、えー!?!」

「ちよつと落ち着こうよ、レーン」

お前は淡々としすぎだこの野郎!と、半ば八つ当たり気味に背後から近づいてきたマーノンを振り返る。

「人間の一人や二人、死んだところで気にする必要はないと思うけど」

「気にする!てかダミアンは宰相閣下だからね!?せっかく誓約交わしたのに、死なれちゃ私が困る!」

それ以前に大陸移動ってことは国外じゃん。

易々と連れ出していい人間じゃないって!

「しょうがないな…。元の場所に戻せばいいの」

「あ、うん。ヴィレンツアーレに戻せば、怪我すぐ治せるだろうし」

なんてったって、頭蓋骨陥没が多少の怪我と言ったのける国だからねと頷けば、マーノンはダミアンの傍らに片膝をついた。

「…二人はきついな。レーンはここで待ってて」

「わかった」

お願いしますと軽く頭を下げれば、優しく髪に指を絡めるよう頭を撫でられる。

いつものように額に唇が落とされて、その感触が離れた時には、マーノンたちの姿はなかった。

一人荒野へと残され、やることもなくぼけつと空を仰いでいると。何故か背筋が栗立って、反射的に背後を振り返った。

何かがあるわけでもなく、周囲へくまなく見やるも、栗立った原因となりそうなものはなく、気のせいかと息を吐いた瞬間。

「フイーエルがいるかと思ったら、なんだ、<sup>フイーリン</sup>神子か」

頭上から落とされた声に、ぞつとした。



バツと顔をあげた先。

いつの間に現れたのか、宙に浮く一人の女がこちらを見下ろしている。

風にはためく群青色をした髪に、つい先日読んだ神話の本を思い出した。

フィッシュエ  
地上神は緑の髪と青の瞳を持ち、フイーリ  
天上神は

「青い髪と緑の瞳……」

ふわりと、花弁が落ちてくるかのような軽やかさで、女が地に足をつける。

その瞳の色は、まさしく緑の色をしていた。

「おかしい。神子にしては気配が歪だ……。それにフイーエルの匂いが濃い」

目前にまで寄せられた美しい造作の顔が、嫌悪と不審に歪む。

「お前、何？」

細められた眼に込められた殺気に、これかと悟った時には遅かった。

私と変わらない細腕のどこにそんな力があるのか、がっとな首を絞められ、片手で持ち上げられる。

首だけでぶら下がるようなその状態に、呼吸がさらに困難になった。

「……つくう……っあ」

腕から逃れようと死に物狂いにもがいても、腕が外れるどころか、逆に首を絞める手に力が込められていく。

首を絞められたことで顔が肥大していくような感覚の中、どくんどくと血液の音と一緒に高い耳鳴りがしてくる。

その耳鳴りの中、女の声が臍げに届いた。

「誓約の糸……？それに神子の紋章。フイーラお前、フイーエル的主か。だとしたら……」

離された手に、どっと肺に空気が流れ込んでくるのを感じ、咳き込みながらも必死に呼吸をする。

心の内ではマーノンに助けを求めながら、口からマーノンの名が出てくることはなかった。

ただただ、呼吸だけを繰り返す。

安定していく呼吸とは裏腹に、意識だけは沈んでいった。

「これを失ったら、フィーエルとリィ、どちらか泣くだろうか」

残虐に笑う女の言葉も届かない闇の底へ。

## 6 やるべきこと

テトシエリック

地上の楽園から一步外に出ると、それまでの景色が劇的に変わる。境界を分かつように明確に、その差は歴然としていた。

「荒れたな……」

侵すことの許されない地上の楽園の一步手前ギリギリまで焼かれた大地に、ハビは眼を細めた。

抉り取られたかのような大穴を幾つも晒し、焦げたような臭いが未だに充満している。

この様子では高位魔術師までも繰り出した掃討戦か。

互いに互いを食い潰すまで終わらない過激さを感じ、身震いに跨るモントラークの毛をぎゅっと握りしめた。

「モントラーク」

「ユリスのところ？」

思いのほか堅くなった声に、モントラークは軽い調子で問いかけてくる。

「いや…、うん。そうだな」

本音を言うと言いたくなくて、言葉を濁すハビに、モントラークは氣遣うように言った。

『行きたくないのわかるけど』

「いや行く…。アイツに会わないと、俺のすべきことが見えてこない」

ユリスはハビの知る人間の中で、唯一今繰り広げられている戦争の中枢にいる者だ。

元々彼を大いに当てにしていたが、いざ会うとなると逃げたくなくなってしまう。

彼に会いたくないのではない。

彼の傍にいる人間に会いたくないのだが、そんなことも言ってもらえない。

「マーノンと合流する前に、ある程度でも戦況を把握しないと」「  
フィーリーシャ神のところに行くからと、一旦別行動となった天<sup>イリ</sup>  
上神の青年を思い浮かべる。

一緒に行動、というにはまだ何かと不都合があるために、ハビにとっては有難かった。

傍にいられない間に何かあっては困るからと、下級ではあるが主<sup>ゲ</sup>  
従誓約を交わしてくれた。

そのおかげで、喚べばマーノンに伝わるようになっていく。

『あのフィーリー・マノレイがねえ……。長の契約者でよかったね』

「喜んでいいところか？ 命の危機に曝されてる気がして、俺としては安心できないぞ」

『殺されはしないよ。そのための主従誓約だしさ』

カラカラと笑うモントラクに、だと良いがなと思いつながら、ハビはグローブに覆われた右手へと視線を落とした。

「契約者……か」  
シエリトウーラ

楽園の長との契約に、こんな特典があるとは聞いていなかった。そもそも契約に関してなど、まるで気にしたこともなかったのだ。ハビにとって、子供との契約はもっと形式的なものだと思っていた。

シエブレイジの頭目に就く者に受け継がれていく、伝統のようなものだと思い込んでいたのだ。

その前例に当て嵌まらずに、少しの特別扱いは受けただけ、それは……。

「ただ、俺の欲求を抑えてくれるだけのものだと思っていたのにな」  
子供が何を思っただけを与えてくれたのか。

わからないが、それに感謝こそ覚え、疎ましさなど覚えてはならない。

「全ては長の御心のままに」  
この大陸は、あの子供のための楽園なのだから。

「シェブレイジ頭目、ハビ・フィーシェーラ・ブフナーだ！門を開けろ！」

王城の厳つい門の前で、ハビが声を張り上げる。

シェブレイジの名に、門番は大慌てになって門を開けた。

すぐに王との謁見をと申し出れば、謁見の間へと案内される。

「シェリ克蘭カ楽園の守り人が何の用だ」

玉座に座る、燃えるような紅い髪を持つその男を認めて、ハビは口を開く。

「久しいな、ユリス。この国はまだ平穏を保てているようだな」

「…楽園の長の命か」

相変わらず頭の回転が早くて助かると頷き、息を吐く。

「元はコッロードに殺到している避難民をどうにかしたかっただけなんだがな。長より直々に命が下った。愚図どもの争いをどうにかしろ、とな」

「それはこちらとしても有難いな。周囲がこう煩くては、仕事が増えに増えて忙殺されそうだ」

忌々しそうに言葉を吐き捨てるユリスは、確かに前回みた時よりやつれた様に見えた。

「お前が欲しいのは情報か？手足か？それとも両方か？」

「ユリスには悪いが両方だ。ただ、手足はさほどいらない」

「ほう？」

「とにかく欲しいのは情報だ。それによっては手足の数は減らせるかもしれない」

護衛は、マーノンがいなくてもハビは自身を一人で守るだけの術

と力はある。

欲しいのは各国の内情を探らせるための手足となる人材のみだが、すでにそれらは放たれていることだろう。

「わかった。では部屋を移そう」

立ちあがったユリスの後に続き、結界の張られた部屋へと移った。結界は情報の漏洩を防ぐためのものだ。

護衛の人間までもをユリスは下げ、二人きりになったところで相好を崩した。

「あー。ヤバイくらいねみい」

数瞬前までの威厳はどこへやら。

机に足を乗せて座る姿は、恰好が恰好でなければ、酒場で見るだらけた親父そのものだ。

「外面が相変わらず厚いな」

「ミーシャの前では素だからいいんだよ。それより、この国の力を借りたとしても、お前が如何こうできる問題じゃないぞ、これは」  
ミーシャ、とはユリスの妻である王妃の名だ。

少々きつい感じの美女だが、とても話しやすい人だったとハビは認識している。

「ああ。天上神も絡んでいるそうだからな」

「…頭痛がするぞ、おい」

「天上神は天上神がどうにかしてくれるらしい。俺がするのは人間が起こしている争いの全体図の把握と、平定だ」

「その平定が難しいんだろうが！」

勢いのある突っ込みに、そうだろうなとハビも頷く。  
難しいことなどわかっている。

だがそれを楽園の長である子供に命じられたのだ。

やらないなどという選択肢が、ハビにははなから与えられていない。  
い。

「やらなければならないんだ、俺は」

もしも事に絡んでいるという天上神をマーノンがどうにかして、

その後もまだ争いが続けば、マーノンは煩わしげに言うだろう。

国ごとなくしてしまえばいい。

少し話しただけでもわかる、冷酷さと残酷さ。

「やらなければ、この大陸は地上の楽園を残し、全てが焦土と化すだろう」

それが冗談に聞こえないのが、ハビには何より怖かった。

## 7 ラムラ

子供が愚図どもの争いと称した戦争は、人間たちの間ではペリラ  
ドム大戦と呼ばれている。

ペリラドムとは悲愴に満ちたという意味だ。

事の発端は東部の二大国間で起きた王族殺し。

互いに互いを睨みあい隣り合った国に、それは決定的な争いの火  
種へと姿を変え、瞬時に燃え広がった。

争いの炎は果てることを知らず、今も燃え続けている。

「で、その裏は？」

手渡された資料を片手にハビが問うと、ユリスはこれだといって  
新たに書類を手渡した。

「この大陸で資源の枯渇なんて珍しくはない。他国に侵略してそれ  
を奪うなんてよくあることだ。今回もその類だと思ってたんだが、  
どうやら様子が違ってな」

「……フイットン融離魔力の増加？」

資料に書かれた文字に、眼を見開く。

相当有り得ない、非現実と言ってもいい言葉だ。

「どちらの国も、その傾向のある土地を有し、尚且つ他国にあるそ  
れを欲している」

「そんな土地が、本当に？」

「そんなものはない」

きっぱりと断言するユリスに、ハビは再び書類へと目を落とす。

一番下に、赤い字で事実無根と書かれているのを見て、なるほど  
なと眉間にしわを寄せた。

「どちらも他国にそれがあると信じ、欲してるわけか」



「そういうことだな。で、だ。実を言うとその2カ国間での問題じや終わらなさそうだな」

ざっと大陸図を広げ、赤いインクでユリスが書いていく内容に、ハビはガタリと音を立てて立ちあがった。

「まさか！」

「そのまさかだ。どちらも尻から狙われてるってことだ。勿体つけた理由並べて軍が押し掛けてもおかしくはない。何せ大同士が互いに互いを潰しあってるわけだからな。赤子の首を捻るより簡単な侵略になる」

大陸全土の争いに発展するのかと、愕然とした面持ちで椅子に落ちるように腰をおろしたハビに、ユリスはだから言っただろうと顔を顰めた。

「いくら楽園シェリクランカの守り人であるお前でも、今回は諦めたほうが無難だと思うぞ」

「そうも言ってられない。シェリトウラ楽園の長が事を頼んだのはあのフィーリ・マノレイだ」

フィーリ・マノレイの名に、ユリスが頭を抱えて机に突っ伏すのを尻目に、ハビはどうしたものかと頭を掻く。

はつきり言って、ここまで事態が大きくなっているとは思っていなかった。

避難民から聞いた話では、二大国の弔い合戦だという話しか聞いていなかった。

元々小競り合いが絶えなかった国同士だ。

大きな戦争に発展してもおかしくはない状態だった。

その二大国にたいしなんらかの処置を取り行えばいいと、ハビは軽く考えていたのだ。

「くそつ。ユリス、情報を徹底的に洗い出せるか？その後ろに控えてる2カ国の細部までの情報全てだ」

「出来ないこともないが、言っただろう。俺は今猛烈に忙しい」

「こちらが最優先事項だ」

厳しくハビが言い渡せば、ユリスは疲れた様に眼を閉じた。

「なら三日待ってくれ」

その申し出に、ハビはよろしく頼むと小さく頭を下げた。

ユリスが玉座に座を占めるのは、先の二大国　　メプスキー国  
とミンカシム国の国境沿いにある周囲を山で囲まれた小さな国、ラ  
ムラだ。

人の足では入るのも出るのも困難なこの国は、テトシェリック地上の楽園同様、  
侵されることが許されない国として大陸全土に知られている。

国交もなく、ラムラ国外でその実態を知る者は少ないが、この国  
は地上の楽園の属国のような立場にある。

本来ラムラは人に限らず、どんな生物でも暮らすのは不可能に近  
い土地だ。

神や精霊たち以外の、生きとし生ける全ての生物が必要とする大  
気中に含まれる融離魔力。

神々がそこに在ることで大気に残す残留魔力のことだが、この融  
離魔力がこのセイ・ロストパース大陸は酷く薄い。

ラムラに限ってはそれが極端に薄く、まだ未開の土地であった頃  
は死の土地とも言われるほどの土地だ。

歴代のラムラ王は、楽園の長と誓約を交わすことで力を得、その  
対価として精霊を人と対等に扱い、長の命延いては楽園の守り人  
であるシェブレージ頭目の命を遵守することを誓っている。

そのため、この国でシェブレージは楽園の長の使いとして丁重に  
扱われ、王はその命に従わなければならない。

ラムラ王が誓約によって得られる力は二つ。

一つはラムラで生活するために必要な融離魔力に変わる力を生成  
出来る力。

もう一つは。

「このっ…、群がるんじゃないっ！」

部屋の床を埋め尽くしている、ふわふわとした丸っこい生き物。

古代地上神フーシエの末裔、精霊モシエラルが部屋の中に大量発生していた。

「…相変わらずすごいな」

実体がなく触れられないので圧迫感のようなものは全くないが、なにせ量が多い。

視覚的煩わしさは半端なく、挙句それに群がられているユリスに、ハビは同情を禁じ得なかった。

しかしこのモシエラル。

ラムラ王にとっては大事な情報源だ。

閉鎖的な国であるラムラが何故あれだけの情報を有しているかと言えば、このモシエラルのおかげだ。

モシエラルは大陸中に散らばっていて、定期的に情報を共有し合っている。

ラムラ王は彼らから情報を聞き出す力を持ち、それらの情報を纏め上げる命を長から受けているのだ。

「寄るな！喋るな！少しは黙れないのかよ、お前ら！？」

大量に群がられているだけでなく、一斉に喋りかけられているのだろ。

頭の中に響くその声は耳を塞いでも仕方ないのだが、ユリスが耳を塞ぐように頭を抱えるのを、ハビは苦笑しながら見つめていた。

## 8 ラムラ王とモシエラル

ころころ、ふわふわ。

ふわふわ、ころころ。

数は減つても未だにユリスの周囲で床に転がったり、浮いたりしているモシエラルの一匹が、パツカリと口を空け小さな円筒の石を作り出す。

それを啜えて、同じように他のモシエラルが作った石が積み重なっている場所にぽとりと落とした。

ユリスはその中の一つを掴んで口の中に放り込み、咀嚼しながら掌を翳すことで紙に情報を書き写していく作業を繰り返している。

モシエラルが作り出した石は、モシエラルたちが見聞きした情報だ。

個々の情報許容量が少ないモシエラルは、互いに情報を共有することと同じ情報を持つことがない。

よって、個々で作りに出された石に宿る情報は、全て違うものだ。

常時であればこの三分の一で済んだであろう石の山に、ユリスは眉間にしわを寄せた。

「胸焼けがする……」

ぼそりと零れた愚痴に、ハビは出来あがった書類を整理していた手を休め、紅茶を淹れてやった。

「これでも飲んで誤魔化せ」

「……お前も食べるか」

積み上げられた石の一つを抓んで差し出してくるのに呆れながら、ハビは首を横に振った。

「俺が食べたところで単なる石だ」

ユリスのように、モシエラルの石を食すことで石化された情報を解読する力はない。

ハビにとつて、モシエラルの石は石でしかなく、それ以上でもそれ以下でもないのだ。

何かしらの付加価値があるとすれば、その色合いがそこらの宝石よりよほど深みのある綺麗な深緑だということだろうか。

本気で食べさせようとはユリスも思っていない。

一度石へと変えられた情報はすでにモシエラルたちの中にはない。もう一度作り直すなどということは出来ないのだ。

手の中の石を弄りながら、ユリスは甘い蜜の香りがする紅茶を一気に咽喉に流す。

「せめて情報を事前に選別できたらいうことねえんだがな」

石に変えてしまえばそれがどの情報なのか、モシエラルたちにもわからない。

作り出した石を一ヶ所に集積する習性があるために、作り出した時点で選別してもすぐにモシエラルたちによつてごちゃ混ぜになる。結局のところ、ユリスは黙って石を食べるしかないのだ。

「御託はいいから、手を動かせ。ついでに喋るためじゃなく、食うための口もな」

「わかつてる」

苦渋に満ちたユリスの顔に、ここ数ヶ月、下手したら一年以上、まともな食事をしていないのだろうことがわかったが、事は一刻を争う。

情けでやめていいとは、到底ハビも口にできない。

けれど、モシエラルの石には微力ながらも魔力が宿っている。

それだけしか食べていないからと言って、気分が悪くはなれど、その魔力のおかげで栄養面はばっちりだ。

「くそつ、黙れ！」

足元をころころと転がるモシエラルを蹴りながら、しかし実体がないために当たることではなく、喚き散らすユリスに、これ以上作業

を滞らせないために仕方がないなとハビは指を鳴らした。

パチンつとなった音に床から顔だけをのぞかせたのは、ハビが誓約している精霊の一匹であるファンパニアだ。

狼のような顔と、狐のような尻尾、しなやかなチーターのような体をしたファンパニアの性格は、一言でいえば無関心に尽きる。

「頼む」

『…面倒』

素気ない言葉だったが、ハビの頼みを一度として断ったことはない。

というより、断るという選択肢を考えてすらいらないようだ。

再び床へと溶けるように潜り込んだファンパニアを見て、ユリスへと視線を戻せば、たちどころに一か所へと集められていくモシエラルが目に入った。

月見団子のように積み上げられたモシエラルを床から全体を現したファンパニアが、傍に伏せてふっさりとした尻尾で包み込む。

「これで静かになったか？」

「……やるならもっと早くやってくれ」

「ファンパニアが戻って来てなかったからできなかったんだ」

集落の一つへと遣いに出していたのだ。

尻尾で包むだけで、それ以外にやることのないファンパニアは、くわつと欠伸をもらしてそのまま眠ってしまった。

「あー…、これで大分楽になった。何であんな五月蠅くなったんだ、こいつら」

「すまん。楽園シェルトウーラの長に会ってきた足でそのまま来たからな、多分中てられたんだろう」

モシエラルと意思の疎通ができるユリスは、モシエラルからは一番大きな仲間のような認識をされている。

楽園の長だけでなく、フィーリ・マノレイまでもの気配を僅かばかりに纏ったハビは、モシエラルにとって畏怖対象となり、ハビを避けるようにユリスの周囲に集まった。

「どおりで恐いだ、助けてだ言われるわけだ。…そうだ」

何かを思い出したユリスが、新たに紙に情報を書き写していく。情報を紙に書き写したからと言って、ユリスの中からその情報が消えるわけではないために、ユリス自身が覚えていれば何度でも書き写すことが可能なのだ。

「二日前の情報だ。今の今まで忘れてたんだが、恐い助けてで思い出した。怯える最上級精霊ブランドフインスと人間の男が突如として、デミトリムに現れたそうだ」

「最上級精霊…？男が捕まえた…というわけではなさそうだな」  
手渡された紙面に目を通しながら、ハビは眼を瞠った。

「シェーラ？」

「そう呼ばれていた。問題は男の方だ。その瞳の色が、澄んだスカイブルー」

その色が示すことは唯一つ。

「他大陸のフィーシェーラが何故この大陸にいるんだ」

## 9 外れた理

青と緑。

それは神だけが持つことを許される、神のための色。

「マノレイ」

この事態に、ハビは即座にその名を呼んだ。

他大陸のフィーシェーラがいる。

それは、人の争いになど比べ物にもなりはしない事態だった。

世界の均衡を崩すこともありうる、大惨事だ。

それこそ、人の身であるハビにとっては荷が勝ちすぎる。

「…何か用？」

現れたマーンンは、恐怖から動けないでいるユリスとそれとは対照的に悠然と眠り続けているファンパニアとを見比べてから、ハビへと声を掛けた。

「他大陸のフィーシェーラ。あれは件の眷属殿と何か関係が？」

「フィーシェーラ？ああ、そういえばあれのせいで飛ばされたんだっけ」

「知って、いるんだな？」

「それがどうかしたの？」

気の抜けるほど邪気なく首を傾げられ、<sup>ファイリ</sup>天上神とはこういうものなのかとハビは頭をか抱えなくなった。

<sup>フィーシェ</sup>天上神と地上神の違いをまざまざと見せつけられたような気さえした。

「何も、知らないのだな」

その言葉が癪に障ったのか、マーンンの瞳に一瞬だけ怒りと侮蔑の色が浮かんだ。



言い募るようにハビが声を荒げたことで、それもすぐに消えたけれど。

「フィーシェーラは他種のフィーシェーラと接触してはならない！これは世界が定めた理だ！！」

「…それは、フィーシェンラが？」

「契約の時に」

「そう」

言葉が途切れ、重たい沈黙にさらされる。

ファンパニアの寝息だけが、大きく部屋に響く。

「僕からフィーシェンラに伝えておく。君はあれに頼まれたことだけに集中しな」

きっぱりとそう言って、その場から立ち去ろうとするマーノンをハビは呼びとめた。

「待ってくれ」

「…何？」

「現れたのはデミトリム。西部にある島国の一つだ。内陸との国交もなく移動手段はトレバランか飛翔が可能な精霊のみ。…今回渡ってきたフィーシェーラにその手段は？」

「空間を歪ませることができるとの精霊を使役してる。飛翔は容易いだろうね」

空間を歪ませる。

そうだ、少し考えればわかることだと、ハビは舌打ちをもらした。飛翔能力では大陸を渡ることなどではしない。

大陸同士の干渉が不可能なのは、空間を意図的に閉じているためにおこっている現象。

大陸間を渡るためには、空間を捻じ曲げて直接つながなければならぬ。

それができるのは、神が持つ空間歪曲転移の力のみ。

そしてその力と同等の力を持つシェーラという名の精霊は。  
「樂園の長に伝えてくれ…」

吐き出した吐息はどこまでも重く沈み込んだ。

マーンンに伝言頼んだ後、ハビはユリスに頼んで一つの鍵を受け取った。

ユリスの私室にある扉の鍵だ。

「エム力が必要か？」

「いや。以前と内部構造は変わっていないのだろう？」

「少し入れ替えはした。何かあってからじゃ遅いからな。連れてけ」

「なら有難く」

ユリスが喚ぶと、優雅な白猫姿の精霊 エム力が現れる。

大きめの耳につけられた鈴が、身動きするたび清んだ音を鳴り渡せる。

「よろしく頼む、エム力」

チリンツと鈴を鳴らしながら、エム力は見事な跳躍でハビの頭に飛び乗った。

爪を立てられることもないので、ハビも慣れた様子でそのままにしてユリスを振り返った。

「食事はいらない。そっちが終わったら呼んでくれ」

「わかった。ああ、ミーシャに挨拶くらいしてけよ」  
後ろ手に手を振って部屋を出る。

軽い音で扉が閉まって、空の明るさに目を細めた。

直接中庭へと続く廊下は、咲き誇るリシアアの香りで満ち溢れている。

シェリクランカ  
「楽園の守り人様」

「…インミか」

か細い声をたどれば、庭の中でリシアアの花に埋もれるように、淡い金の髪を揺らして頭を傾いだ少女。

ユリスの一人娘だ。

「お久しぶりです。父様に御用が？」

「そうだ。…リシアーを？」

「はい。今の時期が一番美味しいですから」

ジャムにするのだと摘んだ花が入った籠を覗かせて見せる。

薄く紅色に色づいた花が、潰れないようにと重ねられていた。

「リシアーのジャムか。茶は？」

「華茶はもう少し花が開きませんと」

その方が香りが華やぐのだという。

「そうか」

「楽園の守り人様はリシアーの華茶をお好みなのですか？」

「好きな部類ではある」

白い花に手を伸ばして、ハビはインミに気付かれない程度に顔を顰めた。

「ミーシャ殿はどちらにおられるか、インミは知っているか？」

「母様でしたら、今日は円卓会議のために円卓の塔におられると思いますわ」

「塔か。ありがとう」

武骨な手で礼代わりに頭を撫ぜれば、インミは顔を赤らめて照れたように顔を伏せた。

「エムカ、案内を頼む」

ハビの頭に乗っていたエムカが、ふわりと地に足をつける。

なあと啼いて先を行く白猫に、ハビはインミの頭をもう一撫でしてその後を追った。

城というよりは大きめの豪邸といったラムラの王城の象徴ともいえる“円卓の塔”は、宙に浮いた円筒の建物だ。

その入り口はその時々で場所が変わる。

その場所がわかるのは、王と王妃、そして彼らと誓約している精霊たちのみだ。

今日の入り口は中庭にある噴水らしく、そこまでやってきたところでエム力がハビを振り返る。

飛び込めと目が語っていた。

「濡れやしないか」

知ったことかというように顔を背けられ、エム力は先に飛び込んでしまった。

後を追う以外ないので覚悟を決めて、ハビも噴水に足を踏み入れた。

「……」

全く濡れた様子のないエム力を恨めしげに見下ろしながら、濡れて張り付く髪を掻き上げる。

螺旋階段の踊り場で滴る水をどうしたものかとハビが立ち尽くしている、エム力が何かに気付いて階段を駆け上がったいく。

そのエム力を抱いて、金髪の美女が下りてきた。

「あら、濡れてしまったの？」

「……ミーシャ。久しぶりだな」

「ええ、お久しぶり。タオルを持ってきて正解だったわね。エム力ったら……」

持っていた大きめのタオルを手渡して、ミーシャは小さな子を叱

るようにエム力の額を突いた。

「その様子だと他にも入口があったのか」

「玉座の背後の壁に一つ」

それはそれで入るのは無理がありそうだ。

王の象徴である玉座に他国の人間が近づくのは、あまりいいものではないだろう。

そう考えるとエム力の采配が正しかったという訳かと、ハビはミーシャに咽喉を撫でられ気持ちよさそうに目を細めるエム力を見た。素直に称賛できないのは、濡れネズミにさせられたからか。

「会議の方はいいのか」

「貴方が来たのがわかったから休憩にしたのよ。…シェリクランカ楽園の守り人である貴方が来たってことは、シェリトゥーラ楽園の長は人間の排除を？」

「ミーシャ。長は野蠻ではないんだ」

咎めるように声を強めたハビに、ミーシャは肩を震わせて俯いた。胸の下で組まれた手が、甲に爪を立てるほどに力が籠っているのが見ていて痛々しい。

「…そう。そうね。けど、各地からよくない報告ばかり上がってくるものだから」

モシエラルによってもたらされる情報だけが、この国にある情報のすべてではない。

当然モシエラルの情報が主体とはなるが、それだけではなく各地に人や精霊を潜りこませ、そこから情報を得ている。

王であるユリスがモシエラルから情報を引き出し整理する役目を担っているように、王妃であるミーシャは上がってくる報告とそれらを照合し、より情報に深みを増させる役目を担っている。

「ラムラの役目は情報の収集と管理だ。それ以上のことを気に揉んでも仕方ない。あとは俺の役目だ」

「…ハビ」

「安心してくれとは言わないが、外でどれだけの争いがあるうとここに手が下ることはない。だから…」

「わかつてる。わかつているわ。…やることがあるのでしょ？もう行つて。食事は後で持つて行くわ。どうせあそこに籠るのでしょ？」

腕の中のエム力を受け取り、ハビは背を押す力に従って出口である扉のドアノブに手をかけた。

この塔の利点は、出口が思ったところに繋がるということだろうか。

勿論、繋がるのは王城の中だけだが。

ハビが扉を開けると、そこはユリス 王の私室だった。

中に入って振り返れば、扉の向こうはまだ塔の内部へと繋がっていて、ミーシャが憂鬱そうな顔で、けれど少し引きつった微笑みを浮かべて手を振った。

それにハビも小さな微笑みを返し、扉を閉める。

ドアノブから手を離れた時には、ハビの顔からは一切の感情が消えていた。

足早に部屋を突っ切って、寝室へと続く扉とは別の飾り気が全くない古びた扉の前に立った。

ユリスから預かった鍵を鍵穴に挿し、左に二回、右に三回、もう一度左に一回半回して鍵を抜き取る。

何の変化もないように見えるその扉に向かって、ハビは躊躇なく右手を突っ込んだ。

「ハビエル・フィーシェーラ・テンベット・ブフナー」

真名に呼応して右手が熱くなるのを感じ、そのまま体ごと扉の中に入り込む。

抵抗なくすり抜けたその先に、厳格な図書館を思わせる内装で、ずらりと本棚が並んでいた。

本棚に並ぶのは、全て史書だ。

いふなれば、ここはラムラが得た全ての情報が詰まったデータバンク。

セイ・ロストパースの歴史を内包した部屋だ。

ユリス達は史書室と呼んでいる。

「エムカ。フィート6982年からの記録は？」

「こちらだ」

今まで喋ることのなかった白猫の口から、朗々とした声が発せられる。

この部屋はフィーションラが造った異空間の中にある。

その為か、獣型の精霊とも誓約することなく会話をすることが可能だった。

「この棚からあちらまでが90年までがそうだ。91年からはまた別のところになる」

「わかった。ここらを調べるから休んでいてくれていい」

「そうかい？ならそさせてもらおう」

本棚の上に登り、エムカは丸くなった。

ゆらゆらとゆれる尻尾を見て、ハビは表情を緩めたがすぐに引き締めて、本の背表紙に書かれている年号を指で追った。

目当ての本を見つけ、それを引き抜き、その場に腰をおろして本を開く。

食い入るように、ハビは文字を目で追い始めた。

同じ頃、大陸の端で世界は歪み始める。

終焉を誘いながら。

## 10 史書室（後書き）

ラムラの王、王妃は日本で言う天皇みたいな象徴的な感じ  
政務に口を出す権限は一応持っているけれどほぼ民主政  
つてことを6、7話くらいに入れるはずが忘れてた（爆  
まあなくてもいっかと加筆する気は今のところないけど、一応こ  
に書いておきます



i n t e r v a l ?

「まあお目覚めになったのですね！もう三日も眠り続けてらしたから、お目覚めにならないものだとばかり思ってたわ！それにしても神子様は本当に双黒なのでございますね！瞳の色も漆黒だなんて素敵すぎますわ！お髪の色も深い黒で初めて見たときは感激しましたけど、それ以上の感激ですわ！あ、神様が起きたのですから医師を呼ばないといけませんわね。少しお待ちください。首の傷も見えていたかないといけませんから」

まだ目覚めきつていない頭で体を起こした途端開始されたマシンガントークに、私は呆気にとられて神子様呼びに突っ込むことも出来ず、医者を呼びに部屋を出ていく少女を見送った。

ここどことか、神子じゃねえとか、アンタ誰とか、普段なら浮かんでくるだろうそのどれもが、頭の奥で沈殿して姿も見せない。

「……」

ぼんやりとしながら肌触りのいい服に目をやってから、違和感を抱いた。

ハツと部屋を見渡す。

違和感の正体にベッドに縛れるように倒れ込んだ。

見上げる天井ですら視界に入れなくなくて、シーツに顔を埋めて泣きたくなった。

鼻腔をくすぐる匂いに、眉間に皺を作る。

同時に、自分自身に苛立ちを覚えた。

ヴィレンツァーレという国に溶け込んでいる自分に。

顔をずらし、視線だけで部屋の中を見る。

ヴィレンツァーレの基盤が中世の西洋であるなら、ここは古代の

中国か。

はつきりと明確に分けるとすれば、それほどの違いがこの部屋からでも窺えた。

照明や扉や窓の作り、箆笥のようなものから小さな置物一つとっても、ここはヴィレンツアーレとはあまりに違いすぎた。

これも大陸の違い故なのだろうか。

わからないけれど、私はヴィレンツアーレの使い慣れた私室がとても懐かしいと思った。

「神子様！」

先程の少女が駆けこんでくる後ろから、初老の女性と…。

「…っ！」

「神子様？」

大声をあげたつもりが、空気のかすれる音しか聞こえてこなかった。

まさかと咽喉を抑え、声を出そうとしても、結果は同じ。

体中の血が汗腺から全部流れ出ていくような錯覚を覚えた。

声が出ない、ということとはだ。

便利マーノンが呼べない。

タクシーな便利マーノンが呼べないとなれば、フィーリーシャのところに行くどころか、帰れもしない。

それどころか脱出も不・可・能。

ていうかだ。

大陸が違つと文字まで違つたりとかして…。

そうなると意思の疎通が図れるかどうかも怪しいとこだな！

どうやって神子じゃないことをきっちり訂正しようかと頭を悩ませる私の横で、医師らしい女性と少女が話していた。

「首の方は薬を塗っておけば大丈夫でしょう」

「それ以外で何か問題はないの？」

「大丈夫かと思われますよ」

「ですが、何やらとても沈んでいらつしやるようですけど」

「起きられたばかりで環境の変化に戸惑っておられるのでしょうか。」

お声の方は私ども手ではどうにもなりません、それ以外でしたら体の方に変調はございません」

「ならよろしいのですが」

「聖女様がしつかりお世話くださいませ」

「心得ておりますわ！」

…。

せーじよ、様？

せーじヨって名前なのか？と少女を見れば、少女は自信に満ち溢れた顔で私の手を取った。

「神子様のお世話は、聖女の役目をもつこのわたくし、コラリー・ラベイユがしつかりと務めさせていただきますわ」

せーじよって聖女なのか。

どんな意味合いがあるのか気になるところではあるな。

にしても部屋や服は中華系なのに、名前は思いつきり西洋なんです。すね。

別にどうでもいいけど。

握られた手を退けさせ、医師の横に立つ人物をじつと見つめる。相手の方も私をじつと見つめてきて、まさかなあと目を細めていると、コラリーがその人の腕を取り、私の前まで連れてくる。

「この方は、神様がくる少し前に城の聖域に現れた方なんです！言葉が通じないのだけれど、名前はアナクというんだそうです」

思わずぶつと吹き出した。

そのまま出ない声でケタケタと腹を抱えて笑ってしまった。

アナク。

やっぱりアナクか…！

まさかなと思ったけど、いや、でも、うん…。

なんでまだ女装してんの、アンタ！

「レーン、様？」

訝しげに、確かめるような響きの言葉に、体を震わせながら頷く。  
ああ、やっぱりアナクだ。

「まあ！お二人はお知り合いなのですね！レーンというのは神子様  
の？」

こくこくと頷けば、「ではレーン様とお呼びしても！？」と願っ  
てもない申し出をされ、私は強く頷いた。

神子ではないという訂正は出来ないにしても、名前呼びに変えさ  
せることが出来ただけで少し満足だ。

神子様呼びは、本当に条件反射的に怒りが湧いてくる。

うっかり殺すことはなくても、手か足は普通に出そうだ。

「レーン様、お腹は空いていらっしやいませんか？わたくし、今と  
ってまいりますね！」

この子は人の話を聞かなそうな子だなと思いながら、引き留める  
こともなくそのまま送り出す。

医師である女性も、コラリーと共に部屋を辞し、部屋の中にはア  
ナクと二人きりになった。

これは質問責めにでもされるかなと腹をくくった瞬間、けたたま  
しい音を立てて、先ほど閉められたドアが再び開いた。

「お姉さま！」

緋色の髪をした女の子が、アナクの腰に抱きついてそう呼んだ瞬  
間、おさまっていた私の笑いが再発した。

i n t e r v a l ? (後書き)

本編とintervalの温度差が激しいこと…

## 11 系の先

自らに絡む糸を震える手で引く。

その先に、切れた糸が垂れ下がっているのではと、有り得ない恐怖を何度抱いたか知れない。

あの子の願いであっても、あの子から目を離さなければよかったと、ガラにもなく後悔して、それから無欲に主を思った。

あの子は僕のモノ。

僕の手の中で、僕の手によって生かされる、最愛の主。

くんと引つ張られる感覚に、まだその存在が在ることを知らされる。

「レーン」

奪うものは許さない。

ただ、それだけのこと。

セイ・ロストパース大陸の上空に浮かぶ雲の中。

蒼い光が漏れだす蚕の繭は、休息を求めるフィーリーシャの仮初の寝床。

『マーノン』

くぐもった鈍い声は、繭の中の水を通して聞こえるからだろう。

マーノンは繭に触れながら、中で眠るフィーリーシャへと声をかけた。

「レーンの気配は、やっぱり？」

『わからぬ。理に張られた糸は切れてはおらぬ故、世界から投げ出

されたわけではないのだろう。だが気配は辿れぬ。結界の中に隠されているとしか」

「大陸間の空間の歪みは？」

『ない。移動できぬよう、この大陸は完全に閉じた』

隠されたとわかった時点ですでに起こした行動だろう。

それに満足げに一つ頷いて、繭へと顔を寄せてひっそりと囁いた。  
「ねえ。フィーシェンラから面白い話を聞いたんだ」

面白いと言いながら、マーノンの表情に浮かぶのは冷やかな怒気だ。

「レーンを隠したのは、<sup>フィーシン</sup>天上神第一位だって言うんだ。あの、愚かな光が。笑っちゃうよね。アイツ、まだ僕に固執してるのかな」

『クオリリアが？』

「ね、殺してもいい？いいよね？もうさ、僕ずっとずうずうしっぱなしなんだよね。アイツがクオリがレーンを隠したって知って殺していいでしょ？ていうか殺すけど。当たり前だよ。レーンに手、出したんだからさ」

ふふふつと笑いながら、静かに狂い怒るマーノンに、「駄目だ」とフィーリーシャは言えなかった。

蓮はマーノンの主である前に、フィーリーシャの眷属だ。

意図的に隠したのなら、それは最高位にたつフィーリーシャに何かしら含むところがあるということだ。

フィーリーシャだとて、手を下さないわけにはいかなかった。

『赦しは、与える。だがな、マーノン。レーンに血を見せてはならぬ。これは絶対だ。レーンに、何かが傷つく様を見せてはならぬ。それだけは守れ』

何故とは、マーノンは問わなかった。

マーノンとしては、血を見せることよりその血で蓮が穢れるのが嫌だった。

そのため、蓮の前では絶対に殺しはしないと決めている。  
目的は違えどやることは変わらないだろうと、マーノンはフィー

リーシャの条件を呑んだ。

「リーには負担をかけてしまうね」

『構わぬ。レーンは余の眷属だ。レーンを軽く扱うということは、余を軽く扱うということ。それに、クオリリアには少々勝手をさせ過ぎた。そろそろ替え時だろうて…』

沈むフィーリーシャの声に、マーンンはそつと繭の表面を撫でる。気持ち良さそうに繭が蒼く発光するのを眺めながら、その心の内で、蓮に手を出した愚か者をどうやって殺してやろうかと考える。位で言えばマーンンよりも上位の存在であるフィーリ・クオリリア。ア。

殺そうと思っても、そう易々と殺せる相手ではないだろう。だからこそ、マーンンの心はこれ以上ないほど沸き立っていた。不意に、小さな力を腕に感じ、マーンンは動きを止めた。

「…ハビか」

蓮との間にある糸とは違う、それより薄く細い糸が腕に絡みついている。

フィーシェンラのところで会った、暗い緑の髪をした褐色の肌の男。  
フィーリ

天上神に対して平然とした態度がとれ、それが蓮を思い起こさせ、マーンンにしては珍しく人間であるその男を気に入った。

フィーシェンラとの交換条件である事を楽に運ばせるためとはいえ、交わされた下級主従誓約がそのいい証拠だ。  
ゲネレイス・ミンユ

「リー。また来るね」

『よろしく頼む』

フィーリーシャの言葉を背に、マーンンは空間を曲げた。糸が引かれる力に従って空間を抜ける。

「…何か用？」

地上神の精霊と、人間にしては魔力の強すぎる紅い髪の男を見比べてから、マーンンはハビを見る。

紙のように青白い顔色のハビが、どこか戦慄く唇で言葉を紡いだ。



「他大陸のフィーシェーラ。あれは件の眷属殿と何か関係が？」

「フィーシェーラ？ああ、そういえばあれのせいで飛ばされたんだっけ」

蓮に囁けた皇帝であるヴォルドと、その血族を思い浮かべ、それからセイ・ロストパーズ大陸に飛ぶ力となった精霊を思い出し、マーノンは苦い顔をした。

そもそもあの暴走がなければこのような事態に陥らなかったと、苛立ちにも似た感情が浮かんだ。

「知って、いるんだな？」

何か激情を呑みこむようなハビに、マーノンは一体何があったのかと考える。

クオリリアやチャメトフが事に絡んでいる以外で、フィーシェーラに関する重大事。

そこまで考えて、けれど考え付く事柄はマーノンにはない。

「それがどうかしたの？」

だからそう問うしかない。

「何も、知らないのだな」

事実とはいえ、人間にそれを言われたということがマーノンのプライドに傷をつけた。

普通に殺していてもおかしくないハビの愚行に、マーノンの手が出かけた瞬間、荒げられたハビの声に制止する。

「フィーシェーラは他種のフィーシェーラと接触してはならない！これは世界が定めた理だ！！」

これだから地上神に近づくのは嫌なんだと、マーノンは内心で舌打ちした。

## 12 理の中

フィーシェーラ。

地上神の血をひく者たちの総称だ。

その存在にマーノンはこれまで欠片も疑問をもったことはなかった。

否、この世界で疑問をもった者などいないだろう。

理に支配された世界の中で、理に組み込まれている存在に疑問を抱く必要などないのだから。

けれど、今この時になつてマーノンは初めてその存在に疑問を抱いた。

「手順を踏めと、妾は言つたはずじゃがの」

無理矢理結界に穴をあけて入り込んだことへの非難をフィーシェンラから受けながら、マーノンは無言で草を踏んだ。

ある程度の距離を保ち、足を止める。

「フィーシェーラは禁忌の末の存在？」

大木の木陰で卵を撫でていたフィーシェンラの手が止まる。

「ほう。そこに行きつくとはな。だが残念じゃのう。あれは許された存在じゃ」

「どういうこと」

「理の内にいるとはそういうことじゃの。許され、その存在を世界に許容される。弾かれたのはあれらではない。だからここにある」

卵を撫でる手を再開しながら言うフィーシェンラに、マーノンの眉が寄る。

「…弾かれたのは」

「それより、どうしてフィーエルであるそなたが、そのようなこと

を気にするのじゃ」

言葉を遮るような問い掛けに、マーノンは不審そうにフィーシェンラを見たが、追求することはせずに、ハビからの言伝を口にした。「他大陸のフィーシェーラが今この大陸にいる。シェーラの名を持つ精霊を連れていることから、ハビはシェトラムだろうと」

シェトラムが何を意味するか、マーノンは知らない。

けれど、それはフィーシェンラにとってはただならぬ衝撃を与えたようだった。

色の失せた顔で目を見開いてマーノンを凝視する。

「な、にを…何を言うておるのだ！そのような気配、妾は…、まさか。そなたか」

「何」

「気付くべきであつた。そうだ、そなたはあのように空間移動をする必要などない。そなたの気配で見落としておつたが…あの気配は確かに」

小さな手のひらで顔を覆い、フィーシェンラは肩を落として瞳を閉じた。

「そなたが近づいたから…か。なるほど、そなたは確かに破壊<sup>ジョバム</sup>じやの。意図せずして世界を壊すか」

原因が自分にあると言われ、マーノンはまさかと思った。  
身に覚えがない。

だが、フィーシェンラの言葉に嘘がないことも知っていた。

嘘がないからこそ、それが真実であり、事実世界は組み込んだはずの理から外れ、破滅を招こうとしている。

「そなたには全て話そう。そなたの知らぬこと全て」

静かに、フィーシェンラはマーノンへと手を伸ばす。

「これを知るは妾とリイのみであろう。世界から抹消された過ちじや。これを知るといふことは、フィーエル。そなたに枷を着けることと同義じや。その覚悟はあるかえ？」

その手を取りたくはなかった。

面倒を被って得られる利益など、マーノンにはない。

けれど、その手を取らないという選択肢はマーノンの中になかった。

フィーシェーラ。

蓮と契約を成したヴォルドも、それに名を連ねる者だ。

ヴォルドの抱えるフィーシェーラの秘密は、そのまま蓮に繋がる。蓮にヴォルドを与えたのはマーノンで、ならば、その責任は取らなければならない。

蓮からヴォルドを取り上げるつもりはマーノンにはない。今はまだ。

「誰にモノを聞いているのさ」

二回り以上の差がある手を握りながら、マーノンはいつもの微笑を浮かべた。

それにフィーシェンラも安堵したように笑みを浮かべる。

「話し終えたら、そなたに頼みたいことがある。聞いてくれるかの？」

「話を聞いたら断れない類のものだろう？いいよ。仕方ないからね」「有難い」

満面の笑みを浮かべたフィーシェンラに、マーノンは肩を竦めた。

フィーリ  
フィーシェ  
天上神と地上神。

同じ理の中で生きる両者は、神と一括りされるが、与えられた役割の差違から全く別物だ。

天上神はそこに在りて世界を照らす役割。

地上神は世界を覆う命の誕生を促す役割。

その役割の差違は、両者の在り方にも差違を齎した。

それが天上神の与える無条件の畏怖だ。

けれど、その畏怖の差は人間たちには些細な違いだった。

圧倒的な力を持ち、遙かに長い寿命を持つ両者は所詮“神”ではない。

そんな神が、長い時の中で幾度か作り変えられていることを人間たちは知る由もないだろう。

変わらないのはただ一人、ファイリズ天上神最高位であるファイリーシャのみ。

そう。

ファイシェズ地上神最高位であるファイシェンラも、一度とはいえ作り変えられた。

先代の地上神最高位の名は、ファイシェーラ。

後にも先にも、その身に子を宿すことが出来た唯一の神。  
シェリア シェトラム

慈愛と誕生を司る、美しい神だった。

その慈愛と美しさ故に、事は引き起こされる。

理が支配するこの世界で、理を壊す存在を作るものをどうして世界が許すだろう。

夜の帳が落ちた世界の中、マーノンは空へと手を翳す。

指の間から、暗く沈んだ色の中で瞬く青い星がこぼれた。

それを握りつぶすように堅く手を握る。

「ノレイン」

「ここに」

音もなく背後に現れたマーノンに瓜二つの青年を振り返ることもなく、マーノンは言った。

「クオリーとチャートを探し出せ。アレらの眷属ならいくら殺してもかまわない。居場所を知っていそうなのがいたら口だけきける程度に傷めつけて、僕の前に引きずり出せ」

「喜んで」

「お前の他にも燻ってるのがいるだろ。全員使って構わない。お前一人で出来るなら、それもいいけど」

「柔軟に考えますよ」

「なら、もう行け」

優雅に一礼した青年は闇に紛れるように掻き消え、完全に気配が消えたのを確認してから、マーノンは握った手を開く。

星は、変わることなくそこにあった。

「フイーシェーラ…、それに名を連ねる者らがいる理由はわかった。種類は…2種でいいわけ？」

盃を回しながら、注がれた酒に映り歪む空の色を覗きこむ。

どれだけ強い酒だろうと酔える体ではないから、ただ咽喉を焼くようなアルコールの感覚を楽しむために、マーノンは杯を呷った。

「2種限りじゃの。受け継がれた色が髪か、瞳かで分けられる」

「それが慈愛と誕生に分けられるの？」

「そうではない。フィーシェーラに名を連ねると言っても、その力を司ることを出来るのは、その中でも一人ずつと決まっておる」

「…そう」

少し考えるような仕草で盃の縁に口をつけるマーノンを横目に、フィーシェンラは自らの杯に酒を注ぎ足した。

「何か気になることでもあるのかえ？」

「いや…」

言葉を濁したマーノンが考えていたのは蓮のことだった。

シエトラムに近い、フィーシェーラであるヴォルド。

フィーリーシャの見立てでは子を宿すことなどなかったはずなのに、蓮はヴォルドの子を宿した。

これは単なる偶然なのか。

偶然でないのなら、ヴォルドに誕生の力があるはずではないのか。けれどフィーシェンラの言葉を聞く限り、その力を持っているのはヴォルドではない、別の男だ。

これは事が終わった後で、きちんとフィーシェンラを問い詰めておこうと決めて、マーノンは酒を飲んだ。

「フィーシェーラは他種のフィーシェーラと接触してはならない。

これは、シェリーアとシエトラム同士の接触でなければ、空間が歪む程度だと考えればいい？」

「そうさな。さして大きい歪みにはならんじやろっ」

「シェリーアは、この大陸のどこにいるの？」

ならば先にこちらを隔離した方がいいだろうと問えば、フィーシェンラはへらりと笑った。

「知らぬ」

酒を飲みながらの言葉に、マーノンのこめかみがピクリと動いた。

「まさか、それを探せって？」

「うむ。あれは人に紛れてしまつての。妾でも気配がわからぬのじや」

はあつと息を吐いて、マーノンは片手で痛む頭を抑えた。

蓮を探して、クオリリアも探して、チャメトフまで探して、拳句人間を探せとは。

一体、どれだけの探し物をしなければならないのか。

「仕方なかるう？リイが空間を閉じてしまつたからのう。妾のお使いを頼める地上神フィーシェがおらのじゃ」

「だからってそんなこと僕に頼む？」

「そなたしかおらのだから、頼まずしてどうするといふのだ」

きつぱりと言い切つたフィーシェンラに、結局はお使い扱いかとマーノンは呆れた。

天上神フィーリの中でも、こんな無謀なことをするのはフィーリーシャくらいだ。

そう考えると、これも仕様がなののかと苦笑が漏れる。

「この大陸のフィーシェーラの大体の居場所くらいは、知つてるよね？」

「地上テトシェリックの樂園のみだ。シェブレイジー族がそのままフィーシェーラの一族となつておるからな」

「ふうん」

それならばこちらは探すのは簡単かと考えて、あることに思い至つた。

「ここだつて言うなら、結界張つて外部からの侵入をなくせばいいだけじゃないの？」

まさかデミトリムからこちらに、すでに移動してきているなんてことはないだろうしとのマーノンの提案をフィーシェンラは考えることなく一蹴した。

「無理だ」

「……何で」



「フィーエル。そなたこの空間を如何にして維持していると思っておる」

問われ、広く草原が広がるフィーシェンラの結界の内に広がる異空間を見る。

適度な風が吹く長閑な空間は、短い時間ならば作るのは容易い。

けれど、長時間：何千年という時間と維持するとなれば。

「フイットン融離魔力？」

地上の樂園と言われるほど、外に比べ緑が溢れているのは、その魔力の蓄積のためか。

「結界を張ってしまったら、ここを維持できぬのでな。申し訳ないが、そなたの提案は却下じゃ」

「…地上神って結構えげつないよね」

「そうかえ？」

「…別にいいけどさ。探せって言うなら、シェリーアの特徴とかは？」

すつとぼけた様子もなく、純粹にきよとりとした顔のフィーシェンラに、マーノンは疲れたように視線を逸らして話を元に戻した。

何らかの特徴がわからなければ、探せるものも探せない。

まさか全てのフィーシェーラを引っ張り出すわけにもいかないだろう。

「双子じゃ」

「…ふたご？って何」

「同じ卵から生まれてくる二人の子らのことじゃ」

そんなこともあるのかとマーノンは俄かに驚いた。

「その双子が？」

「の、どちらかじゃの」

決定的な特徴だなど頷いて、マーノンは盃に残った酒を呷って立ち上がった。

「デーティ酒ご馳走様」

「よろしく頼むの」

ひらりと手を振って、空間を捻じ曲げる。

いつも使わずの力の違和感に眉を顰めながら、マーンンは結果の外に出た。

「っは。これが枷ってわけ？」

じんわりと右腕に滲む痛覚と血に、小さく悪態を吐いて。

## 14 求めるもの

じくじくと焼くような痛みに、右腕を見る。

無数についた切り刻まれたような傷が、黒く腐食し始めていた。

「フイーシェンラが結界の中にいる理由……」

枷と言うには代償が大きすぎやしないか。

使いものにならないだろう右腕の、肩の下あたりを服の袖を切り裂いてきつく縛りあげる。

カルカット  
「散れ」

パンツと右腕が弾け、そのままさらさらとした砂へと姿を変え、風に乗って流れていった。

切り口は血を流すことなく、すでに皮膚を被っている。

それを見て、新しく腕を作ることとは出来ないのだと悟った。

一先ずはこのままでいいだろうと、破れ血で汚れた服を新たなもののへと変え、マーンンは息を吐いた。

フイーシェーラ。

かの秘密を暴くことは、世界の全てとはいかなくても、隠された末端を暴くことなのだろう。

知らず、口の端が上がる。

今まで一度だって感じたことのない痛覚。

それを与える世界の枷でさえ、今のマーンンには愛しいものでしかなかった。

「悪いけど、リイ。僕が望むものは一つだ」

そのためなら右腕一本など安いものだと暗く咽喉を震わせた。

古い紙の匂い。

等間隔に灯された光と、ガラス張りの天井から注がれる光。

木と緑の淡い香りが包む空間は、整然と本棚が並べられている。

本棚を飾る色とりどりの本は、全て布張りに金糸が使われている。

「マーノン？」

奥の本棚から顔を出したハビは啞然とした顔でマーノンを見た。

「腕、どうしたんだ」

「潰した。何か用？」

数刻前に会った時は普通にあったものがなければ、誰でも驚くだろう。

マーノンは最小限の事実だけ告げて、用件を問うた。

「あ、ああ……」

これをと、持っていた本を手渡される。

開かれていたページを見て、ほうつと感嘆の息を吐いた。

事細かに書かれた、大陸の歴史、だろうか。

文字をなぞり、見えてくる情景に、個人単位の行動の記述もあるのかと可笑しくなる。

「起こったことを記す……。ああ、そういえばフィーシェンラシエトラフィは過去を司っていたつけ」

こうして起こったことを記し、歴史という明確な過去を作り上げる。

その過去を綺麗なままで保管する。

フィーシェンラの好みそうなことだ。

「それで、これが何？」

「ここだ。気になって調べてたんだが、これはマーノンが探している眷属殿ではないのか？」

レーン！

文字をなぞり、マーノンは見えてきた主の姿に震えた。

首を絞められ、意識を失い倒れた蓮の向こう。

ざわりと殺気が波立つ。

満足げに歪められた、見覚えのある顔。

見せつけるようにされた舌舐めずりに、今にも掴みかかりたい衝動が湧きおこる。

荒い怒気と殺気に、本棚の上で眠っていたエム力が声をあげた。

「ハビ！本を…！」

その声で今にも握りつぶされそうな本に気付き、殺気に中てられていたハビは反射的にマーノンの手から本を奪った。

同時に見えていた情景も消え、マーノンも正気へと戻る。

「…大丈夫、か？」

ハビの問い掛けにマーノンは答えず、左手で蓮へと繋がる誓約の糸を掴み、そつと口付けた。

レーン…。

絞められた首から僅かだけでも血を流し、虚ろな定まらない視線で倒れた姿に胸が痛む。

けれど、まだ生きている。

今はただ、あれ以上の傷を負っていないことをマーノンは願った。

「ふふっ。これで、確信が持てた。礼を言うよ、ハビ」

「役に、立てたのならいいが」

咄嗟の判断で動いたものの、体はまだ強張っているのだろう。

掠れた声を聞きながら、マーノンは自らもハビに用があったことを思い出した。

「用はこれ？」

「そうだ」

「そつ。なら聞きたいことがあるんだ」

「…聞きたいこと？」

一体何だろうと不思議そうにハビはマーノンを見る。

「シェリーアが誰か、ハビは知ってる？」

「いや…」

フィーシェンラも把握していなかったことだ。

ハビに答えは期待していない。

「なら、双子を知ってる？」

「ふたご？」

聞き慣れない言葉のような反応を見せるハビに、マーノンは一から探すしかないかと諦めかけた。

「もしかして、余り子のことか？」

「……あまりご？」

「一つの卵から二人の子供が生まれることがある。そのことでは？」

「それ、だけど」

フィーシェンラに仕える一族でありながら、フィーシェンラのそれと言い方が違うのは何故だ。

そうマーノンが訝しく思っている、ハビは言った。

「余り子は生まれた時、どちらか一方を殺してしまうのが仕来りだ」

「……今、生き残ってる方は？」

納得と共に人間に対する嫌悪を深めながら、今現在その存在はいのかとマーノンは問う。

どちらかでも生き残っていれば、それがシェリーアな可能性がある。

それにハビはどこか表情を曇らせながら答えた。

「二人いる。イストとアンソニアの姉妹だ」

## 15 幻肢痛

「彼女たちが…シェリーア、なのか？」

「フィーシェンラがいうには、双子のどちらかがそうだってさ。ハビ、その二人僕が預かるよ」

預かるといっても、結界の中に閉じ込め、隔離するだけだ。

傷つけたりする気は全くもってないマーノンだったが、ハビは真っ青になった。

「あずかる？」

「フィーシェンラ同士以上に、シエトラムとシェリーアの接触の方がまずいからね。結界の中にも隔離しとけば、ひとまず安心だろう？」

「あ、ああ…。今から行くのか？」

「早い方がいいだろう？何、何か不都合でもあるの？」

窺うような言葉に眉を寄せれば、首を横に振られる。

「いや。一緒に行ってもいいか？イストが一時的にでもいなくなるのなら、他の者に任せないとならない」

「構わないけど」

承諾してから、マーノンは微かに顔を顰めた。

何かを連れての転移は、マーノンはあまり得意ではない。

むしろ苦手だ。

転移時に、誤って下半身を置き去りにして死なせてしまった、なんてことも遠い昔に起こしたことがある。

今ではそんなこともない。ないが、しかし、一抹の不安があるのも事実だ。

右腕を失い、まだ慣れないこの状況下で失敗をしないと言い切

れない。

「下半身置き去り…したらまずいよねえ」

ハビをそんな目に合わせたら、フィーシェンラから文句を言われるのは必須だ。

「待ってくれ、どういう意味だ」

「んー。まあフィーシェンラの契約者で加護もあるだろうから、大丈夫だよねえ」

下級と言っても交わした主従誓約が、少なからず守護してくれるだろうし、とマーノンは笑みを深める。

「大丈夫って何がだ!？」

「こつちのことだから、ハビは気にしなくても大丈夫だよ」

有無を言わせないマーノンの笑顔に、ハビは顔をひきつらせた。

ふうつと息を吐くハビを見ながら、マーノンは一つの声を聞いた。そちらに意識を飛ばしていると、ハビが口を開く。

「少し待ってもらってもいいか？ユリスたちに一度コッロードに戻ることを伝えてくる」

「用がすんだら呼んで」

素気なくそう言い放ち、マーノンはすぐさま本が並んだその空間から脱け出した。

脱け出した先は、ラムラからそう離れていない森の中だ。

マーノンの気配を感じたのか、先にいた青年が顔をあげた。

ノレインだ。

明るい中で見るその姿は、マーノンと瓜二つでありながら色が全く違う。

髪の色は黒に近い鋼色をしていて、瞳は黄金色だ。

「見つけたの？」

「欠片だけ」

指を鳴らし、円筒の石を作りだして、ノレインはそれをマーノンへと投げた。

受け取ったそれをマーノンは手の上に浮かす。



キラキラと青く発光するそれは液体へと形を変え、完全な球体になる。

球体はそのまま掌へと溶け込んだ。

同時に、球体に含まれていた情報がマーノンの内を駆け巡る。

「なるほど…ね」

大陸の最南端と大陸東部に残る、<sup>フイーリ</sup>天上神の名残。

どちらもクオリリアではなく、チャメトフのものだ。

「これだけ？」

「だから欠片、と」

「眷属は？」

「なかなか」

「ならさっさと捕まえて来い」

苛立ちを含んだ命令に、ノレインは小さく笑いながら姿を消した。一人残された森の中、マーノンは荒い息を吐く。

あるはずのない右腕が痛む。

右肩を左手で爪が食い込むほど掴み、これが痛みなのだと実感する。

痛い。

けれど、その痛みが、マーノンの心を恍惚とさせる。

「やだな。我慢できなくなりそう」

何か、何でもいい、何か。

ただ、壊したくて仕方ない。

突き上げてくる衝動のままに軽く腕を振るえば、近くにあった木がなぎ倒された。

「足りないなあ」

音を立てて倒れた木を見つめながら、ここがせめて他の大陸だったらと思わずにいられない。

ここがセイ・ロストパース大陸でなかったら、せめてこの一帯を焼失することも叶っただろうに。

けれどここはセイ・ロストパース大陸で、フイーリーシャから赦

されているのは、クオリリアの始末のみ。

「あ」

禁じられているのは人間相手だけだっけ。と、命じられた内容を思い返す。

ならばそこらにいるであろう動物相手でもいいか。

そう考えた瞬間、脳裏に少し高めの声が響いた。

『殺しちゃだめだからね』

マーノンの主であるあの子供は、無利益な殺しは嫌いだ。

その相手が何であれ、目的も理由もなく殺すことを嫌っている。

「レーン…」

離れていても、貪欲にマーノンの心の内を支配する、マーノンだけの子供の理。

「殺さない。殺さないから…だから、早く戻っておいで」

この腕の中に。

右肩に寄せた左手に頬を寄せながら、マーノンはうつそりと微笑んだ。

15 幻肢痛（後書き）

マーノンは存外不器用

interval ?

「モール王国第一王女パシィ・ファー・エリアット・モールと申します。あの…<sup>フイーリン</sup>神子、様？」

アナクに抱きついた少女は、私に気付いて頭を傾いだ。

ここでもやっぱりな神子呼びに、けれどこんな小さな子供に当たり散らすのははつきり言って大人げないともわかっていてるために、私は仕方なく微笑みを返す。

それにぱつと顔を綻ばせ、パシィは嬉しげにアナクへと再び抱きついた。

「まあ、パシィ王女。アナクをお探しに？」

どうやらアナクがお気に入りらしい。

食事を持って戻ってきたコラリーが、パシィを見て驚いているようだった。

「コラリー様！ヒリンがこちらから出てくるのが見えたので！」

「後をつけていらしたんですね…。仕方ありませんわね。王族の方に結界は通じませんもの。ですがこのことは誰にも言ったらいけませんよ？」

「神子様がいらしてるなんてびっくりです！聖殿にいらしているということは、父上が契約を成されたわけではないのですね？」

「ええ。守護神様からお預かりしているだけですわ。さ、レーン様。どうぞお召し上がりください」

ベッドに備え付けられていた板を下ろし、簡易的な机を用意してその上に持ってきた料理を乗せていく。

あまり空腹感はなかったが、雑炊のような食べ物をレンゲですくって口に入れた。

慣れてきた薄味とは違う、香辛料がきつい感じの味に、ここがヴィレンツァーレでないことを実感する。

舌が痺れるような感覚に息を吐いて、ふっと窓の外を見つめた。景色の奥、ゆらゆらと光が揺れているのは、海だ。

この世界の、海。

なぜだろう。

どうしようもなく、帰りたくなった。

帰る、どこへ？

どこへ帰ると言っただろう、私は。

「レーン様？」

コラリーが呼ぶのを聞き流し、口に含んだままのレンゲに歯を立てる。

帰りたい。

そう思っただけ先に思い浮かぶのは、ヴォルドだ。

ヴォルドと、ヴィレンツァーレで与えられていた私の部屋。

それと、ずっと傍にあったマーノンのぬくもり。

あ。

「レーン様！？どうかなさいました！？」

零れた涙に、コラリーが大袈裟に騒ぐ。

パシイもおろおろとした様子で私を見ている。

その横でアナクがナフキンで涙を拭ってくれた。

「あなたでも泣くんですね」

呆れを含んだ物言いに、そりゃ私も人間ですからとぼんやりと思う。

でも、そんなことどうでもよかった。

ヴォルドの前で泣いてから、頑なだった自分の心が絆されているような気がする。

弱く、なっただろうか。

だから帰りたいだなんて思うのか。

違つと、脳裏で強く声がした。

違う、そうじゃない。  
そうじゃなくて…。

帰らないといけない。

出せない声で呟く。

郷愁なんて可愛らしいものじゃない。

これは脅迫概念にも近い何かだと、はっきりと理解した。  
「お食事は、もうよろしいのですか？」

心配そうなコラリーに頷いて、書くものはないかと仕草で問えば、  
近くの戸棚からインクとペンならぬ、硯と筆を出された。

習字下手なだけだな。

そう思いながら硯に垂らされた黒い墨を見つめた。

セイ・ロストパース大陸の南端に在る島国　モーレ王国。

王国の守護神の結界により守られた閉鎖的な国だ。

守護神とは、いわずもがな私の首を締めあげたあのクソ天上神だ  
ろっつ。  
ファイリ

コラリーたちは私を逃さないためのいい監視。

そして結界の張られたこの国から、出ることも出来ない。

要は鳥籠の鳥というわけだ。

「これ、なんて読むんですかね」

アナクと筆談すべくヴェネ文字を用いて紙に書いてみたのだが、  
書いた字が潰れている。

墨汁つけすぎたか。

もう一度挑戦して文字を書いていく。

「なぜ…、ここ…いる？なぜここにいるのか？」

おお！単語で通じた！

首を上下に動かして激しく同意する。

「気がついたらこの近くの森にいたんですよ。…まさかと思いませんけど、ここ大陸の外だったりします？」

ああ、アナクは自分の現状を把握するなんて無理だろう。

アナクとコラリーたちでは喋っている言語が違うらしく、コラリーとパシイの二人は筆談する私とアナクを不思議そうに見比べている。

「それにしても、本当に眷属殿なのですね」

意味がわからなくて首を傾げると、言葉ですよと言われる。

アナクは通じないもんね。

「よろしかったらこの女装もやめさせてくれませんかね」

切実なアナクを前に、私はにんまりと笑った。

そんな、何で私がそんなことしなければならなんだ。

「お二人とも何を話していらっしゃるんですか？」

堪え切れない様子で割って入ってきたパシイに、アナクの服を掴んで見せる。

「お姉さまのお洋服：？あ、お姉さまを見つけた時、女性のものを着てたんです！それでこの方はこちらのほうがよろしいのだと思って！」

ナイス判断、と親指を立てて褒め称えれば、私のその仕草を理解できない様子だったものの、私の笑顔で称賛されたと気づいたらしい。

パシイは飛び跳ねながらアナクの腰に抱きついた。

そのパシイの行動に、アナクは苦渋に満ちた顔つきでしっかりと抱きとめていた。

## 16 紙一重の魔術師

史書室から出たところで、ハビは大きく息を吐いた。

マーノンと同じ空間にいるのはどうにも肩が凝る。

畏怖は感じなくとも、妙な緊張感に曝される部分では、契約があつてもなくてもそう変わらない気がした。

呼吸すら奪うあの殺気は、抜き身のナイフを体中に突き付けられているような恐怖を感じた。

少しでも身動きすれば、そのままブスリだ。

フィーリ・マノレイにとって、それだけ眷属殿が特別、ということか。

あの本を読んだだけでハビにわかるのは、黒髪の少女が天上神フィーリに首を絞められていたということだけ。

天上神がどの天上神であるのか、少女と天上神の間に何がしかの会話があつたのか。

なにもわからない。

フィーリ・シャ神の眷属である少女と、それを殺そうとする天上神。

そもそも天上神間で確執でもあるのか。

「厄介事が多すぎる」

くわつと欠伸をもらしながら腕を伸ばして凝り固まった体を解しながら王の私室から出ると、視界がひっくり返った。

「…何の用だ、アダン」

「っふっは！ハビだハビー！ひっさしぶりい」

床に押し倒し、ハビの腹の上に馬乗りに乗り上げた状態になつたにつつこと挨拶をする年若い男に、ハビは己の不運を呪った。



出くわさなかったために、てつきり外の仕事に駆り出されている  
と思っていたのに、どうやら違っただけらしい。

それとも、史書室に籠っていた一日の間に戻ってきたのか。  
どちらにしろ、警戒を怠っていた。

「どけ」

「えー、久しぶりなんだからさあ。ね、目、挟らせて？」

「…死んでしまえ」

どこがどうして久しぶりなんだから目を挟らせるに繋がるんだ。

この男の思考回路は絶対に死んでも理解できないししたくもない  
が、あまりの理解不能さに疲れる。

「指でもいいよー？それとも手にする？」

「お前にやるものなど一つもない」

だからどけと、体を押し退けようとして自分の身体が動かないこ  
とに、ハビは気付いた。

ちつと舌打ちし、アダンを睨み上げる。

捕縛の魔術か。

捕縛の糸が見えないところを見ると、何をこんなところで馬鹿に  
無駄な高等魔術を駆使しているんだこの男は。

「さ、選んでよ。どれくれる？」

手の内に切断の魔方阵を出現させて楽しげに告げてくる。

この男の性質の悪さは、この男がラムラ随一の魔術師であること  
だろう。

腐れ外道がと内心で罵り、自らが楽園シエリクランカの守り人であることに感謝  
した。

「くれてやるものなどないと言ったのが聞こえなかったか。こい、  
チユイ・トーラ」

「ぐえっ」

潰れたカエルのような声を出し、アダンの体が上から退かされる。  
襟首を掴まれ、首が絞まった状態でアダンはぶら下げられていた。  
「主に手を出すなど、我は貴殿に何度申した」

アダンの襟首を掴んでいる壮年の男が、不機嫌そうに口をへの字に曲げている。

チュイ・トーラ。

ハビが誓約している精霊の中で一番高位の最上級精霊だ。クランドフィンス

「やー、冗談だって、ジョーダン」

怒らないでよとへらへらと笑うアダンに、嘘をつけと口の中で吐き捨てながら、チュイ・トーラに捕縛を解かせてハビは立ち上がった。

「それで、何の用だ」

「えー」

「早く言え。でないとチュイ・トーラにそのまま制裁させるぞ」

会う度に似たような茶番を吹っ掛けられるが、こうして待ち伏せされてまで吹っ掛けられることは稀だ。

大概そういう時は何か用がある時に限り、勿体ぶって用件を伝えるまでが長いくせに、内容も遠回しで何が言いたいのか理解できないことが多い。

あまり関わりたくもないので、さっさと脅して吐かせるが吉だ。

ちようどいい脅し要員もいるから使わない手はない。

「ハビ冷たいー」

お前に冷たくしなかったことは一度としてない。

「そろそろ言葉を理解しないか？何の用だって聞いてるだろ。本気で制裁くらわすぞ」

「あ、そうだ。王様がお呼びだよ」

苛立ちを多分に含ませたハビの声に、さらりと用件を言う。

高位魔術師であるアダンでも、神にほど近い最上級精霊は恐いらしい。

力の差が歴然としているからか。

「ユリスが？」

言い渡した期日にはあと二日ある。

まさか期日を越すことはあれ、それ以前に終わるということは不

可能だ。

ならば別に何か大変なことでもわかったのか。  
考えを巡らしながらアダンを視界に入れて、ハビは思わず失笑した。

まるで猫のように襟首を掴まれてぶら下がっているアダンは、何とも情けないがそこではない。

その襟首を掴んでいるチュイ・トーラの、その掴み方だ。

まるでアダンがあたかも汚いモノのように摘まれていたのだ。

「チュイ・トーラ、離しても構わない」

「いえ。主に何かあつてからは遅いですから。もうしばしこうしております」

じろりと睨まれたというのに、アダンはへらりと笑うばかりだ。

確かに離れた途端にまた何かされそうで、そのまま摘んでもらうことにした。

「エムカ。ユリスのところまでお願いできるか」

チリンツと鈴を鳴らして、じっと座っていたエムカが廊下を歩きます。

「お前も呼ばれているのか」

「そうだよー。だからさ、早く離してくんない？」

「チュイ・トーラ。そのままお願いできるか」

アダンを無視してお願いすれば、当然だと言わんばかりに頷かれる。

うへえつと顔を顰めるアダンを連れて、ハビはチュイ・トーラとともにエムカの後を追った。

## 17 他国からの使者

「ねーえー。俺の扱い酷くない？酷いよね？回数追うことに酷くないってよね！？」

「ああそうだな」

摘んで歩くのは面倒だったらしく、襟首に指を引っ掛ける形でするするとチュイ・トーラに引き摺られているアダンが大声で嘆くのをハビが投げやりに同意する。

実際アダンに対しての扱いが会う度に酷くなってるのは事実だ。

それもハビではなく、チュイ・トーラの、だが。

「チュイ・トーラがお前に敬意を表していた頃が懐かしいな」

「今も敬意を表すべきだ！」

「主に手を出す不届き者に、何故我が敬意なんぞ表さねばならん」

声を大にして主張するアダンに、チュイ・トーラが鼻で笑って切り捨てた。

先程からの言動だけ見れば、チュイ・トーラがハビを主として慕っているように見えるが、そんなことはない。

誓約上主と認めてはいるが、実のところはハビを思いっきり見下している。

表立ってその態度が出てこないのは、偏に誓約さままとしか言いようがない。

ああけれど、呼びだすのが命令系だったことを後でねちねちと文句を言われそうだなと、アダンには見えない角度でハビは秘かに顔をひきつらせた。

「……謁見の間に向かつてるのか？」

見慣れた廊下に先を行くエム力に問えば、黙って歩けばばかりに

足を早められた。

なかなかエムカのハビに対する態度も、チュイ・トーラのアダンに対するものほどではないにしろ、結構素気ないというか、扱いが雑だ。

チュイ・トーラとアダンのくだらない会話を聞き流しながら黙々と歩けば、予想通りに連れてこられたのは謁見の間。

玉座に座るユリスと、西部でよく目にするコーケという赤と金糸を使った色鮮やかな織物のマントを着た人物がいた。

「ああ、来たか」

遅かったなと片手をあげてくるユリスに顔を向けていた人物が、ゆっくりとハビたちの方を振り返る。

艶やかな茶色の髪をした女で、ハビを目にするなり大きく目を見開いた。

「ドルテ・マナフ穢れた部族!？」

「そんな呼び名もあったな。チュイ・トーラ、ありがとう。ここまでいい」

まだ何か喚き立てていたアダンを投げ捨てて、チュイ・トーラはシェブレイジの蔑称を叫んだ女へと目を向けた。

「その女は」

「気にしなくていい」

舌打ちでもしそうな機嫌の悪さに、首を横に振る。

主であるハビの手前、不機嫌さを顕わにしながらもチュイ・トーラは僅かに頭を下げて消えた。

「あーもう。ちょっとハビ、もう少し扱いを改めさせてよねえ」

服についた埃を払いながらアダンの立ち上がる。

「お前にはそれくらいがちょうどいいだろう。少しは自重というものを覚えろ」

「またか。アダンの、ハビにちょっかいを出すなど言い渡したはずだ」  
「コミュニケーションの範囲内でしょー、これくらい」

諫めるようなユリスの言葉でさえ不貞腐れた様に顔を背けるアダ

ンに呆れながら、ハビは女を見た。

「彼女は？」

「ダングルルカからの使者でコウラン殿だ」

ダングルルカ。

西部にある小国だったか。

ラムラは、国交がないと言っても行き来が出来ない訳ではない。

他国からの使者はそう珍しくもないが、しかしこのタイミングでとなれば勘ぐらざるを得ない。

「コウラン殿。ダングルルカで楽園に住まうシェブレージを侮蔑する伝承が多いことは知っているがな、このラムラでシェブレージは<sup>シェリクランカ</sup>楽園の守り人と呼ばれている、<sup>シェリトウラ</sup>楽園の長に最も近しき人間だ。ここでのこれ以上の侮辱は控えていただこう」

威圧的に悠然と足を組みながらそういうユリスに、ハビは思わず噴いてしまいそうになった。

王として威厳ある姿は何度も見ているが、国柄ゆえか、今のよう

に威圧するような物言いをするユリスは見たことがなかったのだ。

堅い面持ちで深く頭を下げて謝罪するコウランという名らしい女に、ハビは気にするなと声をかけてユリスへと本題を聞いた。

「それで？俺まで呼んで何の用だ」

「ダングルルカで天上神<sup>フイリ</sup>を崇める宗教が流行り出したそうだ」

「珍しくもないことだな」

「ダングルルカでなければな。あそこは楽園の長である地上神最高<sup>フイシエ</sup>位<sup>ス</sup>フイーシェンラのみを厳格に崇め奉るシェフィラ教の国だ。本来なら天上神の介入の余地はない」

「あの長を崇め奉ったところで利益はないに等しいと思うがな」

楽園の外に住まう者がどれだけ祭り上げようと、あの子供の目に入れることもないのだから。

コウランはハビの言葉がお気に召さなかったようで、不敬極まりないといった様子で睨んでくる。

それに見向きもせずハビは話を進めた。

「俺を呼んだってことは、モシエラルの情報には欠片も引つかかってないのか」

「引つかかるどころか、数年前からダングルル力の情報が一切ない。元々争いも殆どない国だったからな、人も派遣していなかった」

「そのバカを今からでも派遣しとけ」

「え、俺ー!?」

「黙って逝け」

舌打ち混じりに吐き捨てるハビの辛辣な雰囲気、ユリスは軽く目を剥いた。

「俺はこれからフィーリ・マノレイについてコッロードに一度戻る。こちらに戻ってくるまでにコウラン殿から出来る限りの情報と、周辺各国の…そうだな3年分でいい。大至急纏めてもらえるか?」

マーンンの名にコウランが驚いているのを後目に、ユリスが厳粛に承った。

「それが楽園の守り人の命とあれば」

「ではお願いする」

一つ頭を下げてから口を開こうとしたハビに、はっとしたユリスはすぐに止めようとした。

しかしすでに遅く、その口からは破壊神の名が紡がれる。

「マノレイ」

その場にいたハビ以外の全ての人間たちが、息も詰まる畏怖で埋め尽くされた空間に晒された。

## 18 忍び寄る影

「これで、後は長との契約だけですな」

頭目の引き継ぎの儀式が終わり、イストが副頭目の証である刺青の入った右腕に布を巻いていく。

「まだ早いと思うんだがなあ」

「長からの厳命ですもん。仕方ないでしょ」

「ぼやくハビをイストが軽く笑い飛ばす。」

25の若さで頭目を継ぐことは前代未聞というわけではないにしろ三度目との事だ。

前例もあり、長からの厳命でもあったことからとんとん拍子で決まったが、頭目が変わると同時に副頭目の入れ替えも行われる。

イストもウーゴもまだ20に満たない若造だ。

コッロードの頭目ということは、シエブレージ一族の頭目にそのまま繋がる。

もう儀式も済ませてしまったのだからグダグダ言ったところでどうしようもないのだが、幸先は不安一色だ。

「ハビなら大丈夫だと思うけど」

「俺だからこそだろう。最大の不安要因があるっていうのに」

神子への欲求で正気が保てなくなることもあると、以前読んだ書物フィーリンを思い出して唇を噛むハビに、イストは苦笑いをもらしながら言った。

「そこはほら、長の采配を信じるしかないでしょ。ついでに責任は全て長に押し付けちゃえばいいんだよ。選んだのは長なんだから文句はそっちに言えー！って」

「…誰も文句言えないだろう」



楽園の長に文句の言える人間なぞ、どこを探してもいるわけがない。

「うん。だから堂々と胸張っちゃえばいいよ。ハビは力はあるんだもん。皆ハビにならついていくよ」

晴れやかに笑うイストに、肩を竦めながらハビも微笑んだ。

「お前がそこまで言うなら、そういう風に考えてみるか」

どこか軽くなった心に腕を伸ばしてぐっと背伸びをしながら空を見上げる。

それは青い星が彩る夜空に星が流れた、20年前のことだった。

さつき感じた鋭さはない、けれど駄々漏れの殺気に、ハビは体が重くのあるのを感じた。

吐き出す息まで沈み込むように重い。

別れた少しの時間でマーノンに何かあったのか。

考えるだけでも憂鬱だ。

「もういいの？」

それでも問い掛けてくる声に苛立ちなどの負の感情が混じっていないことに、軽く胸を撫でおろした。

「待たせて申し訳ない」

「別にいいけど」

胡乱げに髪を掻き上げながら優雅に足を進め、マーノンはハビとの距離を詰めてその肩へと手を置いた。

置いたまま、マーノンが動かなくなった。

ハビの背後にどこか探るような視線を向けていて、誘われるようにハビも振り向く。

真っ先に視界に入っただのは、青白い恐怖に強張った顔で床にへたり込みガチガチと音を立てて震えているコウランの姿だった。

ユリスと共にいた時には感情が昂ぶっていたためににそちらにま

で気がいかなかったが、今見るコウランのその姿に、<sup>フイール</sup>天上神に対する畏縮、畏怖とはこれほどまでのものなのかと感心すると同時に、自らの立場の危うさを感じた。

駄々漏れの殺気を差し引いても、この畏怖を感じられないというのは危険ではないだろうか。

いくら楽園の長の契約者であろうと、それはそもそも天上神に対しどれだけの行動抑制に繋がるのか。

気に入ったと言うマーノンだとて、ハビを殺さないというだけで殺せないわけではなさそうで、ならば畏縮もせず、畏怖すら感じられないハビを逆に殺そうと考える天上神がいけないとも限らない。

何か対応策でも講じたほうがいいかと顎に手を当てて考え込んでいると、なんとなしに動かしした視線に何かが微かに引っ掛かった。

「面白い、気配がするね」

マーノンの声に反射的に振り返れば、常に浮かべている人のよさそうな笑みは崩さずに、瞳だけがぎらついている。

それにゾツとしながら、今度はマーノンの視線を追う。

そこで先程の引っ掛かりが何なのかを悟った。

誰もが顔を蒼褪め、恐怖に震えている中で、一人顔を強張らせながらも毅然と立っていられるアダンの姿。

<sup>クランドローメルズ</sup>「最上級精霊使役とも違う、でも濃すぎる精霊の気配だ」

クランドローメルズ。

聞いたこともない言葉。

「精霊と一緒に天上神の気配も混じってる。ここはフイーシェンラの領域だと思っていただけ、思った以上に天上神が闊歩してるみたいだね」

そういうマーノンでもないのだろうかとか冷静に思ったハビであったが、口には出さなかった。

他の天上神は知らないが、マーノンに限っては長の了解の下で動いているのだから闊歩していいようが問題ではない。

それにしても。

今一度アダンを視界に入れながら、この差はなんだろうかとハビは眉間にしわを寄せた。

腰を抜かし、歯の根が噛み合わないほどに恐怖しているコウランと、そこまでではないにしろ真っ青に血の気の引いた顔で打ち震えているユリスに比べて、どうしてアダンは平然としていられるのかあれか。

馬鹿だから感覚も鈍感なのか。

ああ、そういえばアダンは無痛症だったなと、ハビは半ば真剣に納得して手を打った。

どうでもいいが、マーノンはアダンに何かする気なのか。

これで結構使えるから殺すのだけはやめてもらいたいものだが。

「ハビ。小声だろうと聞こえてるからね」

「え」

「口に出てたよ。混じってる気配の天上神を特定だけしようかと思っただけど、もういいや。そろそろ行こうか」

どこから聞かれていたんだと焦るハビの肩に置かれた手に、力が籠められる。

それに対したらたらと背筋を伝う冷や汗を感じながら、ハビは力クカクと首だけ縦に振った。

それを合図にハビの目に映る景色が歪む。

変に浮遊するかのような感覚に吐き気が込みあがって来て、それを抑えようと目を閉じる。

「着いたよ」

ポンッと軽く肩を叩かれ、ハッと瞼を開けば確かにそこはコッロイドだった。

集落の入り口でハビは立ち尽くした。

「どうして、誰もいないんだ」

人どころか何の気配すら感じられない、荒れた様子のコッロイド

を前にして茫然と呟くハビに、マーンは目を細めただけだった。

## 19 死人の夢

必ず在るはずの見張りの姿もなく、何者かに荒らされたような痕跡を残す集落の中へと茫然自失のハビが一步踏み出す。

「ハビ」

背後から掛けられた鋭い声に、反射的にハビはビクリと肩を揺らして立ち止まった。

「お寝んねしたくなければそのまま後ろに下がるといい。中に入った瞬間、夢に囚われるよ」

「夢？」

「そう。死ぬまでね」

するりとハビの横をすり抜けて、マーノンがコッロードの入り口に立つ。

胸の高さまで上げられた左手が、何かを撫ぜるように宙を動くと、波立つように空間に波紋が広がった。

「邪魔くさい。さっさと壊れろ」

吐き捨てるような声色で呟くと同時に、マーノンは空間に爪を立てた。

ピシッと音を立てて亀裂が入る。

亀裂はコッロードを覆うように広がっていき、最後にはガラスが割れるような音で空間が砕けた。

パラパラと光のようなものが散ってくるのを眺めていたハビは、集落の中へと視線を戻す。

依然として人の姿は見られないが、荒らされたような痕跡が消えている。

集落の中へと入っていくマーノンの背中に、慌てて後を追おうと

した。

「ハビはそこにいな。それと、なるべく息を詰めたほうがいい。結界が消えて遮るものが消えたから、そっちにも流れてくよ」

何が思ったハビの鼻腔を甘ったるい香りが刺激した。

思わず手で鼻と口を覆った。

この匂いには覚えがあった。

「そうそう。少しの間そうやってなよ。吸い込んだりなんかして倒れたら、そのまま放置するから」

容赦ないマーノンの言葉に、それはご免被りたいと切実に願ってしまった。

胸焼けがするほどのこの甘ったるい香りは、チンチャーヤと呼ばれる毒草と同じものだろう。

少量ならばただの睡眠薬で済むが、濃度もしくは量が規定を超えれば、死への睡眠薬となる。

眠ったまま目を覚ますことも出来ず、死ぬまで眠り続けるといった代物だ。

通称、死人の夢。

「払ったほうが早いな」

ぐるりとあたりを見渡してから、マーノンは左手を高々と上にあげた。

途端、ゴツともの凄いい音と共に大気がマーノンのその左手の方へと動いた。

体を持っていかれるのではないかと思うほどの暴風に、ハビは必死に足を堪えて立っていた。

だがその努力も虚しく、一瞬にして外へと動きを変えた大気の流れに逆らえずに吹っ飛ばされ、背後にある木へと叩きつけられた。

「っ……ゲホッ！」

衝撃に肺が圧迫されて大きく咳き込む。

背中と一緒に頭を打ち付けたのか、視界がちかちかと点滅する。それを頭を振ることで追い払い、ハビは痛む体をゆっくりと持ち

あげた。

ピリピリとした引き攣った痛みに、生温い液体が肌を伝う感触。どうやら怪我をしたようだと他人事のように思う。

「力加減を間違えたよ」

飄々といっそ清々しいまでの笑顔でそう言うマーノンにハビが返せる言葉などあるはずもなく、乾いた笑いで濁しておいた。

さほど頑丈な造りではなかったにしろ、立ち並んでいた集落の小屋を吹っ飛ばしている時点で手加減する気などなかったように見える。

「血の匂いがするね。怪我でもした？」

「少し」

「…僕治せないんだよね」

自分のせいだという自覚があるのかないのか。

突っ込む気にもなれないので、手当てしなよというマーノンの言葉に従ってハビは精霊を呼ぶことにした。

「メイリイ」

「メエ！」

愛らしい鳴き声とともに現れたのは、くりくりとした目と小さな翼が特徴のリスだ。

大きさは肩乗りサイズで、外見能力共にハビが誓約している5匹の精霊の中では一番の癒しだ。

「背中の傷を治癒してくれるか」

『はい。……頭と腕も怪我してるじゃん！小一時間はかかるよこれ！』

小さな翼をパタパタと動かして飛ぶメイリイはハビの背中に回るとなると怪我してるの！と怒りだした。

それを聞き流し、小一時間か…とマーノンを盗み見る。

「向こうに微かだけど人の気配がある。僕はそっちに行くから」

「人の気配がするの？」

「夢に囚われているせいだろうけどもの凄く薄い。一人か十人か、

それともそれ以上か。人数まではわからないよ」

「そう、か」

自分では感じられない人の気配。

それが僅かでも感じられると知って、ハビは言い知れぬ安堵を覚えた。

じんわりと目頭が熱くなるのを指で抑える。

「ああ、そうだ。ヒューバ」

真っ先に呼び出すべき精霊がいたことを思い出した。

予想通り眠っているヒューバが目の前の地面の上に現れる。

くたりと力の抜けているその体を抱き上げて、地面の上に胡坐をかき股の間に置いた。

「どうするわけ？」

「誓約している精霊の中に記憶操作が得意なのがいるからな。引き出そうかと」

それで少しはこの事の顛末がわかるはずだ。

これくらいはメイリイの治療を受けながらも出来ることだから  
と言えば、マーノンからは気のない返事が返ってきた。

「ふうん」

「…なんだ」

「なんでもないよ。ハビ、結界を張っていくからそこから動かないでね」

マーノンの顔からは笑みが消えていて、どう見てもなんでもない  
ようには見えなかった。

それに結界を、ということはまだ危険が潜んでいるとマーノンは  
思っているようにも思えた。

だがそれを深く聞く必要はないだろうと、ハビは一つ頷いた。



## 19 死人の夢（後書き）

マーノンは力の操作、不器用な拳句大雑把です。

ちなみに、一章で蓮がアナクに嗅がされたのも死人の夢。

『フィーリ・マノレイの結界、ね。張れたんだ結界』

結界を張ってすぐさまマーンンがどこかへ行ってしまうと、張られた結界の内ではビの傷を治癒しながらメイリイが言った。

「<sup>フィーエル</sup>天上神第三位だぞ。張れないほうがおかしいか？」

『そうは言うけど、あのフィーリ・マノレイよ？自分の眷属でさえ気に入らないの一言で殺すような、笑っちゃうくらい破壊しかしてこなかったあの神が、何かを守るための力が使えたってだけでも驚きだわ』

能力や見た目とは裏腹に、勝気な性格をしてるメイリイの言葉に、ハビから苦笑いが零れた。

『守護じゃない』

ぼつりと漏れ聞こえた声は結界を張る前に呼び出したファンパニアのものだ。

ヒューバを尻尾ですっぽりと包みながら寝そべっている。

『だったら何だって言うのよ』

『獲物を泳がせる。フィーリ・マノレイはそのため結界を用いる』  
「なるほど。だから広範囲なんだな」

優に30人は入るだろう結界をハビは呆れたように眺める。

動くなと言った割に広く結界を張ったなと思ったが、単に慣れていないだけか。

『あーやだやだ。やっぱりフィーリ・マノレイは嫌い！相容れないっ  
つたらないわ！』

傷つけることを本能的に嫌うメイリイにしてみれば、その感覚もおかしくはない。

だが嫌いとはつきり言ってしまうあたり、精霊の気楽さが窺えた。畏怖を感じないハビとて、あの殺気に晒されて恐怖を感じないほど鈍感ではない。

下手なことをして反感を買っようなことはしたくない。

嫌い、などとは口が裂けても言えないだろう。

『ハビ、あつた。…出す？』

「頼む」

尻尾で包んでいたヒューバを口で啜えてハビの膝まで連れてくると、ファンパニアはふっさりとした尻尾を揺らしながらハビの足に鼻先を置くように伏せた。

『トラファイボード  
記憶抽出』

さつと目に映る景色が一変する。

集落の入り口にいるハビの目に映るのは、集落の中にもう少し入った先にある広場だ。

空は暗く、星が瞬いている。

見張りの者以外は皆寝ているのだろう、静かな、いつも通りの夜。それは唐突に壊れた。

コッロード全体に掛けていた、目眩ましの魔術が壊された笛の音のように高い音が、集落全体を駆け巡った。

真っ先に起きた者たちが、イストの指示に従い女子供を優先的に逃がしていく。

ウーゴは逃げていく者たちの先導を切っているのだろう。

侵入者は何者だと、目に映る景色にハビは目を凝らした。

薄く赤みを帯びた白い靄が、人々が逃げる先とは反対側から流れるように広がっていく。

『フイーリ  
天上神！？』

イストの肩に乗っていたヒューバが忌々しげに声をあげる。

靄の奥に、青色が確かに揺らいでいて。

ヒューバはイストの肩から素早く飛び降り、その青色へとその小さな身を投げ出す。

バチンツと空間が弾け、なんとかヒューバが足止めをしようとしているのがわかったが、天上神を前にその力は無に等しかった。

いとも簡単に、小さな体は地面へと打ちつけられる。

するりと靄から抜け出てきた青色を見て、ハビは思わず空を見上げた。

夜空が、青空へとすり替わる。

「メイリイ」

空を見上げたまま呼びかけてきたハビに、メイリイは傷を癒す手を休めることなく言った。

『星なら昨夜流れた』

メイリイの声を聞きながら、やはりと思うハビの目には先程の天上神の姿の残像が映っていた。

元は鮮やかな青だったろう髪が傷み、茶色へと変化していた。

瞳だけが異様に色味を増した強い緑色で、それがハビの背筋を凍らせる。

「まさか」

コッロードを襲ったのは天上神。

それは理解できた。

けれど、何故なのかがわからなかった。

動機は何だ。

どうしてシエブレイジが襲われなくてはならない。

天上神だとて、ここは地上テトシエリックの楽園。

気まぐれで手を出せるものではないはずだ。

混沌とする思考に、ハビが頭を抱えた時だった。

ズズンツと地面が揺れる。

地響きだろうそれにあたりを見渡せば、集落の奥で土煙が上がっているのが目に入った。

青い光が遠目でもわかるほどにあちこちで弾けるのが見て取れる。

「戦って、いるのか…？」

マーノンと、先ほどの天上神が…？

神々の戦い。

それも天上神同士の。

どれだけの被害がでるか、わかったものではない。

「……っ」

ハビの中で何かがブチ切れた。  
シエルトウーラ

「楽園の長の膝元で何をしてくれてるんだ、クソ野郎どもが……！」  
この楽園を壊す気か！？と、激昂のままにハビが立ち上がる。

『馬鹿ハビ、動くな……！』

背中からのメイリイの一喝に、その激昂は風船から空気が抜けるようにすぐさまなりをひそめた。

肩を丸めて再び腰をおろしたハビの前で、ファンパニアがゆらりと慰めるように尻尾を振った。

i n t e r v a l ?

暇だ。

今から新たに言葉を覚えようにも、意欲が湧かない。何故って、覚えたての三つの言語でさえまだ不自由しているのに、そこに新たな言葉を覚える余裕なんて私にはない。

ただでさえ、この閉鎖的な国でヴィレンツアーレ以上に有益な情報が得られるとも到底思えないのに、この国の言語を覚えるだけ時間の無駄だ。

咽喉さえ治って声が出せれば、意思の疎通の心配もないのだから。だというのに暇だからと言って部屋から出してももらえない。出たいと意思表示する以前に、こちらの意思の確認を殆どしないコラリーを前に伝えようとする気力すら萎えた。

よってかつてないほどに私は暇を持て余すこととなったわけだ。「暇だからって俺に絡まんでくださいよ」  
やだ。

でかでかと紙に書いてやると、アナクはムスツとした顔を作った。パシイに髪を弄られているせいで身動きが出来ないのをいいことに、仏頂面のアナクに化粧を施していく。

こいつ、何で男のくせに化粧のノリがいいかな。ム力つく。  
うん。

当面の暇つぶしはアナク弄りに決定だ。

「レーン様！こちらでよろしいですか？」

身長差から椅子に座るアナクの後ろで、椅子に立って髪を弄っていたパシイがどうだと言わんばかりに胸を張ってくる。

さして長くない髪を丁寧に結い上げたのだろうが、ところどころ

ほつれている。

そのほつれ具合が気に入ったのでその上から、布を折りたたんで作った太めのリボンを巻いてリボン結びを試してみた。

「面白い髪形ですね」

レモー二という華茶を淹れていたコラリーが、出来あがったアナクの髪形を見て言った。

そうだろうかと首を傾げたくなる。

両サイドから頭の輪郭にそって編み込んでリボンを巻いただけの代物だ。

「お姉さま、とっても素敵です！」

「そろそろ動いてもいいですかね」

パシィからの称賛を受け流した渋面なアナクに手鏡を渡して頷く。言葉が通じていないから、馬鹿にされたとも思っているのかもしれないが、無視されたことでパシィが酷く落ち込んだ様子だった。手鏡を見た瞬間、アナクが何とも情けない顔になったのを咽喉の奥で笑いながら、パシィに手招いた。

私の前に椅子を置き、そこにパシィを座らせて髪をとかす。

「結ってくださるんですか！？」

嬉々とした様子のパシィに頷けば、満面の笑みを浮かべられた。

こうして見るとパシィがいくつなのか大変気になる。

まだコラリーと女医、パシィしか見ていないが、どうにもこの国の人間の身長はアナクたちより低い。

私よりは高いようだが、それでもヴィレンツァーレで見た侍女よりは低いように感じた。

「誰かに髪を結ってもらうなんて久しぶりです」

にこにこ邪気なく笑顔を振りまくパシィは、ヴィレンツァーレでなく私の基準でみれば8歳くらいに見える。

なんだか妹が出来たみたい不思議な気分だ。

ずっと昔に、こんな風に兄に髪を結ってもらったつけ。

懐かしい記憶を思い返しながら、その記憶に違和を感じた。

…あれ。

あれは、兄だった？

優しく丁寧に、髪を撫でる男の手の感触。

はつきりと思いだせるのに、振り返った男の顔を思い出せない。

「レーン様？」

「どうかされたのですか？」

手が止まったことで声をかけてくるパシィとコラリーの声も意識から遠く。

あれは誰だ。

振り返った先にいたあの男は、誰だ。

兄でなければ、父…親？

まさか、そんなことは天地が引っくり返ってもあり得ないと頭を振る。

強く振り過ぎて、貧血を起こしたように眩暈を起こした。

歪む視界の中、記憶の中の男の顔がぶれる。

「…っ」

訳のわからなさになさく体を縮めて、頭を抱えた。

どうして。

何故ここでヴォルドの顔にすり替わる。

ヴォルドの名が脳裏を掠めた途端、体の奥から湧き上がる飢餓にも似た激しい焦燥に思考が絡め取られた。

帰りたい。早く、早く、早く。

帰りたい。帰る。帰らなければ。

帰る。その一つ事に全てが支配される。

意識した分だけ強まっていく焦燥に、涙が滲むほど息苦しい。

必死に抑えようとするのに、抑えるどころかさらに強まっていく。心が軋むように悲鳴をあげている。

帰る。

ただそれだけを叫んで。

「レーン様！」



どうやら私は思考と一緒に意識まで飛ばしていたらしい。

いつのまにやら目前にあったアナクの顔に、驚いて思わず手が出かけた。

寸ででなんとか止めたが、今度は犬のように荒く断続的な呼吸に肩が上下していることに気付いた。

掴まれた両腕でなんとかバランスを保っているような状態で、倒れそうな自分の身体にしっかりと力を入れる。

心配そうなパシイたちに小さく微笑んで、息を整える。

大きく呼吸を繰り返しながら、窓の外を見る。

感覚の全てを支配していた焦燥はすでに静まり、欠片も残っていない。

ほつつと息を吐くと、それに合わせてパシイたちの肩からの力が抜けたようだった。

視線は窓の外にやっただまま、椅子の上で片膝を立ててその上に顎を置く。

濃い青色の海の上で、鈍色が揺れた。

## 21 流れ星の行方

「<sup>シェリトゥーラ</sup>楽園の長の膝元で何をしてくれてるんだ、クソ野郎どもが！！！」

耳に届いた怒声に、マーノンは笑みを和らげた。

これが<sup>ファイリ</sup>天上神に対する物言いかと呆れる半面、ファイシェンラの契約者なだけはあると感心する。

シェブレージはファイシェーラに名を連ねると同時に、ファイシェンラの加護の下、ファイシェンラを長として仕えてきた一族だ。

長であるあの子供の庭と呼ぶべき楽園が損なわれることを何より嫌い、それを阻止してきた一族。

今マーノンがしていることは、その一族の頭であるハビにとって何に変えても堪え難いことだろう。

「でも。守りながら戦うっていうのは、僕の性分じゃないんだよね」  
瞬きの間に覆っていた木々が消され、剥き出しの地面を曝け出す地上を眼下に、マーノンは傷んだ青を視界に入れた。

すでに青の欠片もないほどに傷んだ色は、濁った茶色だ。

「探してたのがこのこ出てきてくれたのは楽なだけだ……。その様子じゃ、もう喋るのも無理そうだね」

人とも獣ともつかない崩れた相好。

紅く染まった口から出てくるのは、意味を持たない唸り声だけ。

白い肌の両手は毛並みに包まれて形を変え、すでに獣の前肢だ。

マーノンを睨みつけたまま、ソレは前屈みになり地に肢をつける。

「無様だね。二本足で立つことも忘れたの？」

<sup>ファイシェ</sup>天上神であろうと地上神であろうと、人型以外の姿を晒すことは殆どない。

獣型に姿を変えることも滅多にないだろう。

もしあるとすれば、それだけ弱っているか　　あるいは。

笑みに侮蔑を滲ませて、視界から消えたソレの気配だけを頼りに  
マーノンは左腕を振るった。

鋭い爪と共に飛んできた力に、力をぶつけて相殺する。

周囲への配慮など一切なく、飛び散った力の欠片が新たに地面へと大穴をあけていく。

ただ相殺するだけではつまらないと、マーノンは相殺しながらソレの爪を、指を、腕をと？いでは、その大穴へと捨てた。

両腕が？がれた頃合いで、視界の端に完全に捉えたソレの姿にそのまま左手を伸ばす。

ガツと首を掴むと掴んだまま地面へと叩きつけた。

これくらいで気を失うような柔な造りは全くもってしていないだろうと、叩きつけたと同時に左足で心臓の上を踏みつける。

骨の折れた音と、びちゃっと水気の多い果物を勢いよく叩きつけたような音が響いた。

「あ。潰すだけのはずだったのに、貫通しちゃった」

胴体に埋まった足をずりりと引き上げる。

ねっとりとした血に塗れた左足にマーノンが僅かに眉を顰める。

鼻腔をくすぐる血の匂い。

けれど、いつもなら頭をもたげてくる激情も、劣情も、マーノンの中には何もない。

いたるところに返り血が服に付着していたために、靴と一緒に新しく作り変えた。

「随分と堕ちたものだね。そのくらいの傷も治癒できなくなった？」  
ヒューヒューと音を立てて呼吸するソレを覗きこむ。

中途半端に治癒と再生がなされて骨と肉が丸出しになった両腕も、足が貫通して胸に開いた穴も、どうやらもう治ることはなさそうだ。  
「クォリーなんかに手を貸すからこんなことになるんだよ。」

チャート」

フィーリ・チャメトフ。

かつて、天上神であった傷んだ青をマーノンは無感情に見下ろした。

ざわざわと大気が震える。

いらぬ音ばかりが耳の奥で轟めきあう。

嘲笑うかのような精霊たちの歌。

その歌がなんであるかを知っているマーノンは、ハビに結界を張りながら苦々しいものを感じていた。

人間であるハビには聞こえていないようで、しかしハビに応えた精霊は聞こえているのかピリピリとした視線をマーノンへと投げかけてくる。

その視線を煩わしく思いながら、結界を張り終えると同時にその場から飛んで離れた。

ある程度の高さまで飛んで辺りを見渡してから、マーノンの顔に失笑が浮かんだ。

ハビがいる場所から少し離れた先にある広場の真ん中に、まるで誇示するかのように置き去りにされた人間の死体。

腸だけ食い散らかされた状態のその死体の横に、静かに舞い降りる。

「…シエブレージ」

濃い緑の髪は一族の証だ。

放り出された四肢の一つに、マーノンはこれはハビに知らせるべきかと目を細めた。

右腕に刻まれた紋様は、フィーシェンラの持つ紋章と酷似している。

ドルフィカ

「墮星は放っておいたって勝手に力に吞まれて死ぬものだけど…」  
背後に感じた気配に、マーノンは振り返ることもなく力だけを投

げつける。

飛んできた力にぶつかって相殺される。

「その頭だけ残して消えて欲しいんだけどね」

面倒くさそうにマーノンが振り返った先に、以前見た時の中性的な人型の面影もない理性を失ったフィーリ・チャメトフの姿があった。

マーノンとしては、欲しいのは記憶だけだ。

口もきけないフィーリ・チャメトフに、用は無かった。

## 21 流れ星の行方（後書き）

グロくしないように頑張ったら薄っぺらくなった気がする。  
まあ文章が薄っぺらいのはいつものことか。  
それより頑張ったけどグロイ言われたらどうしよう…

## 22 死神の感傷

胸糞悪い。

痛覚も感じないボロボロの布切れのような体で起き上がろうとするチャメトフを前に、張り付けた笑みの下で舌打ちした。

天上神第七位であるフィーリ・チャメトフであつたなら梃子摺つたであろうが、理性もないただの獣相手ならば殺すことは容易い。

それが墮星であるなら尚のこと、破壊を司るマーノンが敵わないなどと言ふことはあり得ない。

もがくように動いていたチャメトフの身体から徐々に力が抜けていく。

傷が依然として癒されることがないのを見ると、吞まれるまでの時間までそう長くはなさそうだ。

「君がどんな禁忌を侵したかなんて、知らないし知りたくもない。それにレーンが関わっていないのなら、今の僕にとって興味の引かれるものは何もないからね。だけど。ここで吞まれてもらう訳にはいかないんだ」

理に定められた禁忌を侵した神の末路。

神の本性。力の根源。

自らの光という小さな星に全てが吞まれる。

周囲に存在するあらゆるものを巻き添えにして。

「だから」

マーノンの顔から表情が消えた。

「おやすみ。チャート」

チャメトフの空虚な瞳と視線が絡み合う。

元は翡翠の綺麗に清んだ色が、最早原色の濃い緑に変わっていた。

ゆつくりとおろされた瞼に、その色が隠される。

「冒読者は無となり、現るは源。チ・ドルテラシ・ラーグ  
フィル・タスタ  
ジョバム・セニマ手にするは破壊。流星は夢幻。フィカ・ラルゲル  
ラル夢に眠れ」マ・デル・ヤー

ぼおつと灯るように光ったチャメトフの体が弾けるように無数の光へと姿を変え、差し出されたマーノンの左手の中で収束し、丸い琉璃紺の石となった。

色味は違えど、何度この石を目にしただろうかとマーノンは手の中の石を空に透かす。

石の中で光が揺らいでいる。

「流れ星流れた。死神が近いぞ。逃げる逃げる。力増した死神が世界を壊すぞ……」

耳に五月蠅い精霊たちの歌を口ずさむ。

揺らぐ光は根源であり、力であり、神の本性そのものだ。

それをこうして手に入れるのも、自らの中に取り込むのもマーノンは初めてではない。

始めの頃は取込んだ力で暴走することも珍しくはなかったから、精霊たちがこうして騒ぐのもわからないわけではない。

けれど、やはり内心に潜んでた感傷を増長させ、それでもなくても落ち込んでいたマーノン気分は今ももうどん底だった。

「死神、か。同胞殺しが出来るのは、僕だけだもんね」

言い得て妙だと自嘲気味に笑っていると、足元の地面からするりとハビの精霊であるファンパニアが現れた。

「何か用？」

『ハビが、様子を見て来いと』

「……もう終わったよ」

この精霊もハビ同様に少し変わっているなど、マーノンは目を瞬かせた。

これだけ周囲の精霊が騒がしいというのに、それに助長するどころか何の感情もなく声をかけてくる。

ハビの怪我の治癒をしていたメイリィのように空気を張り詰める



でもなく、淡々としたまるでこれが普通だと言わんばかりの態度だ。  
「あれ。結界の中にいたよね？」

一番強い結界を張ったつもりだったが、まさか精霊ごときに破られたのか。

いや、破られればマーノン自身にわかるようになっていいるから、それはないだろう。

ならば何故…。

『抜けてきた』

事も無げに言い放ったファンパニアを凝視して、数拍遅れてからマーノンは納得したように声をあげた。

「実体がないのは久しぶりに見たよ」

モシエラルを除けば、実体のない精霊と言うのは珍しい。

一見して見分けがつかないというのもあるのだろうが、マーノンとしては100年振りだ。

実体を持たない精霊は、どういうわけか結界が効かない。

ただ、結界から出ることは出来ても入ることは出来ないという、おかしい法則のようなものがあるらしい。

らしいというのも、マーノンの眷属や精霊に実体を持たないものがいたためしがないからだ。

「君たちの感情は欠落しているっていうけど」

『欠落と言うよりは薄い。心を動かされることが殆どない。ハビは無関心だと言っていたが、それも違う。流されるだけの惰性だ』

だからハビと誓約したのか。

そう問おうとしたが、やめた。

聞くだけ野暮だ。

「そうだ。シエブレージの人間が一人死んでたんだっ」

生憎と死体は先程の戦闘で消し炭と化してしまったが、伝えるだけは伝えておく。

覚えている限りの特徴を伝えると、ファンパニアが押し黙ってしまった。

「どうかしたの？」

『女、だったのか？』

念を押すように聞かれ、マーノンは軽く肯定した。

「それが何？」

『まだわからないが、イストの可能性がある』

イスト。

それはシェリーア候補の一人ではなかったかと、マーノンは空を仰いだ。

## 22 死神の感傷（後書き）

墮星が力に吞まれる＝体の内で発生したブラックホールに吞まれる  
とてもイメージしてもらえればいかと。

## 23 ジョバム

転がっていた死体がシェリーアであるならば、マーノンとしては有難いことだった。

探す人間が一人減って、その分の手間がかからない。

「そうかどうかは別として、君、フィーシェンラの精霊だよね。一ついい？」

『何故、わかった』

「あれは眷属は絶対に持たないけど、精霊の数だけはいし、人と誓約してる精霊の殆どはフィーシェンラの精霊だから。それに加えて、記憶の抽出、感情の操作。あと何の力があるかは知らないけど、どれもフィーシェンラに通ずるものがある。特に、実体を持たない精霊っていうのは、地上神フィーシェンラの中では地上神最高位の精霊に多いからね」

『さすがはフィーリ・マノレイだ』

「うん。それで、一ついい？」

純粹な感嘆の言葉をマーノンはさらりと受け流す。

ファンパニアはだからといって気にすることもなく、了承した。

それを確認してから、マーノンは持っていた琉璃紺の石を差し出す。

「これから記憶の抽出をしてほしいんだけど」

『無理だ』

「…だよねえ」

にべもなくきっぱりと断言したファンパニアに、マーノンは気が抜けたようにその場に座り込んだ。

『そんな代物を一介の精霊の前に出すのもやめてくれ。精神が崩壊

するかと思つた』

「そこまで？」

『感覚がマヒしていないか？それとも、フィーリ・マノレイには感じられないのか？それを前にして正常でいられるなんて、イカレていると思えない』

「実際僕はまともな部類ではないよ。でもそつか。…うん。言われてみればこれを初めて見た時、僕も正気ではいらなかったな。最も、初めて同胞を殺したことへの罪悪感か何かだと僕自身は思ってたけど」

耐性でもついちゃったかな。

浮かべられた表情は酷く自虐的な笑みだ。

今にも泣きだしそうな、声をあげて笑い出しそうな、よくわからない不安定さがあるように、ファンパニアには感じられた。

『罪悪など、フィーリ・マノレイにも感じられるのか』

「どうだろうね。そうだと錯覚していただけないかな。僕は血を見たり、誰かが苦しむ顔を見たりすることに愉悦を感じるけど、そこに死が前提にあるのは人間みたいな下等種を相手にしてる時だけだ。同じ神を殺すことはあまり気持ちのいいものじゃない」

『楽しんでいると思いたくない？』

「そうとも言えるのかな。けど、やっぱり愉悦より、猛烈な不快感のが大きいのは事実だ。それは君たち精霊に対しても同じ。いつもせつかくだから楽しもうって努力はするんだけどね。進んでそれをするなら、何か確固たる理由や切欠がないとね。気分的にはよろしくないな。」

そう。だからクオリリアを殺すことは楽しみだ。

蓮に害をなした者を生かす道理が、マーノンには無い。

マーノンの中で今はもう、クオリリアはすでに人間たち下等種と同等だ。

感じる不快より蓮に手を出したことへの怒りが上回っているだけだ。

『楽しくもないのに、何故殺す？』

単純な疑問だろうそれに、マーノンが笑った。

「おかしなことを聞くね。<sup>ジョバム</sup>破壊を司るということはそういうことだ。世界に、リイに不都合な墮星<sup>ドルフィカ</sup>を摘み取り、根源を取り込んで破壊する。殺すことが僕に定められ与えられた役目なんだよ」

そこに感情の有無など関係ない。

与えられたその役目は絶対で、だからこそ破壊することしかできない。

そして、その役目を理由にするにはもう慣れ過ぎてしまったのだと、マーノンは琉璃紺の石を握りしめた。

「記憶の抽出は諦めるしかないか」

本当ならチャメトフを首だけにしてフィーシェンラのところに持ち込もうとも思ったが、この状態では、さっさと取り込んでしまわなければこの力が暴走してしまう。

琉璃紺の石は抑制するものが何一つない、力を剥き出しにした状態だ。

取り込んでしまえば、それは石の内部に蓄積された記憶などを残したチャメトフの魂を破壊してしまうために、記憶の抽出は不可能になってしまう。

『…やれないこともないが、ハビに許可を得てきても？』

「やってくれるの？」

『その中の記憶が必要で、他に手段がないのならば協力する。ただ、精神崩壊は免れないだろうから、主であるハビに許可を得ないことには』

「なら結界を消すから聞いてくるといい。僕はその間に向こうに感じる人の気配を確認してくるよ」

死体とチャメトフで忘れていたが、ハビにはそう言って離れたのだ。

あの死体がイストだとしても、シェリーアはあと一人いる。

それが本物かどうかは別として、隔離はしなければならぬこと

には変わらないのだ。

結界を解くとファンパニアはすぐにハビの元へと戻った。

ファンパニアがいなくなり、マーノンはファンパニアとの会話を頭の中で反芻して喋り過ぎだと情けなくなる。

手の中の琉璃紺の石を眺め、ぽつりと呟いた。

「気付いてないだけで、正気じゃないのかな」

## 23 ジョバム（後書き）

前話でグロを回避したら、あれ？  
マーノンとファンパニアがよく喋ること



## 24 焦燥

最初に感じた時よりさらに薄くなっている人の気配に、消し飛んだのは死体だけではなかったかもしれないと、他人事のように思った。

実際マーノンにとっては他人事だ。

シェブレイジの一族がどれだけ死のうと、知ったことではない。どうせなら消し飛んだ中にシェリア候補が入っていれば面倒事が一つ片付くだろう、くらいにしか思っていないのだ。

大体にしてフィーシェンラに頼まれたのはハビのお守であつて、シェブレイジ族のお守ではない。

いっそのことハビ以外のシェブレイジが全滅してしまえばとも考えた。

それをした後のフィーシェンラからの小言がうるさそうだったために、すぐさまその案は頭から除外したが、まあそのくらいマーノンにとってはどうでもいい存在だ。

「ここ、かな？」

気配を辿り行きついたのは、コッロードから幾分離れた場所にあるここらでは一番大きいであろう大木だった。

根元まで近づこうと歩を進めると、踏み出した足に何かが当たった。

柔い感触だったためにそのまま踏みつぶすように突き進めば、何かが砕けた。

「身の程は、知っておいた方がいいと思うよ」

襲いかかってきた精霊を事も無げに振り払い投げ飛ばし、踏みつける。

『フイーリ・マノレイ!?』

足の下から戦慄くような悲鳴が上がったが、気にせずにもた踏みつけた。

マーノンの名を聞いて、新たに襲いかかろうとしていた精霊たちが尻尾を巻いて逃げだしていく。

「襲いかかる前に見極めなよ。敵前逃亡もどうかと思うけど、敵の正体もわからずに猪突猛進するのは馬鹿の所業だよ、ケット。地上<sup>フイー</sup>神の精霊なんて元より馬鹿ばっかだけどさ」

『そんなことはない!』

「そこで口答えしてる時点で馬鹿なんだよ」

痛い痛い!と叫ぶケットと呼んだ精霊をぐりぐりと踏みつける。

くつきりと足跡が付くまで踏みつけてから、ようやく足を離れた。踏みつけられた背中を擦りながら、ケットが声高々に宣言する。

『馬鹿だ馬鹿だとは言うが、地上神の精霊が馬鹿なわけじゃないぞ。俺が特に馬鹿なだけだ!』

「…胸張って言うことでもないけど。いつそそこまで来ると清々しいね。ある意味感心するよ」

『おう!』

…もう何も言うまいと大仰に溜息をもらしつつ、マーノンは大木を見やった。

先には見られなかった大木の根元にある天幕に一人の男が立っているのが見える。

遠目でもわかる鮮やかな緑の髪と浅黒い肌は、彼がシェブレーションであることを示していた。

「あの状態じゃ話も出来そうにないよね」

『ウーゴの奴、ちびりそうだな。顔真っ青だぜ』

「一応今の主じゃないの?」

『仮誓約しかしてないからなあ。なあなあ。ノレイン一緒じゃないの?』

「この大陸にはいるよ。用を頼んでいるから」

『やったね！俺の予知も見捨てたもんじゃねえや！』

「いつもは味噌つかすにもならないほど、役に立たないけどね」

厭味も聞こえないほどにはしゃぐケットは、今にもノレインの下へ飛んで行ってしまいそうで、マーノンは首根っこを引っ掴んだ。ケットはいわば、ノレインの追っかけだ。

「ノレインのところへ行きたいのはわかるし、仮誓約ならほっぽっても平気だろうけどね。僕も用があっているんだ。付き合いな」

『…何するんだ？』

「うん。そうだね、まずはあそこにいる男から、イストとアンソニアっていう姉妹がどこにいるか聞いてこようか」

『そんなことならお安い御用だ』

ぽんつと、ケットは離れた男の下まで一気に跳躍する。

これ以上近づけば話もしづらだろうと、マーノンはそこから動かずに様子を眺めていた。

しばらくしてから、ケットが戻ってくる。

『イストはいねえってさ。アンソニアはコーレイが連れてくるってよ！あ、コーレイってのは』

「説明はいいよ」

『ノレインに会ったの久しぶりだなあ。…もうさ、眷属やめてからずっと追っかけまわしてたのに、ひっでえんだぜ！？何度殺されかけたか！』

「そのまま殺されればよかったのにね？何なら今死ぬ？」

『こっちのがひでえ！』

そう言いながら、傷ついた様子も、落ち込んだ様子もない。

相手にするのも面倒だと大部分を聞き流していると、後を追ってきたらしいファンピアが顔を出した。

騒がしいケットを適当に追いやる。

『待たせて申し訳ない』

「許可はもらってきた？」

『ああ』

ならよろしくと、無造作に琉璃紺の石をファンパニアに放る。それを口で受け止めると、その場に伏せった。

マーノンは黙って石の記憶を探るファンパニアを見ていたが、そこに追いやったはずのケットが戻ってきた。

『ひでーよ。いきなりデコピンでふっ飛ばさなくなっただけいいじゃんか』

「うるさいよ」

顔を向けるのも面倒だったマーノンに、ケットが剥れた。

『悪かったな！アンソニア連れてきたぞ！』

言われて振り向けば、人型の精霊が一人の女を抱えていた。

「レーン」

違う。

そうわかってはいるのに、その女の顔を見れば呼ばずにはいられなかった。

手の中にいないから尚のこと、マーノンは焦がれずにはいられない。

「レーン」

そつと糸を引いて、存在の有無を確かめる。

確かにある小さな手ごたえに、殊更胸の奥がじりじりと焼かれた。

ぐらりと体の芯が揺らぐ。

眩暈でも起こしているのか、視界がぶれて定まらない。

だというのに、女の顔だけはやけにはつきりと見えた。

蓮そっくりの造りに黒髪黒瞳をした、少し泣きそうな女の顔。

その表情に、マーンは自らの胸ぐらをぎゅっと掴んだ。

今、あの子供はこんな顔をして、泣いているのだろうか。

身を守る術を何一つ持たない子供だ。

殺されることは容易く、傷つけられれば治癒することも叶わない。

死に怯え、痛みに泣き、いつ来るかもわからない迎えをあの子供は待ち望んでいるのだろうか。

目の前の、この女の顔そっくりの表情を浮かべて…？

ふと、思考の奥で何かが引つ掛かる。

「レーンの、怯えた顔…？」

あの子供が、怯えた表情を…？

マーンが向けた殺気にすら、顔をうつすらと蒼褪めさせ息を詰めていたくらいで、泣きもせずに殺気から解放された途端怒鳴ってきたあの子供が？

殺されかけても次に会ったときには、平然と何か悪巧みしているような、あの子供が？

「ない、ね」

一度否定してしまうと、今度は泣き寝入りする以前に、相手をこれでもかと煽っていきそうな気さえしてきた。

いや、実際相手が目の前にいれば煽っていきそう。

いなければいいで、ぶちぶちと文句を言いながら貶しているこ

とだろう。

それほどまでにあの子供は気丈で、無鉄砲なところがある。  
素直に怯え、泣くことは絶対にしないだろう。

そう結論付けてしまえば、歪んで見えていたはずの視界は靄がは  
晴れるようにすっきりとしていた。

定まった視界の中、けれど、女の顔だけは変わらず蓮によく似た  
面差しをしていた。

微妙に縁取っている色が違うが。

『フィーリ・マノレイ？』

どうかしたのかと不思議そうに顔を覗いてくるケットを視線で制  
し、女へと手を伸ばす。

「その顔、どこで手に入れたの？」

黒に近い濃い緑の髪は、蓮と同じように癖がなく真っ直ぐで、瞳  
の色も黒に近い焦げ茶色をしている。

まるで、出来の悪い蓮の模造品のようで、マーノンは猛烈な吐き  
気を感じた。

握りつぶしたい衝動を抑えて、優しく、出来るだけ優しく指で頬  
をなぞる。

女はぶるりと体を震わした。

「根源である石が傍にあるせいで感じられなかったけど、さっきの  
はチャートの幻影だった。堕ちる前に君へとその幻影をかけたんだ  
ろうね。あのまま幻影に囚われてしまえば、脱け出すことは僕にだ  
って容易じゃなかっただろう。けど、その幻影から脱け出したとい  
うのに、未だにレーンと同じ顔をしているのは何故だろうね」

マーノンが口の端をにいつと吊り上げる。

ヒツと、小さく悲鳴が上がった。

その顔は、蓮と同じ造作でありながら、何とも醜く映った。

「ねえ。その顔、どこで手に入れたの？君の顔じゃ、ないだろう？」  
威圧的に問うマーノンに、女は小刻みに震えて首を振る。

支える精霊の手がなければすでに崩れ落ちていただろうが、そう

することもできずにマーノンの鋭い視線から目を逸らすことも赦されず、ただ震えて泣いていた。

口が開いても喘ぐような意味を成さない声だけで、次第に苛立ちが募っていく。

「人間ってどうしてこう柔かな。いくらなんでも少しくらい会話を成り立たせてもいいと思うんだけど」

『フィーリ・マノレイが威圧しすぎだと思っんだが。これじゃ恐くて口なんてきけねえって。…あ、いや、なんでもねえです』

「そのフィーリ・マノレイに気安すぎだ、お前は」

『うつせえ、コラーケイ！』

「もう少し神々を敬え、馬鹿者」

『俺なりに敬ってるからいいんだよ！』

「うん。答える気もないみたいだし、傷めつけて聞き出そうか」

『わーーーーーー！！！！！！！！マテマテマテマテ！！！！』

精霊同士の言い合いなぞ耳にも入っていない様子で、マーノンはいいことを思いついたとにつこりと笑った。

不穏すぎる言葉に、すかさずケットが止めに入り、人型の精霊が隠すように女を抱え込む。

「何」

『フィーリ・マノレイの傷めつけるは殆ど殺すと同義だろ！？話なら俺たちが聞くから、それはちよつとタンマ！』

「うるさいな。僕に指図しようって言うの？」

『アンソニアを殺すっていうなら「殺す！？」』

勇み立った様子で声を張り上げていたケットの言葉に、頭上から声が被さる。

上空を振り上げば、モントラークの背からハビが飛び降りてきた。ああ厄介だと、顔を顰めたくなるのを堪える。

「どういことだ、マーノン！アンソニアたちは隔離するだけだったはずではなかったのか！？」

よほど激怒しているのか、今にも胸ぐらを掴んできそうな勢いでハビが大声で言う。

マーノンは煩わしそうに頭を振った。

「うるさいよ。レーンと同じ顔をしてる理由を取っちめようとしていただけだろう？ なんだってそう僕ががなり立てられなきゃならないのさ」

「は？」

間の抜けた声を出し、ハビが視線を巡らす。

状況もわからずに口出しをするなど、マーノンは眉間にしわを寄せた。

しかし、女を視界に入れたハビはまた間の抜けた声で今度はこう言い放った。

「その女は誰だ」

事が起こったのが、その言葉の前であったのか後であったのか、はたまた同時であったのか。

マーノンは正確には把握していない。

ただ、瞬きのうちにズツと音を立てて足元に広がった闇に、逃れることも出来ずに吞まれていた。



interval ?

ヴォルドの事を考えると、無条件に胸が締めつけられるわ、帰りたいとか訳の分かんないことを考えてしまっわで、面倒通り越してむしゃくしゃするので、意識的に頭の奥の奥に押し込めた。

やることはなく、時間ばかりを持て余す今現在、私が出ることと言えばここからの脱出方法を考えるくらいだ。

考えたところで出られそうもないというのが、目が覚めて1日目にしてすでに私の出した見解だが。

だってここ、部屋全体に結界が張られてて、窓だって開けられない状態で、強行突破しようにもそんな力、私にはないし。

もう目覚めてから4日経つけど、コラリーはコラリーで私の話、もといジェスチャーを正確に読み取ることなんてしてくれない。

外に出たいがどうして風景画。

絵を見たいわけじゃないんだよ。

実物！生！シャブ！あ、違う、シャバがいいんだ！

それじゃないんだと訴えても、今度は窓の外になっていた木の实（生臭い青い実だった）を持ってきて、これをお食べになるんですかと不審そうに見られる始末。

意思の疎通の難しさを絶賛痛感中（手話って偉大だね、ホント！）。

これでどうやって出ろっっていうの。

コラリーたちに出す気があるかどうかは別として、散歩にも出れないというのに。

近衛師団の師団長様であるアナクは、上級魔術師であり、最上級騎士でもあるらしいが、彼曰く「融離魔力フイットンの濃度が本国と違いすぎ

て思うように力が使えません」それって結局使えないということ。  
役立たずめがと内心で罵るも、一番の役立たずは自分なので面と  
向かつては文句も言えず。

にしても魔術師の他に騎士つてのもちゃんとあつたんだな。  
職業関連興味なかったから初めて知ったよ。ありそうだなあとは思  
つてたけど。

上級とか最上級とかよくわかんないけど、そういうのって試験で  
もあるのかな。

もしあるなら、今度からその試験に融離魔力の濃度変化の適応性  
も入れておくことをお勧めしたい。

だって最上級とかついてても、使えなかったら意味ないし。

あーもー。

あのクソ天上神フイリのせいで時間の浪費もいいところじゃなか！

これは次会つたら絶対ぶん殴らなきゃ気がすまない！！

「そこ、間違つてますよ」

なんていくら息巻いたところで、結局今やっていることといえば、  
アナクに教えてもらいながらヴェネ文字のおさらいだ。

「ここを払って、こう。くるつと丸めるんです」

何度同じような指摘が繰り返されたのか、だんだんとアナクの顔  
がしかめっ面になっていく。

私はヴェネ文字は苦手だ。

この文字の造り自体、イマイチわからないのだ。

チエ文字は古代文字と言われるくらいだから、文字と言うよりは  
絵に似ていて、アフィン文字は丸と線で表される文字で、これを  
覚えるのは割合簡単だった。

ヴェネ文字はいえ、英語の筆記体をさらに崩したかのような  
文字で、どれもこれもが同じに見えるのだ。

書くときは英語のように単語単語で途切れないために、なおのこ  
と読みにくい。

「アフィン文字がわかってどうして、ヴェネ文字がわかんないんで

すか」

アフィン文字の方がわかりやすいから。

「チェ文字も完全とは言わないですが、それなりに使えてどうして……」

そんなもん、ミミズがのたくったイメージから脱せられない、この文字が悪い。

「一番覚えやすい文字のはずなんですけどね」

それはヴィレンツアーレ、ひいてはセイ・リチエラ大陸で最も親しまれている文字だからだ。

生まれた時からその文字を目にしていれば、覚えられないわけがない。

ていうか日本人が平仮名覚えるのと一緒にだね、それ。

「そろそろ休憩になさいませんか？」

スツとしたミントに似た香りのオレンジ色の茶を淹れてきたコラリーの言葉に、私は頷いた。

声に出して会話をしていなくとも、私の不満たらたらな空気はアナクに伝わっていたらしく、呆れたように溜息を吐かれる。

コラリーもこれの十分の一くらいでいいから理解してくれたらな。散歩くらいはさせてくれそうないでもないのに。

願望でしかないから、多分意思の疎通が図れたところで出られるわけないだろうけどさ。

けど流石に軟禁生活は気が滅入る。

アナクは普通に外出てるから余計に。

不貞腐れて音を立てて茶を飲んでると、風船が割れるような、空気が弾ける音が部屋全体に響いた。

それに驚く暇もなく、今度は窓ガラスが吹っ飛ぶ。

幸い、吹っ飛んだ窓から離れた位置に机があったために、破片をひつかぶることは無かったが、私は勿論、アナクもコラリーも声も出ない様子で驚いてた。

「見つけた」

窓枠に足をかけて入ってきた青年に、アナクが椅子から転げ落ちた。

## 26 闇の中の光

完全なる闇というものをハビは初めて体感した。

「マーノン？」

すぐ傍にいたマーノンを呼んだつもりが、声が耳に届かない。

口の中から濁ったような音を身体に響かせるだけだ。

黒一色に塗りつぶされた視界には、自分の身体でさえ映りはしない。

目に映らないだけで、服の感触や動いた時の感覚はあるために体があることは把握できた。

どこにも痛みは無いから、怪我もしていないだろう。

そうわかってくると、今度はここがどこなのか気がなり始めた。足元から広がった闇に吞まれたことは覚えている。

だが、その“闇”がなんであるかが、ハビにはわからなかった。

魔術や精霊の力というにはどこか禍々しい気がするのだ。

それ以上に、なんだかとても息苦しい。

視覚聴覚は利かず、唯一当てになるのは触覚というこの空間からどうやって脱け出すかを考えながら身体をずらすように足を踏み出した。

地面、もしくは何かしらの床に着くはずの足は階段を踏み外したかのように空を切る。

あ、と思った時には完全に平衡感覚を見失っていた。

上を向いているのか下を向いているのか、それとも横を向いているのか。

酷い浮遊感に吐き気が込み上げてくる。

「何してるの。しっかりしなよ」

心底呆れたような声が鼓膜を叩いた。

いつの間にか閉じていたらしい瞼を押し上げて、ハビは目に映った光景にハッと息を飲む。

黒一色しかなかった空間の中、マーノンの姿は光を帯びていて、自身どころか彼の周囲もが浮かび上がるように見えた。

蒼い光。

世界を照らす光。

強烈な光ではない、じんわりと温かいけれど多くを照らしたす光だ。

それを目の前にして、ハビは唐突にこれが“フイール天上神”なのだと理解した。

畏怖の正体、存在の定義、意義、意味。

それがこの“光”だと。

あまりに綺麗すぎる光に、感じていた浮遊感や吐き気がなくなっていることにも気付かずにハビは見入った。

「僕はここでやるべきことがあるから。ファンパニアはこのまま借りていくよ。ああ、それとアンソニアもね。君は君のやるべきことをすればいい。ただ、イストとやらの生死の確認と確保だけは君に任せるからよろしくね」

「は……」

反論や返答どころか制止すらする間もなく、ぼんぼんと口早に告げると、マーノンはハビの首根っこを引っ掴んで 投げた。

それはもう無造作に、ぽーんと。

勢いよく飛ばされた身体は膜のようなものを突き破り、地面の上に投げ出された。

草の上を受け身も取れずに転がったものの、怪我はかすり傷程度だった。

「ハビ！」

「……ウーゴ」

駆け寄ってくる人影に、ほっと息を吐く。

戻ってこれた。

そのことにただただ安心して、腰が抜けたみたいにその場に座り込んでいた。

「アンソニア？あの女が？」

「アンしか知らないこと知ってたし、精霊たちが満場一致で断定してたからまず間違いねえ」

被害の状況を聞きながらマーノンが壊した結界の修復をしていたハビは、信じられない様子で立ち尽くした。

あの闇に吞まれる直前に見た、記憶にない顔をしたシェブレイジの女。

マーノンがアンソニアも借りていくと言った意味がわからなかったが、あの女がそうであるなら理解できる。

だが、どうしてもハビにはわからないことがあった。

「アンソニアしか知らないことがなんなのが気にはなるが、それよりもだ。どうして顔が違うんだ。幻影の類はアンソニアは使えなかったと認識してるんだが」

アンソニアが誓約しているのは治癒系統の精霊一匹だけ。

アンソニア自身にしても、治癒魔術関連以外とは壊滅的に相性が悪かったはずだ。

「ここに避難してきた時にはもうあの顔だった。俺もアンだけに気を回してなんていらなかったし、アンはこれが自分の顔だの一点張りでさ。イストが戻ってきたらイストに聞いてもらえばいいと思っただけだ、俺も」

「イスト。そうだ、イストと連絡は？」

生きていることをハビは確信していた。

副頭目が死んだとき、それは頭目に伝わるようになっていたのだから、ハビにとって生死の定かは問題ではない。

「それだつたらついさつき。……でも、足を失つちまつたつて」

「生きているだけ儲けモノだ。流れ星…ドルファイカ墮星の姿を見て生き残れたんだからな。それで、イストは今どこに？」

早いところ迎えをよこして、ここの結界内から出るこのないようにしなくてはならない。

こんな脆い結界では、クランドフィンス最上級精霊を従えているフィーシェーラには役にも立たないかもしれないが、居場所を定めているのといないのでは対処のしようも変わってくる。

それに、この結界であれば、破られた時はハビにもわかるはずだ。  
「いや、それが…」

齒切れの悪いウーゴにどうしたと声をかければ、ウーゴはガシガシと頭を掻いた。

「フィーシェ・ロウラに助けられて、シェリトウーラ楽園の長の門前だつてよ」

しばらくそこにいるって、とどこか情けない声でウーゴが言う。  
迎えに行く手間は省けたにせよ、そのまま預けていいものかと、ハビは真剣に悩んでしまった。



「アカセヌの根に、トレバランの羽根、シェンシエムの尻尾、ゴンドラルクの干し草……。これでどうにか足りそうか？」

他の集落から集められたものを見て、なんとか難を逃れ残ったコッロードただ一人の薬師へと視線を送れば、わからないと首を振られた。

集められたモノは、死人の夢に効く薬の材料だ。

未だ連絡のつかない者たちも多く、避難民の大半は散り散りになって、どれだけの人数分の薬が必要になるのか、ハビにもわからない。

薬自体も効くといっても、完全に夢にハマってしまった者には、日に4度、これを1ヶ月と長く、意識が戻る前に一度でも抜くと最初からやり直しといった感じで、恐ろしく量が必要になる。

今ここに在る量では1週間ともたないだろう。

「追加分はそれが尽きるまでに揃わせる。とりあえず作れるだけ作ってくれ」

あとはウーゴに言えば、細かい指示などはあらかたやってくれるはずだ。

この緊急時にこのまま留まっていられないのはハビとしても申し訳ないが、こればかりはいかんともしがたい。

イストには結局迎えに行くまで動かないよう命じてある。

イストがいない分、ウーゴに全ての負担がいつてしまうことも、少し不安だった。

彼はイストほど頭が回らないから。

「レットーニヤから応援が来るまでの辛抱だろ。ハビが心配するこ

とねえよ」

ハビが不安を口にすれば、からからとウーゴは笑う。

レットーニヤ（シェブレージの集落の一つだ）からの応援は、早ければ朝にでも来る手はずだ。

だから任せるとウーゴは背を叩いて追い出しにかかるのだから、頼もしいと思う反面、やはり少しばかり不安が残る。

不安だ不安だと言っているにしても仕様がなれないと思ひ直し、モントラークの背に乗ってハビがラムラに戻ったのは、空がどつぱりと夜に浸かった頃合いだった。

「遅い」

開口一番にそう言ったユリスは、目に見えてわかる不機嫌面をしていた。

コウラン殿はと聞けば、話だけ詳しく聞いて、すぐさまアダンと共に国に帰ったという。

なるほど、あの厭味はきちんと遂行されたのかと思ひながら、手渡された紙の束を受け取った。

「3ヶ月……か。早いな」

ダングルルカに現れた新しい宗教が、浸透するまでの期間だ。

厳格なシェフィラ教の国でありながら、これは早すぎはしないかと目を剥いた。

樂園の長たる地上神<sup>シェリトゥーラ</sup>ファイシェズ・ファイシェンラをどれだけ崇め奉ったところで実益は無い。

それにしたって、とハビは思う。

天上神<sup>ファイリ</sup>をどれだけ敬い肖ろうと、この大陸の融離魔力<sup>フイツテン</sup>を握っているのは長だ。

どれだけその地で生成されようと、一度は地上の樂園<sup>テトシェリック</sup>に集めら

れ、その後は長の気まぐれによって大陸内に配分される。

その気まぐれも、本当に“気まぐれ”で、土地の事情なんて鑑み  
ることは一切ない。

昔であれば周知であつたこの事実も、長い時の中で廃れ消えか  
つているのだろう。

嘆かわしい、の一言に尽きる。

「で？元々頼んでた情報は？」

「ミーシャが今、上がってきた情報と統合している」

「そうか」

ならいいとハビは紙面の上にずらりと並んだ文字から目を離さず  
に言った。

新しい宗教      フィルリア教はダングルル力のみで流行り出し  
ているらしい。

なんでも一月前に天上神自ら姿を現したことが一番の効力だつた  
らしく、そこから爆発的に広まったのだそうだ。

何が目的でこの地に目をつけたのか、天上神の考えることはほとん  
とわからないと、ハビは匙を投げだしたくなった。

だが集められた情報を見る限りでは、ペリラドム大戦には関わつ  
てくることはなさそうに見えた。

魔術師も少なく、どちらかと言えば閉鎖的な国だ。

国も、国と言うよりは村に近く、この国を取り込んでの利点がわ  
からなかった。

「マーノンに問題を丸投げしてもいいんだろうか」

これはどうみても天上神の問題だと思つていいだろう。

「フィルリア教だろうとシェフィラ教だろうと何だろうと。何が流  
行ろうが、ラムラならいざ知らず、外なら感知の範囲外だな」

丸投げする気満々でそう呟けば、確かになとユリスも頷いた。

「俺の関心が働くのも、この時期に天上神が関わってるからであつ  
て、宗教なんぞどうでもいい」

「ぶっちゃけたな」

「俺たちシェブレージが仕えるのは樂園の長だけだ。それにシェフイラ教というなら、この大陸の仕組みをわかっているんだろ？ それを知っていてどこぞの天上神に仕えるというのなら、俺たちの知ったことじゃないだろう」

「そう言ってしまえば終わりだな。まあ俺も相談されただけで、アダンも情報収集に向かわせたただけだからなあ」

他人のこと言えはしないなど、ユリスは苦笑った。

ユリスがしたことは聞かれたことへの助言と、アダンに情報収集がてら送らせただけだ。

その送り方も大層具合の悪くなる送り方で、コウランにしてみれば親切というよりは嫌がらせに近いものだったろう。

「アダンの情報待ちで保留だな。目的が見えなさすぎる」

そう言って、ハビは持っていた紙の束を机の上に投げ捨てた。

ひび割れ焼けた大地と空の青さだけが強調される景色にうんざりしながらも、ハビはモントラークの背から降り立った。

人間というものは浅はかだ。

そしてそれ以上に愚かで、愚鈍。

それを見せつけられているようで、ハビは胸の奥に小さなしこりがずんつと溜まるのを感じた。

『生き物の焼ける匂いは何度嗅いでも気分のいい物じゃないね』

「そうだな」

景色の中に点在する黒い影は、もしかしたら屍なのかもしれない。ありがとう、モントラーク。ここからは一人で行くから」

モントラークの背に乗ったほうが快適なので連れて行きたいのは山々だが、連れて行きたくてもこの先にある結界で精霊を連れていては不都合が生じるために、已む無く徒歩で向かうことにした。

向かうは、目に映る景色のずっと奥。

聳えるような岩山の向こうに在るであろう、大陸最大の街。

ミンカシムの首都      デッドランデーハだ。

平坦な道なりを一日、結界を感知されないように通り抜けるのに半日、その後に続く整備されているとはいえ険しい山道を更に半日掛けて歩いた。

首都に辿りつくとき、そこは外の光景が嘘のように思えるほど賑わい、人で溢れていた。

人々で賑わう街並みをフードを目深に被って足早に歩くハビの姿

を気に留める者はいなかった。

一軒の寂れた宿屋に身体を滑り込ませるようにして入ると、恰幅のいい主人が出迎えてくれた。

「空いてるか？」

「ええ。いつも通りですよ」

「頼んでいたものは？」

「出来てますよ」

そうかと頷くと、そのまま二階へと続く階段に向かう。

階段を上がって一番奥の部屋へと入ると、マントを脱ぎすてた。

この宿はラムラからこの国へと派遣された男が始めた宿で、ラムラやシェブレイジの人間は金を払わずに貸し出してくれる。

その分、ラムラからの物資援助があるために、どれだけさびれていようが暮らしていくのには困らないらしい。

「方陣は……」

ドアの裏側に目当ての物を見つけ出す。

薄い樹脂で書かれた方陣

正式名称、魔導式魔力循環方陣を

ゆつくりと右手でなぞる。

「チュイ・トーラ」

背後に現れた人型の精霊は、命じられることもなくハビの腕をとると、些か乱暴に方陣へと手をついた。

「跳スイクべ」

マーノンの時とは違う、腹の奥底が引つ張り出されるかのような力と上下に振られるような変な浮遊感に、吐き気がして堪えるようにハビはぐつと目を瞑った。

チュイ・トーラが声をかけるまで数秒のことだというのに、体感的には数分以上に感じ、目を開けた時にはぐつたりとしていた。

「転移はもう少し快適にならないものか」

マーノンの空間歪曲転移能力を知ってしまうと、その不便さが浮き彫りにされて、いつもの二割増しに疲れを覚えてハビはその場に座り込んだ。

「申し訳ありません。もとより転移能力は持ち合わせておりませんので」

慇懃無礼にそう言い放つチュイ・トーラに苦笑いをもらしながら、へたり込んだ腰を持ち上げ、礼をとった。

「お久しぶりです。大神官シーグフリード」

「挨拶はいつになるのかと思っておりましたよ。神の代理者」  
フィンガード

燦々たる光の降り注ぐ温室の中で和やかに笑う老翁は、「それと元、をお付けになるのを忘れないでください」と悪戯っぽく付け加えた。

元、大神官シーグフリード。

ハビが彼に会いに来たのには、勿論目的があった。

勧められた向かいの席に座ると、シーグフリードの精霊である人型のコレットが淹れてくれた紅茶が目の前に置かれた。

チュイ・トーラはハビの後を追うこともなく、方陣の描かれた上からも一歩も動こうとはしなかったが、コレットをきつく睨みつけている。

「いつになれば地上神<sup>フィッシュ・フィッシュエンラ</sup>フィーシェンラが動くのかと、我ら神官は皆、今か今かとお待ち申しておりました」

椅子に座ったままとはいえ、恭しく首を垂れる老翁の姿は、しかし、どこか胡散臭さが残る。

その一切合切を無視し、言葉の額面だけを耳に入れて、ハビは言った。

「では、楽園<sup>シエルトウーラ</sup>の長の厳命に有無を言わずに従うと？」

「我らテジヘフィズ教の教えをご存じでしょう？<sup>ファイリ</sup>天上神であろうと地上神であろうと、我々が従うは最高位の神のみ。フィーシェンラ神の命であるならば、我々教会は喜んでお遣い申し上げます」

「では、こちらの書状を国王に。自署誓約の正式な誓約書が同封されていますので、内容を踏まえてどうぞご検討を」

持ってきた封書を机の上に置き、ハビは紅茶に手をつけることなく立ち上がった。

「受けるかどうかはそちらに一任します。ですが、どちらにしてもご決断はお早めに。時間はあまり、残されておりませんので」

ハビの言葉をどうとったのか、顔を強張らせた老翁に、柔らかいまでの微笑みを浮かべそれとなくハビは付け加えた。

「このお茶はどうぞ、貴方が飲んでください。俺は混ぜ物は嫌いなもので」

渋みのある薄茶色の紅茶から微量ながらも香る匂いに、気付かないとも思ったのか。

ザツと音を立てて血の気が引き、悔しげに歪められた老翁の顔は、なかなかの見ものだった。



## 28 老翁（後書き）

修正前の内容はどうぞ頭の中から抹消してやってください…。

## 29 黒ならなんでも神聖になるんです

宿に戻ってきてすぐ、ベッドの上に荷物を広げ始めたハビの背後からチユイ・トーラはその手元を覗きこんだ。

「よろしかったのか」

「構わない。あれだけで随分と脅しになっただろ」

「…脅し？」

「この国の国教であるテジヘフィズ教の神官である彼にとって、俺の不興を買うことは樂園シェリトウラの長の不興を買うことと同じことだと思ってる。大神官の任から降ろされて切羽詰まっているからって、俺に盛ろうとしたことを今頃血相変えて後悔してるだろう」

「後悔して、封書を国王に渡そうとすると？」

「いや。直に渡すことはまず無理だろう。あの温室に軟禁されている男が、そうそう国王に接触できる機会なんてないだろうからな。ただまあ、元大神官だっただけあって、伝手はあるだろうからな。誰かしらに預けるなりなんなりするだろう。時間もないと脅したことだから余計にな」

教会側に危機感を植え付けられさえできればそれでいいのだと笑うハビは、デッドランデーハの地図を広げ、緑のピンで皺のないように四方をベッドに縫いとめると、チユイ・トーラに手招きした。地図を挟んだ向かい側に座ったチユイ・トーラの手を握り、輪になった腕の中に地図が入るようにする。

フィットン・グーラク  
「魔力測定」

チユイ・トーラの声に呼応して緑の光が地図の上に浮かびあがって行く。

「…あーやっぱり薄いな」

ラムラで情報を確認した時もあったが、ミンカシム全体で融離魔<sup>フイツ</sup>力が例年よりも薄くなっている。

否、ミンカシムだけではない。

<sup>テトシエリック</sup>地上の楽園とラムラを除く大陸全体で、僅かに減少している。

それが顕著なのが、ミンカシムとメプスキーだ。

「長の処置、か」

することがないというだけで、彼の長は意図的に外に排出する融離魔力を減らすことだって可能だ。

だがこの融離魔力の減少がペリラドム大戦に拍車をかけている。

なんとしても融離魔力の沸く土地を手に入れなければ、どちらも引けられないところまで来てしまった。

「これなら一時的にしろ、停戦は簡単かもな」

「何故」

「王族殺しが発端といっても、このまま続ければ破滅は目に見えている。国だけで済めばいいが、これ以上融離魔力が減少すれば、結局のところ待つのは死だ」

融離魔力がなければ、植物は育たない。

それどころか、水も火も簡単には手に入らなくなる。

「融離魔力の湧く土地がないとわかれば、手を引かざるを得ない。

だが、盲信的な輩は多いからな。こちらの情報が偽りだと言いだす

馬鹿もいるだろう」

「それであるの自署誓約ですか」  
<sup>ゲネレ・トウルレ</sup>

繋いでいた手を離し、荷物の中からシーグフリードに渡したものと同じ封書を取り出す。

「今度の大战での爪痕は大きすぎる。どれだけの土地が壊滅状態になったか。あれを復興させるだけでも優に3年以上はかかる」

それも常時の融離魔力の量であればの話だ。

そうではない今、ただ現状を維持することだって危うい。

「それを2年で賄えるだけの融離魔力を与えようというんだ。悪い話じゃないだろう？」

「それを与える代わりに停戦しろということか」

「と、同盟を組めということだな。あとは1年間の最上級魔術の使用制限」

そう易々と融離魔力を与え、与えられることを癖にされては適わない。

この際だ、面倒事は押し付けてやろうという魂胆のもと組まれた誓約内容だ。

「使用制限はわかるが、同盟…？」

「停戦した拳句両国が同盟を組んだとなれば、手は出しづらいだろう。しかも同盟を組ませた背後には楽園の長である地上神フイーシェズ・フイーシェンラが絡んでいるんだから」

牽制にはなるだろうと言えば、まどろっこしいとチュイ・トーラの眉間に皺が寄せられる。

「主は甘いな、いつもながら。フイーリ・マノレイがいるのだから、風漬しに漬してしまえばいい」

「その風漬しをしたら、楽園の外の間人間がラムラの人間だけになる」

あながち冗談では済まされそうにないだけに、ハビとしてはマーンマーンの力は本当に最終手段としてなるべく手を借りたくはない。

「それだけ残っていればまた増えてくと思うが。…神子フイーリンの言葉ではゴキブリ並みの生命力だとも」

「ゴキブリ並み…。ゴキブリってどういう生き物なんだろうな」

「黒光りした生理的に受け付けられない虫だそうですが」

「黒光り…神聖な生き物に聞こえるんだがなあ」

生理的に受け付けられないと言われると、どうにも想像し難い。

とにかく気色悪い生き物なのだろうが、それと同格にされる人間にハビは少し悲しくなった。

### 30 精霊の悪戯

封書の中から誓約書の紙だけを取り出す。

誓約事項が書かれたその下に、ハビの真名が書かれている。

この誓約書に効力を持たせるためには、ミンカシムとメプスキーの国王ら二名の署名が必要となる。

三人分の署名全て揃った時点で効力が発揮されるから、それまではただの紙切れだ。

署名されるにしても、今日一日でどうこうなるような問題ではない。

すでにチュイ・トーラはおらず、ハビは宿の部屋の中でぼんやりと誓約書を見つめていた。

「…寝るか」

ここ最近避難民の問題やらからずっと、ろくすっぽ休める時間も作れなかった。

数日寝なくたって体に支障をきたすようなことはないが、それでも身体は休息を求めているのか、ベッドに寝転がった途端、吸い込まれるようにハビは眠りについた。

深く貪るように堕ちていた意識が、何かの気配で一気に浮上する。腕に仕込んでいたナイフを引き抜き、横になったままじっと気配を探る。

宿の主人であれば、ドアをノックするだけで部屋には入ってこない。

それ以上にあの男ではあり得ないだろう。

淀み濁った殺気が部屋中に充満しているのに、その気配の根を断つようなことは。

神経を尖らせて静まり返った部屋の中は、窓の外の喧騒をどこか遠くに置き去りにしていく。

「そんなに硬直されなくても大丈夫ですよ」

耳元に降って湧いた見知らぬ声に、ハビは反射的にナイフを切りつけた。

ナイフの切っ先は相手の腕に埋め込まれたというのに、肉を切り裂いた感触が一切なかった。

引き抜いてみれば血どころか、服すら裂けていない。

「なかなか…向う見ずですね」

「…マーン！？いや…誰だ？」

呆れたと言わんばかりにため息を吐く相手の顔に、ハビは愕然とした。

あのマーンと同じ顔をした青年に、思わず腰が引ける。

「申し遅れました。ノレインといいます。フィーリ・マノレイの眷族ですよ」

「……眷族」

「ええ。すみませんね。気配を消すのも、そのくせどうにも殺気が駄々漏れになるのも、もう癖のようなものでして」

「はた迷惑な癖だな」

そんな殺気のおかげで目の前に立たれるだけで、いつ殺されるのかとこっちは冷や冷やさせられているというのに。

さすがはフィーリ・マノレイの眷族といったところかと、ハビの中で諦めにも似た感情が浮かんた。

「それで？一体何の用だ？」

「いえね。少々主人に用があつたのですが…“声”が届かないもので」

「だからってなんで俺のところ？」

来る必要性が見えないと胡乱げにハビが問うと、ノレインは楽しげに口を歪ませた。

「おや。人間であるあなたにとっても必要な情報かと思ったんです

「がね？」

「…情報って」

「いえ。なんてことはないんですけどね？昨夜無秩序な歪みが発生したんですよ」

歪み。

その言葉に、ハビの背筋は瞬時に凍った。

「幸いにも小さいものでしたから、こちらに被害はなかったんですが。…あれは多分また起きますよ」

「何故、わかるんだ」

「空間がひずんでいくのが見えましたからね。私は壊れやすいものを見つけるのが得意なもので」

壊れやすいの意味がわからなかった。

ただわかるのは、空間に歪みがあるということ。

そしてそれが引き起こすは、 災厄。

空間にできた歪みが穴となり口を開け、その穴が閉じるまであらゆるものを呑みこんでしまう。

それに呑まれたものの全て、二度と戻ってくることはない。

人も物も、災厄が大きければ大きいほど被害は拡大する。

「大きいのか？」

「かと思えますよ？あれは結構範囲が広がったからなあ。多分大陸の西側、丸ごと呑まれることになりそうなくらいには」

「そんなに…」

「けれどまあ、原因であるものがすでにその地を離れているから、もしかしたらそのうち自然と収まるかもしれないが」

「原因：？いや、それより災厄までの時間は…」

顎の下に指を当てて、ノレインはわざとらしく考えるふりをした。  
「んー。最短であと5日ってところ、ですかね？」

くらりと眩暈がハビを襲った。

5日。5日で西…。

今ハビのいるデッドランデーは、大陸の東も東。

テトシェリツク

中央部である地上の樂園の東端に戻るとしても最低でも4日。  
西のどこかは知らないがとてもじゃないが行ける距離ではない。  
今こそマーノンの力を借りたいと、ハビは心底思った。



interval ?

窓から入ってきた男に私は勢いよく抱きついた。

「遅くなってごめんね」

耳を擦る声に、胸に顔をすりつけたまま首を振る。

するりと右頬を撫でた手が前髪を掻き上げて、額に柔く懐かしい感触が落ちる。

そのことに酷く安心感を得てしまった自分に泣きなくなった。自分で思っていた以上に、私はこの存在に心を許しているのだろう。

「無事でよかった。レーン」

ただただ強く抱きしめてくる腕の強さに身体を預ける。

力強く、無遠慮なのに不器用なまでに優しく触れる手は変わらない。

ああ、なのに。

どうして、右腕がないの…マーン。

「ああ。声が封じられてるね」

咽喉を指が擦って離れていく。

それだけで咽喉から何か小さな突っかかりのようなものが消えた。

「……あ」

久方ぶりに聞いた自らの肉声。

少し掠れたような声だったけれど、ようやく喋れるのかと思うと考えるよりも先に口が開いていた。

「疲れた。マジで疲れた！てか何！？私何で天上神に敵視されてん

ファイリ

の！？首絞められるわ、声封じられるわで散々だったんだけど！いや、そんなことよりその腕！何で右腕無くなってるの！？」

肩辺りから綺麗すっぱりと無くなっている右腕。

何が驚きって、マーノンに傷をつけられる奴がいるってことが驚きだ。

まさかあのクソ天上神がつけたのだろうか。

…アイツ殺す。

絶対殺す。

神様が死ぬようなものなのかは知らないが、絶対殺す。

「レーン、眉間に皺。そんな顔しないで大丈夫だよ」

眉間を左手の親指の腹で皺を伸ばすように丁寧に撫でながら、マーノンが可笑しそうに笑う。

むくれる私に、また額に口付けを落とした。

「でも…」

「これはちょっとした取引の結果だから。誰かに奪われたってわけでもないし、傷つけられたわけでもないから、レーンがそんな顔をする必要は全く無いよ。切り落としたのは僕だし」

「…」

その取引とやらが誰とのもので、どうして腕を切り落とすことになったのか。っていう経緯が私は知りたかったけど、深くは突っ込まないことにした。

例えあのクソ天上神が関係していないにせよ、八つ当たり材料にはなる。

ああ、そうだ。

八つ当たり材料で思い出した。

「アナク、大丈夫？」

椅子から転げ落ちたまま、真っ青な顔色でけれど視線を外すことも出来ずにマーノンを見上げているアナクに声をかける。

答えは返ってこなかったけど、意識はしっかりしてそうだから大丈夫だろう。

「ね。そういえばどうしてここが？」

「ん？僕の眷属が見つけたんだよ。目だけはいい奴でね。ヒントも貰っていたし、レーンは特に壊れやすい生き物だから、アレの目には留まりやすいとは思ってたけど、ちゃんと見つかったよよかったよ」

私が壊れやすいかどうかはさておき、マーノンの眷属…。

連れてきたら地上が血の海になるとか前に言ってたか？

あれ、聞き間違い？

聞き間違いなのか…？

「ところでレーン」

「ん？」

「ずっと嫌な気配がしてるんだけど。あれ、何？」

「あれ…？」

マーノンが指さした先にいたのは、コラリーだった。

まるで親の敵でも見るかのようなコラリーの表情に、私は思わずマーノンに体を寄せた。

血走った眼が、マーノンだけを捕えている。

つい先ほどまで優しく微笑んでいたコラリーの変貌に、少しだけゾッとする。

「レーン」

大丈夫だというように私を抱き寄せて、マーノンはいつもの笑みのままコラリーを見返した。

その視線を受けて、コラリーは肩を震わせたが視線は外さなかった。

外さないまま、ぶつぶつと何か言い始める。

どこかに隠し持っていたのか、いつの間にかその手には短剣が握られていて。

常軌を逸した様子のコラリーを私は黙って、マーノンに庇われたまま見つめるしかなかった。

「コロス…コロセ。アレは、アレが、神の皮を被ったケモノ…！」

さして距離があつたわけではなかったために、短剣を構えたコラリーは二歩で私達との距離を詰めた。

突き付けられた短剣に、私はマーノンの背後へと押しやられ、足がもつれて横倒しになった。

気付けば、マーノンの腕にずぶりと短剣の刃が埋まっていた。

「マノレイ……！」

じわじわと服が血で滲んでいく。

だというのに、マーノンの顔に浮かんでいるのは恍惚とした表情だ。

「ねえ、レーン」

腕に突き刺したまま、顔だけ振り返って私を見るマーノンの向こうで、コラリーは我に返ったように短剣から手を離し、一歩、また一歩と後ずさっているのが癪に障った。

「殺してもいい？」

だからか。それとも、マーノンを傷つけられたこと自体への純粋な怒りか。

「この国ごと潰して」

どちらにせよ、腹の奥で燦るところか、頭に血が上って目の前が真っ赤になるほどの怒りを私は感じていたのだ。

i n t e r v a l ? (後書き)

よつやく母子の再会w

### 31 本懐

あどけない顔で笑って、羽のように軽やかな声が大切な名前を呼ぶ。

好きだ好きだと口にして、傍にいさせてと懇願して。

どれだけ顧みられないことを知っていても、追いかけて追いかけて。

でも、どんなに願っても、その視線を振り向かせるどころか、動かすことさえ出来なかった。

急いた心は焦れて焦がれて、それでも切り捨てられずにまた後を追う。

アナタのためなら、アナタが望むのなら、どんなことだってできるんだ。

なんだってできる。

自分を殺すことも。

アナタ自身を殺すことも。

闇という黒以外、象られたものは何もなかった。

何もないからこそ、マーンンの姿は一際際立ち、輝く。

そこに“在る”ことこそが天上神フィリの運命である以上、その存在の誇示が天上神の役目だ。

光でもある彼らは、闇の中、光ることですその存在を示し、主張することです世界を照らし出す。

「クオリーの罫、か。術の負荷でもかけたら強制的に根源への入り

口が開けるようにでもしたな、あのアバズレ」

フィルヴァ・ララム

神々の間では、根源の狭間とも呼ばれるこの闇は、通常ならば入ったら最後、二度とは出てこれないと言われている代物だ。

けれどもそれは、事実ではあるが真実ではない。

二度と出てこれないのは出口を見出せず、作れもしないからだ。

破壊を司るマーノンからすれば、出口を作る　否、空間の一

部を壊すことは容易い。

そもそもここに入り込んだことは一度や二度ではない。

他の神々よりは勝手を知っている。

ハビを帰すことだって、造作もない。

造作もないが、苛立ちは抑えられずにいた。

闇に吞まれる寸でのところで、根源である琉璃紺の石をマーノンが体内に取り込んだからいいものの、もし取り込んでいなかったら、マーノンたちが闇に吞まれた直後、あの一帯は琉璃紺の石に宿る根源が引き起こしたであろう力の暴走に巻き込まれていたはずだ。

あれ以上シエブレージが減ることは、ハビは勿論のこと、フィーシエンラも良しとはしないだろう。

要らぬ労力ばかり裂けさせられて、クオリリアへの怒りは膨らむばかりだ。

その怒りを抱えながらも、闇ばかりが広がる空間を一度ぐるりと見渡し、マーノンは一つの方向を見据えるとそちらへと一歩進み出た。

瞬きの内に、闇しかなかった空間に現れた蒼い膜のような球体の中で、ファンパニアと一人の女が眠っていた。

「起きてくれない？」

「……すまない。止めようとはしたのだが」

「気にしないでいい。君がどう注意したところで、吞まれてたよ。

君が壊れてないだけマシ。それより…そっちは起きそうにないね」

「起きたところで、この空間に耐えられはしないと思うが」

確かに、いくら結界が張られていたとしても、人間が耐えられる

とは思えない。

ハビのように上位以上の神と契約しているのなら、ある程度の耐性は得られるのだろうが。

精霊でさえ気を抜けば精神を病んでしまうこの空間で、結界で肉体的に守れはしても、精神的に守れはしないのだから、ただの人間なら目が覚めたら狂うだけだ。

「…そのまま寝かしておこう。起きられても面倒だし」  
起きていなければならぬわけでもない。

呑気に眠っている姿が癪に障るというだけで、それ以上の意味は無いために、面倒は回避させることを優先させた。

『それで、ここから脱け出さないのか？』

「それはまだもう少し後。その前に、ここに入り込んだ外なら、外に出たら出来ないことをしないとね」

あの琉璃紺の石から開いた根源の狭間ならば、ここはあの石に宿っていた根源に最も近い。

「記憶を見るのに、ここは最適な場所だからね」

抽出までしなくても、それを探す能力があればここでなら簡単に引っ張り出すことが可能だ。

当初よりかは、ファンパニアにかかる負担も格段に低くなるはずだ。

『どこまで引き出せばいい』

「そうだな…。とりあえずクォリーと最後に接触したところかな」

『わかった』

するりと結界から抜け出たファンパニアが、マーノンに擦り寄るように寄り添う。

尾を足に絡ませて、記憶を探るためにファンパニアは瞑想に入った。

尾が触れているとから流れ込んでくる記憶をマーノンはぼんやりと眺めた。

整理されていないそれらは、無秩序で無作為に流れ、意味を成さ



ない。

それでも、マーノンの心に一つの感情を置き去りにするだけの思いが、どの記憶にもめいっぱい詰まっ

「チャート」

琉璃紺の髪を揺らして、駆けていく幼い神。

フィーリ・クオリリアだけを妄信し、その影を追い続けた。

「馬鹿な子」

ぼつりと漏らした言葉は、ファンパニアには届くことなく闇に溶けた。

なんだってできるんだ。

アナタが望むのなら、なんだって。

### 32 禁忌

ぼろぼろと音もなく闇が崩れ剥がれていく。

その様はまるでフィーリ・マノレイの涙のようだと、ファンパンアはその情景を目にし、思った。

泣いてるわけではないが、とても悲しげに瞳が揺らいで見えたのだ。

完全に闇が崩れ去る頃には、すでに飄々としたものに戻っていたけれど。

吞まれた場所から離れてはいるものの、地上の樂園らしく緑が生い茂っている。テトシェリック

胸に手を当てて、マーノンは大きく息を吐き出した。

それに合わせてズツと体内に手を差し込む。

何かを掬うように手を動かし、ゆっくりとその手を抜いていく。

抜き出された手の上にあったのは、どろりとしたゼリー状の濁った何かだった。

『それは…？』

見たこともない物体にファンパンアが問う。

マーノンは聞こえていないのか、じっと見入るようにそれを見つめ、終いには握りつぶした。

指の間から飛び散ったモノは空気に溶け込むかのように霧散し、手に纏わりつくように残っていたモノも、同様に消えていった。

完全に消えたのを見とめてから、マーノンはアンソニアに張っていた結界を解いた。

草を踏みならして徐に近づき、未だ目を覚まさないアンソニアの腹を蹴りあげる。

「いい加減起きな」

痛みに呻くアンソニアの髪を掴んで強引に引き起こし、木に叩きつける。

蓮に似た顔が苦痛に歪むのはマーノンとて心苦しいものを感じるが、この女は蓮ではない。

なれば、容赦する理由はないに等しい。

「ははっ。君が慈愛<sup>シエリア</sup>じゃないのはわかりきってる。だから。うん、だからさ、殺しちゃいけない理由が、ないんだよね。君の仕出かしたことを思えば、フィーシェンラも君を殺すのは許してくれるだろうし」

抑えつけるように胸の上を踏みつけて壮絶なまでに綺麗に笑うマーノンに、ファンパニアはマーノンたちから目を逸らした。

今見ているマーノンの行為も、これからするであろう行為も、ファンパニアにとって止める権限は何一つ持ち合わせてはいなかった。フィーリ・チャメトフの記憶を見た今では、尚更。

目の前のこの女は、今のその顔を手に入れたいがために、フィーリ・チャメトフと交わった。

<sup>ラルゲル</sup>夢幻を司るフィーリ・チャメトフが、幻を現実にするただ一つの方法である。

と同時に、人と神が交わる事、それは絶対の禁忌だ。

だがしかし、その禁忌の術を持ってしても、得られたのは顔だけのようだが。

「君を庇護するものはない。神を意図的ではないにしろ貶めた君を守るものは誰一人としていないだろう。例えハビであってもね」

「嘘よ！」

反射的にであろう返された怒鳴り声に、マーノンの眉間に皺が刻まれた。

「ハビは守ってくれるわ！だって…だって私は、フィーシェーラの…ひっ…！」

「黙れ」

感情が抜け落ちたまま冷えた瞳でアンソニアの顎を掴み、そのまま力を込めて骨を粉々に粉碎した。

蓮からの許可がなかるうとも、フィリーシャからの赦しがある。マーノンを止めるものも、阻むものもない。

「僕も、フィリーシャも、レーンの存在を辱めるものを許さない。死を持ってこそ、償われるべきだよね」

楽には死なせないけどさ。

パツとアンソニアの目に鮮血が散った。

皮膚と言う皮膚のいたるところから血が流れだし、ショックと痛みから醜い女の悲鳴が上がる。

のた打ち回りア力をまき散らす女を口元だけは楽しげに歪めて眺める。

そうして、次は精神をギリギリまで壊そうかと、恐怖に醜悪を晒すその顔に手を伸ばした。

やめてくれと、口にできたらどれだけいいだろう。

耳にこびりつくような狂宴を背に、ファンパニアは強く感覚の全てを遮断したまま終演を待った。

憐れんだわけではない。

ただ重なってしまったのだと、闇の中でマーノンは目を伏せた。

「馬鹿な子」

漏れた呟きをもう一度吐息交じりに囁く。

見たかった記憶全てを見て、マーノンが言えたのはこの一言だけだ。

憐れんだわけじゃない。

そんなことは絶対にしないし、それは憐れみを持つようなことでもなかった。

けれどほんの少し。

ほんの少しだけ、フィーリ・チャメトフが置き去りにしていった感情を理解してしまった。

「あの子は僕だ」

それでも、あの子ではない自分に僅かながらの安堵を覚えると共に、これからの未来を懸念する。

同一ではなく、しかし同種である自分たちの末路は、きっと変わり映えもしない。

変えようという気もないからこそ、悲しいと思った。

唯一絶対の存在を求め、焦がれ、その幻影にまで手を伸ばす。その魂の続く限り、ずっと、変わることなく。

「馬鹿な子」

自嘲ともとれる声色で、今度は強く吐き出した。

### 33 失態

ピチャリと靴の下でアカが跳ね、アカに塗れた靴を上塗りするよう汚していく。

靴どころか浸かったみたいに服へと付着した血を汚らわしいと言わんばかりにマーノンは眉を顰めた。

小さな所作で皮膚や髪に着いた血を消し、全身の服を新たに作り変えたところで、満足げにファンパニアを振り返る。

「ハビにはこれ、聞かれない限り黙っててくれるかな」  
『了解した』

問い掛けてくるのと同時に、それなりの範囲に散っていたアカや意味をなさない塊が、夢か幻のようにふわりと血の一滴どころか跡形なく消失していく様に、ファンパニアは感嘆としながら返答した。惨劇そのものというよりはアンソニアの存在そのものを消し去ったかのような感覚で、どちらにしても現実味は格段に薄れた。

耳にこびりついた音も連れ去られたようになりを潜めてしまったから余計に。

ぼんやりしていると、マーノンが目前まで近づいてきた。

「そのままじゃ危ないねえ」

言われて、自らの身体を確かめたところで頷いた。

ファンパニアの下半身がほぼ消えかかっている。

気を張っていた分なんとか精神崩壊は免れたが、結界の外にいたために耐えきれなかったのだらう。

消えかかっているが、痛みは全くもってないだけに気がつかなかった。

「これをあげるよ」

懷から差し出されたのは小さな花の形をした欠片で、青みがかつた乳白色をしていた。

『これは…?』

「チャートの欠片つてところかな。いつもはそれも砕くんだけど、今回は特別」

あまり残してはいけないモノだが、精霊に分け与えるくらいなら大丈夫だと判断して、マーノンはファンパニアの口にソレを放りこんだ。

口の中に入った瞬間、溶けだすように消えてしまう。

それでも下半身を見やれば消えかかっていたのが完全に元に返っていて、ファンパニアはゆらりと尾を揺らした。

「ああ、やっぱりチャートだから修復力高いね。もしかしたら力の一つや二つ増えてたりして」

『…どうやらそのようだ。今なら人型にもなれそうだ』

「あら…。やっぱり地上神の精霊ファイシェに天上神の欠片ファイリ混ぜたりしちゃ、やばかったかな。理には触れないと思ったけど」

軽く言っただけなのに愕然とした声を返され、マーノンは頭を抱えなくなった。

理で禁じられていないからといって、それで大丈夫とは言い難く、それどころかファイシェーラという前例がある。

神々が子を生すことが出来ないことや人と神が交わることが禁忌となったのは、ファイシェーラのことがあった後のことだ。

今回のことが理に触れ、禁忌とならない可能性がないとはいえない。

「…今のところ何か問題ありそう?」

『特には』

「つてことは今すぐ何か起こることはなさそうだね」

『時間が経ってから何か起こるものなのか?』

「一概にはなんともいえないけど、そういう前例もあるんだよね。しかも一番厄介な」

『何が起こるのかは』

「わからない。それ以前に何の問題もないかもしれないし。…ここはリイカフィーシエンラに視てもらったほうが得策かなあ」

元々目がいい方ではないマーノンには、どうとも判断がつけられなかった。

フリーリーシャは未だ蚕の中だろうから自動的に除外して、結局のところフィーシエンラしかいなわけで…。

「シェリーアではなかったにしろ、その候補でシェブレイジの一族殺したとなれば、小言がうるさそう」

『不問になるようなことを言っていなかったか？』

「問題自体は目を瞑つても、行為に関しては何か言われるよ。ここは地上の樂園で、アレのテリトリ<sup>テトシェリツク</sup>ーだから絶対だね。あんまり小言を聞いている時間はないんだよなあ。狭間に堕ちてから、もう三日前は経ってるし」

しかしフィーシエンラに会わなければどうにもならないのではないのかとファンパニアが思った矢先、マーノンが不自然に動きを止めた。

ふうつと息を吹き返すように動きを取り戻し、にんまりと口の端を釣り上げて笑う。

「一度ハビのところに行かなきゃならない。君はどうする？フィーシエンラのところに行く時に声はかけるようにするけど」

『ついて行っても？何かあった時自分では対処できない』

「…ま、それもそうだね。じゃ、とりあえずハビのとこまで行くよ」  
言つて、ファンパニアの首をむんずと掴むと、すぐさま景色は移り変わっていく。

辿りついた先は宿屋の中で、ハビの姿を目にとめた途端、ファンパニアどころかマーノンも身を固くした。

「何襲われてるの、ハビ」

「…っ、助けてくれ！マーノンの眷属なんだろう！？早く退かしてくれ！！」



情けない声で必死に懇願され、マーノンはハビの上に乗るかかり上半身の服をほぼ剥いてさあこれから下だといわんばかりにズボンに手を掛けているノレインを蹴りつけることで退かし、ハビの腕を抑え込んでいたケットを引っ張り剥がした。

いつもながらにとんでもないことをやらかそうとするノレインとソレに惚れ込んでいるケットの組み合わせは、早急に引き離れた方がよさそうだと、痛みに対し正反対の表情を浮かべる精霊たちを見てマーノンは決意した。

### 34 見当

「何でこんなことになったのか…なんて、愚問だね。ノレイン。君の趣味にとにかく言う気はないけど、ハビに手を出すのはやめてくれる。フィーションラから小言を喰らうのは僕なんだから」

ノレインの趣味とは人間の部分収集だ。

男ならば性器、女なら胸といった部分を収集していて、大方、またその収集癖でも出たのだろう。

「申し訳ありません。情報の対価を戴こうと思ったただけだったのですが」

悪びれもしないノレインは、それどころか五月蠅いからとマーノンに踏みつけられているケットを恍惚とした顔で羨ましげに見ている。

この被虐性愛者が。と、内心で打ち捨てて、マーノンは呆れ顔で服を着直しているハビを見た。

「何の情報？」

「いや、その…広範囲で空間が歪んでいたと」

「歪み？へえ…ノレイン、情報寄こしな」

投げて寄こされた円筒の石を取り込み、内包された情報を得る。

おおよそ、チャートが犯した禁忌で引き起こされた災厄だろうと見当をつけていたマーノンにとって、ノレインから引き渡されたその情報は寝耳に水だった。

「…地上の楽園外？  
テトシエリック」

「外も外ですよ。西側全体を覆ってる分、被害がない、とは言いきれませんが」

「原因は何。ここまで大きな災厄、並大抵のことじゃ起こりようがない」

チャートが犯した禁忌のせいではない。

断言はできないが、大抵、災厄というものはその原因となるものの傍で起こる。

もしチャートが犯した禁忌が原因ならば、地上の楽園で災厄が引き起こされるのが筋だ。

そして、この災厄はチャートが犯した禁忌程度では割が合わないほど、大きすぎる。

「そばにそれらしきものは見あたりませんでしたから、すでにその土地を離れていると思ったのですが」

もう少し小さな災厄であれば、マーノンとてそう考えただろう。だが。

「あれほど大きな災厄だ。原因であるモノが離れたのなら、それについて範囲だつて広がって行く」

「フイーシェーラ同士の接触は？」

ハビとしてはそれ以外の原因を考えられなかったのだろう。

しかし、それもマーノンによって一蹴された。

「これほど大きな歪みなら、最低でもシェリーアが接触したことになる。その場合、シェリーアが楽園の外にいてることになるけど？」

「ああ、そうか……」

シェリーア候補である二人のうち一人はすでに死んでいる。

もう一人も、ハビの反応を見る限りまさか楽園の外にはいないだろう。

「原因が何であれ、クオリーが一枚噛んでるのには間違いなさそうだ」

「意図的に引き起こしたと？」

「地上神を嫌ってるからね。この大陸諸共消し去ろうとか考えてたとしても不思議じゃないけど。それにあれは天上神第一位だから、それくらいは理に引く掛からずにやりそうだ」

造作も躊躇いもなく、簡単に。

フィーリ・クオリリアを知っているノレインとケットは、納得したように頷いた。

「そのまま放置してもいいけど、フィーシェンラに恩でも売ったかな」

「どうか、できるものなのか？」

「出来ないでも思ってるの？」

出来る出来ない以前に、歪みそのものをどうにかするという発想自体、人間であるハビは持ち合わせていないことだろう。

意地悪く問いかければ、滅相もないと言いたげにブンブンと首を横に振られた。

そんなハビの傍で、我関せずといった顔で伏せていたファンパニアがふつと顔をあげた。

「今から？」

「いや。残念だけどそれは後回し。まずはレーン迎えに行かなきゃね。レーンを！だからノレインは歪みの監視、ケットはフィーシェンラにこのこと知らせてきて」

早速二手に別れさせると、足の下でケットが大声で喚き立て始めた。

「俺が行くのかー！？いやーだー！俺はノレインと…んぎゃっ！」

「うるさいよ。ハビはどうする？」

「出来るなら歪みがある場所まで行きたい。必要なら避難させないとならない」

先程までの情けない顔が嘘のように真摯に見つめてくるハビに、にぎにぎとケットを踏みつけながらマーノンはノレインを見た。

「ノレイン、ハビも連れていけ」

羨望の眼差しでケットを見ていたノレインは、マーノンの視線に頷くだけで了承した。

「ファンパニア…は、ハビといって」

頷くファンパニアを認めて、ノレインへと視線を戻す。

「それで？捕まえてきた精霊とレーンの居場所は？」

「こちらです」

何もない空間から手を握り開くことでノレイン取り出したのは、球体の膜の中にギユウギユウ詰めにされた獣型の精霊と円筒の石だ。精霊の方は大分弱っているようで、膜の中で虚ろな瞳でぐったりとしている。

「死にかけだね」

「口はきけますから」

命令そのままを遂行したらしい。

口さえきければマーンンとしても文句はなく、蓮からの命令を守るために、殺さないように気をつけなければならぬと考える。

とりあえずは。

「レーンを迎えに行くのが先決だよね」

円筒の石を手に、愛しい子供を抱きしめることだけを思った。

### 35 サイカイ

何も無く、海だけが広がるその場所を上から見下ろしながら、マ  
ーノンは腕に絡む糸を引いた。

「レーン」

今なら見える。

繋がった糸の先が。

閉じた瞼の裏。

不貞腐れた顔をして、唇を尖らせている子供の姿。

眼を開け、左手を海へと翳し、スツと横に引き払う。

現れたのは島と島を覆う無数の青い光の網。

緻密で繊細な網目。

通常ならそれはそれは強固な結界だ。

「こんな結界に隠されてて、よく見つけられる」

それだけノレインの眼がいいのか、はたまた結界の中に隠されて  
いる子供があまりに脆すぎるのか。

どちらとも言えなさそうだと、マーノンは結界の網に手をかけた。  
つつと指先が網に触れ、数度撫でているとぽろぽろと撫でた場所  
から崩れ落ちていく。

人一人分の穴が出来上がるのを待ってから、マーノンは悠々と結  
界の中へと入った。

マーノンが中に入った数瞬後に、結界は自動的に修復され元に戻  
っていく。

緑豊かとは言えないまでも、内陸に比べれば緑多き島に、白い宮  
殿と青い神殿。

宮殿を中心に囲むようにあるのは街か。

「レーンがいるのは…」

糸を辿れば、神殿の塔につづいていて。

「いた」

外からでは見えないように結界の張られた窓の中。

ようやつと見つけ出した姿に、性急に結界を破り、子供に傷がつかないように注意しながらも乱暴に窓を吹っ飛ばした。

「見つけた」

パキリと部屋の中に踏み入れた足がガラスを踏み潰して音を立てる。

歓喜と安堵と色んなものが渦交ぜになった表情で胸の中に飛び込んでくる蓮に、マーンンは腕の中に取り戻せた存在を実感した。

「遅くなってごめんね」

胸に擦りつけるように首を振る愛おしい子供の額に、いつものようにそつと唇を押し付けた。

レーンに血を見せてはならない。

マーンンとて、フリーリーシャの言葉を忘れたわけではない。

体中を巡る痛みにうつとりと息を吐き、腕に埋まったままの短剣を見ながら、蓮の様子を窺い見る。

特に変わった様子はないから、すぐに引き離せば問題ないだろうとあたりをつけて腰が抜けたままの女装男を引っ掴み蓮の方へ投げ捨てた。

無いよりはあれば盾にでもなるだろう。

「そこでレーンを守ってる」

自失茫然としている女の腕を捻り上げて、大穴を開けたままの窓に近づく。

「レーンはここから出ないで、大人しくしてて。終わったらすぐ迎

えに来るから」

「わかった」

もう片方の手があれば頭を撫でて安心させてあげることまできただろうにと、どこか不安そうな色の揺れる瞳に思いながら、女を連れて窓から飛び降りた。

塔から程近い、蓮のいた部屋から死角になる木々の生い茂った森の中に入り込む。

「さーて。聞きたいことがあるんだ」

腕から短剣を引き抜き、木に凭れるように座り込んでいる女に切っ先を向ける。

「その女で何してるのさ。クォリー」

蒼褪め、恐怖に滲んでいた顔が厭らしいニタニタとした笑みで彩られる。

生き物の意識に潜り込むのはクォリアの常套手段だ。

「……何って、勿論。アナタを絶望させることだけよ」

不快げに眉を寄せたマーノンの背後　蓮のいる塔で大きな爆破が起こった。

ガラガラと崩れる塔を見上げ、瞠目するマーノンの耳に甲高い笑声が響く。

「傍にいれば守れたのに！　ざまあないわー！！」

濛々と立ち昇る煙と耳障りな笑声と。

「黙れ」

湧き上がる怒気に反射的に短剣を投げていた。

女の額を突き抜けた短剣が木に刺さる。

頭に穴が開いたというのに、声は止まらない。

女の口から声が上がっているわけではないからだ。

森全体に響き渡る笑声に顔を顰めるものの、マーノンは塔へ向かうとはしなかった。

そのまま塔へと背を向けて、宮殿へと足を向ける。  
腕に絡まる系にはまだ、しっかりとした感触がある。



蓮は生きている。

傍にいたあの男がしつかりと蓮を守ったのだろう。

少しの傷がついていようと、その礼は後できっちりとしてやればいい。

生きているのなら、今はそれだけでいい。

それよりも、今はただ。

「何も残すものか」

あのフィーリ・クオリリアに繋がるもの全てを一つ残らず消しやる。

それだけを考えて、マーノンは無造作に力を揮った。

i n t e r v a l ?

「いったーい！」

砂埃が目に入って、涙がボロボロ出てくる。

水でバシャバシャ顔を洗いたいと目を擦りながら、隣で咳き込んでいるアナクに声をかける。

「大丈夫？」

「なんとか…っ、レイン様は」

「私は平気。かすり傷一つないよ」

茶器が突然爆発して動くことも出来なかったが、アナクが前に出て庇ってくれたおかげだ。

アナクも服が少し焦げたくらいで、大した傷もないようだ。

「やー、今の何。びっくりしたー」

「それだけですか」

「え？何が？」

純粹に驚いてみれば、アナクはどこかあきれ顔だ。

驚く以外にどう反応すればいいのだろう。

私にはわからないので、スルーだ。

それよりも、早くここから出ないと色々怖い。

天井とか床とか壁とか、色々崩れていきそうで怖い。

現に今、床崩れてるし。

「結界もうないかな？」

「フィーリ・マノレイが入ってきた時点で消し去られていると思いますよ」

ああ。

あの空気の破裂する音は結界が壊れた音か。

ならばさつさと出ようと、抜き足差し足で部屋の出入り口である扉まで歩く。

怖々と歩いていると、いきなり背中を強い力で押された。

「走れ！」

言われて、ダツと駆けだす。

廊下に出たところで振り返れば、すぐ後ろにいたアナクの足元まで床が崩れかかっていた。

廊下で立ち尽くしていた私を抱き上げて、アナクは廊下を駆ける角に差し掛かり、曲がるのかと思いきやそのまま窓に突っ込まれた。

アナクの身体と一緒に、宙へと投げ出される。

少し離れた身体にアナクは私の腕を引いてしっかりと抱き寄せると、声を張り上げた。

「飛べ！！」  
ラクターク

地面にたたきつけられる寸前で、ぶわりと下から巻き上げるような風が起こり、柔らかいクッションの上に座るように身体が押し返されてゆつくりと地面に足が付いた。

「大丈夫ですか？」

「……今の、何？」

精霊もいなかったのに、魔法みたいな力だったことに茫然としてみると、アナクは不思議そうに首を傾げた。

「魔導のことですか？」

「まどう？」

「陣を描いた魔具に自分の魔力を蓄積させておいて使っんですよ。今のは一回こっきりなんで、もう使えませんけどね」

右手の人差指に嵌っている指輪を見せられる。

銀製のそれは大きなひびが入っていた。

「へえ……」

魔術以外にそんなものがあつたのかと驚いていると、もの凄い地響きと一緒に青い建物がかくもあっさりとし消し飛んだ。

「うわぁお。マーノンってば派手」

火柱というよりは濃紺の光の柱があちこちで上がり始める。

「あの光の柱……」

「コルビラの円光柱!？」

「……って何」

あの光の柱をアナクは知っているらしく、真っ青な顔色で見入っている。

そういえばコルビラって聞いた覚えがある気がするのは何でだろうか。

「コルビラは昔セイ・リチエラ大陸から消えた国の名前ですよ。その国で最後に見られたのがあの光の柱だっていう言い伝えで」

消えた国、といえば神子殺しの国だ。

その国で見られた、光の柱。

あれ?ということはなんだ?

「コルビラ消したのマーノンなの?」

「は!？」

国が廃れる風説だとか、フィーリ・ロレルアが絡んでいたとか言われていたはずが、実はフィーリ・マノレイが絡んでましたとか、やっぱり驚くよなあ。

顎でも外れるんじゃないかと思うくらい、アナクはあんぐりと口を開けている。

「てかあの光の柱って何なの?」

「あれは……光の柱が丸く円を描くように出るんです。その円の中は、塵一つ残さないっていう話ですよ」

「ふうん」

話ということは、正確な情報ではなさそうだ。

ああでも、アレが出た後国が消滅したんだから、そう外れてもいないのかもしれない。

「ところで、そろそろ移動しない?」

反対側へ塔が崩れて、それも止まっていると言っても、建物の傍

にいるべきではないと思う。

それにいつこの国の兵士がやってこないとも限らない。

安全な場所、というものがあるのかは疑問だけど。

離れることにはアナクも異論はないようで、立ち上がって辺りを見回している。

立ち上がったアナクにならい、私も立ち上がるうとしたが、如何せん腰が抜けてしまったようで生まれたての小鹿よりひどい有様だった。

これ見よがしに溜息を吐かれ、小さな子供のように抱き上げられる。

「どうも……」

「いえ。とりあえず向こうにある東屋に行きますね」

「東屋？」

指を差された方角的に森の中にあるようだが、この島の地理は私とどつこいどつこいのくせに何故知っているんだと首を傾げれば、一番最初にこの島に着いたのが東屋近くの森の中だったらしい。

東屋の正面には綺麗な湖もあって、人も滅多に近づかない場所だとのことで、光の柱の外にいればまあ安全だろうとも判断しそこに向かうことにした。

アナクに抱き上げられながら、光の柱を見上げる。

何かを奪う光とは思えないほど、それは私にとってとても綺麗に感じられた。

### 36 転移の先

マーノンとケットがいなくなったことで、ハビは自然とファンパニアの傍に寄ってノレインと距離をとった。

「そんなに警戒心剥き出しにされなくても、もう何もしませんよ。それより行くんでしょう？ さっさと行きたいんですが」

早く傍に寄れと、ノレインが手招く。

突如として襲ってきた相手では果てしなく信用ならない思ったが、逡巡している暇も惜しいのは事実で、厭々ながらもファンパニアを盾にしながら近づいた。

呆れたようにファンパニアが息を吐いたのはこの際無視だ。

「そこまで気にすることなんですかね。何も殺そうとはしていないかったのに。ただちょっと性器を貰おうとしてただけでしょう？」

死にはしなくても、心とか色々挫かれて死にたくなりそうなことは間違いないだろうに、理解できないとノレインは心底不思議そうな顔をしている。

「十分恐怖を煽られるモノだと思うが。いや、その前に何で性器なんだ」

「それは、精霊というものが、無性だからですかね」

「無性だから性器が欲しいと？」

「一種の憧れみたいなものですよ。神と違って、どうやったって手に入りませんから。私の場合はもうコレクションするのが趣味みたいなものですけど」

それがずらりと並んでいる光景を想像してしまい、ハビは露骨に顔を顰めた。

嫌なコレクションだ。

「無駄話は後にして、そろそろ行きますよ」

「どれくらいかかるんだ？」

「さほどかかりませんよ。人間を連れては初めてですけど、一時もあれば着くでしょう」

一時。

マーノンがいなければどうやったところで間に合わないと考えていた分、ノレインの転移能力の高さに驚きを隠せなかった。

転移に方陣を必要とするチュイ・トーラのその能力の差は歴然だ。

方陣を用いる場合、転移できる距離に制限があり、ノレインのよ  
うに一時でなぞ土台無理な話だ。

そもそも方陣を用意するのに2日かかる。

「転移能力が備わっている者ならそれほどの能力があるのか」

「誰もがってわけではないですよ。眷属であるかどうかもありますし、なにより転移といってもさまざまですから。自身のみの転移ならば、召喚も転移の部類と言えますし」

話を聞きながら壁に立てかけてあったマントを羽織り、荷物を手  
にとってノレインの足元で床に伏せているファンパニアを挟んで  
向かい合うようにして立つ。

そんなハビを確認してから、ノレインは小さな一粒の光を床に落  
とした。

床に着いた途端、それはハビたちを包むように大きく広がる。

光が身体を通り抜ける感触はとても気持ちにいいものではなかつ  
たが、光の内に入ってしまったえば不思議と温かく心地よく感じられる。

「跳べ」  
スイク

吐息と共に吐き出された言葉は、先ほどのチュイ・トーラと同じ  
でありながら、示された能力は全くの別物だった。

光の膜の外の景色が横にぶれたかと思えば、そこはすでに宿の部  
屋ではなかった。

チュイ・トーラの時のような、転移魔術に付きものとされる特有

の“酔い”がこれっぽっちも感じられない。

「後3度移動しますよ。…やはり人間は柔で困りますね。これが精霊なら1度の転移で済むというのに」

これ以上の距離を伸ばそうものなら、忽ち身体がばらばらになってしまふのだという。

少しの時間を置いてから、また転移し、また少しの時間を置いて転移を繰り返した。

それまでずっと変わらなかった景色が、4度目の転移で若干の違いを見せた。

地面に張り付くようにして家が点々と建っている。

セイ・ロストパース大陸では岩山にでも囲まれない限り、地下に家をつくるためにこれが一般的な景色だ。

そんな当たり前の景色は、その上で発生している空間の歪みが異質にしていた。

空よりは幾分低い位置でとぐるのように渦巻いている。

「あれが、災厄の歪みか」

食い入るように歪みを見つめ、茫然とハビが呟く。

空一面を覆う歪みの大きさに身震いした。

囲っていた光が消えると、ファンパニアが素早くノレインの横をすり抜け躍り出る。

よく言えば穏やかな、悪く言えば無気力さが拭えなかったファンパニアの、毛を逆立て尾を膨らませ低く唸りながら牙を剥いて威嚇する様は、ハビにとっても初めて見る姿で、驚きに目を睜いだ。

ファンパニアが何をそんなに警戒しているのかとハビが目を凝らしていると、ノレインが笑った。

「おやまあ。我が君がお探しでしたよ？      フィーリ・クオリリア」

「その割にはこの場にいないのはなんでかなあ？」

聞き知った声に、ハビはまさか、有り得ないと思った。

けれどその思いを裏切って、ラムラ特有の生地である黒地に白の



ラインが入ったローブが風に揺れる。

「…何故」

近づいてくる男に、ファンパニアが唸り声を強くする。

「アダンが、フィーリ・クオリリア…？」

ハビの声が耳に届いたのか、男は口の端をあげ、ちらりと舌で唇を舐め上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5860p/>

---

連理の咲く庭

2011年10月7日19時57分発行